京都府遺跡調査概報

第 10 冊

1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
   (1) 洞楽寺遺跡
   (2) 洞楽寺北遺跡
   (3) ケシケ谷遺跡
2. 土師南遺跡
3. 中山城跡
4. 田辺城跡第3次
5. 田辺城跡第4次
6. 蒲生遺跡
7. 上中遺跡
8. 千代川遺跡第4次
9. 篠窯跡群（試掘調査）

1984

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年４月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し，間もなく３年が過ぎようとしています。その設立の目的は，京都府内の埋蔵文化財の調査，保存，活用及び研究を行い，その保護を図るとともに，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は，京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり，昭和58年度は，46件の調査を実施しました。これらの発掘調査は，いずれも道路建設，学校建設，宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり，調査によって発見された遺跡の多くは，調査終了後破壊され，消滅する運命にあります。しかし，発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅していいはずはありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され，現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は，遺跡の重要性を理解していただくために，また，たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し，その活用を図るために刊行するものであります。昭和58年度は，第９冊，第10冊，第11冊の３冊にまとめることにしましたが，この第10冊には近畿自動車道舞鶴線関係遺跡ほか，８件を収録しました。調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では，開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会，各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け，さらに，炎暑の下，極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって，これら多くの関係者に厚く御礼を申し上げます。

昭和59年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1. 本冊に収めた概要は，

   1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡　2. 土師南遺跡　3. 中山城跡
   4. 田辺城跡第３次　5. 田辺城跡第４次　6. 蒲生遺跡
   7. 上中遺跡　8. 千代川遺跡第４次　9. 篠窯跡群

   を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地・調査期間・経費負担者及び概要の執筆は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡			日本道路公団大阪建設局	岩松　保 藤原　敏晃
(1) 洞楽寺遺跡	福知山市大字大内小字坪田	昭58. 5.17 〜 昭58. 6.30		
(2) 洞楽寺北遺跡	福知山市大字大内小字坪田	昭58. 5.17 〜 昭58. 6.30		
(3) ケシケ谷遺跡	福知山市大字大内小字ケシケ谷	昭58. 8. 4 〜 昭59. 3.31		
2. 土師南遺跡	福知山市字土師南	昭58. 7. 4 〜 昭58. 7.28	京都府教育委員会	藤原　敏晃
3. 中山城跡	舞鶴市字中山	昭57.12. 8 〜 昭58. 3.31 昭58. 6.20 〜 昭58. 9.28	京都府土木建築部	竹原　一彦
4. 田辺城跡第３次	舞鶴市大字南田辺小字大内口下	昭58. 7. 5 〜 昭58. 7.30	京都府教育委員会	辻本　和美
5. 田辺城跡第４次	舞鶴市円満寺字八丁	昭58. 8.25 〜 昭58. 9.29	建設省近畿地方建設局	辻本　和美
6. 蒲生遺跡	船井郡丹波町豊田下河原	昭58. 7. 2 〜 昭58. 8.25	京都府教育委員会	引原　茂治
7. 上中遺跡	北桑田郡京北町大字上弓削小字沢ノ奥	昭58. 7. 1 〜 昭58. 9. 8	京都府教育委員会	増田　孝彦
8. 千代川遺跡第４次	亀岡市千代川町	昭58. 6.20 〜 昭58.10.31	京都府教育委員会	村尾　政人
9. 篠窯跡群(試掘)	亀岡市篠町篠・王子	昭58. 1.26 〜 昭58. 3.25 昭58. 5.25 〜 昭58. 6.30 昭59. 2. 6 〜 昭59. 3.28	日本道路公団大阪建設局	水谷　寿治 引原　茂治 土橋　誠 岡崎　研一

3. 本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

目　　次

1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和58年度発掘調査概要…… 1

(1) 洞楽寺遺跡…… 6

(2) 洞楽寺北遺跡……13

(3) ケシケ谷遺跡……15

2. 土師南遺跡発掘調査概要……27

3. 中山城跡発掘調査概要……37

4. 田辺城跡第3次発掘調査概要……63

5. 田辺城跡第4次発掘調査概要……73

6. 蒲生遺跡発掘調査概要……81

7. 上中遺跡発掘調査概要……99

8. 千代川遺跡第4次発掘調査概要…… 115

9. 篠窯跡群昭和58年度試掘調査概要…… 137

挿図・付表目次

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

(1)洞 楽 寺 遺 跡

第 1 図　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡分布図…… 2

付 表 1　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一覧表…… 3

第 2 図　周辺遺跡分布図…… 5

第 3 図　洞楽寺遺跡地形図…… 7

第 4 図　洞楽寺遺跡・洞楽寺北遺跡トレンチ配置図…… 7

第 5 図　洞楽寺遺跡遺構配置図…… 8

第 6 図　竪穴式住居跡 SB 02 実測図 …… 8

第 7 図　洞楽寺遺跡出土遺物実測図…… 9

第 8 図　SB 02 内出土紡錘車実測図 …… 9

第 9 図　須恵器杯身・杯蓋型式分類案……10

(2)洞楽寺北遺跡

第 10 図　洞楽寺北遺跡地形図……13

第 11 図　洞楽寺北遺跡遺構配置図……14

(3)ケシケ谷遺跡

第 12 図　ケシケ谷遺跡地形図……15

第 13 図　ケシケ谷遺跡遺構配置図……16

第 14 図　竪穴式住居跡 SB 102 実測図……17

第 15 図　SB 02 内出土土器実測図……19

第 16 図　分銅型土製品実測図……19

第 17 図　SD 74 内出土土器実測図……20

第 18 図　ケシケ谷遺跡・宮遺跡・城ノ尾古墳・奥谷西遺跡調査地位置図……21

付 表 2　須恵器杯・蓋分類案……25

土 師 南 遺 跡

第 19 図　周辺遺跡分布図……28

第 20 図　調査地位置図……30

第 21 図　土層柱状図……30

第 22 図　遺構平面図及び土層断面図……32
第 23 図　出土遺物実測図……34
第 24 図　造成前地形推定図……35

中　山　城　跡

第 25 図　中山城跡と周辺の城館跡分布図……38
第 26 図　中山城跡地形図……39
第 27 図　調査地地形図……41
第 28 図　A地区土葬墓実測図……45
第 29 図　B－1号墓実測図……48
第 30 図　B－2号墓実測図……49
第 31 図　B－3・B－4号墓実測図……50
第 32 図　C－1号墓実測図……51
第 33 図　出土遺物実測図……53
第 34 図　A地区土葬墓出土遺物実測図……54
第 35 図　A－1号墓櫃金具実測図(1)……56
第 36 図　A－1号墓櫃金具実測図(2)……57
第 37 図　櫃推定復元図……58

田辺城跡第 3 次

第 38 図　田辺城跡調査地位置図……63
第 39 図　田辺城跡と周辺城跡分布図……64
第 40 図　城跡復原及び調査地位置図……66
第 41 図　調査トレンチ位置図……68
第 42 図　調査地土層断面図……69
第 43 図　出土遺物実測図……70
第 44 図　寛永通宝……70

田辺城跡第 4 次

第 45 図　田辺城跡調査地位置図……73
第 46 図　城跡復原及び調査地位置図……74
第 47 図　調査地位置図……75
第 48 図　調査地土層断面図……76
第 49 図　土坑 1 実測図……77

第 50 図　出土土器実測図及び拓影……78

蒲　生　遺　跡

第 51 図　調査地位置図……82
第 52 図　調査地地形図……83
第 53 図　調査地（A地点）平面図……86
第 54 図　Dライン・10ライン層序断面図……87
第 55 図　竪穴式住居跡 SB 05 実測図 ……89
第 56 図　土坑実測図(1)……90
第 57 図　土坑実測図(2)……91
第 58 図　掘立柱建物跡 SB 06 実測図 ……92
第 59 図　柵列跡 SA 07 実測図 ……93
第 60 図　出土遺物（弥生土器）実測図……95
第 61 図　出土遺物（石器）実測図……96

上　中　遺　跡

第 62 図　周辺遺跡分布図…… 100
第 63 図　調査地位置図…… 102
第 64 図　遺構平面・断面図…… 103
第 65 図　川跡北壁断面図…… 104
第 66 図　遺構平面図・断面実測図…… 105
第 67 図　出土遺物実測図(1)…… 107
第 68 図　出土遺物実測図(2)…… 109
第 69 図　出土遺物実測図(3)…… 111

千代川遺跡第 4 次

第 70 図　調査地と周辺の遺跡…… 117
第 71 図　トレンチ断面図…… 118
第 72 図　調査地区図…… 119
第 73 図　BT 15～BT 18 トレンチ遺構実測図…… 120
第 74 図　遺構実測図…… 122
第 75 図　掘立柱建物跡 SB 0401 実測図 …… 123
第 76 図　BC 28・29 地区溝平面・断面図 …… 125
第 77 図　出土遺物実測図(1)…… 127

第 78 図　出土遺物実測図(2)…… 128
第 79 図　出土遺物実測図(3)…… 129
第 80 図　遺構変遷図（第Ⅰ期遺構）…… 131
第 81 図　遺構変遷図（第Ⅱ期遺構）…… 132
第 82 図　遺構変遷図（第Ⅲ期遺構）…… 133

篠 窯 跡 群

第 83 図　調査地位置図…… 138
付 表 3　篠窯跡群試掘調査・発掘調査年次一覧表…… 140
第 84 図　試掘トレンチ配置図（西長尾―SNNO―地区）…… 142
第 85 図　試掘トレンチ配置図（掛ケ谷・芦原地区）…… 143
第 86 図　西長尾Ｂ地区第１トレンチ断面図…… 146
第 87 図　芦原Ａ地区第８トレンチ断面図…… 148
第 88 図　出土遺物実測図…… 150

図 版 目 次

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

(1)洞 楽 寺 遺 跡

図版第 1　(1)洞楽寺遺跡近景（南から）

(2)洞楽寺遺跡・洞楽寺古墳遠景（洞楽寺北遺跡から南を望む）

図版第 2　(1)洞楽寺遺跡全景（東から）　(2)洞楽寺遺跡と洞楽寺古墳（東から）

図版第 3　(1)調査地北半検出遺構（北から）　(2)SB 03 全景（北から）

図版第 4　(1)SB 02 全景（西から）　(2)SB 02 内かまど（北西から）

図版第 5　出土遺物

(2)洞楽寺北遺跡

図版第 6　(1)洞楽寺北遺跡遠景（洞楽寺遺跡から北を望む）

(2)洞楽寺北遺跡全景（西から）

(3)ケシケ谷遺跡

図版第 7　(1)調査前北半部（南から）　(2)調査前中央部（南から）

図版第 8　(1)SB 02・SD 05（南から）　(2)SB 119（北から）

図版第 9　(1)SB 118・SB 138 全景（南から）　(2)SB 138 全景（西から）

図版第10　(1)SB 136 全景（南から）　(2) SB 72・SB 96・SB 135 全景（南から）

図版第11　(1)出土土器（SD 74 内）　(2)出土石鏃

土 師 南 遺 跡

図版第12　(1)柱穴検出状況（東から）　(2)Cトレンチ東壁（西から）

図版第13　(1)出土遺物（土錘・土師器・須恵器 他）

(2)出土遺物（中国製陶磁器・瓦器・土師器 他）

中 山 城 跡

図版第14　中山城跡全景（航空写真）

図版第15　(1)A地区調査前（南東から）　(2)B・C地区調査前（南東から）

図版第16　(1)A地区古墓（北から）　(2)A－1号墓 人骨出土状況

図版第17　(1)A－2号墓 遺物出土状況　(2)A－3号墓 遺物出土状況

図版第18　(1)B－1号墓 集石検出状況（北から）　(2)B－2・3・4号墓（北西から）

図版第19　(1)B地区完掘状況（北から）　(2)C地区 堀切り（北から）

図版第20　1～7．土師皿　8．紅皿　9．石臼　10．火輪（五輪塔）
図版第21　(1)1．錫杖頭　2．銅体　(2)櫃金具
図版第22　(1)櫃金具(表)　(2)櫃金具(裏)
図版第23　(1)古銭(表)　(2)古銭(裏)

田辺城跡第3次

図版第24　田辺城跡全景（航空写真）
図版第25　田辺城跡本丸跡付近（航空写真）
図版第26　(1)調査地全景（北から）　(2)調査地全景（南から）
図版第27　(1)旧三の丸堀（静溪川）とトレンチ設営状況（南から）
(2)Cトレンチ全景（西から）
図版第28　(1)Aトレンチ全景（西から　(2)Bトレンチ全景（東から）

田辺城跡第4次

図版第29　(1)調査前状況（西から）　(2)調査状況（東から）
図版第30　(1)調査状況（西から）　(2)拡張グリッド調査状況（南から）
図版第31　(1)土坑1（北西から）　(2)　調査地土層断面

蒲　生　遺　跡

図版第32　調査地全景（航空写真　左が北）
図版第33　(1)調査前全景（南西から）　(2)調査前全景（北東から）
図版第34　(1)竪穴式住居跡 SB 05 検出状況（南東から）
(2)竪穴式住居跡 SB 05（北東から）
図版第35　(1)土坑 SK 02（北西から）　(2)土坑 SK 04（南西から）
図版第36　(1)掘立柱建物跡 SB 06（北から）　(2)柵列跡 SA 07（南西から）
図版第37　出土遺物

上　中　遺　跡

図版第38　(1)調査地全景（西から）　(2)トレンチ全景（北西から）
図版第39　(1)P1・P2・土坑完掘状況（南東から）　(2)川跡全景（南東から）
図版第40　出土遺物(1)
図版第41　出土遺物(2)

千代川遺跡第4次

図版第42　(1)調査地遠景（南西から）　(2)調査前全景（南西から）
図版第43　(1)調査地西側全景（南から）　(2)調査地南東側全景（北東から）

図版第44　(1)調査地北西側素掘溝全景（東から）　(2)調査地西側全景（東から）
図版第45　(1)M 29～M 32 トレンチ全景（北から）
(2)BT 11～BT 12 トレンチ全景（北から）
図版第46　(1)BT 11～BT 12 トレンチ北側旧河道（東から）
(2)調査地東側全景（南西から）
図版第47　(1)調査地東側全景（南から）　(2)調査地拡張区全景
図版第48　(1)SB 0401 掘立柱建物跡（南から）
(2)SB 0401 掘立柱建物跡と素掘溝（北から）
図版第49　(1)SB 0401 掘立柱建物跡と素掘溝（北から）
(2)調査地東側奈良時代の溝（南から）
図版第50　(1)調査地東側素掘溝西域（南から）
(2)調査地東側素掘溝・暗渠（南東から）
篠　窯　跡　群
図版第51　(1)西長尾Ｂ地区 第１トレンチ全景（南東から）
(2)西長尾Ｂ地区 第１トレンチ灰原検出状況
図版第52　(1)西長尾Ａ地区近景　(2)西長尾Ａ地区作業場跡関連遺構
図版第53　(1)芦原Ｂ地区遠景　(2)芦原１・３号窯灰原検出状況
図版第54　出土遺物

1. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 昭和58年度発掘調査概要

1. はじめに

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の発掘調査は，昭和53年度の京都府教育委員会による自動車道建設予定敷地内遺跡分布調査の後，54年・55年度は京都府教育委員会が，56年度以降は(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが，日本道路公団大阪建設局の委託により発掘調査を実施している。

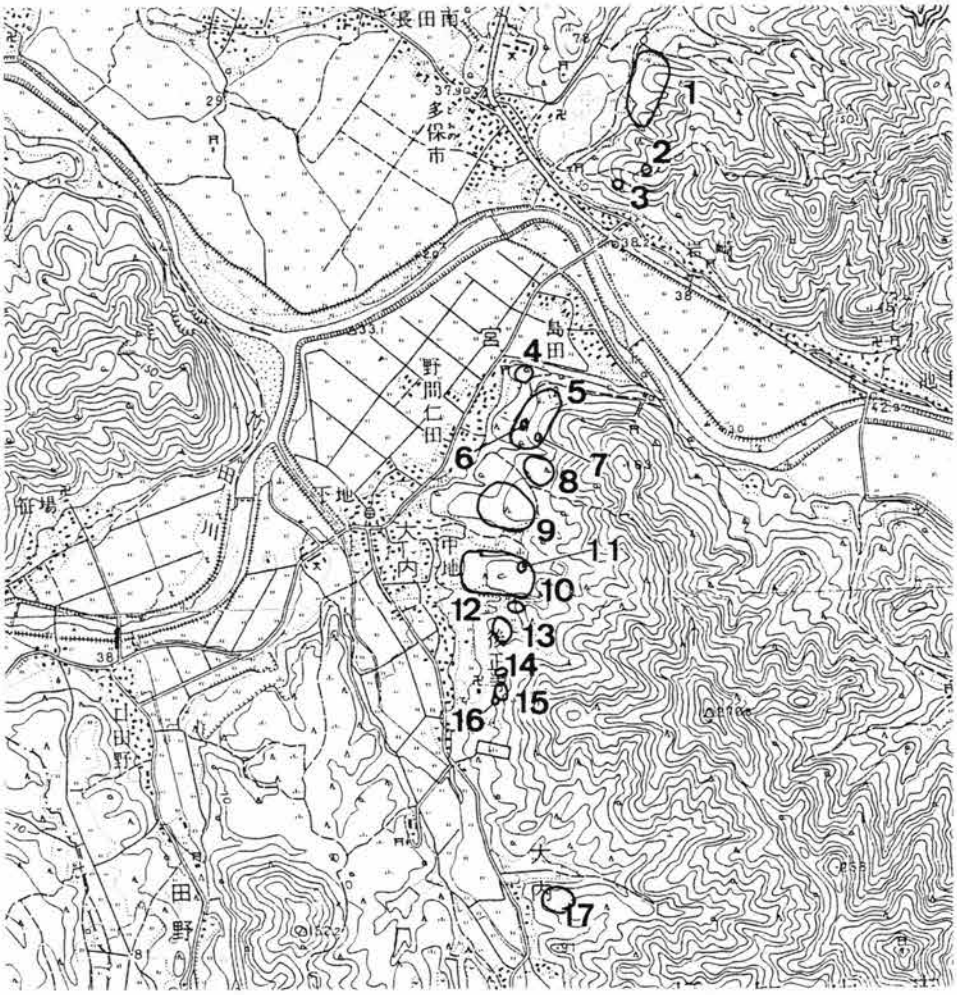
当初の分布調査では，福知山市大内山田から同市長田間の約 15 km で 9 遺跡が確認され，その後 6 遺跡10か所が追加確認され，15遺跡19か所が知られている（第 1 図・付表 1）。既に発掘調査がなされ報告されているものは，付表 1 の「文献」に掲げてある。今年度は，それらの遺跡のうち，薬王寺古墳（旧名岩崎古墳）・ケシケ谷遺跡（同ケシケ谷城館跡）・奥谷西遺跡・洞楽寺北遺跡（同洞楽寺 3 号墳）・洞楽寺遺跡(同洞楽寺 2 号墳）の発掘調査を実施した。調査期間は以下のとおりである。

洞楽寺遺跡	昭和58年 5 月17日～ 6 月30日
洞楽寺北遺跡	昭和58年 5 月17日～ 6 月30日
ケシケ谷遺跡	昭和58年 8 月 4 日～昭和59年 3 月31日
奥谷西遺跡	昭和58年12月12日～昭和59年 3 月28日
薬王寺古墳	昭和59年 3 月 6 日～ 3 月30日

これらのうち，今回報告するものは，洞楽寺遺跡・洞楽寺北遺跡・ケシケ谷遺跡の 3 遺跡である。奥谷西遺跡と薬王寺古墳は，諸般の事情により調査着手時期が遅れたこと，加えて 1 月下旬から 2 月中旬の降雪により現地調査が遅れたため、本稿執筆時期においても現地作業を行っており，本概要作成中には調査成果をまとめられない。両遺跡の報告は次の機会に譲りたい。またケシケ谷遺跡も不順な天候のため，調査が遅れており，整理・検討の半ばにしての執筆のため、充分な資料を提示しえない。

今回報告する際に、昨年度以前の遺跡名を変更しているものがある。その名称の異動と理由を述べておきたい。

洞楽寺遺跡と洞楽寺北遺跡は，すでに洞楽寺 2 号墳・同 3 号墳と報告[(注1)]したが，昨年度の試掘調査の結果，名称と遺跡の実態がそぐわないことが判明[(注2)]したので，遺跡名を変更することにした。洞楽寺遺跡では，古墳時代の集落跡が見つかった。



第 1 図　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡分布図（1/25,000）

1. 多保市城跡　2. 薬王寺古墳　3. 薬王寺古墓　4. 城ノ尾城館跡
5. 宮遺跡　6. 城ノ尾古墳　7. 宮遺跡古墓群　8. ケシケ谷遺跡
9. 奥谷西遺跡　10. 大内城跡　11. 大内城跡墳墓　12. 後正寺古墓・小屋ケ谷古墳
13. 後青寺跡・後青寺古墳　14. 洞楽寺北遺跡　15. 洞楽寺遺跡　16. 洞楽寺古墳
17. 山田館跡

ケシケ谷遺跡も，すでにケシケ谷城館跡と報告したが[注3]，同じく昨年度の試掘調査によると，中世城館跡と積極的に係わる遺構・遺物は発見されず，弥生時代中期を主とする遺構・遺物が確認された[注4]。そこで「城館跡」という，ある一つの内容を限定する字句を遺跡名から削除することにした。

薬王寺古墳・薬王寺古墓はともに昭和53年度の分布調査において確認されたものであるが，昨年度まで「岩崎古墳」・「岩崎古墓」という名称を与えていたが，今年度からは，所在地付

付表1　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	年代	所在地	備考	文献
1	多保市城跡	城跡	中世	福知山市多保市小字打越ほか		
2	薬王寺古墳	古墳	古墳時代後期	〃　〃	58年度調査他に2基存在か	
3	薬王寺古墓	古墓	近世	〃　〃	他に1基存在か	
4	城ノ尾城館跡	集落跡城館跡	弥生～中世	〃　宮小字城ノ尾	57年度調査	小山雅人「城ノ尾城館跡」(『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
5	宮遺跡	集落跡	弥生	〃　〃小字城ノ尾ほか	54～56年度調査	辻本和美ほか「宮遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
6	城ノ尾古墳	古墳	古墳時代後期	〃　〃　〃	〃	辻本和美ほか「城ノ尾古墳」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
7	宮遺跡古墓群	古墓	中世	〃　〃　〃	56年度調査	辻本和美「宮遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
8	ケシケ谷遺跡	集落跡	弥生～中世	〃　〃小字ケシケ谷	57年度試掘調査・58年度調査	本概報
9	奥谷西遺跡	集落跡	弥生～中世	〃　大内小字奥谷	58・59年度調査	
10	大内城跡	城館跡	弥生～中世	〃　〃　小字平城(ひらいじょう)	55～56年度調査	伊野近富「大内城跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
11	大内城跡墳墓	古墓	中世	〃　〃　〃	57年度調査	伊野近富「大内城跡墳墓」(『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
12	後正寺古墓	古墓	中世・近世	〃　〃　小字後正寺	57年度調査	岩松保「後正寺古墓小屋ケ谷古墳」(『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
	小屋ケ谷古墳	古墳	古墳時代後期			
13	後青寺跡	城館跡	弥生～中世	〃　〃　〃	56年度調査	辻本和美「後青寺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
	後青寺古墳	古墳	古墳時代			
14	洞楽寺北遺跡	集落跡か	不明	〃　〃　小字坪田	57年度試掘調査・58年度調査	本概報
15	洞楽寺遺跡	集落	古墳時代後期	〃　〃　〃	〃	本概報
16	洞楽寺古墳	古墳	古墳時代後期	〃　〃　〃	57年度調査	伊野近富「洞楽寺古墳」(『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
17	山田館跡	古墓	中世	〃　〃　小字大内山田	57年度調査	岩松保「山田館跡」(京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

近の小字名を両遺跡に冠することにした。

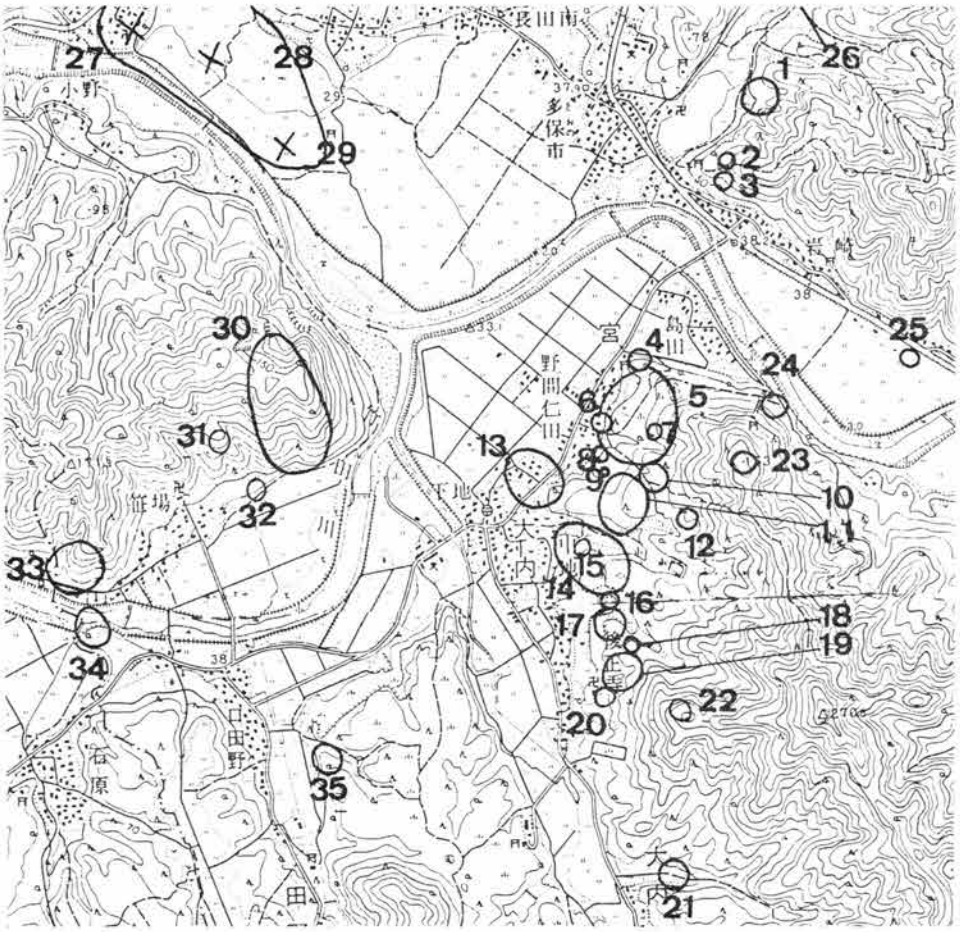
現地での調査は，調査課 主任調査員 辻本和美，調査員 伊野近富・小山雅人・藤原敏晃・岩松　保が担当した。調査に際しては，日本道路公団・福知山市教育委員会・同市史編纂室・同企画室・福知山史談会・京都府中丹教育局等の諸機関の協力を得た。また，大内地区総代西躰　太氏，宮地区総代今川栄一氏，多保市地区長梅原萬喜三氏には，現地作業員の手配・調整等，格別の御援助をいただいた。大内・宮・多保市各地区の多くの方々には作業員として発掘調査に参加していただいた。(注5) また，直接には調査に参加していただけなかった方々からも，多くの助言・御配慮を賜わった。調査補助員・整理員として協力していただいた学生諸君には色々と手を煩わせた。(注6) さらに，多忙の中，現地にまで赴いて有益な助言・御指導を賜わった先生方(注7)にも感謝の意を表したい。　（岩松　保）

2. 位置と環境

調査地は，福知山市の東南部に位置する。福知山市の南方は高峰のみられない山々が連なる丹波山地である。こうした低い山地より発した土師川・竹田川が北側で合流し，これらの河川によって形成された平野の周辺地にあたる。竹田川を遡行し加古川に至るルートは瀬戸内・日本海を結ぶ低位なルートであり，旧山陰街道（現国道9号線）とも合流するなど，古くから交通の要衝として発達した。同時に他地域の影響も多くみられる地域でもある。

当地周辺で，人間の生活跡が明確になるのは，弥生時代中期からである。宮遺跡（福知山市字宮）は，水田面からの比高差約30mの台地上に，弥生時代中期後半の溝（幅約2m），住居跡（2棟），方形周溝墓などが調査・確認されている。また，この宮遺跡の下に広がる水田からは太形蛤刃石斧の優品が2点採取されている。生産活動の場であったのかもしれない。宮遺跡の南側，遺跡を見下ろす台地上に今回報告のケシケ谷遺跡とその南に奥谷西遺跡が立地する。小さな谷をへだてた南に大内城跡が所在する。そこからも弥生時代中期後半の遺物が採集されており，集落の立地をみると河川氾濫の及ばない台地という共通した条件があったとも想像される。また，ここからは「播磨系」の土器が出土しており，先のルートを経た文化交流のあとを物語る。

宮遺跡の北隣に城ノ尾城館遺跡がある。弥生時代末の住居跡、鎌倉時代の館跡が調査・確認されている。弥生時代末～古墳時代前期にかけての遺跡が少ない当地には貴重な成果である。古墳時代後期になると多くの古墳や集落跡が見出される。6世紀初め後青寺古墳で木棺直葬墓が営まれ，6世紀中頃には六人部地方唯一の前方後円墳，男塚古墳が営まれる。その後，先のケシケ谷遺跡や洞楽寺遺跡（大内城の南約350mの台地上）では，古墳時代後期の住居



第 2 図　周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 多保市城跡	2. 薬王寺古墳	3. 薬王寺古墓	4. 城ノ尾城館跡
5. 宮　遺　跡	6. 仁田城跡	7. 城ノ尾古墳	8. 男塚古墳
9. 姫塚古墳	10. ケシケ谷遺跡	11. 奥谷西遺跡	12. 奥谷遺跡
13. 散布地(弥生)	14. 大内城跡	15. 中地古墳	16. 後正寺古墓・小屋ケ谷古墳
17. 後青寺跡・後青寺古墳	18. 洞楽寺北遺跡	19. 洞楽寺遺跡	20. 洞楽寺古墳
21. 山田館跡	22. 古　　墳	23. 古　　墳	24. 古　　墳
25. みこし塚古墳	26. 多保市廃寺	27. 和田賀遺跡	28. 前ケ鳴遺跡
29. 仲堤遺跡	30. 庵戸山古墳群	31. 庵戸山古墳	32. 庵戸古墳
33. 境谷古墳群	34. 田　野　城	35. 口田野古墳	

跡がありそれに伴う葬儀の場が，同時的にとらえられ，当地の古墳時代後期の様相が明確になりつつある。ただ，男塚古墳はケシケ谷遺跡の下方に位置し，現民家地に住居跡の存在も考えられ，弥生時代中期と同様に台地を選別した条件が存在するかもしれない。6 世紀後半～7 世紀前半にかけて，洞楽寺古墳・城ノ尾古墳・小屋ケ谷古墳が営まれる。竹田川を挟んで

対岸の丘陵部には6世紀後半以降に推定される庵戸山古墳群・境谷古墳が造営される。

奈良時代には，多保市廃寺が建立されるようだが，ほかには遺物が散見される程度で，明確な生活跡は確認されていない。

平安時代になると，当地は六人部荘という荘園になるが，この時期の大内城跡は，館として営まれ，室町時代に山城へと変遷する。

以上，簡単に当地の変遷を列挙したが，外形などで明らかな古墳以外は，調査地が台地上に集中していることもあって，当時の全体的な様相は明確になっていない。この限られた時期・様相のみに重きを置いて当地を考えるにはなお検討が必要であろう。

（藤原 敏晃）

(1) 洞 楽 寺 遺 跡

1. 遺 跡 の 立 地

洞楽寺遺跡は，福知山市大内小字坪田に所在する。この付近で竹田川と土師川が合流し，その氾濫原が平野としてひらけている。この平野から竹田川に注ぐ大内川が開析した狭隘な平地と段丘が南に伸びている。その段丘面に現在の集落が形成されているが，当遺跡はそれより山手側の丘陵上に位置している。遺跡の立地する台地に接して，この遺跡名のもととなった曹洞宗洞楽寺がある（第4図）。

当遺跡のある丘陵は，東から西に傾斜しており，東西20m・南北50m程の緩傾斜地を占めている。同地は，尾根筋が西北と西南の二方向に伸びているが，その一つである西南方向の尾根上には，径約15mの洞楽寺古墳（円墳）が築造されている。この台地上の約500 m^2がこの遺跡の範囲と考えられる（第3・4図）。

なお，この遺跡は昨年度，試掘調査を実施している。

2. 調 査 経 過

昨年度の試掘調査の成果より，緩傾斜地のほぼ全域と，洞楽寺古墳の近傍までの調査を実施した。地区割りは，昨年度の洞楽寺古墳の調査時のものを援用した。

基本土層は，表土（数cm）―暗黄褐色土（10～20cm）―地山（黄褐色土）であるが(A・D区)，Bトレンチ・Cグリッドでは暗黄褐色土下が砂礫層となる。この層からは土器片がまったく出土しないことから洪積世の堆積層と判断し，地山の一種と考えた。

遺構が存在したのはA調査区のみで，丘陵の傾斜がやや急になるD区，洞楽寺古墳の東側

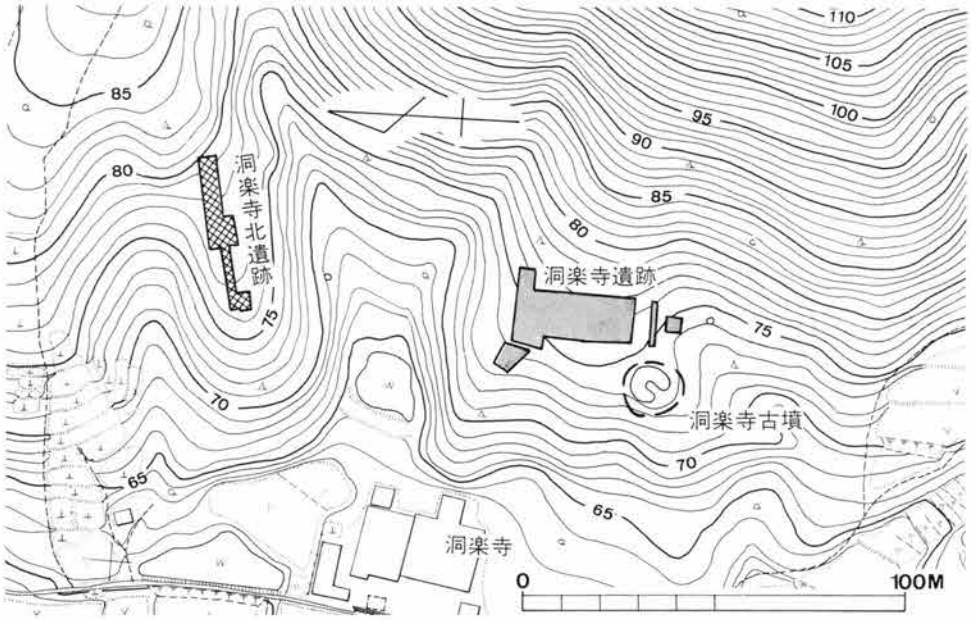
第3図　洞楽寺遺跡地形図

に設けたBトレンチ・Cグリッドでは，遺構は検出できなかった。遺物はA・D区では出土したが，B・C区では全く出土しなかった。遺物と遺構の検出状況から，この遺跡は南の尾根筋より北側をその範囲と考え，これから南は調査を行わなかった。

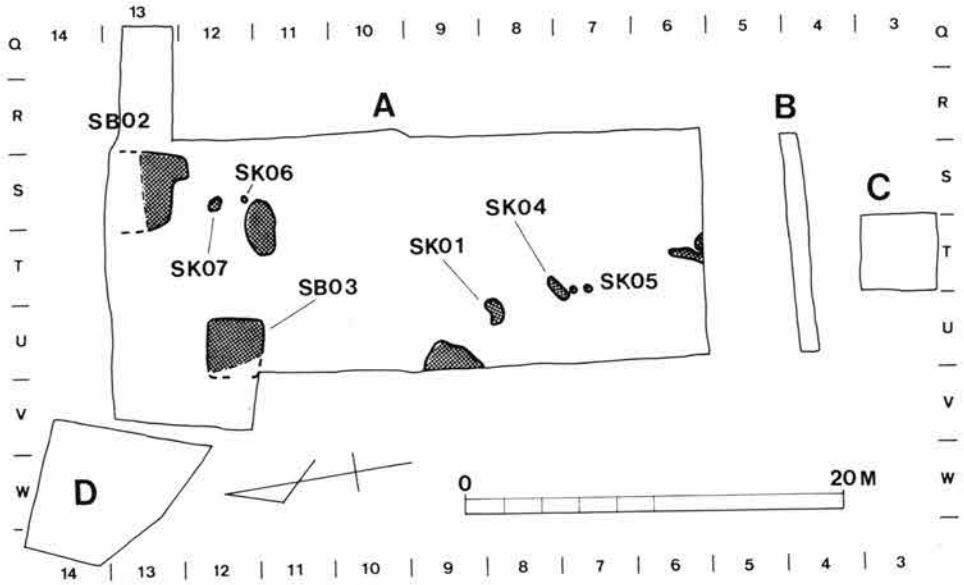
検出遺構は，竪穴式住居跡2棟，土坑・ピット7基，溝状遺構1条，落ち込み2である。調査面積は，昨年度試掘分 45 m² を含めて約 370 m² である。

3. 検出遺構

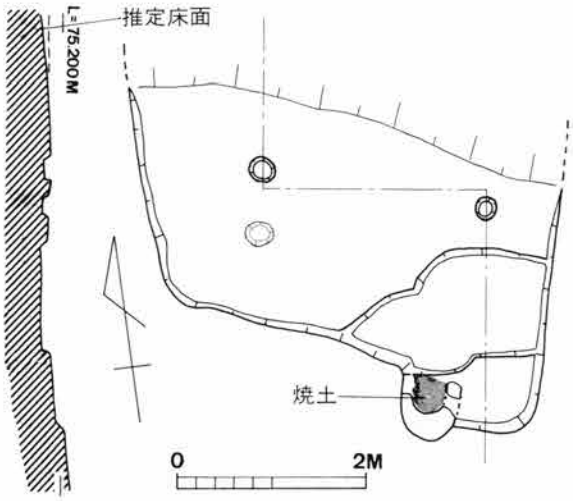
SB 02・03 は，A調査区の北側で検出できた。両住居跡の間隔は約 6 m で，両者の軸は一致している。ともに削平を受け，遺存状態は悪い。



第 4 図　洞楽寺遺跡・洞楽寺北遺跡トレンチ配置図



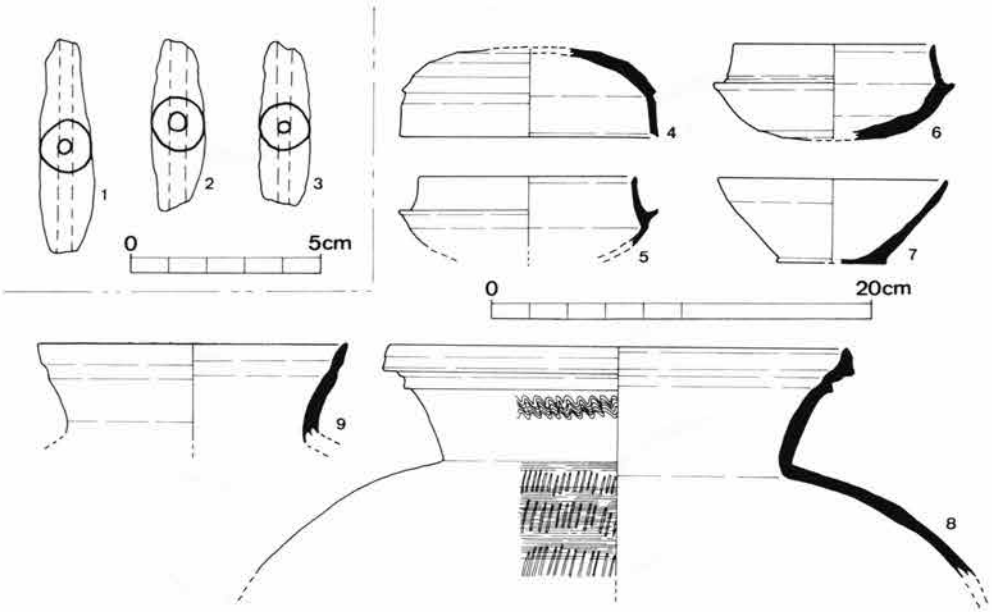
第 5 図　洞楽寺遺跡遺構配置図



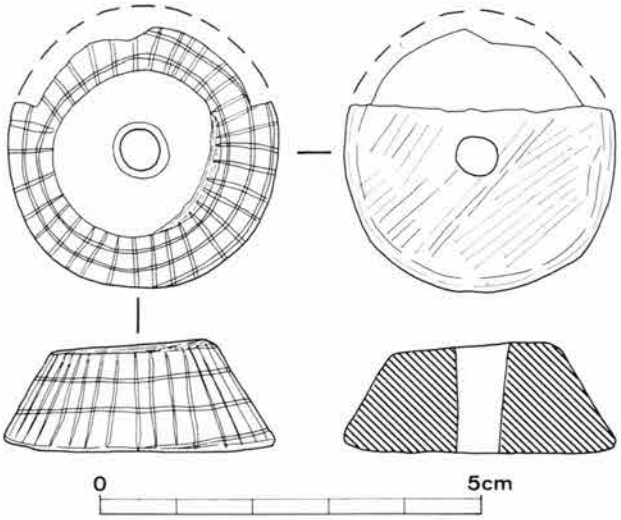
第 6 図　竪穴式住居跡 SB02 実測図

SB 02 は 13 S 区にある。北側は削平を受け，東・西辺の一部と南辺が検出できただけである。それによると，一辺約 4.5m の方形住居に復元できるが，南東隅に 0.8m×1.4m の張り出し部が設けられており，そこにかまどがつくられている。かまどの焚き口部は 1 m×2 m にわたって，床面よりさらに10 cm 程度低く掘り下げられている。柱穴は 3 か所検出できた（第 6 図）。

SB 03 は，西辺が削平されているが，一辺 2.9 m の方形住居に復元できる。住居跡床面まで 5 cm の深さしかなく，残り具合は極めて悪い。住居跡中央部北側では，かまどがかろうじて検出できた。床面から，土師器片が出土した。SK 01 は 8 T 区にあり，長辺 135 cm・短辺 70 cm の長楕円形をしており，深さ 25 cm，SK 04 は 7 T区にあり，長辺 145 cm・短辺 50 cm の楕円形をしており，SK 05 は径 40 cm,・深さ 12 cm の円形である。以上の SK



第 7 図　洞楽寺遺跡出土遺物実測図

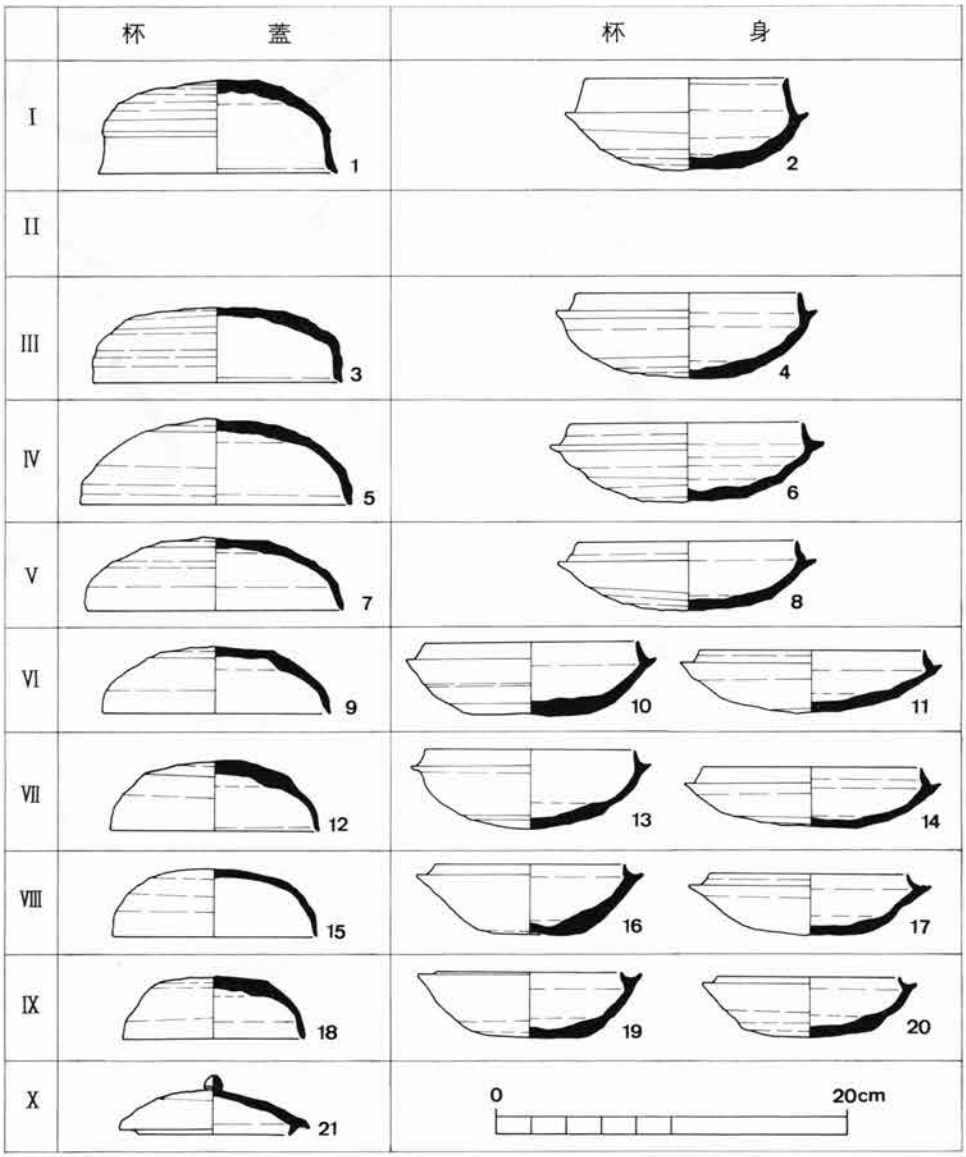


第 8 図　SB02 内出土紡錘車実測図

01・04・05は，坑内出土土器片から，SB 02・03 と同時期のものと思われる。SK 06 は 12S 区にあり，径 20 cm・深さ 5 cm で，坑内から炭化物が出土した。時期を決定しうるものはない。SK 07 は長辺 85cm・短辺60cm・深さ 3 cm の長楕円形をしている。

4. 出 土 遺 物

当遺跡の出土遺物には，須恵器・土師器の土器片，石製品（紡錘車）・土製品（土錘）がある。総数は整理用コンテナ箱約 5 箱に相当する。第 7 図（1～3）は土錘で，長さ 4.2～5.6 cm・径 1.3 cm 程度のものである。13 T 区を中心にみつかっている。(4)はSB 02 内埋土中から出土した。口径（復元）13.5 cm・器高（復元）4.6 cm で，色調は青灰色を呈している。天井部の約1/2を回転篦削りで調整しており，天井部端



第 9 図　須恵器杯身・杯蓋型式分類案

を強くなでて稜を明瞭につくっている。SB 02 の床面で検出した杯蓋と同型・同様の焼成・胎土をしている。

（5・6）は須恵器杯身で，（5）は SB 03 埋土中より，（6）は 9T 区の落ち込みから出土した。（5）は口径（復元）11.4 cm・器高（現存）3.8 cm,（6）は口径（復元）10.5 cm・器高（復元）5.9 cm である。ともに，立ち上がり部は比較的長く，やや内傾して上方に伸び，端部はつまみ上げられている。受け部端は丸く終えている。（5）はやや薄手のつ

くりで，（6）は立ち上がり部に沈線が一本巡る。陶邑編年のⅡ－1段階に相当[注8]すると考える。

（7）は須恵器の椀で，11・12S区の包含層より出土した。口径（復元）12.0cm・器高4.3cm。底部外面には糸切り痕が見てとれる。

（8）は須恵器甕で，口径（復元）24.2cm。口頸部には突帯が一条つけられており，その下には波状文が施文されている。体部外面は，平行叩き目ののち横方向カキ目を施している。

（9）は土師器甕で，口径（復元）16.4cmを測る。口頸部の内外面を強くなでて調整を行っているのが観察されるが，器壁の磨滅が著しい。

第8図は，SB 02の床面出土の紡錘車であるが，下底部約1/5が欠けている。高さ1.4cm・上底径2.2cm・下底径3.6cmで、外面には格子文が刻まれている。全体に稚拙な感がまぬがれえない。滑石製。

5. ま　と　め

今回の調査において，古墳時代後期の集落跡が確認され，この周辺では初めて集落と古墳との関連とを論じうる資料を得た。また，今年度調査のケシケ谷遺跡においても，同時代の住居跡が検出されており，昨年度以前に調査した4古墳[注9]とともに，古墳時代後期の遺跡の発掘例が増加している。ここでは，それらの遺物をもとに須恵器の分類を提示し周辺遺跡の先後関係をまとめておきたい。

第9図に示した分類案は，後青寺古墳・洞楽寺古墳・小屋ケ谷古墳・城ノ尾古墳などから出土した須恵器を型式の推移の順に並べたものである。（1～21）の須恵器を10段階（現時点ではみつかっていないが，想定されうる段階のものを含む）に分類した。便宜上Ⅰ～Ⅹのナンバーを付する。（付表2参照）

Ⅰの型式が出土するものとして，後青寺古墳・洞楽寺遺跡がある。共に，Ⅰの須恵器のみを出した。Ⅱの段階のものは現在まで見つかっていない。Ⅲの段階では，小屋ケ谷古墳・ケシケ谷遺跡（SB 02）がある。小屋ケ谷古墳では，第1次埋葬面出土須恵器は，Ⅲ・Ⅳ，第2次埋葬面はⅤ・Ⅵ，第3次埋葬面・石室崩落面ではⅥ以降Ⅹのものが出土している。次いで，Ⅳ～Ⅷの段階は洞楽寺古墳から，城ノ尾古墳からは，Ⅶ～Ⅸの段階の須恵器が見つかっている。

遺跡の消長をまとめると以下のようになる。洞楽寺遺跡・後青寺古墳→小屋ケ谷古墳・ケシケ谷遺跡→洞楽寺古墳→城ノ尾古墳となる。洞楽寺遺跡と同台地上の洞楽寺古墳との間には若干の時期差が認められる。

周辺地域には，他に多くの古墳があるが，発掘調査例がほとんどなくその時期決定は難し

い。ただ，男塚古墳（前方後円墳・全長約28m・横穴式石室）は石室石抜き排土中より須恵器片が採集されており，断片的な情報は得られる。[注10] それによると，先に分類したⅢ～Ⅸが少なくとも古墳築造・追葬期に重なることは間違いない。この古墳は，ケシケ谷遺跡の西方約80m，比高差約10m下の丘陵先端部に築造されている。

洞楽寺遺跡やケシケ谷遺跡で検出できた住居跡と古墳築造の時期から次のことがいえる。まず，現時点では洞楽寺遺跡と後青寺古墳とが同型の須恵器を出土しているので，洞楽寺遺跡の住人が後青寺古墳の被葬者と結びつく可能性が高い。両遺跡とも標高は同程度であり，洞楽寺遺跡からはそれ以後の土器の出土がないことから，同時に存在したのではなく古墳の築造を契機にして洞楽寺遺跡の住居は廃絶されたといえよう。ケシケ谷遺跡においても，先の男塚古墳の築造を契機として，家屋が廃絶した様相を示す。その後，小屋ケ谷古墳・洞楽寺古墳・城ノ尾古墳が当地に築かれるので，両遺跡の集落の人々は他地域に移動したのではなく，低地へ移住したものと判断する。

近舞線関係遺跡における，丘陵上の集落跡はどのような性格かは，低地の調査が全く行われていない現時点では全くわからない。なお，当福知山市と隣接する綾部市においては，久田山N地区[注11]と青野遺跡[注12]とが，前者が丘陵上，後者が自然堤防上と，その立地が異なる古墳時代後期（6C後～7C）の集落跡であることを付記しておく。

福知山市西部の豊富谷丘陵遺跡では，方形台状墓が4世紀から6世紀前半まで営々と築造されているが，「須恵器が内部主体に埋納され始める5世紀後半にはすでに本丘陵での古墳築造は衰微し，6世紀初頭をもって終焉を迎える[注13]」と考えられ，須恵器の出現と方形台状墓造営の中止，横穴式石室墳の盛行，近舞線で見られる，（低地→）丘陵上（低地と併存か？）→低地という集落の立地の変化が，ほぼ同時期的に捉えられる。これを斉一的な古墳文化の波及に際する社会的緊張の増加と捉えるか，他の要因を考えるかは今後の課題である。

古墳と集落との関係がわかる資料は，当福知山では今回初めて確認されたものであり，その研究は緒についたばかりである。当福知山では今後の類例の増加を待ち，更なる考察を深めたい。

（岩松　保）

(2) 洞楽寺北遺跡

1. 遺跡の立地

洞楽寺北遺跡は，洞楽寺古墳・洞楽寺遺跡が所在する台地と谷一つを隔てた北側の丘陵にある。その間，直線距離にして約100 mを測る。高さは同程度である。

この丘陵は，幅の狭いやせた尾根で，東から西に緩やかに傾斜しているが，現地形図によると，77 m のコンター・ラインで傾斜が異なっており，また尾根の端が若干丸く削られているように見える。

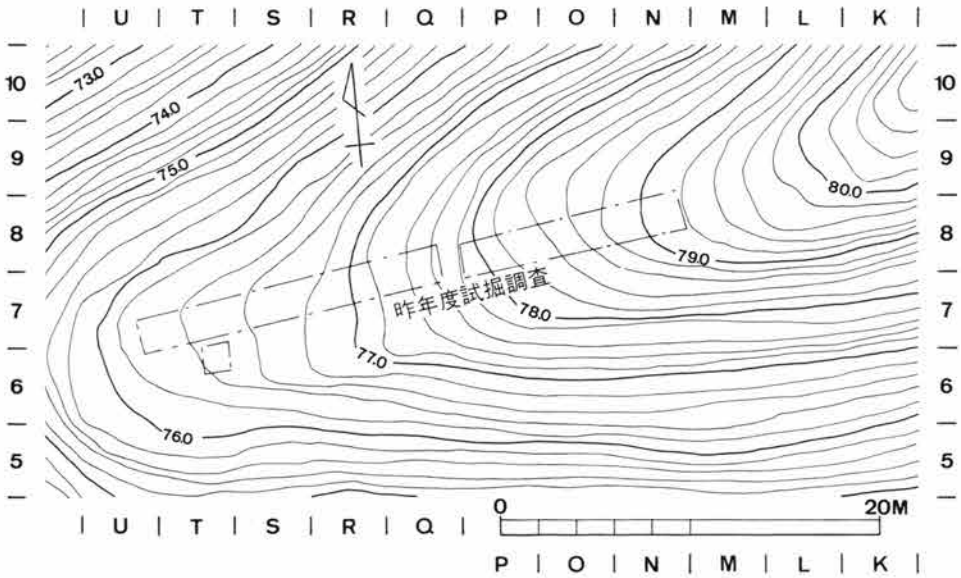
昨年度の試掘調査では，明確な遺構は確認できなかったが，方形台状墓の可能性が示唆され，今年度に本調査を行った。

2. 調査概要

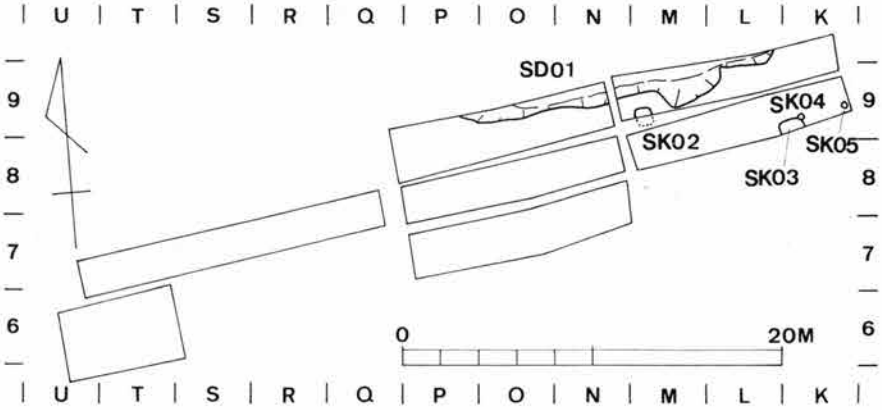
今年度は，昨年度の試掘トレンチに沿ってトレンチを設定し，緩傾斜地のほぼ全域を調査した。基本土層は，表土（数 cm）—暗黄褐色土（約10cm）—黄褐色土（地山）である。

昨年度の試掘調査で検出した溝状遺構・土坑は，その土層観察と精査を繰り返した結果，2条の溝状遺構と報告されたものは，地山の中での土色差を遺構と誤認したものと判断された。

今年度は，昨年度の試掘トレンチの東側と，南北にトレンチを設定し調査を行った。遺構・



第 10 図　洞楽寺北遺跡地形図



第 11 図　洞楽寺北遺跡遺構配置図

遺物はほとんどなく，調査地東側で溝状遺構１条，土坑・ピット各２基を検出したが，それに伴う遺物は全くなかった。これらのうち，SD 01 は，その埋土が黄褐色砂質土で，排水を目的とするものとは考えにくいこと，尾根筋にほぼ沿って検出されたこと，調査地外の東側に平坦地が開けていること（第４図）などから「古道」と考えたい。SK 01・SK 02～SK 05 は，その性格については全く不明である。

3. ま　と　め

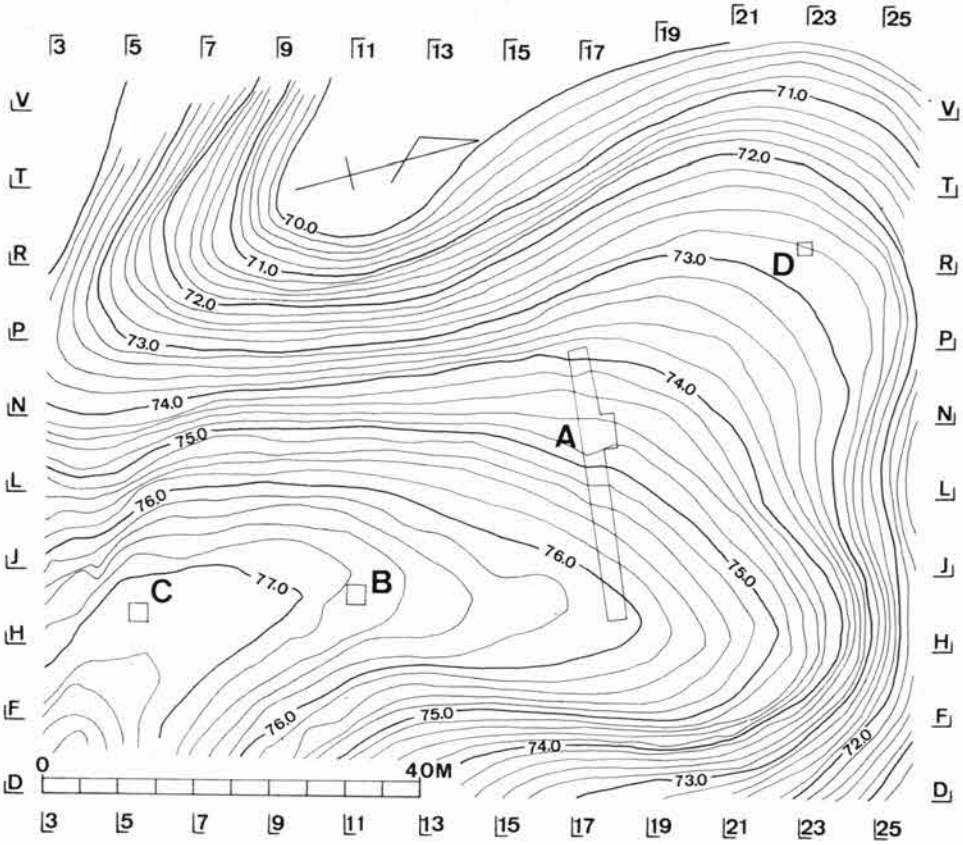
今回の調査では，若干の遺構が確認されたが，その性格を推定しうる遺構・遺物はなかった。先に触れたように，調査地の東側には平坦地があり，そこに遺跡の中心があるものと推測される。限られた調査であるので，確言はできないが，検出された「溝状」の遺構はそこに至る「道」と現時点では考えたい。ともかく，今回の調査地は，洞楽寺北遺跡の西端にあたり，東に遺跡が広がると考えられる資料を得たといえよう。　（岩松　保）

(3) ケシケ谷遺跡

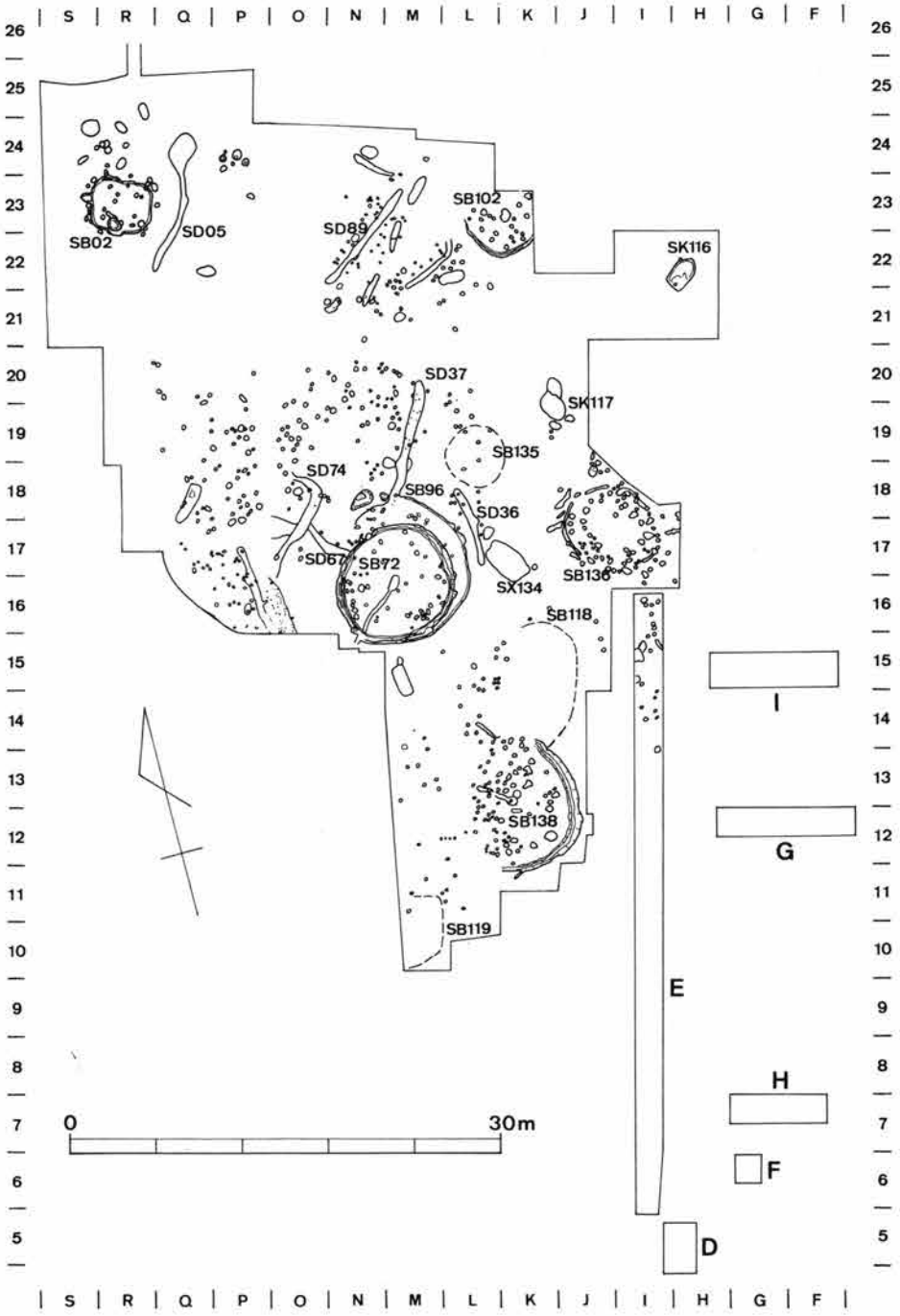
1. 遺跡の立地

当遺跡は，福知山市東南部の宮地区小字ケシケ谷にある。兵庫県から流れる竹田川と丹波山地に源を発する土師川が合流する地点にあたり，北に長田野丘陵，南に当遺跡を含む近畿自動車道舞鶴線関係遺跡が所在する丘陵・山並みが連なっており，その間には両河川の氾濫原が広く平野を形成している。

ケシケ谷遺跡は，平野部から約30mの比高差をもつ低丘陵上にあり，背後には標高160m前後の低い山々をひかえている。この丘陵の北側には，谷を隔てて約10m低いところに台地があり，その全域が弥生時代中期の宮遺跡である。南側は，小さな谷を挟んで，同程度の高さの平坦地が開けており，奥谷西遺跡が所在する（第18図）。この両遺跡は近畿自動車道舞鶴線関係遺跡として知られ，発掘調査を実施している。



第 12 図　ケシケ谷遺跡地形図（アルファベットは昨年度試掘トレンチ・グリッド名）

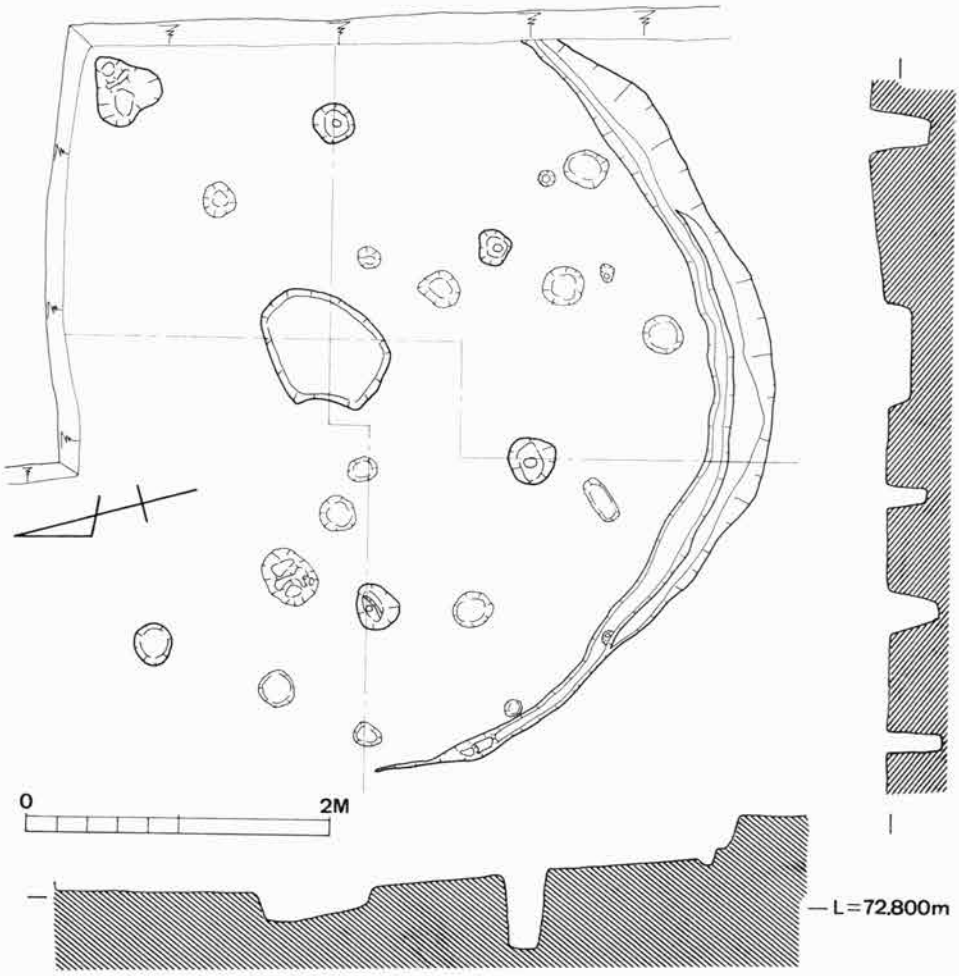


第 13 図　ケシケ谷遺跡遺構配置図（破線は上面検出のみ）

同台地上は，北西に伸びる尾根筋の南北に70m×100m の緩傾斜面が形成されており，70m のコンターライン付近で傾斜が変わり急勾配となる。遺跡推定範囲は約 9,000 m² であるが，この内の約 4,000 m² が路線内にある。

2. 調 査 経 過

昭和57年度の試掘調査（第12図A～Dトレンチ・グリッド）の結果を受けて今年度の調査を実施した。住居跡の一部を検出と報告されたAトレンチと，溝状遺構が確認されたDグリッドを拡張し，各遺構の全容を検出することからはじめた。Aトレンチのものは，SB 72 内の埋土の一つである黒褐色土がレンズ状に堆積したものを誤認したことがわかった。また，



第 14 図　竪 穴 式 住 居 跡 SB 102 実 測 図

Dグリッドのものは，SB 02 の南辺の一部を検出したものであった。

当遺跡の遺構検出面は，ほぼ20ラインから北と南とで異なる。北側は，表土（数cm）―黄褐色土（約15cm）―暗茶褐色土（約15cm）―暗褐色土（約5～20cm）―地山（黄褐色土）で，暗褐色土層上面と地山面の2遺構面がある。地山面で検出したのは弥生時代のものばかりであるが，暗褐色土層上面でみつかったものには弥生時代～中世のものが混在している。20ラインから南では，層位は同じであるが地山面でのみ遺構を検出できた。Eトレンチの大半，I・G・Hトレンチ，F・Dグリッドは，地山が黄褐色砂礫層となり，遺物もわずかで遺構は確認できなかった。

今回の調査では，弥生時代中期から後期にかけての竪穴式住居跡・溝や，古墳時代後期の竪穴式住居跡・溝などが確認され，集落跡であることが判明した。発掘面積は約 1,800 m^2 である。

3. 検 出 遺 構

竪穴式住居跡は，SB 02（古墳時代）・SB 72・SB 96・SB 102・SB 118・SB 119・SB 135・SB 136・SB 138（以上弥生時代）の9基が確認されているが，SB 118 や SB 136 は同じ場所で数度の建て替えを行っており，実数は現在整理・検討中である。以下，主要なものの概要を記す。

SB 72 は，調査地のほぼ中央にあって，最も残り具合のよいものである。壁溝は全周し，中央の炉から「排水溝」が南西に向けて掘られ，住居の外に伸びる。主柱は6本で，その間は2.7～3.2m である。深さは最高40cm を測る。径8.2m。SB 96（復元径10m）の廃絶の後につくられている。

SB 102 は，調査地の北辺で検出できた。北に下る傾斜地に位置しており，住居跡の北半は削平されている。土層観察により，床面の北半には若干の張り土を行っていたことがわかった。主柱は6本のみ検出できたが，復元すると8本の主柱をもつようである。径は5m 内外で，中央に炉をもつ（第14図）。

SB 118 と SB 138 とは一部重複して検出されたが，先後関係は SB 118 →SB 138 となる。SB 118 は，埋土を除去して床面まで掘り下げると，SB 118 に伴う壁溝とそれに平行して内側に3本，他に数本の壁溝と思われる溝と多数の柱穴を検出した。SB 138 は床面に多くの柱穴がある。壁溝は1条のみが巡っている。中央に炉跡が2か所あり，うち一つは壁が焼けて赤化している。現時点では SB 118 は最低4回，SB 138 は柱穴・炉跡の数から最低2回の建て替えが行われているといえる。

SB 02は，北西隅で検出された隅丸方形の竪穴式住居である。東西 4. 2m・南北 3. 6m で，北辺の中央にカマドを設けている。主柱 4 本と貯蔵穴を確認した。ケシケ谷遺跡で唯一の古墳時代の住居跡である（図版第 8）。

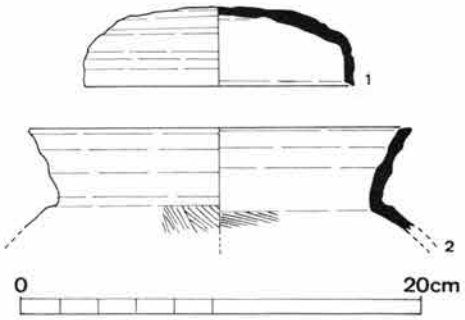
SD 67 は，SB 72 と重複しており，土層の堆積から SD 67→SB 72 の先後関係をもつ。また，この溝は SD 74 と重なっている。SD 67 は幅0. 45～1. 6m・深さ5～35cm で，5. 2m 検出できた。西端は幅が広く，浅くなり消滅している。SD 74 はL字形に巡っており，その性格は不明である。幅20～80cm・深さ約20cm である。この溝の南端の16・17 P 区は，地山が約 25cm の深さでカットされていて平坦地がつくられている。ここでは，溝 1 条と柱穴群が検出されている。

4. 出 土 遺 物（第15～17図　図版第11）

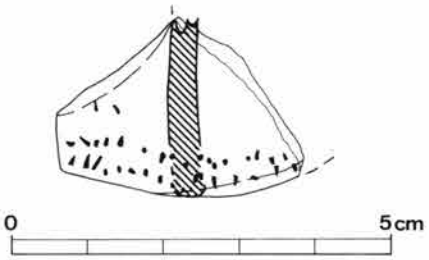
整理用コンテナに約40箱分の土器・石器が出土しているが，未整理なため，2～3 の遺構の遺物実測図を掲げておく。

第15図は，SB 02 内の床面で検出した土器である。（1）は須恵器杯蓋で，約 3/5 が残存している。天井部の約 1/2 にわたってヘラ削り調整を行っており，天井部端には明瞭な稜がみられない。ほぼ直立する口縁をもち，端部内面には段がある。復元径14cm・高 4. 2cm。（2）は土師器甕の口頸部である。口縁部は全面をなでで調整しており，口縁端部には内傾する「面」をもつ。体部はほとんど残存していないが，内外面ともハケ目調整を行っている。口径（復元）9. 5～10. 5 cmで，淡赤褐色を呈している。

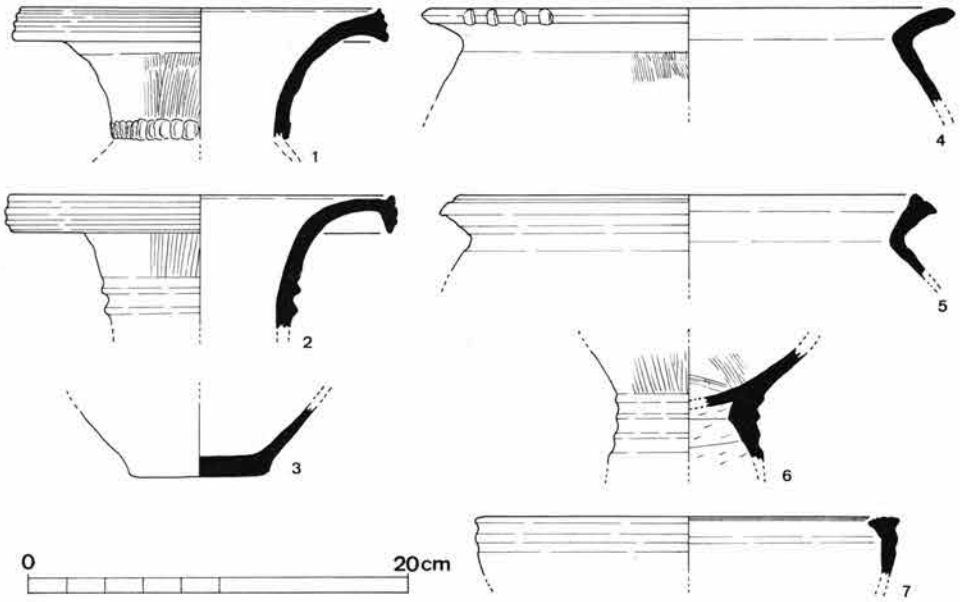
第17図はすべて SD 74 内出土の弥生式土器である。（1～3）は壺で，（1）は復元径 19. 0 cm を測り，口縁部に 3 条の凹線が巡り，頸部には粘土紐を貼りつけ，指頭をそれに左まわりに押しつけ施文している。外面の調整は，縦方向ハケ目である。（2）は復元径20. 2cm で，（1）と同じく口縁部に 3 条の凹線文を施している。頸部には 2 条以上の凹線が施文されて



第15図　SB 02 内出土土器実測図



第16図　分銅型土製品実測図



第 17 図　SD74 内 出 土 土 器 実 測 図

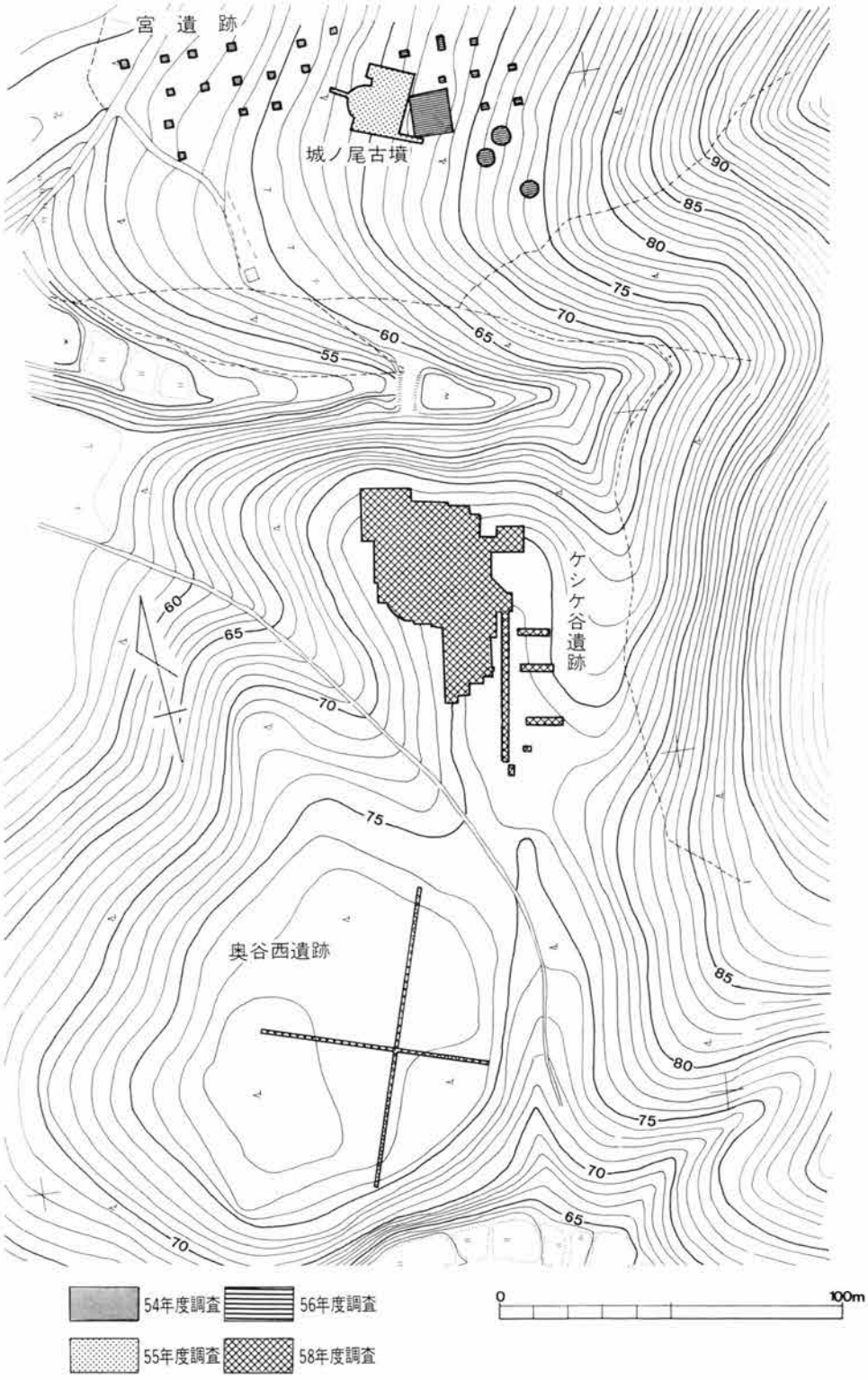
いるが，詳細は不明である。（3）は底部で径 6.6 cm を測る。内・外面とも磨滅が著しく，調整は不明である。（4・5）は甕である。（4）は口縁部にヘラ状のものを押しつけ，「刻み目」状のものを施している。現存の破片では 4 個残っているが，これが 1 単位であるのか否か，また，単位間の間隔等はわからない。復元径27.2 cm。（5）は頸部から「く」の字に屈曲して外方に立ち上がる口縁を有し，口縁端部に面を有し，肥大している。口縁端面には凹線（？）が 1 条巡る。調整は磨滅のためわからない。復元径 24.2 cm。（6）は脚付椀で，体部下半から脚の上半が残存している。椀の内外面とも刷毛で調整している。脚と椀の接合部に近いところには，3 条の凹線文がある。脚の内面は，篦で横方向に削って成形している。（7）は鉢で，口縁が特に厚くつくられ，端部が内側に突出している。端面には，4 条の擬凹線（？）が，外面の口縁に近いところに 2 条の凹線文がそれぞれ施されている。復元径 21 cm。

分銅型土製品と思われる小片が出土している（第16図）。縁辺に沿って二列に刺突文が施されている。京都府北部では，久美浜町の橋爪遺跡で分銅型土製品が出土している。(注14)

他に石鏃（図版第11）や石斧などの石器が多数出土しているが，前述のように整理が進展していないため，それらは後日の報告としたい。

ま　と　め

概述のように，発掘調査により弥生時代中期～後期にかけての集落跡が検出できたが，近



第 18 図　ケシケ谷遺跡・宮遺跡・城ノ尾古墳・奥谷西遺跡調査地位置図

畿自動車道舞鶴線（以下，近舞線と略称）関係遺跡において，弥生時代の遺構・遺物を検出したのは，宮遺跡・城ノ尾城館跡・大内城跡・後青寺跡と本年度調査のケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡である。ここでは，弥生時代に限って若干の整理を行っておきたい。

現在までの調査・整理によると，前述の遺跡から出土した弥生式土器は，すべて中期後半（畿内第Ⅳ様式）以降のもので，前期・中期前半のものは皆無である。中期後半の土器が出土する遺跡は，上掲のものすべてであり，この時期の土器が「爆発的」に丘陵上で出土する。この現象は，この時期に弥生文化が初めて福知山市東南部に波及したか，もしくは，同地域内の低地から台地・低丘陵上へ居住空間が拡大した結果と考えられる。ここでは，以下の理由により，後者の可能性に立ちたい。まず，近舞線関係遺跡は，限られた低丘陵上の調査であり，谷や低地には全く調査が及んでいないことが掲げられる。まだ発掘調査の及んでいない低地に，前期の弥生集落が埋没している可能性は否定できない。現在，水田として利用されている平地から，時期は判然としないが，磨製石斧２点が出土していることを付記しておく。[注15] 第２に，この地域が播磨と丹後を結ぶ加古川―由良川ルートの通過点にあたり，早くから弥生文化の影響を受けていたと考えられることが掲げられる。綾部市館遺跡では弥生時代前期の土器が出土しており，加古川―由良川ルートにあたる当地区は，早くから弥生文化の洗礼を受けていたといえる。状況証拠ではあるが，当地区において前期における低地の集落が存在する可能性を考えたい。とすると，発掘調査例の多い河内や淀川水系で見られるような，中期に低台地・丘陵上に集落が営まれることと一致する。当地域の前期の低地に営まれた集落は，いわば「開発」型の集落であって，それが開墾と農耕の定着による集落内部の人口圧や社会的要因などによる分村もしくは移住として，近舞線内の中期集落を位置づけうる。

次いで，近舞線関係遺跡に見る中期後半の集落間の関係についてであるが，ケシケ谷遺跡では，遺構・遺物は整理中で詳細は不明ではあるが，同時には２～３基の家が建ち並ぶものであった。宮遺跡では，竪穴式住居跡が２基検出されている。奥谷西遺跡は，現在も発掘調査中であり，断定できないが，ケシケ谷遺跡とほぼ同じ様相を示すものと推測される。[注16] 各集落の規模から，各遺跡は，いわゆる「単位集団」ごとの集落跡といえるのではなかろうか。近接する丘陵に小集団が分住し，それらが協業して一村落を構成していたと考えたい。

以上，当地域における弥生時代の社会の一素描をもって，まとめにかえたい。

（岩松　保・藤原 敏晃）

注1　岩松　保「福知山市大内周辺の新発見遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第5号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982.3

注2　伊野近富「洞楽寺2・3号墳」(「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注3　注1と同じ

注4　伊野近富「ケシケ谷城館跡」(「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注5　現地調査に参加していただいた方々を以下，列記しておく（順不同，敬称略)。

（大内地区）芦田実雄・井上光治・竹内　実・中司丈太郎（故人)・中司順太郎・堀　一三・堀一夫・堀　嘉寿・堀喜太郎・堀　憲三・堀光一郎・堀　佐一・堀三治郎・堀　俊治・堀俊太郎・堀　竹三・堀　只志・堀　宗男・堀　好一・吉田義男・片山サワ子・片山すえ・竹内千枝子・土田和子・土田初江・土田美千代・土田美也子・土田ゆき子・土田としえ・土家筈恵・中司てる子・中司咲子・中野千代の・西躰香代子・堀　昌子・堀あいの・堀　綾子・堀恵美子・堀　きみ・堀コトエ・中司咲子・堀千恵子・堀みさえ・堀美智子・堀ゆき子・堀よしえ・堀ヨシエ・堀美津野・山本美喜子・吉田光子

（宮地区）芦田三治・井上五郎・今川栄一・塩見喜十郎・谷垣　勇・藤田滝雄・井上はつ江・井上美代子・井上千恵子・今川和美・今川芳子・藤田秋野・藤田千代子・藤田はな・藤田はるゑ・藤田美行

（多保市地区）芦田一男・芦田庄五郎・芦田精一・大槻角治郎・大槻佐一・大槻実太郎・和田銀太郎・芦田阿や野・芦田志げ野・芦田志津乃・芦田真寿恵・芦田八重子・芦田よし子・大槻かつえ・大槻きよ・大槻太重・大槻としゑ・大槻正子・大槻まさの・大槻まちゑ・大槻美代野・大槻みゑ・塩見きくの・塩見ヤエノ・田渕みよ子

注6　調査補助員・整理員として調査に参加して下さった方々は以下の通りである（敬称略)。

崎山正人・国木健司・杉山司郎・千原　毅・今川俊之・須田九三・立川明浩・藤田正美・吉岡克巳・中山　肇・中井八郎・大槻哲也・竹田英浩・鹿野正人・赤木克行・佐藤　敦・白波瀬正幸・菅原真人・神田博文・立石則也・松永厚典・恵美寿彦・堀　明彦・北山　茂・安野哲也・永田真也・武田真治・竹中　郁・出口公子・梅垣小百合・大槻智恵美・堀　祐子・大西宏美・芦田由美子・由良明美・藤田知子・北山由美・浅田和美・加藤典子

注7　御助言・御指導をいただいた先生方は，以下の通りである（敬称略)

都出比呂志（大阪大学助教授)・瀬戸谷皓（豊岡市立郷土資料館)・田中光浩(峰山町教育委員会)，平良泰久（京都府教育委員会)・中村孝行（綾部市教育委員会)・大槻真純(福知山市教育委員会)・禰宜田佳男（大阪府教育委員会)・福永伸哉（大阪大学)・常盤井智行・村川俊明・横田　明（以上，山城考古研究会)

注8　『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会　1978

注9　辻本和美・石井清司「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-2)』京都府教育委員会) 1981

辻本和美・伊野近富「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

伊野近富・岩松　保「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

上記概報のそれぞれの項参照

注10　『丹波の古墳Ⅰ　――由良川流域の古墳――』（山城考古学研究会)　1983.12

注11 『久田山　綾部市文化財調査報告　第５集』（綾部市教育委員会）　1979. 3

注12 「青野遺跡第５次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第９集』綾部市教育委員会）　1982. 3

注13 松井忠春ほか「豊富谷丘陵遺跡昭和55年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-2)』京都府教育委員会）1981

注14 石井清司ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-2)』 京都府教育委員会）1981

注15 現在京都府立福知山高等学校にて保管している。(『福知山市史』第１巻　福知山市史編さん委員会）

注16 奥谷西遺跡では，現在までのところ４基の竪穴式住居跡がみつかっている。

付表2　須恵器杯・蓋分類案

	器形	実測番号	口径	器高	器形	調整	備考
Ⅰ	杯蓋	1	13.5	4.6～5.2	天井部端に明瞭な稜がつくられており，口縁は下方に長く直立・端部に段を有する。	天井部のほぼ全体にわたって回転ヘラケズリを施す。	
	杯身	2	10.5～11.4	5.2～5.9	立ち上がりがやや内傾気味に上方に長く伸び，端部は内傾する段をなしている。	底部外面の約1/2にわたって回転ヘラケズリ。	
Ⅱ							現在までには見つかっていない。
Ⅲ	杯蓋	3	4.2	14.0	天井部端の稜は形骸化し，強くナデルことで代用，口縁は短く，下方に伸びる。端部に内傾する段を有する。	天井部の回転ヘラケズリの範囲は約1/2。	
	杯身	4	4.8	12.8	立ち上がりはやや短く直立する。底部は丸く，全体に深い。	底部外面は約1/2にわたって回転ヘラケズリで調整。	
Ⅳ	杯蓋	5	4.2～5.0	14.3～15.2	天井部端と口縁部の稜がなくなり，丸く仕上げられている。端部内面の段は見てとれない。	天井部の約1/2にわたってヘラケズリをする。	
	杯身	6	4.5～4.8	12.9～13.9	立ち上がりは短くやや内傾する。Ⅲのものと較べて，口径のわりに器高が低く，扁平となる。	底部外面の1/2弱にわたって回転ヘラケズリを行う。	
Ⅴ	杯蓋	7	3.7～4.3	14.0～15.0	天井部から口縁部へはなだらかに移行し丸味を帯びている。口縁部はやや外反気味である。	天井部約1/2にわたって回転ヘラケズリを行っている。	
	杯身	8	4.0～4.2	12.6～14.8	器形は，Ⅳのものとかわりがないが，口径が小さくなり，ますます扁平となる。	底部外面約1/2にわたって回転ヘラケズリで調整する。	
Ⅵ	杯蓋	9	3.6～4.2	12.8～14.6	やや扁平で，器形は小型化する。形態はⅤのものとほぼ同じ。	天井部は回転ヘラケズリ調整を加えているが，ほとんど削らずに簡単に仕上げている。	
	杯身(A)	10	4.0	12.2	立ち上がり部はⅤのものとかわりないが，体部から底部にかけてふくらみをもち，全体に深い印象を与える。	底部中央付近は，ヘラ切り痕が残り，その周辺をかすかにヘラケズリを行う。	この段階以降，深いものを(A)とする。
	杯身(B)	11	3.4～3.8	11.6～12.8	器高は低くなり，ますます浅いものとなる。	底部中央部のみをヘラケズリをして，中央をやや丸く仕上げている。	この段階以降，浅いものを(B)とする。
Ⅶ	杯蓋	12	3.6～3.7	10.9～12.8	口径は11.5cm前後となり天井部は丸く仕上げている。口縁はやや外反する。	天井部のヘラケズリ調整は省略されている。	
	杯身(A)	13	2.6～4.4	11.0～14.9	立ち上がりが短く内傾し，器形が深い。	底部中心部は未調整で，その周囲を簡単にヘラケズリする。	
	杯身(B)	14	3.4	12.6	底部は，ヘラケズリを簡単にすますためか，やや平坦化してくる。	〃	
	杯蓋	15	3.6～3.7	11.5～12.0	天井部から口縁にかけては半円形を呈している。	ヘラケズリは全く省略されており，ロクロのみで成形。	

Ⅷ	杯身(A)	16	3.6～4.0	10.2～10.6	口縁部の立ち上がりは極めて小さくつくられ，内傾している。底部は平たく，ほぼ直線的に受け部に至る。	ヘラケズリは全く省略されており，ロクロのみで成形。	
	杯身(B)	17	3.6	11.4	口径は小さくなり，内傾する短い立ち上がりがつく。底部はやや平らにつくられる。	〃	
Ⅸ	杯蓋	18	3.5～3.8	10.2～11.5	口径11cm，器高3.5cm 程度まで小型化している。	〃	
	杯身(A)	19	3.5	10.5	立ち上がりは最大限省略化され，受け部と同等の高さまでのものを付す。	〃	
	杯身(B)	20	3.9	10.5	〃	〃	
Ⅹ	杯蓋		7.8～9.3	2.6～3.4	蓋に宝珠つまみとかえりが付されている。	天井部はヘラケズリを施す。	

2. 土師南遺跡発掘調査概要

1. はじめに

本調査は，昭和56年度より実施されている府立福知山高等学校校舎老朽化に伴う増改築工事に先立つものであり，今回の調査が第3次となる。当校敷地は，土師南(はぜみなみ)遺跡として周知の遺跡であり，昭和56年度・57年度と2次にわたる調査が実施された。本年度も，事前の発掘調査が必要であると判断され，京都府教育委員会の依頼を受け， 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査主体となり，主任調査員 辻本和美，調査員 岩松　保・藤原敏晃が調査担当者となって，昭和58年7月4日から7月28日まで発掘調査を実施した。その結果，奈良時代～鎌倉時代の遺物及び遺構を検出し，本遺跡の性格の一端を明らかにする貴重な成果を得た。

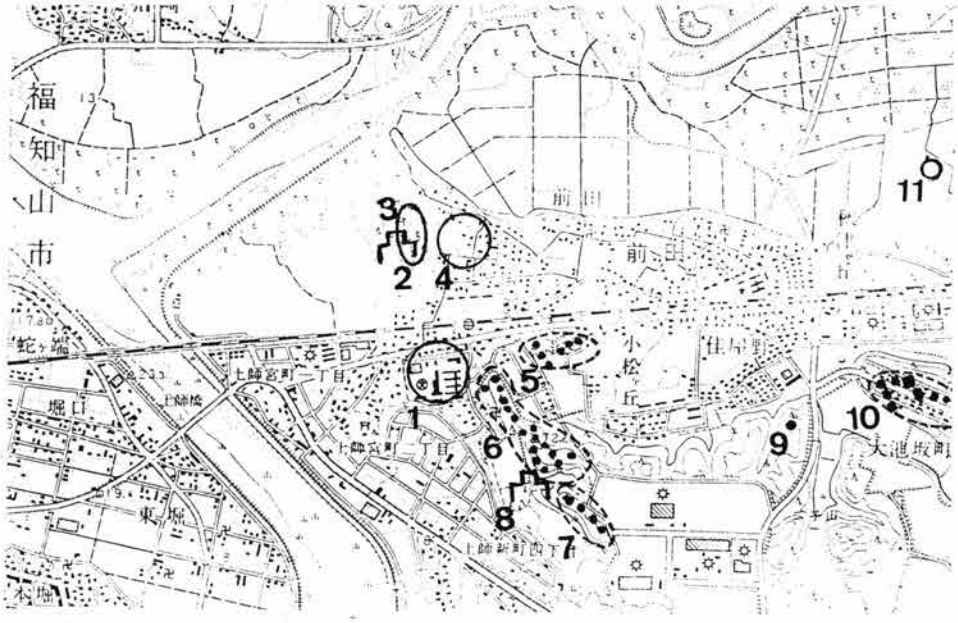
なお，調査においては，福知山高等学校をはじめ関係諸機関の方々，調査補助員として参加していただいた学生諸氏(注1)から多大な協力を得た。記して感謝の気持ちを表したい。

2. 位置と環境

福知山高等学校は福知山市土師南650番地に所在する。当地西方では，三国岳(標高670m)に源を発する由良川と，京都府・兵庫県の府県境の山間に源を発する由良川の主要支流である土師川が合流し，流路を大きく北へ向ける。由良川は北桑田郡を西流し，船井郡・綾部市を経て福知山市に至り，当地西方で北流し舞鶴市を貫流して日本海に至る京都府最大の河川である。この由良川により，長さ20kmに及ぶ綾部市・福知山市の狭長な盆地が形成されているのであるが，この福知山盆地の地形上の最大の特色は，周縁地に多くの段丘が存在することである。由良川と土師川両河川の間にも，東西4km・南北2～3kmに及ぶ広大な長田野段丘が存在する。土師南遺跡は，この段丘の北縁部に位置している。標高は約26mを測る。

この長田野段丘では多くの遺跡が発見され，調査されている。長田の和田賀遺跡ではチャート製削器が採集(注2)されているが，旧石器時代の所産の可能性が示され，福知山の黎明期といえる。

石原の上野地区は段丘の北東部に当るが，上野平遺跡(注3)として発掘調査が実施されている。面積30万m^2を占める広大な土地から，縄文時代晩期～弥生時代と考えられる多くの石器が出土している。打製・磨製の石斧・石鏃・皮剝等であるが，中でも土掘り具とされる短冊型



第19図　周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 土師南遺跡　2. 前田城跡　3. 愛宕山遺跡　4. 岩畑遺跡
5. 宝蔵山古墳群　6. ゲシ山古墳群　7. 南町古墳群　8. 土師城跡
9. 八ケ谷古墳　10. 中坂古墳群　11. 川原遺跡

の打製石斧が数多く検出され，集落に係る遺構や土器が検出されていないことと考え合わせて，何らかの生産活動の場であるとされている。

前田の岩畑遺跡は，長田野段丘より一段低い盆地を隔てた北側の段丘上に所在するが，石庖丁などの多種多様な石器が弥生時代中期の土器と共に採集されている(注4)。その中でも石鏃は200点以上採集されている。古来より河川の氾濫を避ける良好の地として存在していたのであろう。

この遺跡の西，土師の地に通称愛宕山という円形の丘があり，この地に愛宕山遺跡(注5)が所在する。この北東斜面より，弥生時代中期に比定される高杯・台付無頸壺の完形品が採集されている。こうした河川の氾濫を避けた高位な場所に，集落を営む傾向があるとも考えられる。

弥生時代の墳墓はまだ周辺より発見されていないが，土師南遺跡の東尾根線上に，弥生時代末～古墳時代初頭にかけての宝蔵山古墳群(注6)がある。直径 10～15 m の円墳 3 基と一辺 30m の方墳 1 基がある。方墳には，計 6 基の埋葬施設があり，中には弥生時代後期の甕が棺として利用されているものもある興味深い古墳群である。

同じ尾根上にはゲシ山古墳群(注7)（円墳16基），南町古墳群(注8)（前方後円墳？1 基，円墳 3 基）が

ある。ゲシ山古墳群では，人骨が遺存した箱式石棺が確認され，周囲から埴輪片も採集されている。

さらに，東側，沖積地を見下ろすかのように長田野段丘の北縁には古墳が点在する。八ケ谷古墳[注9]・中坂古墳群[注10]・大池坂古墳群[注11]・仏山古墳群[注12]と続く。八ケ谷古墳は5世紀前半の築造で，一辺 20 m の方墳である。3基の石棺を持ち，副葬品には琴柱型石製品・鏡・ガラス玉などがあり，宝蔵山方墳に葬られた者の次期の実力者（首長系譜）を思わせる。古墳時代後期，5世紀後半～7世紀前半にかけて，中坂古墳群・仏山古墳群などが築造されるが，7世紀前半には，中坂5号墳・同7号墳や仏山7号墳など，土坑墓に加えて横穴式石室を模した横穴粘土室と呼ばれる埋葬施設が採用されている。前述の方墳といい，4世紀代より延々と畿内的でない埋葬形態が採用されているとも考えられ，今後の問題となろう。

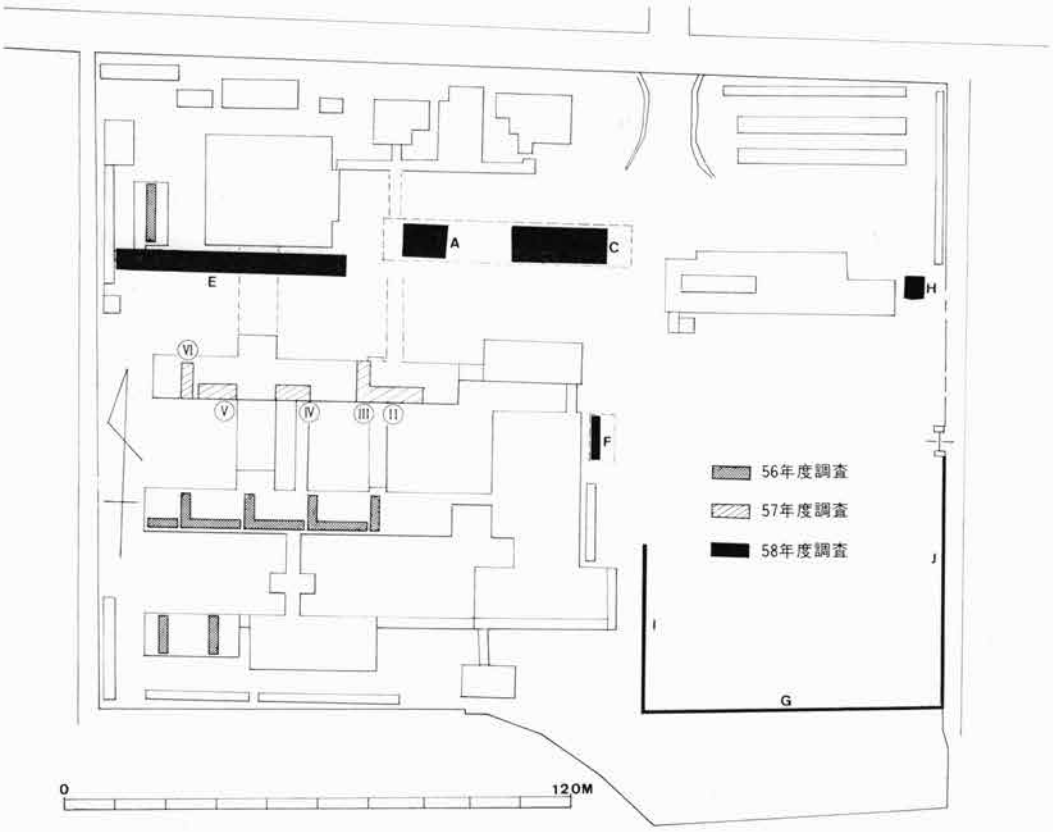
こうした地方実力者は，しだいに中央政権と係わりを持つようになり，氏族として姓を与えられ，庶民は部民として中央政権の支配下に入る。当遺跡の名称「土師」は，土師連が私有する土器作りの民であった土師部より起ったといわれ[注13]，福知山市の宗部（曽我部）や，綾部市の物部同様，古代豪族に由来する地名が残っている。

律令時代には，『和名類聚抄』によれば，国郡の制が定められた時，福知山市は天田郡に属し，10郷を有するとある。当地はこのうち，土師郷の地にあたる。

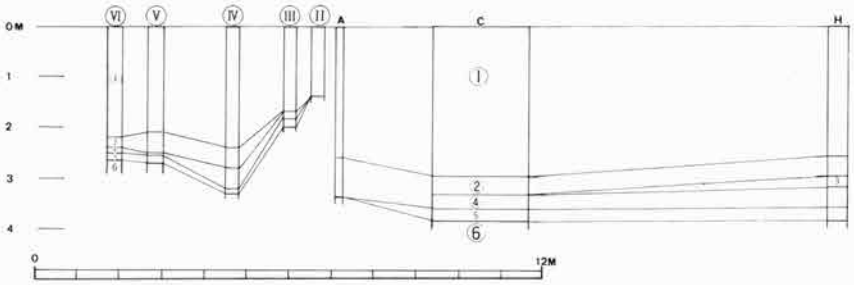
班田制が崩壊する頃には，土師郷も土師荘として貴族の私有領となり，藤原頼長の所領であったが，頼長が保元の乱で敗れたため後白河院の領となったことが史上にみえ[注14]，封建社会となるまで永続していく。

3. 調 査 経 過

本調査は，昭和58年度福知山高等学校増改築工事のうち新校舎（敷地720 m²）の部分に，水道管の埋設されていた中央部を避けて，東西に2か所のトレンチ（Aトレンチ: 10m×8m，Cトレンチ：20 m×8 m）を設けて掘削を開始した。ところが，調査を進めて行く段階で，予想を上まわる厚さ約 2.5 m 程度の校地造成時の盛土層が堆積していることが判明した。このため，土砂崩壊を防ぐ勾配をつけたので，遺物包含層の調査はCトレンチ部の18 m×2.5 m の範囲にとどまった。なお，新校舎以外にも，附属施設・グラウンドの排水溝等の工事に際し，随時，立会調査を行った（E～Jトレンチ）。次に各地点の調査結果の概略について述べる。なお，Cトレンチの遺構・遺物等は別項で詳しく述べる。



第 20 図　調 査 地 位 置 図



第 21 図　土 層 柱 状 図

1. 盛　　土　2. 黒 褐 色 土　3. 黒　色　土　4. 黒 色 粘 質 土
5. 茶褐色土（黄色粘土がブロック状に混ざる）　6. 灰 色 白 色 粘 土
7. 黒灰色シルト層　8. 淡灰褐色砂質土　9. 淡灰褐色砂質土（黄色砂が混ざる）

4. 各トレンチの調査概要

Aトレンチ Aトレンチは，土砂が崩れ危険なため，機械による掘削により土層確認を行っただけである。地表下約 2.6 m は盛土でその下約 70 cm 間が遺物包含層である黒ボク層が堆積し，地山である灰白色粘土層へと続く。

Cトレンチ Cトレンチは，今回唯一遺構・遺物が検出できたトレンチである。土層は，上層から大きく盛土層，黒ボク層，地山（灰白色粘土）に分層できる。盛土層は，現福知山高等学校グラウンド造成時の土層と，明治33～35年にかけて造成された府立第3中学校建設に伴う下層の2層に分層できる。遺物包含層である黒ボク層は，上層より大きく，黒褐色土・黒色粘質土・茶褐色土に分層でき，地山の灰白色粘土に至る。

Eトレンチ Eトレンチは，長さ 5.4 m×4.8 m・深さ約 1.5 m のトレンチである。体育館整備において掘削されたので，立会調査を行ったものである。立会の結果，約 1.5 m の範囲までは，すべて盛土であった。以下に述べるトレンチはすべて立会調査によるものである。

Fトレンチ Fトレンチの調査は，更衣室建設に伴う掘削によってであった。長さ 10 m ×2.4 m・深さ 0.6 m のトレンチである。グラウンド造成時の盛土であると判断した。

G・I・Jトレンチ これらのトレンチは，グラウンドの排水溝設定のための掘削によるものである。幅 70 cm 程度で，長さは，G＝約 61 m・I＝約 39 m・J＝約 60 m である。深さは約 50 cm を測る。すべてを盛土と判断した。

Hトレンチ 下水処理施設に伴う掘削によるもので，長さ約 5 m×4.8 m・深さ約 3.8 m のトレンチである。地表下約2.1 mまでは盛土層であるが，その下層に，4層に分層可能な黒ボク層を確認した。この層は遺物を含んでおり，地山の灰白色粘土まで約1.5 mの厚さをもつ。黒ボク層は，東→西・南→北へと若干傾斜をもつ。

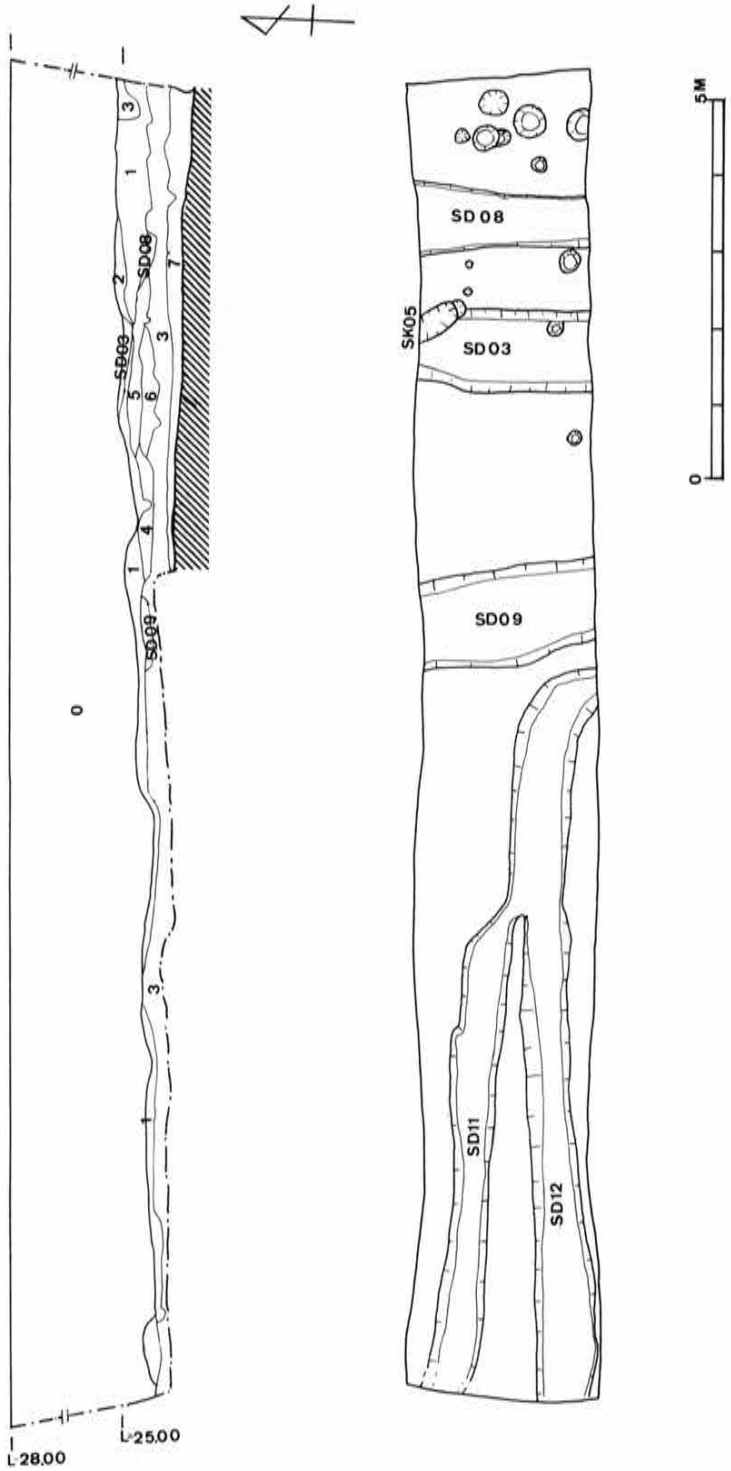
C トレンチ検出遺構

溝1 (SD 03) 幅約 1 m・深さ約 10 cm の南北方向に走る自然流路である。黒ボク上層である黒褐色土を切り込む。

溝2 (SD 08) 黒ボク中層，黒色粘質土を切り込む溝で，幅約 50 cm・深さ約 5 cm を測り，南北方向に走る自然流路である。

溝3 (SD 09) 黒ボク中層，黒色粘質土を切り込む，幅約 1.2 m・深さ約 10 cm の南北方向に走る自然流路である。

溝4 (SD 10)・**溝5** (SD 11) 幅約 80 cm・深さ約 10 cm の南北方向に走る溝が，西へ流れる方向を変えて走り，溝4（幅約 70 cm・深さ約 10 cm）と溝5（幅約 65 cm・深さ約 10



第22図　遺構平面図及び土層断面図

0. 盛　土　1. 黒褐色土　2. 暗茶褐色土　3. 黒色粘質土
4. 黒褐色粘質土　5. 黒灰色土　6. 黒茶色土　7. 暗茶褐色土
地山：灰白色粘土

cm）の2つに分岐して走る自然流路である。流れる方向はトレンチ端に近づくにしたがいしだいに北へと蛇行するようである。黒色粘質土を切り込む。

土坑1（SK 05）溝1を切る浅い土坑で性格は不明である。中からは江戸時代の陶器片が出土し，他の遺構とは時代を異にするものである。

その他，土坑もしくは柱穴と考えられるものが，10数個検出されているが，性格は不明である。

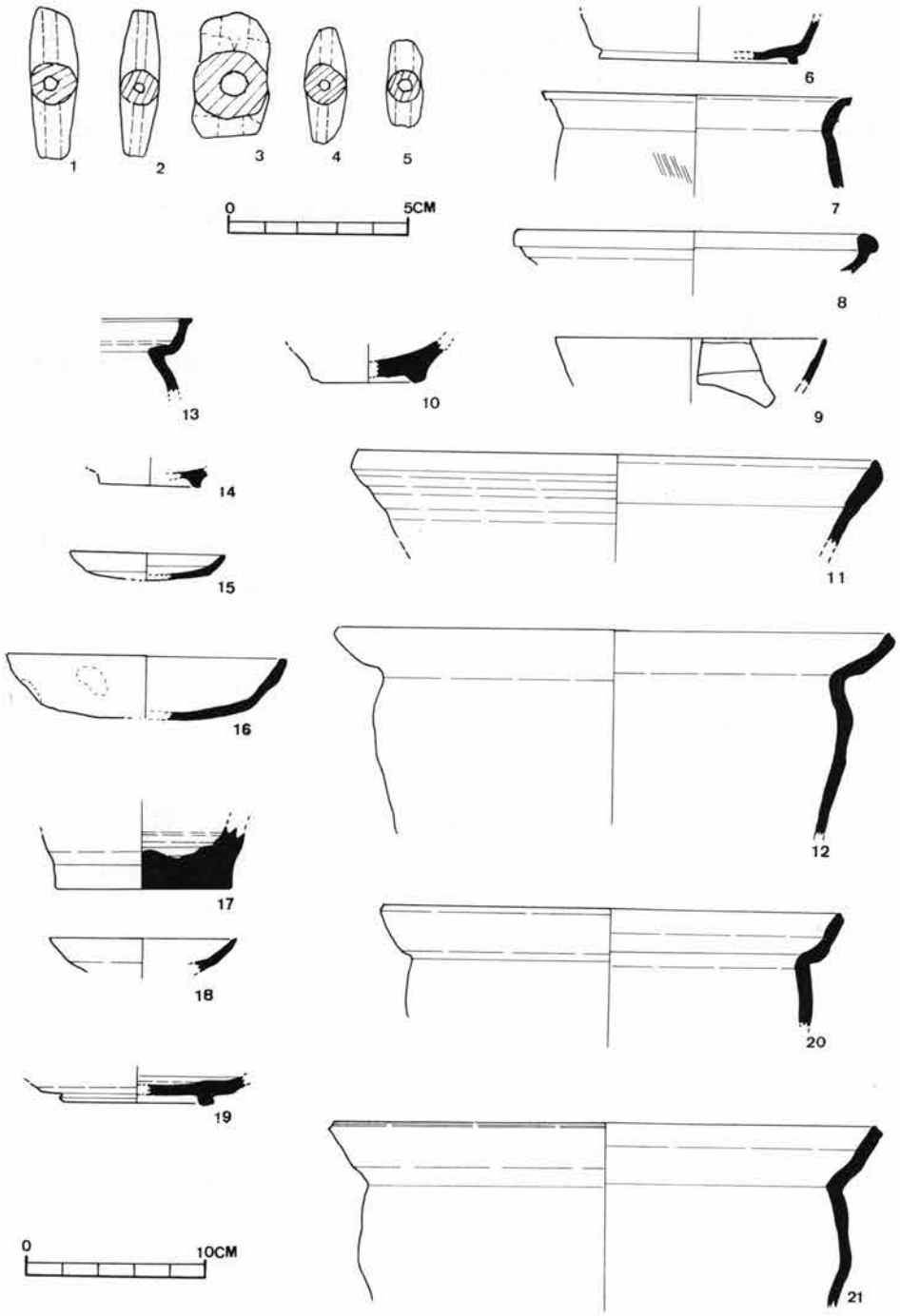
C トレンチ出土遺物

黒ボク層の黒褐色土・黒色粘土層及びそれらを切り込む遺構から，奈良時代～鎌倉時代にかけての遺物が出土している。

出土した遺物の中心は，平安時代後期～鎌倉時代にかけてのものである。（9）は輸入陶磁器である青磁椀である。復元径15 cmを測る。（以下示す径はすべて復元径である。）13世紀前半。（10）は白磁椀の高台部である。内面には釉が施されているが外面は箆なでで，露胎である。福建省の窯の産であろう。1,200年前後。（18）は，（10）と同時期に比定される白磁皿である。外面下半は露胎である。（11）はねり鉢である。体部は斜上方へのび，端部はとがり平端面をなす。内外面ロクロなで。口径30 cmを測る。（14）は瓦器椀高台部である。13世紀前半？，径2.9 cmを測る。（16）は土師器の椀である。手捏ね成形で指頭圧痕が残る。口径15 cmを測る。色調は赤褐色を呈し，通有の土師器に比べ赤い。13世紀後半。（12）・（13）・（20）・（21），これらは瓦質の鍋である。（12）・（20）・（21）は，体部から外上方へ短く屈曲した後，さらに斜上方に立ちあがる口縁部を持つ。（（21）は他の2つに比べやや開き気味。）口縁端部は面を持ち，内面の体部と口縁部との境には，明瞭な稜を持つ。口径はそれぞれ（12）は31 cm，（20）は25 cm，（21）は30 cmを測る。（13）は体部から外へ鋭く屈曲してすぐに上方に立ち上る口縁部を持つ。口縁端部は両側に肥厚し，平坦をなす。内面の体部と口縁部の境には鋭い稜を持つ。（13）以外は，ほぼ同時期に比定できる。12世紀後半～13世紀前半。（13）はこれらより時期が下り，13世紀後半に比定できよう。これらの瓦質の鍋は摂津・山城地方のものと同系列にあたる。ところが14世紀に入ると瓦質の鍋の使用は丹波地方ではみられなくなり，外面をたたきしめた土師質・須恵質[注15]の鍋が使用されるに至る。これらの資料はこの土師質鍋の採用前のものである。（15）は，瓦器の皿である。口径8.6cmを測る。

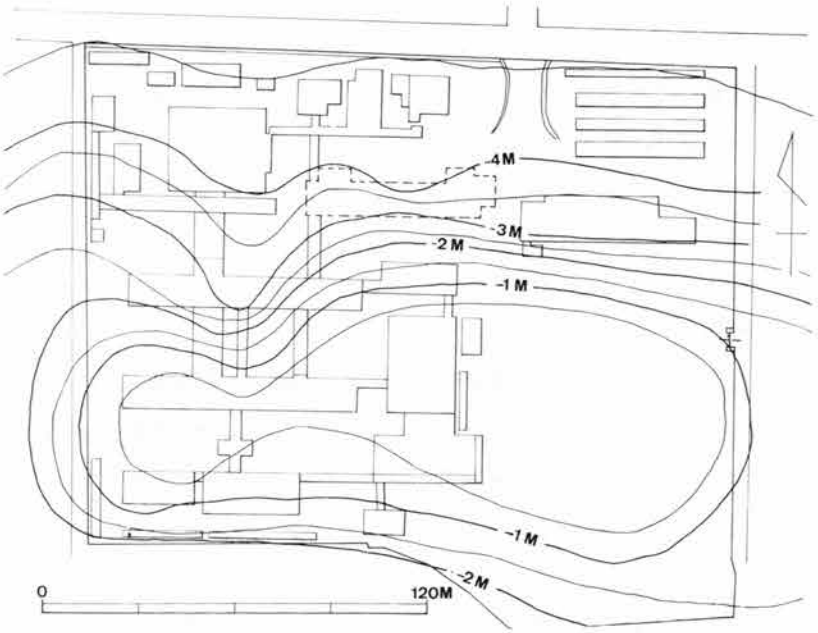
これらの遺物以外に，土錘や奈良時代～平安時代前半にかけての遺物が若干みられる。

（1）・（2）・（4）・（5）は，長さ2～4 cm前後を測る土錘である。断面円形を呈し有孔である。（3）は太い円柱状の有孔土製品で指押し整形したものである。土錘であろう。



第 23 図　出 土 遺 物 実 測 図

1～5．土　錘　6・8・11・17・19．須恵器　7・16．土師器　9．青磁　10・18．白磁　12～15・20・21．瓦器　黒色粘土層：1・2・6～12　SD11：13～16　SD08：4・7　SD10：3・8　黒褐色土：19・20　SD03：21



第 24 図　造成前地形推定図（現地表面からのマイナス高）

（6）は高台付の杯で，斜め外方に立ちあがる体部を有する。高台は断面台形を呈し，底部と口縁部の屈曲部に付く。9 世紀後半。（7）は甕で，斜上方に口縁部が立ち上がり，口縁端部が肥厚する。体部外面に刷毛目が施され，口径は 7 cm を測る。（6）と同時期か？

（8）は，玉縁状口縁を有する鉢で，口径 18. 4 cm を測る。10世紀～11世紀。（9）は，高台付杯で，高台部を削り出すようである。高台底径 8 cm を測る。8 世紀。

5. ま　と　め

今回の発掘調査は予想外の盛土や湧水のため調査面積約 200m² のきわめて狭い範囲にとどまった。以下概略を記してまとめとしたい。

(1)昭和56年度から58年度の調査の結果を総合して旧地形を推定すると，敷地東方長田野段丘の北へ延びる狭長な丘陵とこれと分れて西へ広がる葉枝脈状の狭い丘陵があり，このうち敷地が位置するのが葉枝脈上の尾根筋を伴って，東から西へ延びている丘陵であり，その間には北へ開口する狭小な開析谷が広がっていた。

(2)福知山高等学校では，約 2. 6 m 前後の敷地造成時の盛土が包含層まで堆積していた。丘陵部を削平し谷部を埋め立てて敷地を造成したことが判明した。

(3)谷部は56年度調査のＢ地区付近からはじまり，57年度調査の第 3 トレンチ辺りを中心に

北へ開口する。

(4)本年度調査地のCトレンチはこの谷部に当る。本調査では地名である土師(部)との係わりを示唆する遺構・遺物も乏しく，明確にしえなかったが，むしろ藤原頼長の所領から後院領へと変遷した土師荘の頃との係わりが重視される。

(5)出土した遺物も平安時代～鎌倉時代のものが主体をなし，遺物には当時ある程度の身分階層の者しか所有し得なかった輸入陶磁器片も検出され，遺跡の性格に考慮が必要と考えられる。なお，出土遺物には土錘も検出されているが，奈良時代の遺跡では土錘の出土の頻度が高く今後の検討が必要であろう。

今回の調査は，きわめて限られた範囲であるため，遺跡の性格を考えるには不充分なものといえる。しかし，少なくともこの地に，また周辺地に，平安時代後期～鎌倉時代にかけてのある程度の実力者が存在した集落・館等が遺存している可能性はきわめて高く，文献史料の検討や今後の調査成果が期待される。　（藤原 敏晃）

注1　杉山司郎・千原　毅・白波瀬正幸・今川俊之・吉岡克己・中山　肇・佐藤　敦・竹田英浩・神田博文・菅原真人・立石則也・崎山正人・梅垣小百合
注2　『福知山市史』第1巻　福知山市史編さん委員会　1976
注3　『上野平遺跡発掘調査報告書』京都府教育委員会　1973
注4　注2と同じ
注5　注2と同じ
注6　堤　圭三郎「宝蔵山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1976)』京都府教育委員会）1967
注7　注2と同じ
注8　『京都府遺跡地図』京都府教育委員会　1972
注9　注2と同じ
注10　末本信策・平良泰久「中坂古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1972)』京都府教育委員会）1972
注11　注8と同じ
注12　注3と同じ
注13　注2と同じ
注14　細見末雄『丹波の荘園』名著出版　1980
注15　伊野近富氏の御教示による。

3. 中山城跡発掘調査概要

1. はじめに

中山(なかやま)城跡は，舞鶴市字中山に所在し，若狭湾にそそぐ由良川の河口部から約 5 km さかのぼった由良川右岸の丘陵上に築造された戦国時代の山城である。

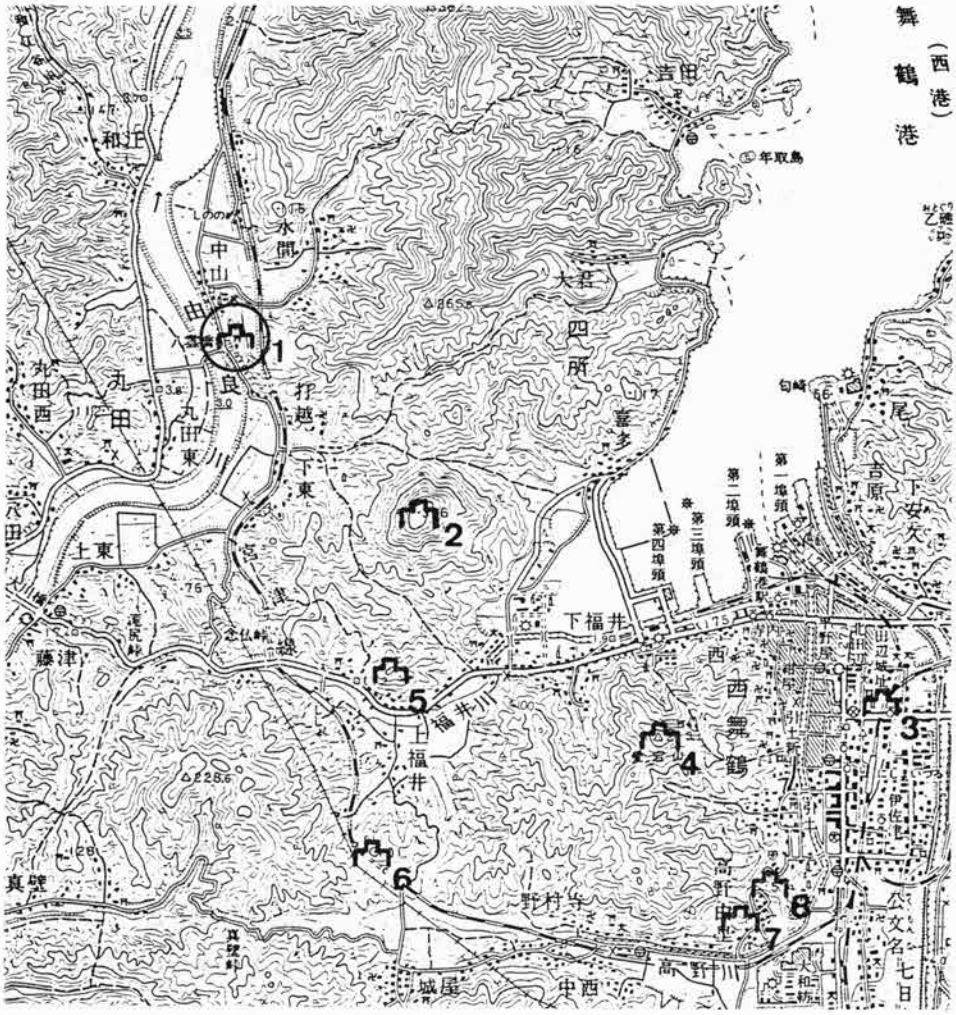
中山城跡の存在する丘陵の西側裾部には，府道西神崎上東線が由良川に沿って存在している。京都府土木建築部では，今回この府道の改良工事を施行する計画がなされ，丘陵の一部が削平されることとなった。その結果，丘陵上に存在する中山城跡の一部もその影響を受けることが明らかになった。中山城跡は，『京都府遺跡地図』(注1)に周知の遺跡として登録されており，各関係諸機関と協議の結果，文化財保護法に基づいて発掘調査の必要があるとの判断がなされた。発掘調査は府文化財保護課の指導のもとに，財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査主体として実施することになった。現地調査は，着手時期が冬期であったため，冬期（昭和57年度）・夏期（昭和58年度）の２次にわたって実施した。第１次調査は昭和57年12月８日～昭和58年３月31日まで実施した。調査期間中，１・２月は降雪期間のため，やむなく調査は中断した。第１次調査では，集石をもつ火葬墓を検出していた。第２次調査は，昭和58年６月20日～９月28日までの期間で実施した。調査は冬期に検出した火葬墓の調査地区から引き続いて実施した。

発掘調査にあたって，第１次調査には調査課主任調査員 辻本和美，調査員 竹原一彦・藤原敏晃の３名が担当した。第２次調査においては同じく主任調査員 松井忠春，調査員 竹原一彦・小池　寛の３名が担当した。

発掘調査を実施するにあたり，舞鶴市教育委員会をはじめ関係諸機関・地元の方々の御協力・御援助を得た。また，発掘調査に従事していただいた地元地区有志の方々(注2)，調査補助員・整理員として参加していただいた多くの学生諸氏(注3)に対して，あわせ記して謝意を表します。

2. 中山城跡の位置と略沿革

舞鶴市の西部を北流する一級河川である由良川は，福井・滋賀の両県と境を接する三国山を源とする全長約 146 km の河川である。京都府下で最大規模の流域面積をもつ河川であるが，由良川下流域の平野は他の多くの同規模河川と異なり，広大な平野を形成してはいない。わずかに中流域の綾部市・福知山市において，若干の平野が形成されている。下流域では河

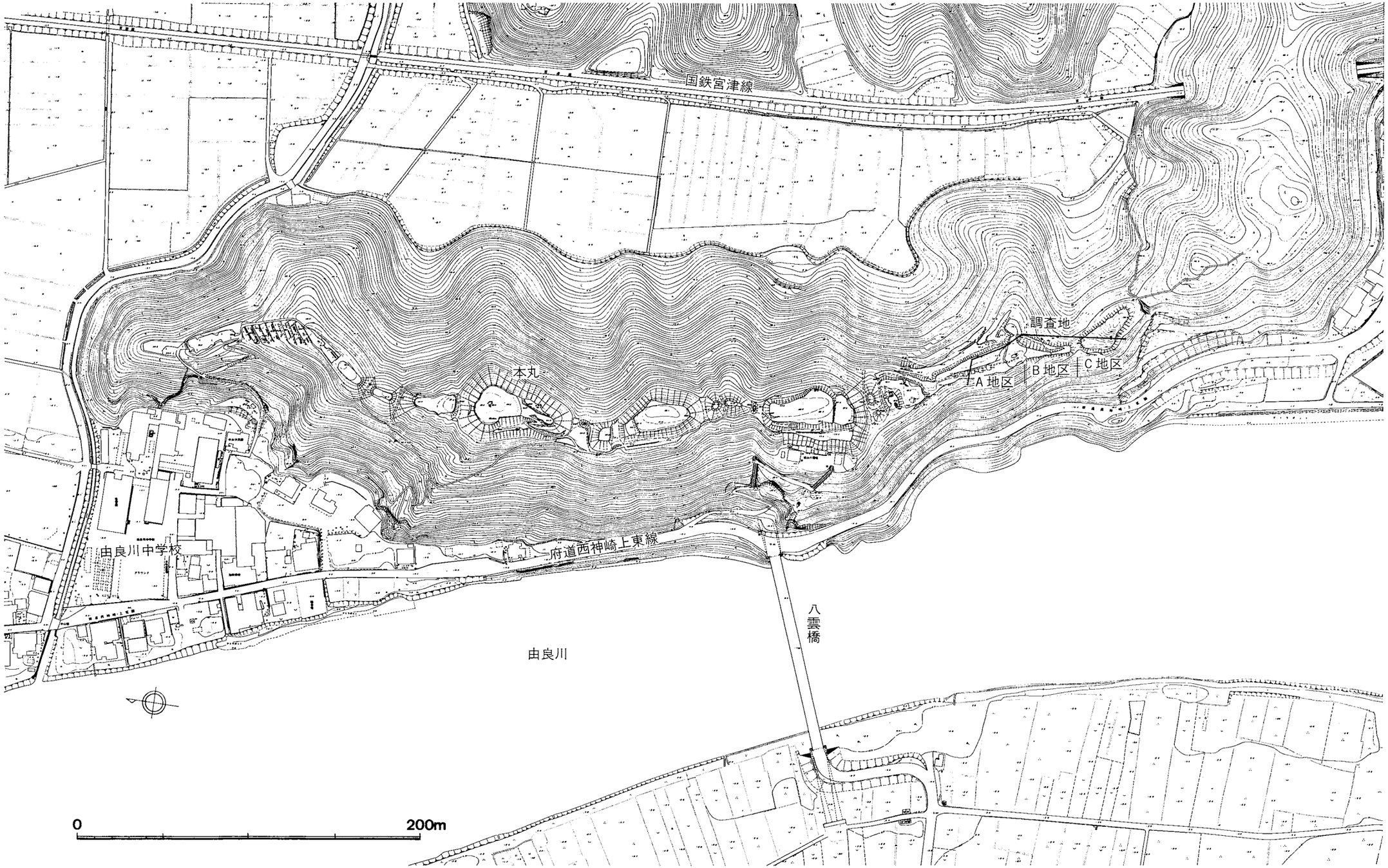


第 25 図　中山城跡と周辺の城館跡分布図（1/50,000）

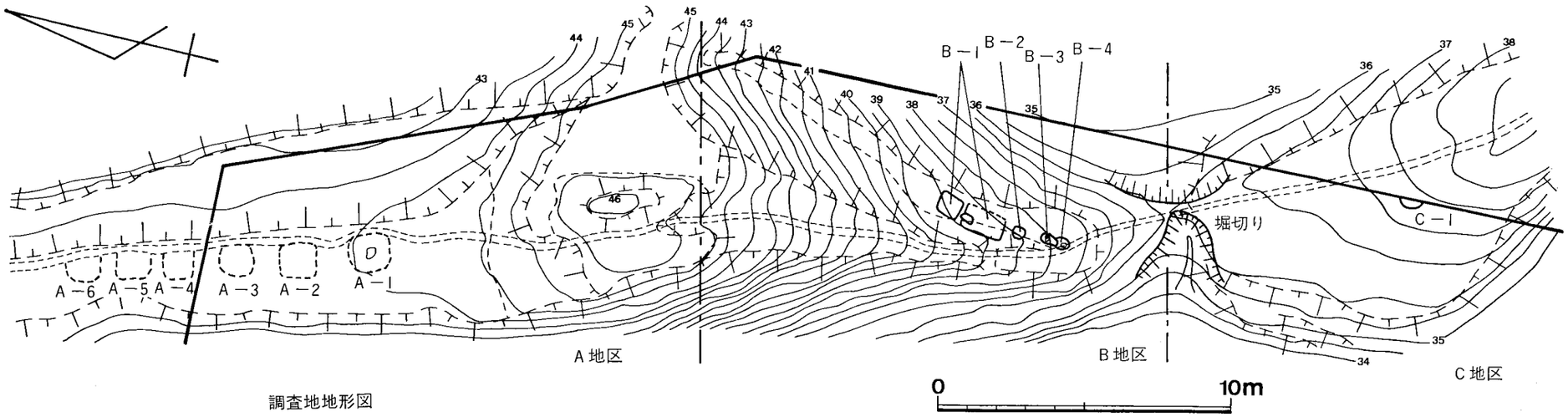
1. 中　山　城　2. 建 部 山 城　3. 舞鶴（田辺）城
4. 田 辺 山 城　5. 福　井　城　6. 城　屋　城
7. 引土(茶臼山)城　8. 高 野 由 里 城

川に沿って幅約 500 m 内外の細長い平地が続き，自然堤防が顕著に認められる。自然堤防部には数多くの遺跡が存在し，代表的な遺跡として桑飼下遺跡(注4)（縄文時代）・志高遺跡(注5)（弥生～古墳時代）等が認められる。自然堤防上には，明治40年の大洪水以前までは各所に宿場街が存在していた。由良川は，高瀬舟や蒸気舟等による水運が発達し，舟着場や牛馬の市等により宿場街は繁栄していた。古代より由良川は人々の生活の上で重要な位置を占め，戦国時代においては周辺の丘陵上に山城が築かれていた。

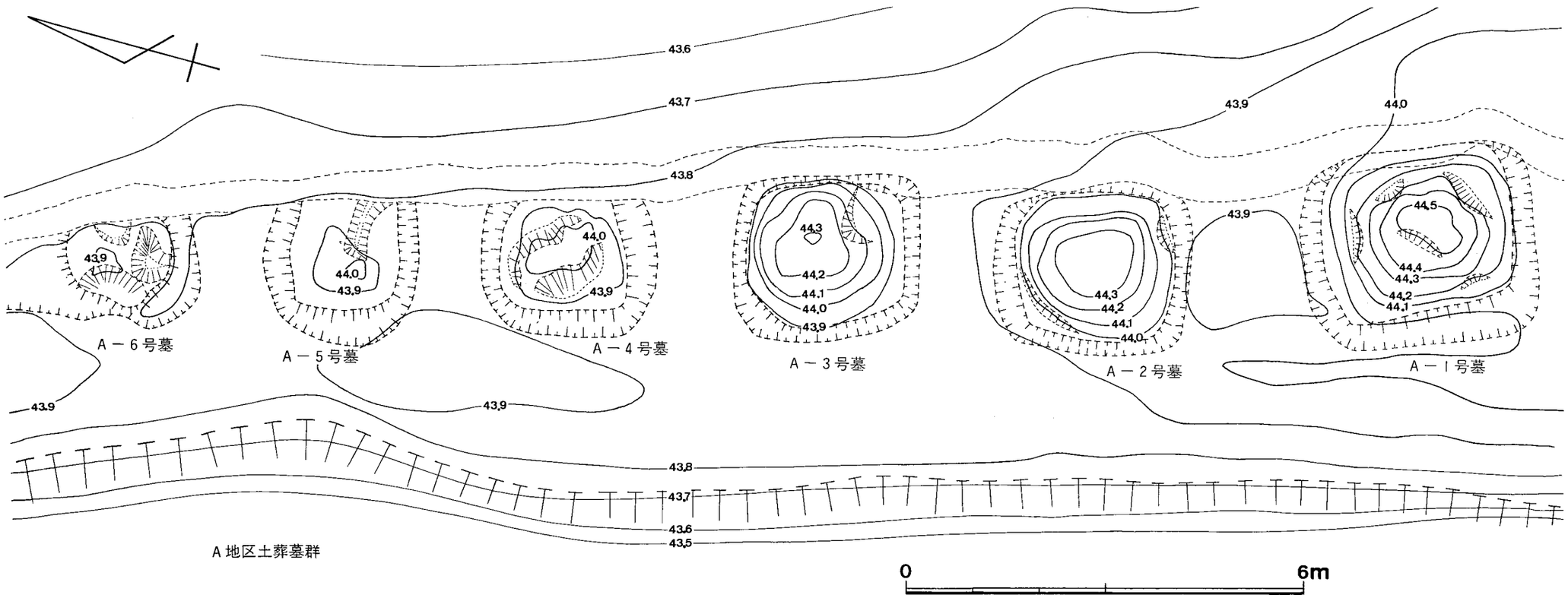
中山城跡もこのような山城の一つであり，代々丹後守護職であった一色氏一族(注6)の居城であ



第 26 図　中　山　城　跡　地　形　図



調査地地形図



第 27 図　調　査　地　地　形　図

る。中山城跡より南東約1.5kmの建部山山頂（標高約316m）には建部山城跡が存在する。この城は代々一色氏総師の居城であり，丹後85城を統轄したと伝えられている[注7]が，多くの場合は京及び与謝郡府中の地に居住したものとみられている。中山城跡と建部山城跡は，地勢等からみて本城と支城の関係であったとみられる。

一色氏は足利氏の一門であり，丹波・丹後は京の都の資源地の他に搦手にあたる要衝の地でもあることから，足利尊氏は室町幕府を開くにあたり，延元元（1336）年に一色範光を丹後の守護職に就けている。一色氏が丹後に入国して後，天正10（1582）年に10代一色義俊が没するまでの間，当地にその勢力をもっていた。建部山城最後の城主9代一色義道は，織田信長の丹後討伐の命による細川藤孝・明智光秀連合軍との戦にやぶれ，天正7（1579）年に中山城に遁れたが，中山城城主沼田幸兵衛の謀叛により中山城でその最後を遂げている[注8]。文献に残る中山城の城主に関しては不明な点が多く，この沼田幸兵衛とする説の他に一色左京大夫とする説もある[注9]。

一色氏滅亡後，信長は明智光秀に丹波を，細川藤孝には丹後を与えた。藤孝はその居城として田辺城を築き，中山城には沼田勘解由左衛門清延を城主として配した。細川氏はその後慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦の功により、豊前中津，さらに九州小倉39万石の領主として転封され、沼田氏も行動を共にしたため，中山城はその後廃城となっている。

中山城跡は由良川右岸に沿って南北に細長く横たわる丘陵頂部に存在している。連郭式の山城であり，丘陵尾根の稜線上を利用して郭・曲輪・土塁・空堀等を配している。丘陵の東側は常に水が満ちている深田であり，対する西側崖下には由良川が流れ，この両者は自然に堀の役割をはたしていたものと考えられる。中山城跡の本丸は丘陵中央部最高所に存在する郭部にあったと考えられる。城の大手は現在の市立由良川中学校の南にあたり，搦手は建部山に続く丘陵の南側にあったと推定される。

3. 調 査 経 過

調査地は中山城跡の南端部に位置する。調査対象面積は約 1,000 m² であり，対象地内には郭（2か所）・空堀（1か所）・曲輪部（1か所）が含まれていた。調査地はその立地状況から，A地区（北側郭部）・B地区（中央傾斜部）・C地区（南側郭部）の3地区に分割した。A地区には，6基の方形マウンドが存在しており，それらの遺構は墓とみられていた。6基の墓のうち南側3基が調査の対象となり，残る北側3基の墓は保存されることとなった。

第1次調査ではB地区とC地区の調査を実施した。B地区とC地区の境界部には空堀様の丘陵狭部が存在した。A地区からC地区にかけて急傾斜するB地区には，東側斜面部に幅約

2m 程度の曲輪が南北方向に延びており，傾斜の緩くなる曲輪中央部に集石を認める火葬墓（B－1号墓）を検出した。第1次調査の段階では集石部の検出段階で終了したが，集石の状況から当初は4基の墓が連なっているものと判断した。C地区は中山城跡の最南端部に推定されているところから，城跡に関する何らかの施設等が存在したものと考えられていた。調査の結果，中山城跡に関する遺構はほとんど検出されず，唯一B地区とC地区の境界部で空堀と考えられる丘陵狭部を検出したのにとどまった。C地区の調査では調査地の中央部東端で，火葬墓が1基検出されただけであった。

第2次調査は，今回の調査の中で最も主要な調査地となるA地区が，8月中旬以降にまで着手時期が延期された。そこで第2次調査は第1次調査に引き続き，B地区の調査から着手した。

B地区の調査では，B－1号墓を中心に周囲を調査した結果，B－1号墓の南側で新たに3基の火葬墓を検出した。これらの火葬墓は曲輪部に連続して存在していた。新たに検出された火葬墓は，集石を認めるもの（B－2号墓）と大型の石を1個中央部に据えたもの（B－3号墓・B－4号墓）の2形態が認められた。

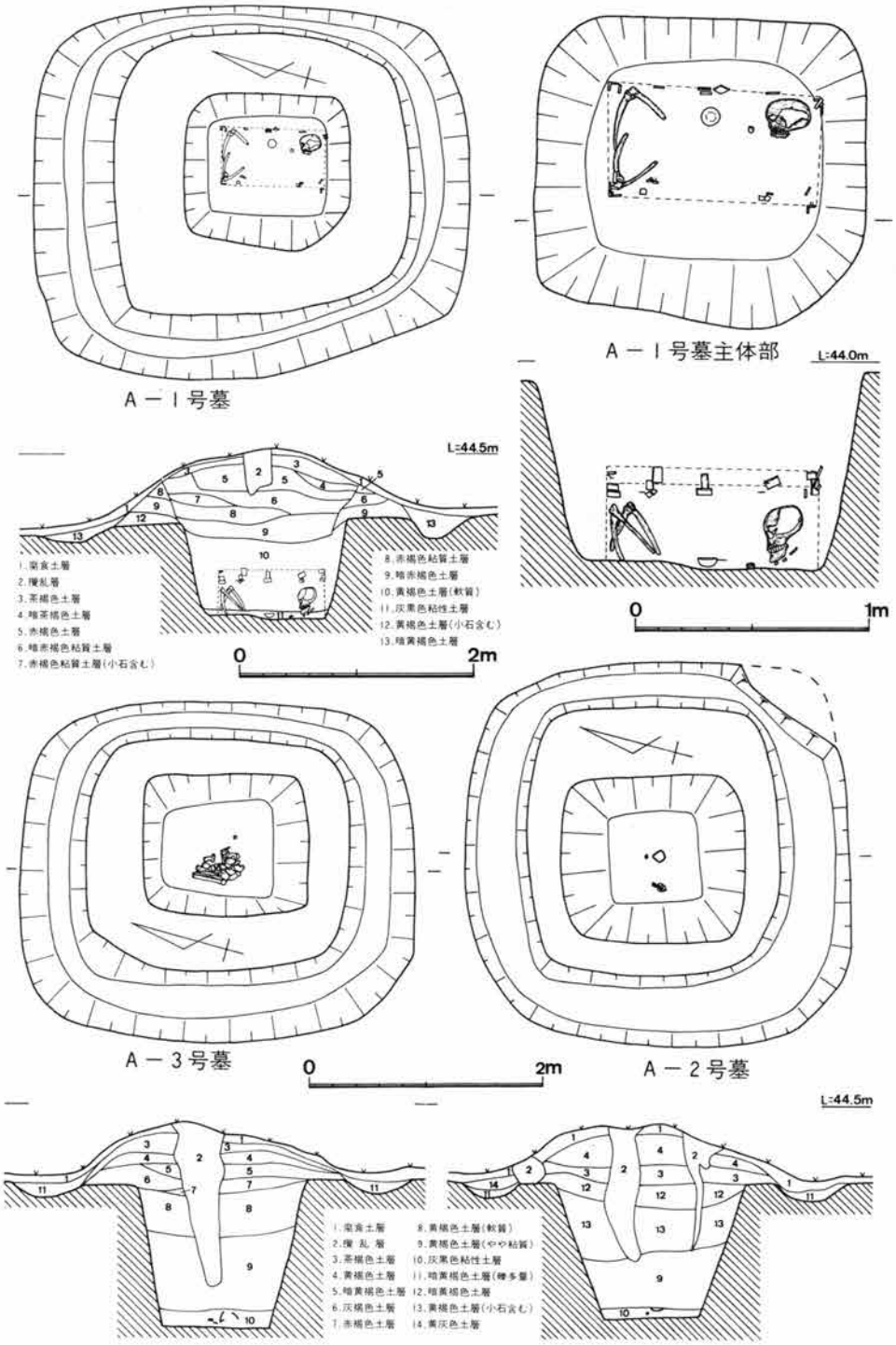
A地区の調査では，丘陵上にトレンチを各所に設定し掘り下げを実施したが，城跡に関係する遺構は検出されなかった。ただ，A地区南端の小テラスは人為的に削平されたとみられ，その削平は中山城築城に伴うものと考えられる。

A地区には当初から6基の古墓が連続して存在することが判明していた。今回の調査予定地内には6基の古墓のうち南側3基の古墓が含まれており，南側3基の古墓（A－1号墓～A－3号墓）の調査を実施した。これらの古墓は他の地区で検出した古墓と異なり，すべて土葬墓であった。調査対象外の古墓（A－4号墓～A－6号墓）もこれらと同様に土葬墓と考えられる。

4. 検出遺構

(1) A地区

A地区で検出した遺構は3基の土葬墓のみであった。古墓は南北方向に延びる幅約 4～7m の狭長な丘陵の尾根筋上に認められる。連続する6基の古墓はほぼ一直線上に約 2m 程度の間隔で存在している。各古墓ともマウンドが認められる。6基の古墓のうち最南端に位置するA－1号墓が当初の形状を良く残している。各古墓のマウンドは，北側に位置するものほど比高差も少なくなり，A－6号墓においては，ほとんどマウンドは認められない程度になっている。各古墓のマウンドの周囲には浅い窪地が繞っていることから，周溝が存在す



第28図　A 地 区 土 葬 墓 実 測 図

るとみられていた。

A—1号墓(第28図)　古墓群中で最南端に位置する古墓である。プランは方形を呈し，盛土は一辺約 2.4～2.8 m・高さ約 50 cm の規模であり，7～8 層にわたって盛り上げている。周溝は幅約 20～50 cm・深さ 10 cm 前後の浅い溝であった。埋葬主体部は周溝によって方形に画された部分（一辺約 2.3 m）のほぼ中央に位置していた。主体部は地山面を約 80 cm 程度掘り下げた方形プランであり，上縁では一辺約 1.3 m・底面では 80～90 cm の規模で，墓坑底面は南側半分が小さく 1 段下がるが，ほぼ水平に近い状態であった。墓坑内には棺に付けられていたとみられる金具（第35・36図）が多量に出土した。それらの金具の出土状況からみて棺の形態は長方形の櫃とみられる。各金具はほぼ原位置を保って出土しており，櫃の規模は，ほぼ縦 50 cm・横 90 cm・高さ 40 cm 程度であったと推定される。棺は墓坑の中央部よりやや東側に設置されていた。棺の内部には頭部を南側に置いた遺骸（頭蓋骨・下肢骨）が遺存していた。遺骸は頭部を前傾させ，下肢骨は膝を折り曲げてくるぶし部で交差させており，下肢骨が立った状態で検出された。多くの場合，下肢骨が立った状態で遺骸が検出されると座棺による埋葬とみられるが，今回検出の遺骸は寝棺であった。これは棺の規模に関係したものと考えられる。櫃の木部はすでに腐朽し残っていないが，金具に銹着した木質の状態からみて，櫃は白木製であったとみられる。

棺の内部には遺骸のほかに小型の銅鉢 1 個・寛永通宝 6 枚が納められていた。銅鉢は棺の中央部やや東側より口縁部を上にした状態で出土した。寛永通宝 6 枚は重ね合せた状態で銅鉢よりやや南側に離れた場所より出土した。銅鉢と銅銭はいずれも遺骸の上部に安置されていたものとみられる。

A—2号墓(第28図)　A－1 号墓の北に位置する古墓である。プランはA－1 号墓と同様に方形を呈し，盛土は一辺約 2.2 m・高さ約 40 cm の規模で，4 層にわたって盛り上げている。周溝は幅約50cm・深さ約15cm前後の浅い溝が廻る。周溝によって画された東西2.3m・南北 2.1 m の方形区画のなかで，埋葬主体部の墓坑はやや西側に偏った状態で検出した。墓坑は地山を方形に約1.1 m 程度掘り下げている。墓坑の断面は逆台形状を呈し，墓坑の上縁は一辺約 1.3～1.5 m・坑底部はほぼ水平を保って一辺約 70 cm の規模であった。墓坑内にはA－1 号墓でみられた棺を示す金具等の遺物は検出されなかった。棺の構造は不明であるが，墓坑の形態がA－1 号墓と同様に方形であることから，方形の櫃が棺であったと推察される。

墓坑内中央より遺骸の一部として頭頂骨片が検出された。遺骸の遺存状況が悪く，他の遺骨との関連が不明であることから断定はできないが，座棺による埋葬であったと推定される。

遺骸のほかに墓坑内には銅製の錫杖頭1個と寛永通宝6枚が納められていた。錫杖は手錫杖とみられ，墓坑の西側より先端を南に向けた状態で出土した。寛永通宝6枚は重ね合せた状態で，墓坑の中央部より出土した。

A—3号墓(第28図)　A—2号墓の北に位置し，今回調査の古墓のうち最も北側の墓である。プランはA—1号墓・A—2号墓と同様に方形を呈する。盛土は一辺約1.1m前後・高さ約40cmの規模で，5層にわたって盛り上げている。マウンドの形状は他の2基の墓と異なり，盛土の表層部は風雨等の影響により表土の流出があったとみられ，マウンドのコーナーは崩れてプランは円形に近い。周溝は幅約30～60cm・深さ約10cm前後の浅い溝が廻る。

周溝によって画された東西1.9m・南北2.2mの方形区画のほぼ中央部で，埋葬主体部の墓坑を検出した。墓坑は地山を方形に約1.2m近く掘り下げている。墓坑の断面は逆台形を呈し，墓坑の上縁は一辺1.2～1.4m，坑底部は一辺0.7～1mの規模で，ほぼ水平を保っている。

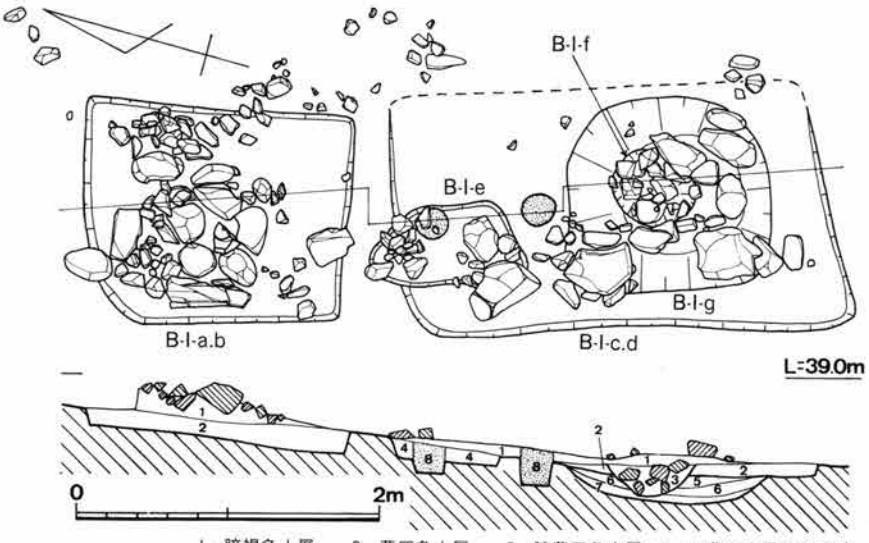
墓坑内にはA—2号墓と同様に，棺の形態を示す釘・金具等の出土は認められなかった。棺の構造は不明であるが，墓坑の形態がA—1号墓と同様に方形であることから，A—3号墓の棺も方形の櫃が使用されたと推定される。

墓坑内の坑底西側から人骨が折り重なった状態で出土した。下肢骨の一部はやや立った状況で検出され，頭蓋骨も人骨の上部から検出されたこと等からみて，被葬者の遺骸は座棺で埋葬されたと推定される。墓坑内には遺骸のほかに寛永通宝6枚が，重ね合せた状態で墓坑の中央部より出土した。A—1号墓・A—2号墓で出土した銅鉢・錫杖等の副葬品は認められなかった。

(2) B 地 区

B地区は調査地の中央部に位置する。A地区とC地区の比高差は約9mであり，A地区からC地区に向って急角度で下降する傾斜地がB地区である。丘陵尾根はA地区境界部では幅約3.5mであるが，中央部およびC地区境界付近では幅も約1mと狭く，A地区からの傾斜角は約49°である。尾根筋の東側一段下がったところに，幅約1～1.5mの曲輪が認められる。この曲輪はC地区境界付近の尾根狭部より現われ，B地区中央付近までは傾斜角も緩やかで尾根に沿って存在するが，中央部以北では急傾斜でやや東方に向けて上がっていく。この曲輪はA地区テラスに到達した所で終り，A地区南端で東方に延びる小テラスを削り，丘陵尾根に狭部をつくりだしてテラスに変化を与えている。

B地区で検出した遺構は，中山城築造段階で造られたとみられるこの曲輪のほかに，後の時代にこの曲輪の南部を利用した火葬墓を4か所で検出した。



1．暗褐色土層　3．黄灰色土層　5．暗黄灰色土層　7．灰黄色土層(炭含む)
2．暗赤褐色土層　4．暗灰黄色土層　6．暗灰褐色土層　8．骨片

第 29 図　B－1 号 墓 実 測 図

B－1号墓（第29図）

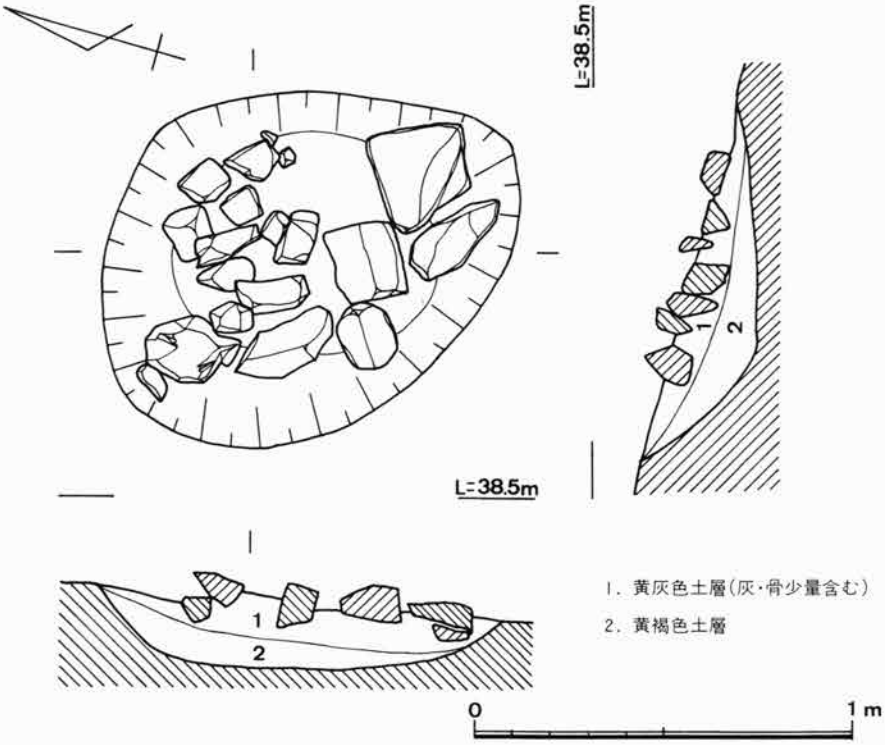
第１次調査において，上部施設である多量の集石が認められた墓である。この墓は曲輪のテラス部を利用して造られているが，曲輪の傾斜部をさらに削平して水平に近いテラスをつくりだした後に使用している。

第１次調査の段階では，集石の状況から４基の集石をもつ墓（B－１号墓ａ・ｂ・ｃ・ｄ）が存在するものと推定していた。しかし，第２次調査で集石下に墓坑の掘形を検出した段階で，第１次調査段階における推定が正確でなかったことが判明した。

Ｂ－１号墓の墓坑掘形は合計７か所検出した。７か所の掘形中６か所がそれぞれ重複しており，うち２か所からは火葬骨片が多量に出土したほか，一部の墓坑掘形では少量の火葬骨の出土が認められた。

B－1号墓 a・b　第１次調査において２基の墓と推定していた墓である。墓坑掘形プランは方形を呈する。墓坑の掘形は東西約 1.4ｍ・南北約 1.7ｍ であり，北西コーナー部を除く各コーナーはほぼ直角に近い。墓坑は地山面から約 20 cm 程度掘り下げただけで浅く，坑底面は南東方向に緩く傾斜している。墓坑内から火葬骨等の出土は認められなかった。

墓の上部施設として，拳大から人頭大以上の河原石を多量に使用した集石が認められた。集石は墓坑の中央部やや北側に集中しており，集石のプランは一辺約1.2ｍ程度の方形を呈する。墓坑外に集石に使用したとみられる石材が存在したことから，集石の当初のプランは



第 30 図　B－2 号 墓 実 測 図

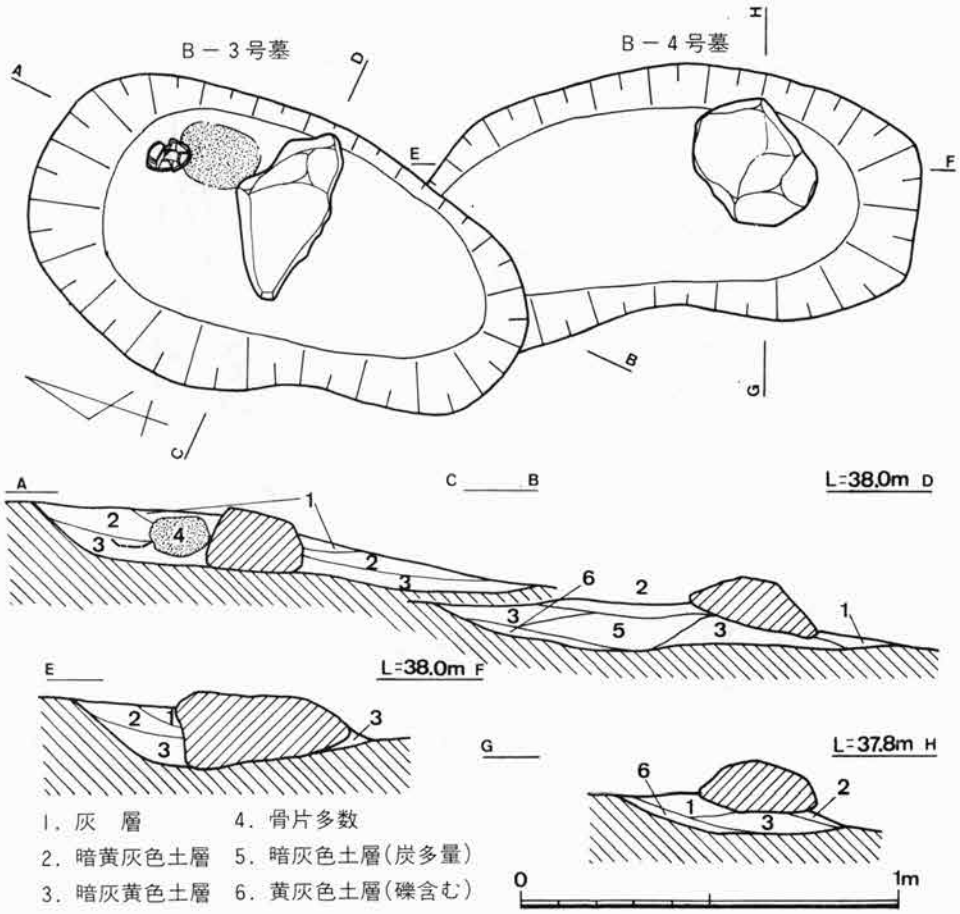
もう少し大きかったとみられる。集石の石材には手頃な石材も使用したとみられ，河原石の他に石製茶臼・五輪塔の破片が使用されていた。

B－1号墓 c・d　墓坑の掘形は東西約 1.5 m（推定）・南北約 2.8 m で，やや不定形な長方形を呈する。墓坑の深さは西端部で約 10 cm，東端部では掘形ラインが確認されず地山面と墓坑底面の境は不明であった。人骨及び土器等の遺物の出土は認められない。

B－1号墓 e　c・d 墓坑内北西部に存在する。東西約 1.0 m・南北約 0.5 m・深さ約 10 cm であり，プランは不定形な方形を呈する。墓坑の東端部に火葬骨が集中していた。火葬骨は直径約 20 cm・深さ約 20 cm の円柱形を呈する範囲で出土が認められた。納骨容器は出土しなかったが，火葬骨の出土状態から木製の円柱状を呈する容器が使用されたものと考えられる。

B－1号墓 f　c・d 墓坑内中央やや南に存在する。直径約 60 cm の円形プランである。墓坑はすり鉢状であり，深さは約 20 cm であった。墓坑内には拳大の河原石が多量に認められたが，遺物等の出土は認められない。

B－1号墓 g　f 墓坑の下部に存在する隅丸方形プランの墓坑である。一辺約 1.3 m・



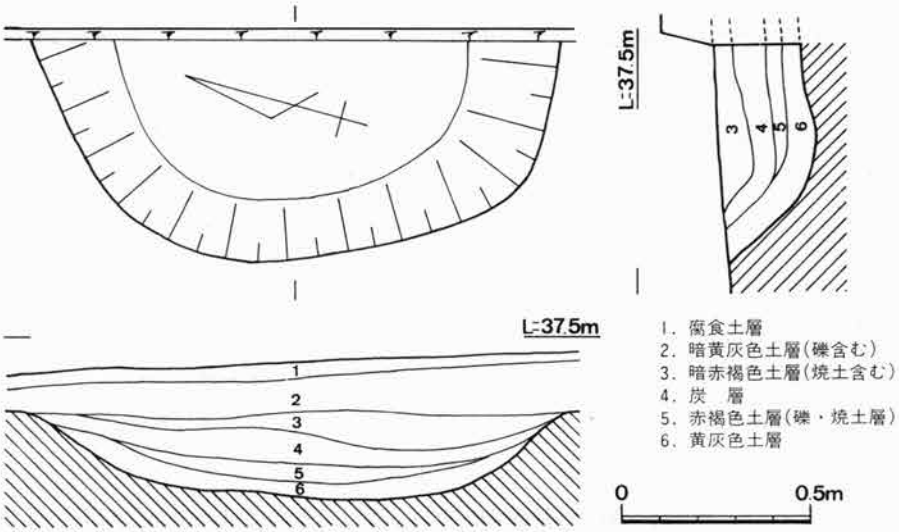
第 31 図　B－3・B－4 号 墓 実 測 図

深さ約 20 cm で浅い皿状の掘形である。墓坑内には少量の炭と灰が認められたほか，若干の火葬骨も出土した。

その他　e 墓坑と g 墓坑の中間付近より多量の火葬骨が出土した。火葬骨は直径約 20 cm・深さ約30 cmの範囲で円柱状に認められた。掘形は不明であるが地山を円柱状に掘り下げている。各墓坑の中でも最後に埋められたと考えられる。納骨容器は出土しなかったが，e 墓坑の火葬骨と同様に木製の円柱形容器が使用されたとみられる。

c・d 墓坑の上部には拳大から大型の河原石が多数認められる。これらの各石はいずれかの墓坑に伴うものと考えられるが，各墓坑が重複するため断定はできない。

B－2号墓（第30図）　B－1号墓の南に位置する。プランは不整形な円形を呈し，東西約0.8 m・南北約 1.1 m・深さ約 20 cm である。墓坑の上部には拳大から人頭大の河原石が多量に認められた。墓坑内には人骨・遺物等は存在しなかった。



第 32 図　C－1 号 墓 実 測 図

B—3号墓（第31図）　B－2号墓の南に位置する。プランは南北に長い楕円形を呈し，東西約 0.8 m・南北 1.3 m・深さ約 15 cm である。墓坑は南側のB－4号墓を切っており，墓坑の中央部に大型の河原石を1個設置していた。この大型石は墓坑底に接していたことから，墓坑を埋める以前に設置されたとみられる。墓坑内には炭・灰が多量に存在し，石の北側より火葬骨および土師皿が1個出土した。石の表面には火を受けた形跡は認められなかった。火葬骨はほぼ1か所に集中しており，木製容器に納められていたとみられる。

B—4号墓（第31図）　B－3号墓と重複し，B－3号墓により墓坑の北端を切られている。プランは東西約 0.6 m・南北約 1.3 m・深さ約 15 cm の楕円形を呈する。墓坑の南部に大型の河原石が1個設置されていた。墓坑内には炭・灰が多量に認められ，石の周囲より少量の火葬骨が出土した。火葬骨の集中的な出土は認められなかった。また，配石も墓坑を埋めた後に設置している。

B地区における各火葬墓群はその立地が狭い曲輪部を利用しているところから，地形が下り傾斜となる東側が全体的に下がり，埋土の流出もあったとみられその結果，各墓坑掘形の壁部の残存状態は悪くほとんど壁面は残っていなかった。

(3) C 地 区

C地区は調査地のなかでも最南端・最下部のテラスである。テラス部分は南東から北西方向にかけてゆるやかに下がる。テラスの南には小規模ながら切り通しが造られており，丘陵東裾の搦手へと通じている。当初，このテラス部に建造物が存在したものとみていたが，調査の結果火葬墓を1基検出したのにとどまった。

C—1号墓（第32図）　調査地中央部の東端で検出した火葬墓である。墓坑の西側半分が検出され，東側は調査地外に延びていた。確認された墓坑は東西約 0.6 m・南北約 1.4 m・深さ約25cmである。推定では直径約1.5m程度の円形を呈する墓坑とみられる。脆い岩盤を掘り下げており，墓坑の内面は火を受けて焼けた状況を示していた。墓坑内には炭・灰が多量に認められ，火葬骨も炭に混じって出土した。他に出土遺物は認められず，火葬骨の集中も認められなかった。

堀切り　B地区とC地区の境界部に存在する。北部の傾斜部と南部のテラス部の境でもあり，丘陵の狭部を造りだしている。この堀切り部は空堀様に切り通してはおらず，西方からの掘削は丘陵頂部において終了している。対する東側斜面には顕著な掘削は認められず，旧地形をうまく利用したものとみられる。丘陵西側の掘削は脆い岩盤を削り，西方に開口する扇形を呈する。下方の開口部では幅約 3 m であるが丘陵頂部ではわずかな幅をもつだけであった。切り通していない丘陵頂部の幅は約 50 cm 程度と狭く，1人分の通行が限度であったとみられる。

5. 出 土 遺 物

今回の調査において出土した遺物は僅かであり，その大部分は近世遺物であった。ほとんどの遺物は墓に伴うものであり，A地区出土の遺物が大半を占めていた。

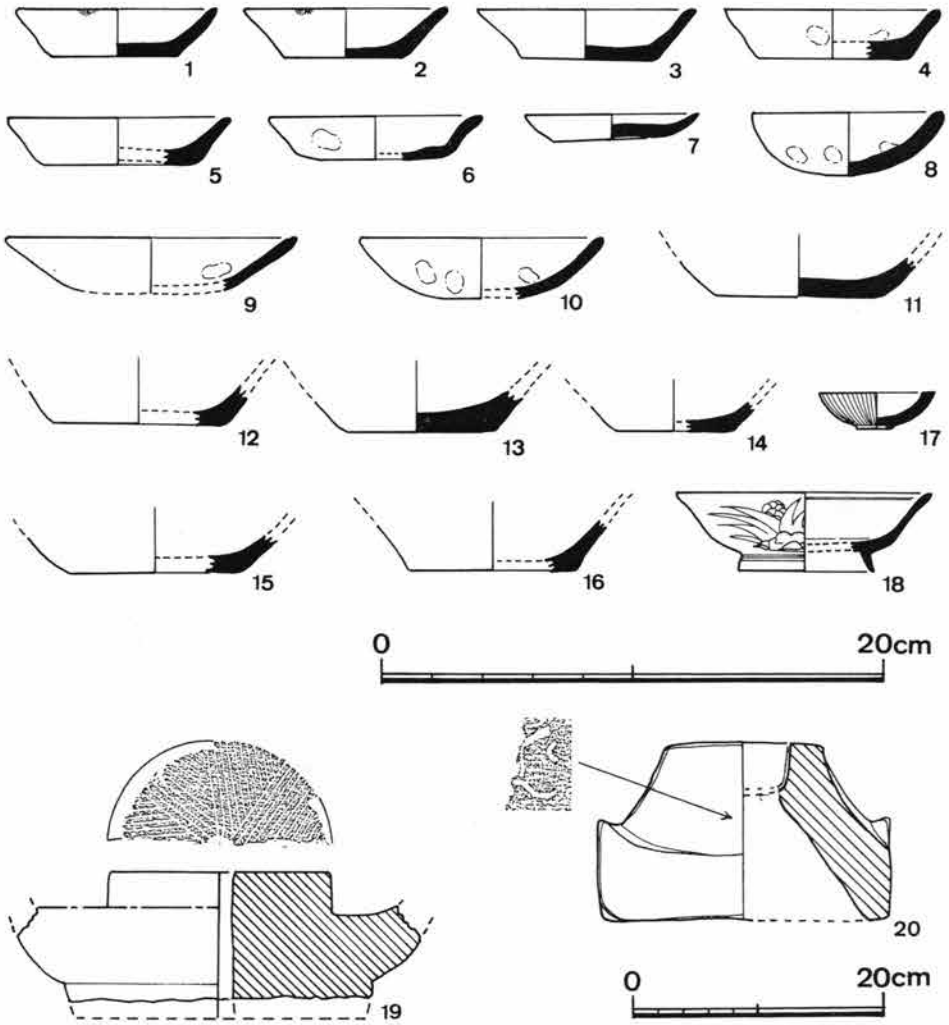
土師皿（第33図 1 ～16）

土師皿の中で（8）以外の土師皿は，すべてA地区の古墓周辺より出土した遺物である。土師皿の大部分は古墓の東側の周溝外より出土している。

土師皿（1～5）は口縁直径 9 cm・器高 2.2 cm 前後を計測する。胎土は精良で金雲母を含む。器壁は全体に肥厚し色調は暗茶褐色と暗い。口縁部は底部から大きく屈曲して立ち上がる。口縁端部は肥厚したまま丸く終る。口縁部の一部にススが付着するもの（1～3）があり，燈明皿として使用されたとみられる。（11～16）は土師皿の底部であり，同一型式のものである。（6）は器壁も薄く色調は灰黄色である。口縁部は底部から大きく変化して外上方へ立ち上がる。指頭圧痕を良く残す。（7）は器高が低く口縁部の器壁も薄く仕上げている。（8）はB—3号墓に伴って出土したものである。器壁は肥厚し，底部は丸底状であり，口縁部はなだらかに立ち上がり，口縁端部は丸く終え，色調は赤褐色である。（9・10）は比較的薄く仕上げられた土師皿であり，底部から口縁部にかけてなだらかに立ち上がる。色調は灰黄色であり，指頭圧痕を良く残している。

近世陶磁器（第33図17・18）

少量ではあるが調査地全域の表土層中より出土している。（17）は伊万里焼の紅皿である。



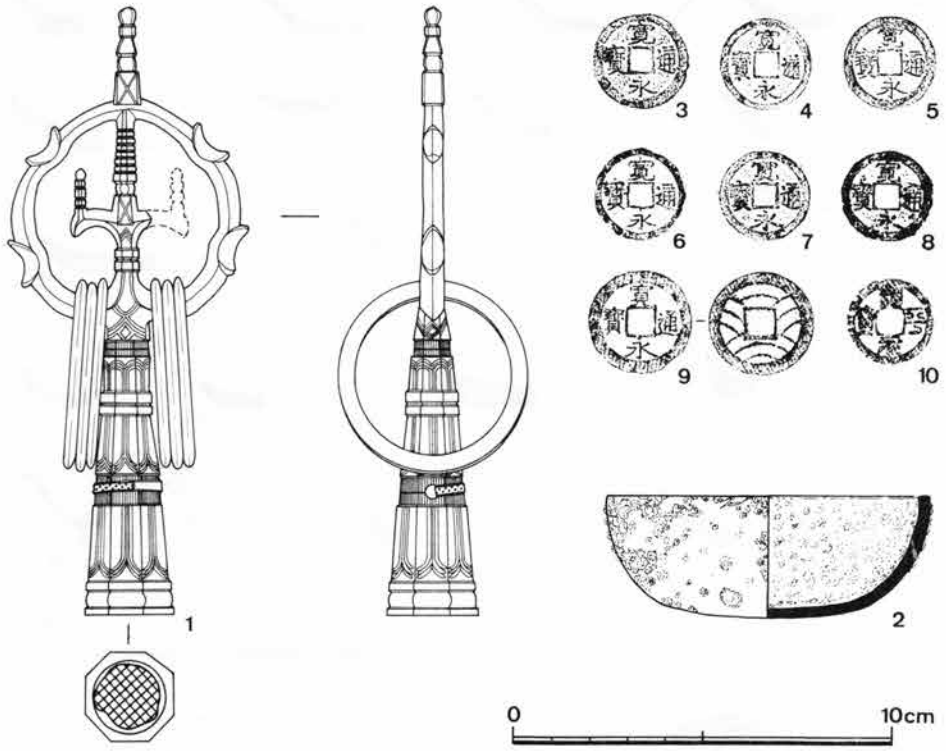
第33図　出土遺物実測図

1～16. 土師器皿　17・18. 磁器　19. 茶臼　20. 五輪塔（火輪）

口縁直径4.8cm・器高1.5cmである。椀状の器形を呈し，口縁端部は水平に切られている。型押しにて成型されており，外面には菊座様の文様を施し，小さな高台が付く。白色釉が内面と口縁部外面に施釉されている。(18) は伊万里系の染付皿とみられる。高台は比較的高く，体部はわずかに外反して口縁にいたる。外面には淡い藍色による草花の絵付けを施す。

石製品（第33図19・20）

石製品として茶臼と五輪塔の破片がB－1号墓より出土した。多くの河原石とともに集石として利用されていた。茶臼 (19) は下臼であり約1/2が出土した。小型の臼であり下方外部の中間部分には，受け台が作り出されている。臼の中心部には直径約3cmの穴が貫かれて



第34図　A地区土葬墓出土遺物実測図
1. 錫杖頭　2. 銅鉢　3～9. 寛永通宝　10. 治平元宝

いる。臼の摺歯面の直径は約9cmであり，細く浅い線彫りによる摺歯が鋸歯文状につけられている。摺歯面には細い擦過痕が多数同心円状に認められ，長期にわたる使用をものがたっている。五輪塔（20）は火輪部分の破片であり，大小2個の破片が出土した。ともに同一のものとみられる。五輪塔の各2面には梵字の一部が認められた。一方の梵字は判別不能であるが，もう一方は「ऱ」（ラー）の梵字に相当するものとみられる。

金属器（第34図）

金属器としてA地区の古墓内より錫杖・銅鉢・銭貨・櫃金具が出土し，さらにB・C地区の表土層中より若干の銭貨が出土した。

錫杖（第34図1）　A－2号墓内より出土したものである。銅製の頭部と柄の一部が残っている。手錫杖とみられる。全長17.4cm，輪の形態は正円に近く，断面は菱形で幅は7.2cmを測る。輪部の四天に仰月形座をつくりだし，その内側に抉りをもつ。頂部には五輪塔形を作り出して，地輪部分には×印を彫りこむ。輪の中央を通る柄頭は面を取った相輪形に作り，その基部から両側には単純な蕨手を示し，上部は抽象化された五輪形を表現している。輪の

下方に続く柄は袋穂状につくり，下端の断面は稜のある八角形を示すが，輪と接する上端は扁円形に近い。表面は刻線による櫛歯文をもって二節に分け，稜線を中心にした蓮弁を表現している。柄部内側には木質が残っており，柄部には穿孔が2対あり細い銅板による柄の固定がなされている。また，この銅板の一部に紙質が銹着していた。輪に附属する遊環は3連一対で，その径 5 cm・環体の幅 5 mm・厚さ 3 mm を測る。

銅鉢（第34図2） A－1号墓内より出土している。内外両面にロクロ目がよく残っており，鋳造品とみられる。口径8.6 cm・高さ 3.3 cm・厚さ3cmを測る。口縁端部はまっすぐ終わる。小型の仏餉鉢とみられる。

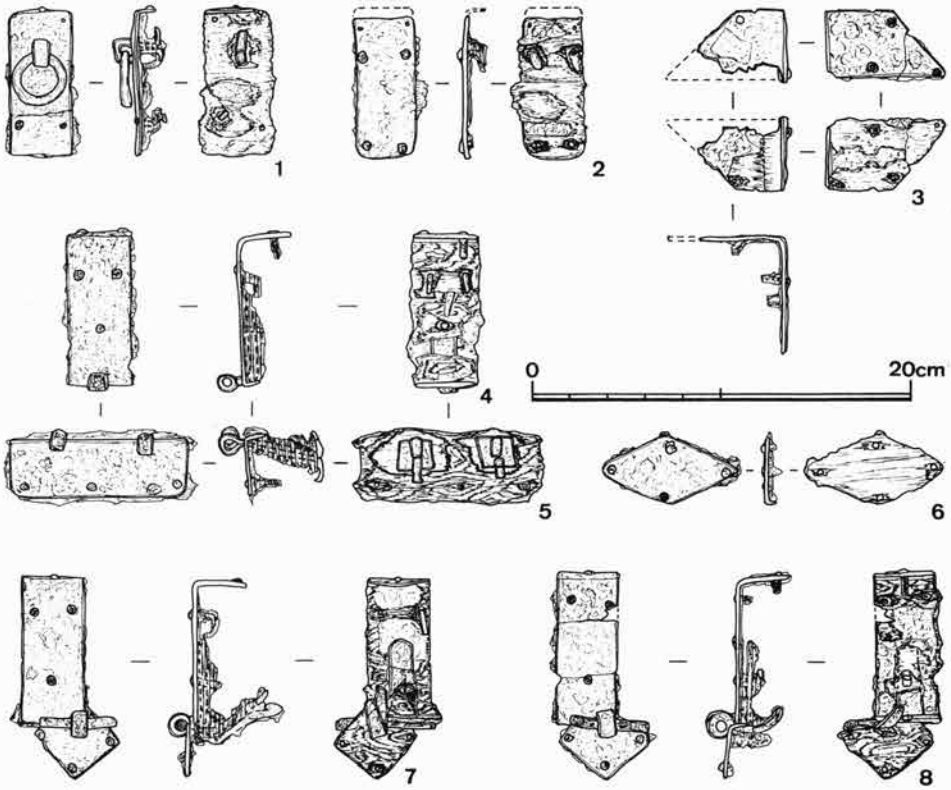
寛永通宝（第34図3～9） A地区の各古墓中より各々6枚計18枚出土し，また，B地区（9）・C地区の表土層中より3枚が出土している。A地区各古墓出土の寛永通宝は文字も鮮明であり，古寛永（1626～1668）に属する同一型式である。各古墓中からの古銭の出土状況は，目のあらい布に包まれたもの（A－2号墓）と紐通しによる重ね合わせ（A－1号墓・A－3号墓）との2通りが認められた。（9）は新寛永であり，裏面の文様からみて明和6（1769）年初鋳の正字（11波）銭である。（10）は治平元宝（1064～1067）であり，北宋時代の古銭である。治平元宝はA－2号墓のマウンド表土層中より出土した。

櫃金具（第35・36図）

A－1号墓内より遺骸の棺として転用された櫃の金具が出土した。櫃の木質部はすでに無く，櫃の外部に打たれた鉄製金具からみて，棺として使用された櫃は印籠合口造りの和櫃とみられる。

引手座金（第35図1・2） 櫃の蓋部正面両サイドから内側約20 cm の所に付く，一対の金具である。金具の長さ 7.8 cm・幅 3.3 cm・厚さ 2 mm であり，5本の小型角釘により蓋に鋲留めされる。金具の上端は直角に折れ，蓋の上面へ約 1 cm 突出する。突出部の先端コーナーは丸く縁取りがなされている。（1）の正面中央には直径 5 mm の丸棒を直径 3 cm の環にしたぶら環が下がる。このぶら環は小さな環をつくりだす割釘に通し，割釘の先端は蓋の内側に出た後，上下方向に大きく分っている。木質は遺存状況からみて，厚さ約 1 cm の板材が蓋に使用されたとみられる。蓋の高さは7.5 cmの規模とみられる。（2）にぶら環は認められない。

鎖前金具（第35図4・5） 櫃の正面中央部の蓋と身の接合部に付けられる。蓋と身の2個に分れる。蓋に付く金具（4）は縦位置にあり，長さ 7.8 cm・幅 3.4 cm・厚さ 2～3 mm を測る。蓋の上面に折れ曲る部分は 2.3 cm と長く，先端コーナーは丸く縁取りがなされている。上面で2か所，正面で3か所の鋲留めがなされる。金具の中央下端に小環をもつ大型



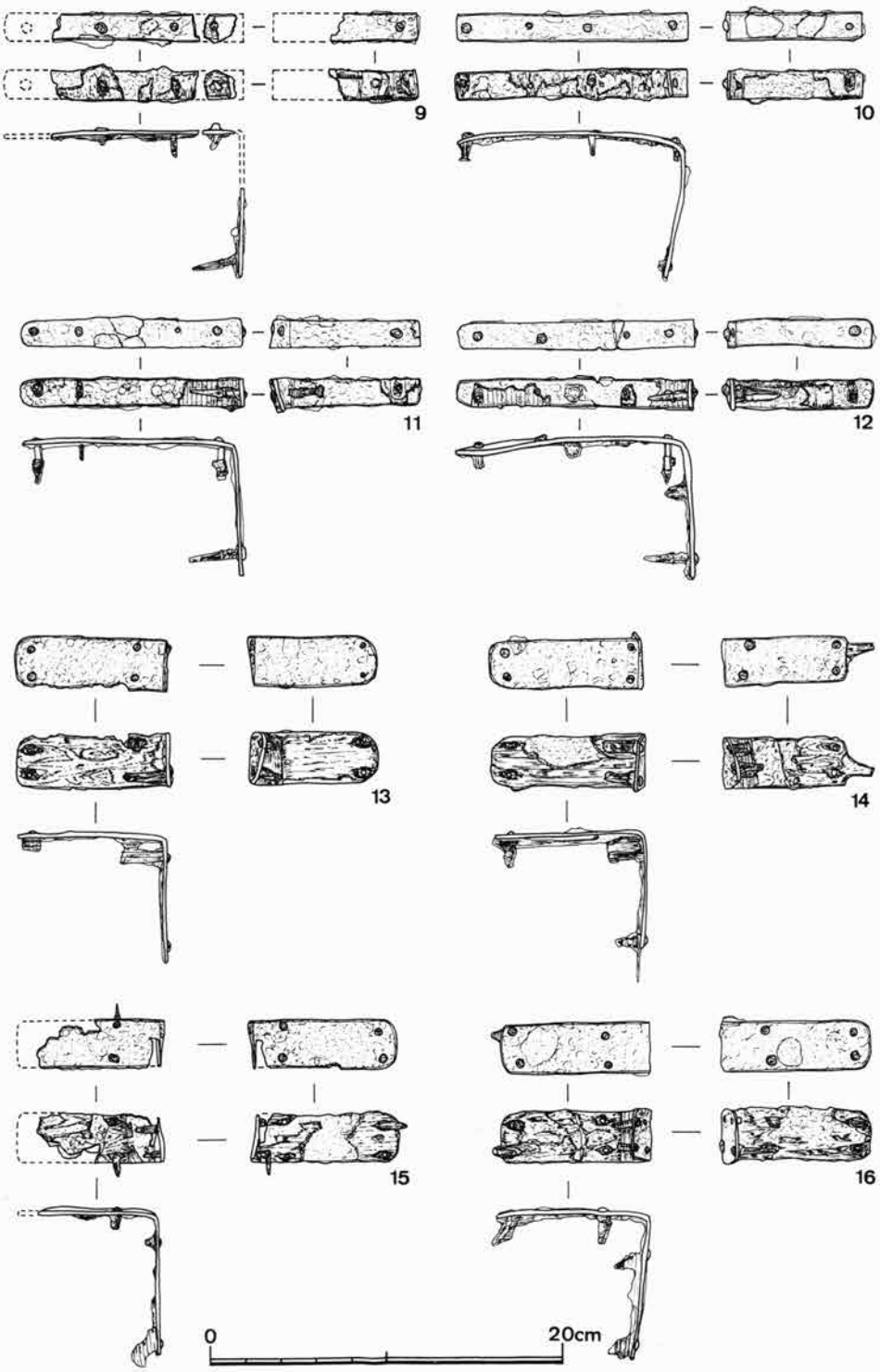
第 35 図　A－1 号墓櫃金具実測図 (1)

の釘が1本打込まれている。

身部に付く金具（5）は横位置にあり，長さ 9.3 cm・幅 3 cm・厚さ 2 mm を測る。金具の上端部は直角に折れ，内側へ 1 cm 入り込む。正面の5か所で鋲留めがなされる。金具の上端両サイドから内側へ 2 cm の所に，小環をつくりだす割釘が2個打たれている。割釘の間隔は 3.8 cm である。割釘の先端は金具裏面より 3.7 cm の所で上下に分れ，1.5 cm 前後の方形の座金が櫃の内面に認められる。櫃の身は2枚の板材貼合わせにより1寸厚になることが，木質の遺存状況から推察される。2枚の板は表側 1.3 cm・内側 1.9 cm の厚さをもち，内側の板は表側より若干高く残して印籠合口を造ったとみられる。

鎖前は認められなかったが，小環をもつ3個の割釘の環を通して鎖前をかけたものとみられる。

蝶番金具（第35図7・8）　櫃の裏面にある一対の表蝶番の金具である。金具は蓋部と身部に分れ，櫃の両サイドから約 20 cm の所に位置する。櫃の蓋に付く金具は縦位置であり，長さ7.7 cm・幅3.3 cm・厚さ3 mm前後を測る。金具は上端部が直角に折れ，蓋の上面に約



第 36 図　A－1 号墓櫃金具実測図 (2)

3 cm突出する。金具の先端は丸く縁取りをおこなう。上面に1か所，正面に3か所の鋲留めがなされる。櫃の身部に接する下端にはL字形に曲がった直径約5mmの円棒が，向って右に開口する状態で打たれている。

櫃の身に付く金具は横位置であり，その形状は逆三角形の上縁両端部を切り落とし，菱形様の座金である。蓋部に接する上端中央には直径1.3～1.5 cmの小環をつくる割釘が1個打込まれている。この座金は3か所のコーナー付近で鋲留めされている。

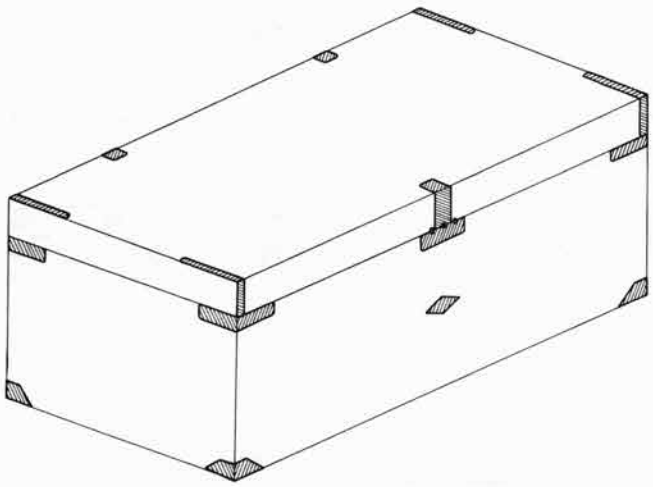
蝶番の取付け状態からみて櫃の蓋は，蓋を開けた状態で左方向へずらすことにより，取り外しが可能であったとみられる。

縁金具（第35図3・第36図）　櫃の各コーナー部分には縁金具が認められた。縁金具には幅が狭く長い縁金具（第36図9～12）・幅が厚く短い縁金具（第36図13～16）・幅が厚くて短く両端が尖るもの（第35図3）の3種類が認められた。

（9～12）の縁金具は全長20 cm・幅1.6 cm・厚さ2 mm前後の鉄板を，一方の端から約7.4 cmの所でL字状に折り曲げている。金具の両端部は縁を丸く仕上げている。縁金具は櫃の蓋に付けられており，金具の短い部分は正面および裏面に縦位置で取付けられ，長い部分は櫃の上面部に付けられたとみられる。金具は5か所で鋲留めされていた。

（13～16）の縁金具は全長15～16 cm・幅2.8 cm・厚さ2 mm前後の鉄板を，中央部分でL字状に折り曲げている。金具の両端は（9～12）の縁金具と同様，縁を丸く仕上げている。この金具は櫃の身部上端コーナーに横位置で取付けられていたとみられる。この縁金具は8か所で鋲留めがなされていた。

第35図（3）は台形状を呈する全長約12.8 cm・幅3.6 cm・厚さ2 mm前後の鉄板を，中央部でL字状に折り曲げている。この縁金具は櫃の最下部コーナーに取付けられたものとみられ，墓坑内からは1個しか出土をみなかったが，元は4個存在したものと考えられる。この縁金具は若干装飾性をもち，上端部を斜めに切り落とし，6か所で鋲留めしていた。



第37図　櫃推定復元図

装飾金具（第35図6）

この金具は長さ 7.2 cm・幅 3.6 cm・厚さ 2 mm 前後で，菱形を呈する金具である。4 か所で鋲留めがなされており，この金具は櫃の身部正面側の中央付近に取付けられていたものと推定される。この金具は縁金具等と異なり，櫃の装飾のみに使用された金具とみられる。

6. ま と め

以上，中山城跡において，これまでの調査による概要を報告してきた。発掘調査開始当初の予想に反し，中山城跡に関する遺構・遺物の出土はほとんどみられなかったが，図らずも近世初頭の墓地が検出され，多数の調査成果を得ることができた。そこで今回の発掘調査によって判明した事実と問題点を整理し，本概要報告のまとめとしたい。

まず，中山城跡に関してであるが，調査の成果からみて現時点では残念ながら中山城跡に関しては，何ら特筆すべき成果を得ることはなかった。ただ，今回中山城跡の存在する丘陵部全域の詳細な測量図（第26図）の完成をみたことは，連郭式の中世山城を考えていくうえで貴重な資料となるものと考える。この中山城跡は，舌状に延びる 1 本の細長い丘陵を利用し，その丘陵尾根の上端部を削平して郭と曲輪等を造りだしている。中山城跡には，主要な城の施設が存在したとみられる比較的大型の郭が，城跡の中央付近に合計 3 か所認められた。これら主要な郭のうち最も北に位置する郭が中山城跡の本丸跡とみられ，城跡の中で最高所の位置を占めている。この本丸および主要な郭は急傾斜をもって立ち上がり，容易に攻められにくい状況を造りだしていた。主要な郭の周囲には小型の郭や曲輪が存在しており，さらにそれらの郭の前後には，空堀りや土塁によって造りだされた小型の郭が，直線的に連続して認められる。

中山城跡の本丸の西側丘陵裾には，当城で戦没した一色義道の墓が存在する。中山城の城主に関しては不明な点が多く，今回の調査でも城主等を推察できる成果が得られなかったが，丹後守護一色氏一族が統治した山城であることはまちがいないであろう。

丹後・丹波地域には数百にものぼる中世山城跡が存在している。近年，これらの中世山城跡の調査がわずかながら実施されてきており，今後これらの山城に関する比較検討をする作業が，当地域の中世山城を考えていくうえで必要となろう。

次に，近世初頭とみられる墓に関する遺構についてであるが，調査地内において火葬墓と土葬墓といった 2 型態の埋葬方法が認められたことは，当地域の近世の葬制を知るうえで良好な資料となるものとみられる。各古墓は慶長 5 (1600)年以降の中山城廃城後に造られたとみられ，中山城跡の郭および曲輪部分に存在している。A 地区において土葬墓が調査され，調査を実施した 3 基の墓の内部より寛永通宝（古寛永―1626～1668鋳造）が各 6 枚ずつ出土

したことから，ほぼこの時期に墓が造られたものとみられよう。各土葬墓については出土遺物も少なく，時期差は認められなかったことから，これらの墓は比較的短期間に次々と造られたものとみられる。この土葬墓の被葬者については，A－1・2号墓の中より被葬者を推定できる良好な遺物の出土をみた。A－1号墓からは銅鉢，A－2号墓からは錫杖頭が出土している。このような出土遺物は修験者の持ち物を示すものである。当地域には修験の場も数多く知られており，このような修験の場がこの中山城跡の存在する丘陵付近にあったか現在知り得ないが，この地が修験者の墓地として使用されていたことは確かである。この地に埋葬された修験者の系統がどのようなものであったか明らかではないが，古墓は連続する6基の墓とやや北に離れた地点にもう1基存在していることから，付近に修験者の集落があったものか，集落内に多数の修験者がいたものか，今後検討されるべき問題は多い。

次に火葬墓についてであるが，B・Cの両地区で検出した火葬墓では墓に伴って出土した遺物は少なく，築造時期に関しては不明な点が多いが，出土した土師皿（第33図8）から江戸時代とみてよいであろう。火葬墓は大型の石を1個配置するもの（B－3・4号墓）と集石が認められるもの（B－1・2号墓）とに大別される。前者は墓坑内に炭・灰を多量に含み，人骨の出土も少量ながら認められる（C－1号墓も同様である)。後者は各墓坑内に人骨は認められるが，炭・灰等は検出されない。人骨はいずれも火葬骨であり，B－1号墓における火葬骨は木製蔵骨器の存在をうかがわせる。このような埋葬型態の差は時期差・身分差によるものか定かでないが，もう一つの仮説として同一被葬者のものとみることも可能ではないだろうか。仮に被葬者が火葬された後取り上げられた火葬骨は容器に納められて埋葬され，残った少量の火葬骨は炭・灰と共に別の場所に埋められたとみることはできないであろうか。これら火葬墓の被葬者については不明であるが，A地区の修験者の墓との関連等，今後の比較検討に数多くの問題を残す。

以上，今回の調査の成果および今後の課題等を思いつくまま列記してきたが，今後，各方面からの御意見・御教示を頂くことによって，より充実した調査を実施していきたいと願うところである。

（竹原 一彦）

注1　『京都府遺跡地図』京都府教育委員会　1972

注2　作業員（順不同）

佐織利夫・坂本太一郎・坂本達雄・坂本弥寿男・太田美代子・佐織栄子・佐織なみ子・坂本節子・橘いよ子・谷田ふじ枝・丸山和美・村上よ志子・山下美津子・小池小夜子

注3　調査補助員（順不同）

井川朋之・大和田淳司・坂本浩一・中村元彦・藤井謙志・藤本雅之・藤田公徳・福元浩一・宮城正和・永野計一・本田敏子

整理員（順不同）

小山みのり・北川ともえ

注4　縄文時代後期の安定した集落跡が確認される。その他弥生時代中・後期，古墳時代～奈良時代の遺構・遺物も出土している。

注5　弥生時代前期の柱穴群と遺物，弥生時代中期と古墳時代初頭の方形周溝墓群が確認される。また上層では奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡群も確認された大規模な複合遺跡である。

注6　一色氏系図

一色公深―範氏―範光―詮範―満範―義範―義直―義季―義幸―義道―義俊

注7　『日本城郭大系』第11巻（京都・滋賀・福井）新人物往来社　1980

注8　『田辺旧記』1852

『田辺府志』1852

『丹哥府志』1841

注9　注8と同じ

4. 田辺城跡第３次発掘調査概要

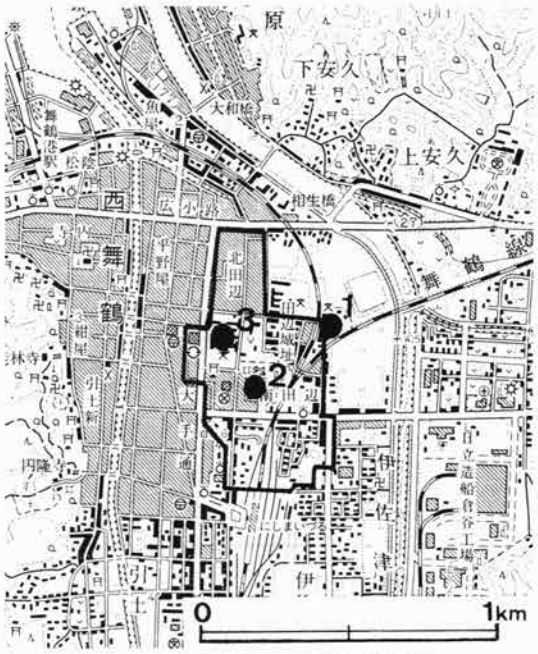
1. はじめに

京都府立盲聾学校舞鶴分校は，舞鶴市大字南田辺小字大内口下83番地に所在するが，校舎の老朽化に伴い京都府教育委員会では，昭和58年度に新校舎への増改築工事を計画した。

当学校は，戦国期細川氏の築城になる田辺城跡の一画に立地しており，今回新校舎の建設が予定される場所についても，当該城郭に関する何らかの遺構が存在するものと予想された。このため，関係各機関の協議の結果，校舎建設工事に先だち発掘調査を実施し，城跡に関する地下遺構の有無を確認する必要があるという判断がなされ，当財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターに発掘調査の依頼がなされた。

発掘調査は，昭和58年７月５日に現地着手し，同年７月30日に終了した。現地調査の実施にあたっては，当調査研究センター調査課主任調査員 辻本和美が担当した。

なお，現地の調査期間中，舞鶴市在住の有志の方々には，夏の炎天のもと例年にない猛暑にもかかわらず発掘作業に従事していただき，また，学生諸氏には調査補助員あるいは整理員として参加協力を得た。(注1) 諸氏の献身的な御援助および御協力に対し厚く御礼申しあげたい。

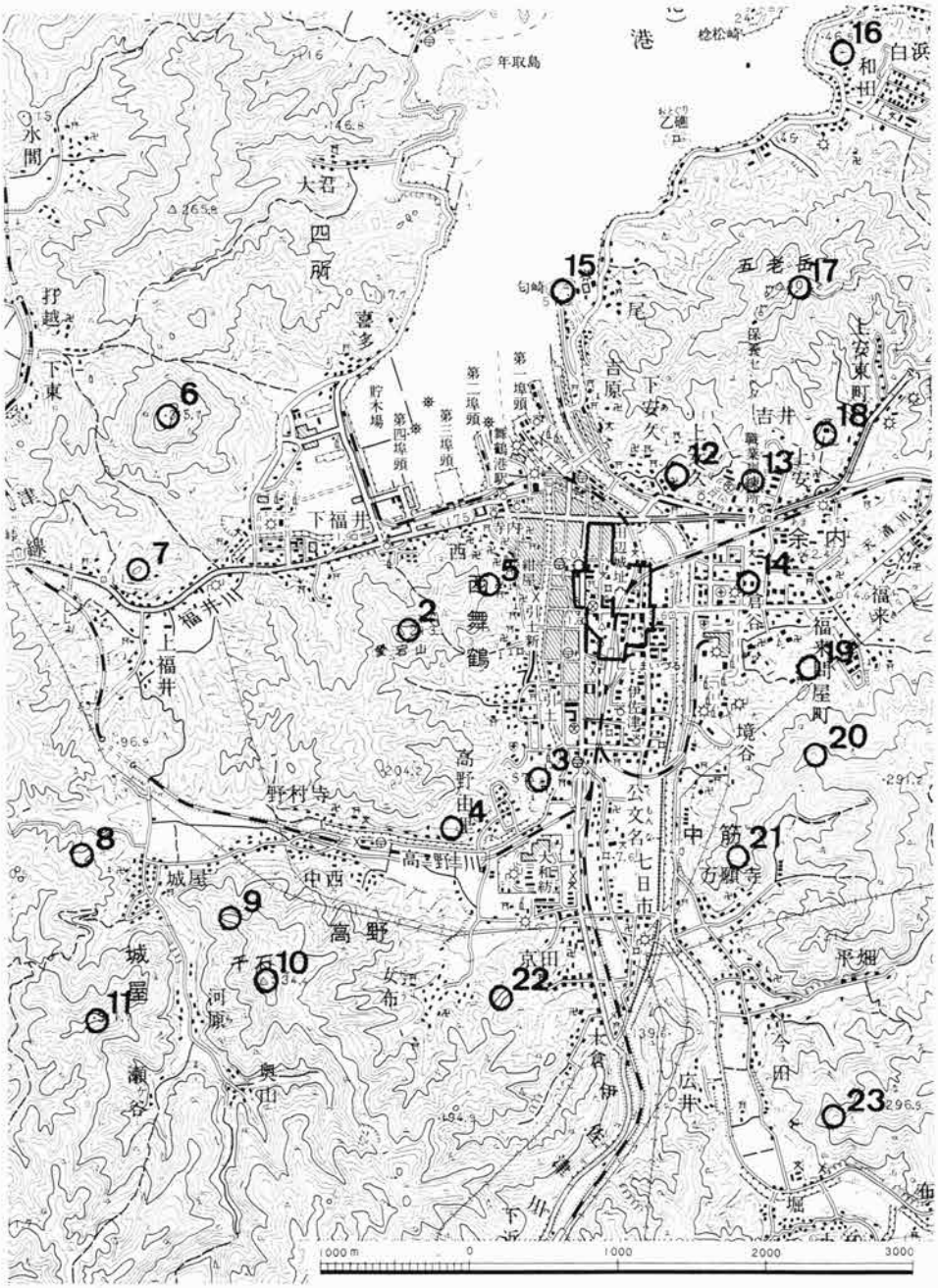


第 38 図　田辺城跡調査地位置図

1. 調査地　2. 本丸跡
3. 二ノ丸・大草やぐら（第１・２次）調査地

また，舞鶴市教育委員会・府立丹後郷土資料館・京都府中丹教育局・府立盲聾学校舞鶴分校・㈱大滝工務店等の各位各機関には，調査全般にわたり多大の御協力を賜わった。それぞれの御厚意に対し深く謝意を表したい。

なお，今回掲げた発掘の調査次数については，過去２度にわたり舞鶴市教育委員会が当城跡について発掘調査を実施しており，今回の調査をそれらに続く第３次調査と呼称することにしたものである。今後，調査担当機関が異なることがあっても，本田辺城跡の発



第 39 図　田辺城跡と周辺城跡分布図

1. 田　辺　城	2. 愛 宕 山 城	3. 引土城(茶臼山城)
4. 高野由里城	5. 神 明 山 砦	6. 建部山城(八田城)
7. 福　井　城	8. 城　屋　城	9. 山　上　城
10. 千 石 山 砦	11. 城 屋 別 城	12. 上 安 久 城
13. 新藤山城(高迫城)	14. 飯田倉谷城(倉谷別城)	
15. 勾 ケ 崎 城	16. 和　田　城	17. 五 老 岳 城
18. 上　安　城	19. 倉　谷　城	20. 佐武ケ嶽城(大内山城)
21. 満 願 寺 城	22. 女布城(白雲山城)	23. 今 田 下 村 城

掘調査については調査順に次数を重ねて行く方法に従うことで統一することにした。

2. 田辺城の沿革とこれまでの調査

現在の西舞鶴の市街地は，旧田辺城域にほぼ重なり，市内の所々に現存する武家屋敷の土塀や町割り，市内を流れる堀の名残りを留める用水路の姿にかつての城下町の面影を色濃く残す。

田辺城築城の歴史は，天正12（1584）年に遡るものとされる。(丹後旧事記)

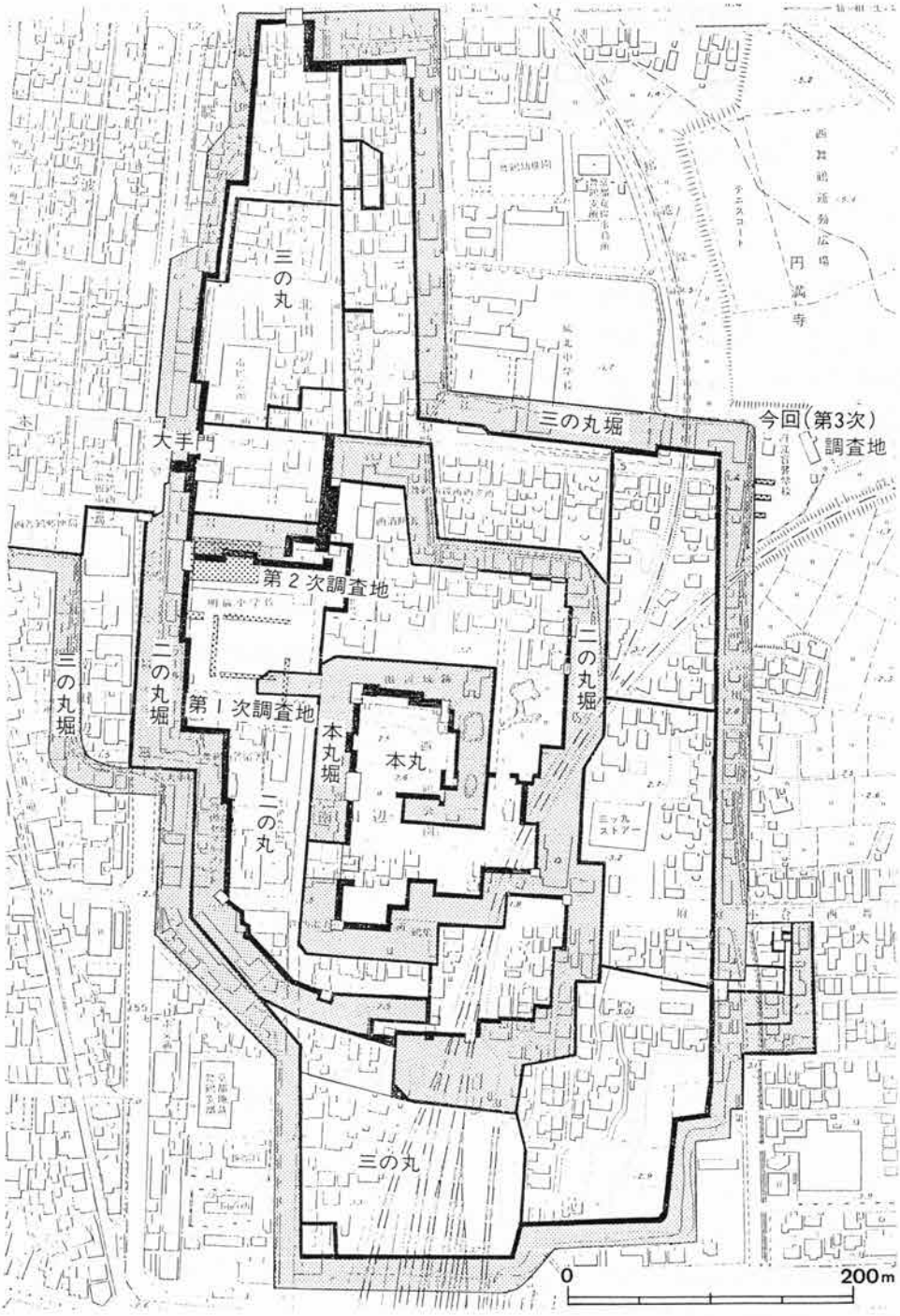
今少し築城前史について述べると，近江坂本城の城主明智光秀は天正3（1575）年，主君織田信長の命を受け丹波・丹後平定の途につき当地方に入国する。同年，荻野直正を追い丹波黒井城を攻めるが，八上城主波多野秀治の離反に遭い退く。その後，幾度かの曲折を経，同6年黒井城攻略を果し，同8年丹波・丹後両地域の平定が完了する。

平定後，丹波は光秀に，丹後は細川藤孝に宛行われ，光秀は丹波の亀山城（亀岡市），藤孝は丹後の八幡山城（宮津市）に本拠を置く。藤孝（幽斎）・忠興父子は，新城である宮津城の築城と同時に当時田辺郷八田村と呼ばれた地にも新たに城を築いた。これが田辺城である。細川氏の築城当時は，南は池内川をはじめとする数河川が合流する広大な沼沢地が広がり，北方は西舞鶴湾を臨む文字通り天然の要害を形成していた。田辺御城図によれば，天守台・本丸を中心に北方に二の丸・三の丸があり，本丸の南に大手，三の丸の西に搦手が存在した。細川氏はその後関ケ原の戦功により豊前小倉に転封され，京極・牧野氏と代々城主が替わり，明治初年に取り壊されるまでの約284年間存続した。この間，幾度となく城郭に改廃・修復の手が加えられ最終的には三重の堀を廻らした輪郭式の典型的な平城として完成をみた。

現在，本丸と二の丸の一部は舞鶴公園として利用されており，石塁や天守台の跡が残っているが，近年の急激な市街地化に伴い消滅した箇所も多い。

田辺城に関しては，これまで主に遺存する絵図や文献等からの研究が行われてきたが，一方で西舞鶴高校の生徒達に拠る堀跡付近の土中に含まれる塩素イオンを定量分析して堀跡を確定するというユニークな科学的調査も行われている。

昭和56年，二の丸跡に位置する明倫小学校の校舎全面改築に伴い舞鶴市教育委員会により田辺城に関する初めての本格的な発掘調査が実施された。調査の結果，二の丸堀跡の石垣や本丸堀跡および二の丸侍屋敷跡の一部が確認されている。(注2) 翌57年には同校の体育館建設に伴い同じく舞鶴市教委によって発掘調査が実施され，大草やぐらの石垣や二の丸内堀の石垣，二の丸侍屋敷に伴う礎石建物・掘立柱建物・石組水路・池状遺構・井戸・竹を利用した導管



第40図　城跡復原及び調査地位置図
(舞鶴市教育委員会作成図を基に加筆・補足したものである。)

等の遺構や近世陶磁器類・瓦類をはじめとする多種多量の遺物が出土した。特に，土坑から出土した木製品には漆器椀・箸・下駄・桶・シャモジ等，当時の城内の生活を彷彿とさせるものがみられ，予想以上に田辺城の遺構が遺存していることが認識された[注3]。以上のように2次にわたる調査の成果には多大なものがあり，今後の城跡の発掘調査に希望をいだかせるとともに，市街地の開発と文化財の調査という困難な問題が課題として残された。

3. 調 査 概 要

今回調査を実施した府立盲聾舞鶴分校の校地は，田辺城城郭域の北東角に位置している。

現在校内を南北方向に縦貫する用水路（静溪川）は，往時の三の丸堀の名残りであり，試掘トレンチの設定に当ってもこの用水路に直行する形でトレンチを設け，堀の護岸施設ないし町割り等に関する遺構の検出に務めた。

試掘トレンチは合計3本設け，南に位置するものからそれぞれA・B・Cのアルファベット名を冠しトレンチ名称とした。

トレンチの開削に入っては，当初土層の堆積状況を確認するため人力によって行ったが，その後学校敷地造成時の置土がかなり厚く成されていることが判ったため，以後は重機によって旧水田の床土面まで掘り下げることにした。

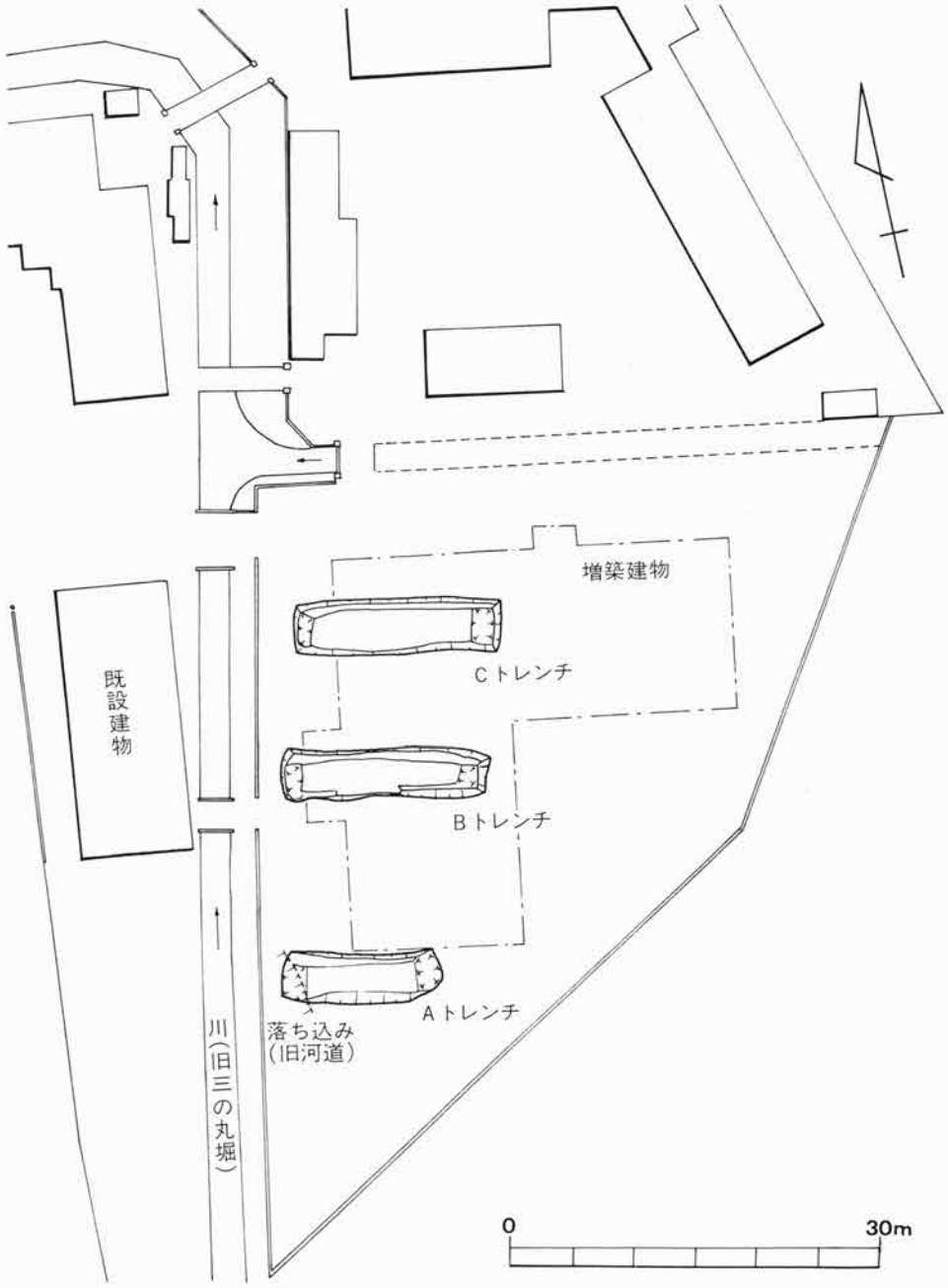
各トレンチの基本的な層序は，現地表面からマイナス1mの付近までが置土，それ以下，青灰色粘土（旧耕作工）・暗灰褐色土（同床土）・茶褐色粘土の互層がマイナス2.3m付近まで堆積し，以下砂層の順になる。最下層に当たる砂層は上部では粘土質を交えるが，下部に行くにしたがって砂の密度が増し粒子も細かくなる。トレンチ最深部は，計測によれば地表下約4m付近に達するが，同様な状態で上記砂層が堆積し大きな変化は認められなかった。ただ，砂層上部を覆う黒褐色粘土層と砂層の上層部は自然木片や海水産の貝殻類に混在して弥生土器をはじめ須恵器・土師器の小片を少量含んでいた。いずれの土器片も磨滅が著しく，上流からの流れ込みと思われる状況を示す。

なお，各トレンチは壁の崩壊を防ぐため北壁側は中途に段を設け二段掘りとしたが，南壁については土層観察のため，垂直に整えた。調査期間中は台風による大雨や地下水の涌水によりトレンチ内はたびたび冠水する被害を被った。

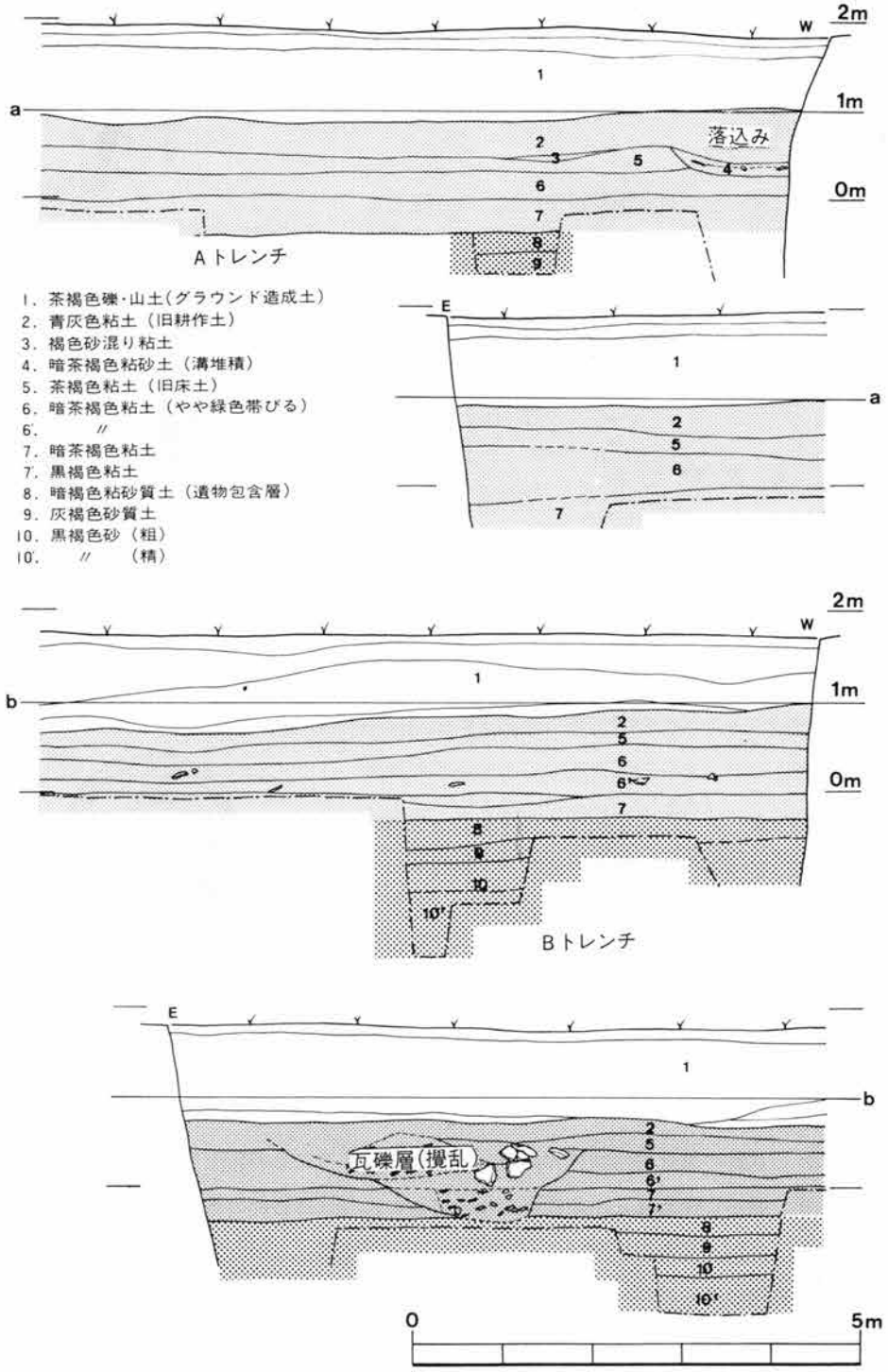
以下，各トレンチの概要を略述しておく。

Aトレンチ

トレンチ南東角から北西方向に延びる浅い溝を検出。溝は旧水田床土と同レベル面から掘られており，溝内から近世の瓦片や廃材が出土した。現用水路の改修以前の溝の一部である。



第41図　調査トレンチ位置図



第 42 図　調 査 地 土 層 断 面 図

他に，杭列や瓦礫を埋めた暗渠排水溝を検出したが，すべて近代の水田耕作の所産である。トレンチ長さ13 m，幅 4 m。

Bトレンチ

東端部で瓦礫が混入する攪乱層を検出。特に顕著な遺構なし。長さ 17 m，幅 4 m。

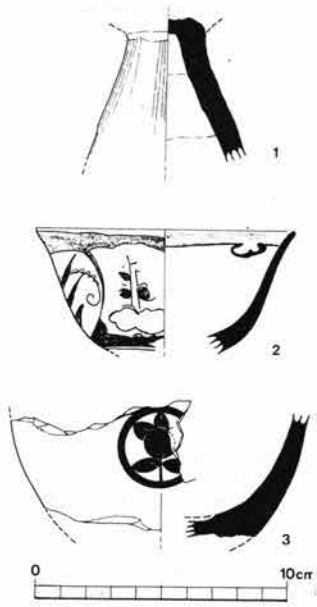
Cトレンチ

上記トレンチと同様顕著な遺構は認められない。長さ17 m，幅 4 m。

4. 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は，整理コンテナに収納して10箱程であるが，大部分が近現代のものである。田辺城存続時期に所属するものとしては，漆器椀残欠（第43図３），陶磁器（２），寛永通宝（第44図）がある。漆器椀はAトレンチの暗渠排水溝から出土したもので，体部とその下半の一部を残すのみであるが器壁を厚く削り出し，やや大ぶりな印象を与える。外面に黒漆，内面に赤漆を塗り，体部に金泥で「丸に橘」の紋を置く。

その他，田辺城築城以前に遡る遺物として，図示した土師器高杯脚部（１）以外に，弥生土器・須恵器等があるがいずれも小片である。



第43図　出土遺物実測図

1. 土師器高杯　2. 磁 器 椀
3. 漆 器 椀　Aトレンチ：3
Bトレンチ：1・2

第44図　寛 永 通 宝（1/1）

5. ま と め

今回の田辺城跡の調査は，城外郭を囲む旧三の丸堀，特にその北東角に当る地点の調査であり，当初，堀跡に伴う何らかの護岸施設の有無および城外郭部の様相を知ることを主目的として実施したが，調査の結果については既に述べた通り，三の丸堀についての手がかりとなるような資料は得られなかった。

細川氏の築城当時の田辺城周辺は真倉川・高野川の二河川が城の東西を挾むような格好で流れており，このため城の南方は広範囲に沼状の湿地帯が広がっていたとされている。これ

らは北方側の海岸線と合わせて堅固な天然の要害を形成するものであるが，反面，度々の河川増水期の氾濫は城下に大きな被害をもたらした。その後，城主京極高知の代に至り，現在市街地の東部を流れる伊佐津川の瀬替え（付け替え）という大土木工事により，洪水の被害を防ぐことに成功し南部地域の乾地化が進んだとされている。

今回の調査箇所についても，土層の観察によれば周辺に沼沢地が広がっていた様子がうかがわれ，城外での土地利用の状況が判る。調査地内で検出された瓦礫を利用した水田の暗渠排水溝や杭列の時期が示すように，この地域が耕地として利用されるのは比較的新しいことがうかがえる。

また，現在学校内を流れる用水路は，かつての三の丸堀の名残りを留めるということは幾度か述べた。調査結果から判断すれば当水路は旧堀跡の外肩部分の位置をほぼ踏襲して流れていることがうかがえる。すなわち，元禄14（1702）年に描かれた城下図により約8間から10間（14〜18m）の幅を有していたことが推測される三の丸堀については，今回調査地よりもやや西側の本丸寄りに主要部が存在するものと考えられる。

最後に，今回掘り下げたトレンチの最深部や工事前のボーリング調査によって貝殻を包含する層が確認されている。これらの貝類は浅海の砂泥地に生息する種類のものであり，今後，田辺城築城以前の西舞鶴湾の海岸線の変遷や自然環境等の復原を行ううえに一つの材料となろう。

（辻本 和美）

注1　調査参加者（敬称略）
　作　業　員　大辻武夫・川端一男・川端景一・高田　勇・水嶋亀吉・上羽マスエ・川端　操・後野春江・迫田ミキオ・獄キミコ・土渕喜代子・堀江キヨ子・村尾明美
　調査補助員　堀田寿典

注2　「田辺城遺構発掘調査」（現地説明会資料）　舞鶴市教育委員会　1981

注3　「田辺城遺構第2次発掘調査―明倫小学校体育館改築に伴う発掘調査―」（現地説明会資料）舞鶴市教育委員会　1982

参考文献

『日本城郭大系』第11巻（京都・滋賀・福井）新人物往来社　1980

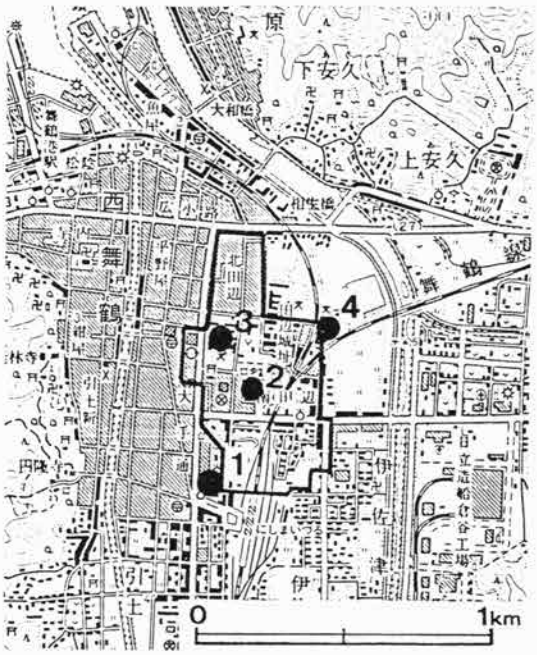
5. 田辺城跡第４次発掘調査概要

1. はじめに

京都府北部に所在する舞鶴市は，古くから港湾都市として発展し日本海沿岸の主要都市の一つとなっている。

舞鶴市の名称は田辺城の別称「舞鶴城」から起るが，田辺城跡の研究はこれまで，残存する絵図面や現存する町割り等を基に主に城郭域の縄張り配置等についての復原作業が行われてきた。しかしながら，急激な市街地化に伴い，旧来の姿を消失した箇所も多く，上記の作業についても困難な点が少なくない。

近年，中・近世の城郭調査については，地理学及び文献史学的な調査に加え考古学的な調査が必須のものとして認識されている。当田辺城跡については，昭和56年に舞鶴市教育委員会により，二の丸跡及び大草やぐら跡に立地する明倫小学校の校舎全面改築に伴う発掘調査が実施され，翌57年にも引き続き同小学校内での発掘調査が行われた。(注1) これらの調査によって田辺城の縄張りや城内での生活の様相が明らかになったのみならず，近世城郭史を研究する上に数多くの重要な事象が検出された。

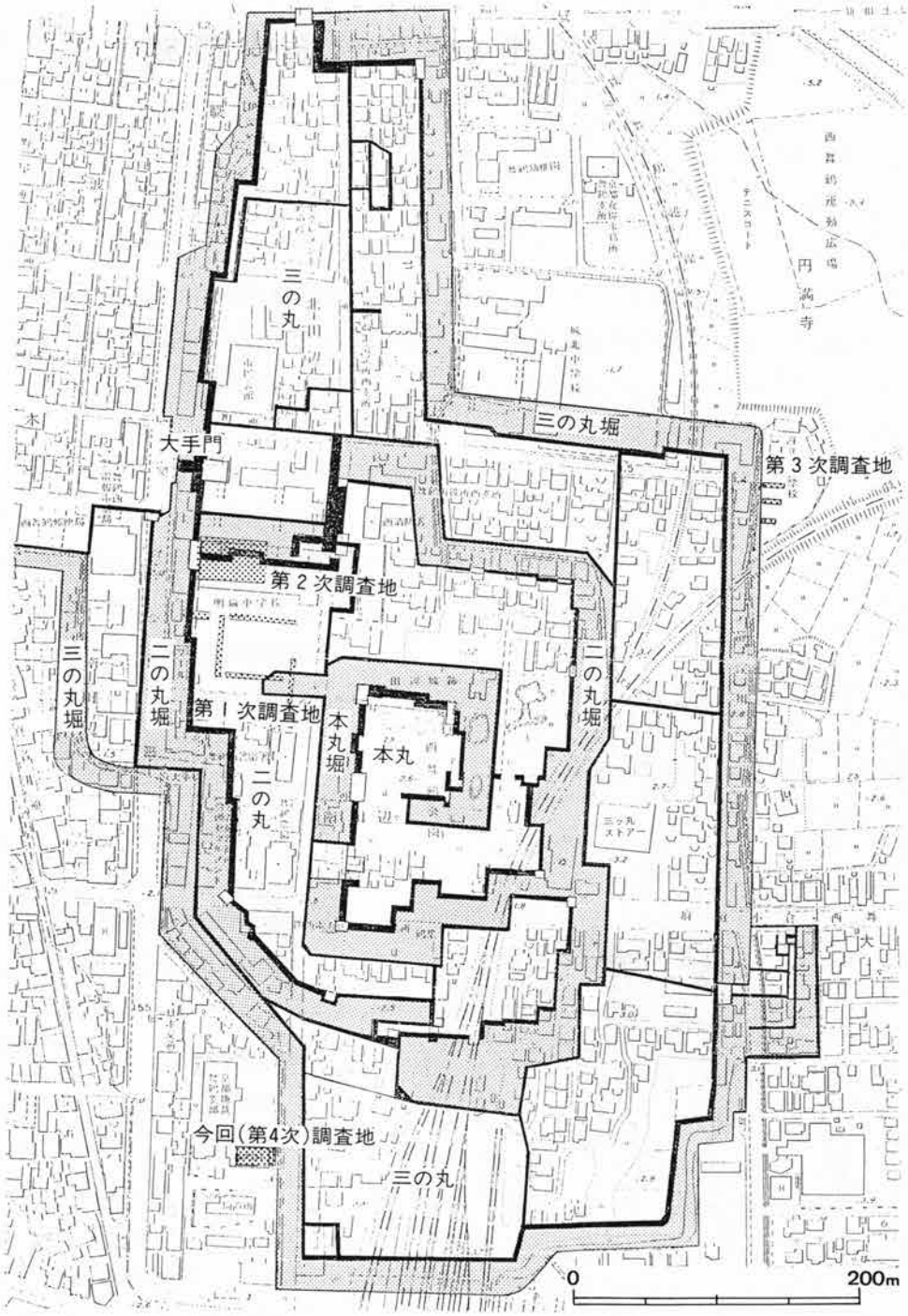


第 45 図　田辺城跡調査地位置図

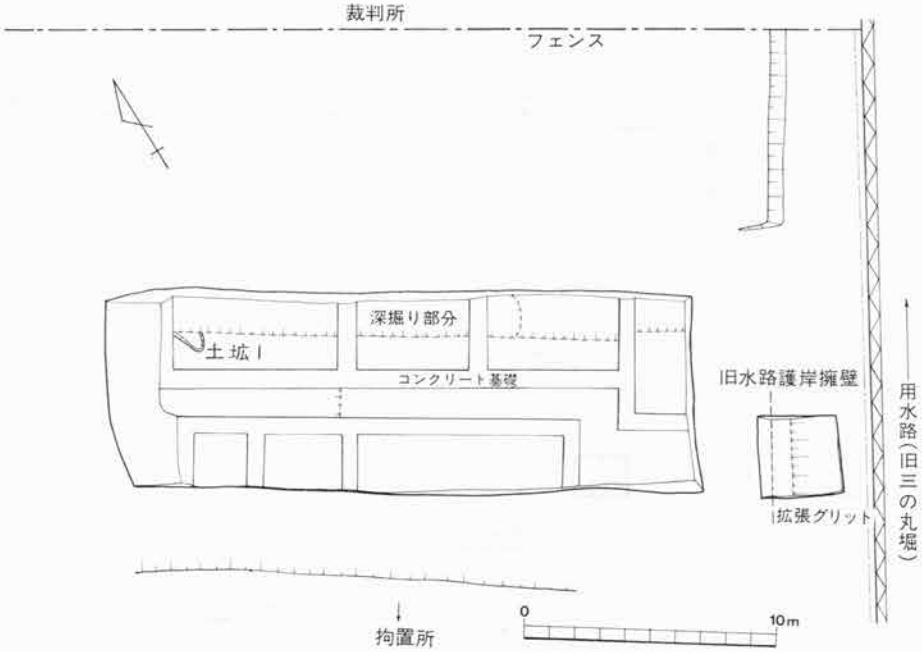
1. 今回（第４次）調査地　2. 本　丸　跡
3. 二の丸・大草やぐら（第１・２次）調査地
4. （第３次）調査地

さて，今回調査対象となった舞鶴法務合同庁舎の建設予定地は，田辺城郭域の南西角に位置しており，城の外郭を廻る三の丸堀跡に近接する。

同地点周辺ではこれまで発掘調査の実施例がなく，また，庁舎建設予定地の東辺を北流する用水路が三の丸堀の名残りを留めるものとされているため，今回の発掘調査に当っては，三の丸堀の規模及び堀に伴う護岸施設の有無及び城の外縁部分での土地利用状況を確認することを主目



第46図　城跡復原及び調査地位置図
(舞鶴市教育委員会作成図を基に加筆・補足したものである。)



第 47 図　調 査 地 位 置 図

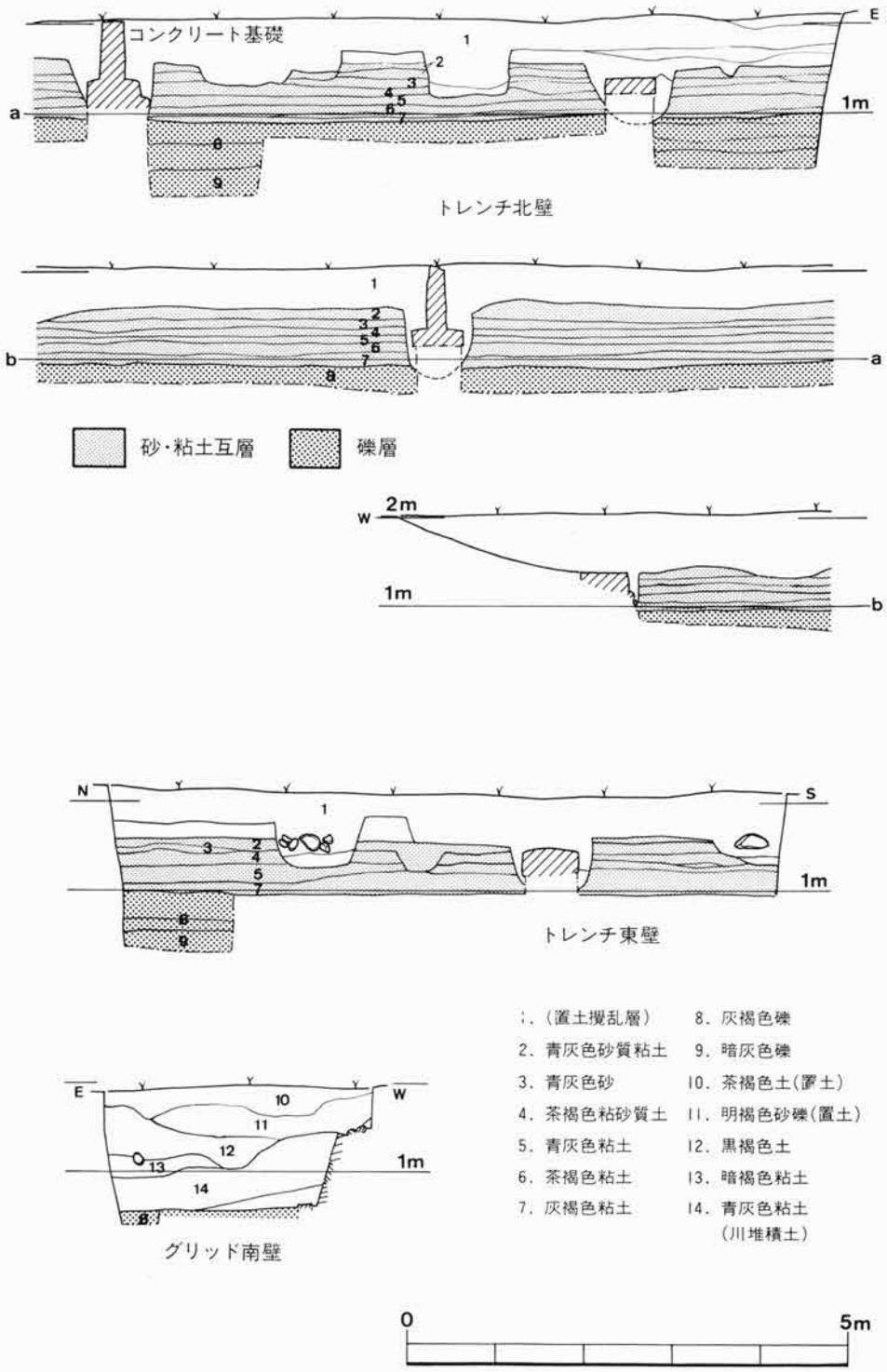
的とした。

現地調査は，昭和58年8月25日に着手し，同年9月29日に終了した。調査の実施に際しては，財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課主任調査員 辻本和美が担当した。

なお，調査期間中は，舞鶴市在住の有志の方々には例年にない夏の暑さの中，作業員として従事していただき，また，学生諸氏には調査補助員あるいは整理員として参加協力を得た。(注2) 諸氏の御協力に対し厚く謝意を表したい。また，舞鶴市教育委員会・府立丹後郷土資料館・京都府中丹教育局・京都地方検察庁舞鶴支部・舞鶴地方裁判所・舞鶴拘置所・㈱大滝工務店等，各位各機関からは調査全般にわたって御指導・御協力を賜わった。御厚意に対し深く謝意を表したい。

2. 調 査 概 要

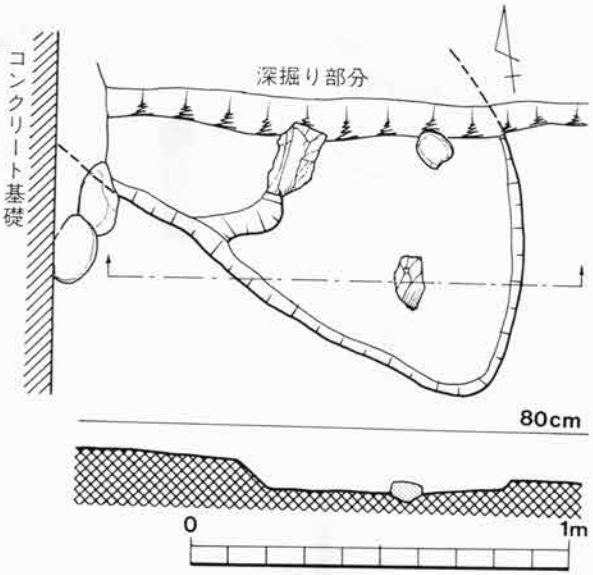
今回，発掘調査を実施した調査地は，田辺城跡の南西角に位置している。国鉄舞鶴線西舞鶴駅から本丸跡の舞鶴公園に通ずる道路の西側に沿って石積護岸の用水路が流れ，往時の三の丸堀の名残りを留める。調査に当っては，この三の丸堀の開削当時の西岸部の検出を期したが，調査着手前から旧庁舎建設時の基礎工事により地下部分についてはかなりの攪乱を受けていることが予想された。また，新庁舎の建設地が用地内のやや西側に寄った地点に予定



第48図　調査地土層断面図

されており，さらに当初予定した調査範囲内に現在使用中の水道管が埋設されていることが判明するなど，種々の事情により，調査の実施に当っては，新庁舎建設予定地内に一辺3 m 四方の試掘坑を3箇所に開け，その結果を基に改めて調査範囲の設定を行うことにした。

上記の試掘調査を基に行ったトレンチ調査（開削面積約 200 m²）の結果，当初予想していた通り旧庁舎のコンクリート基礎が地下深くまで達しており，城跡に関する遺構は検出されなかった。



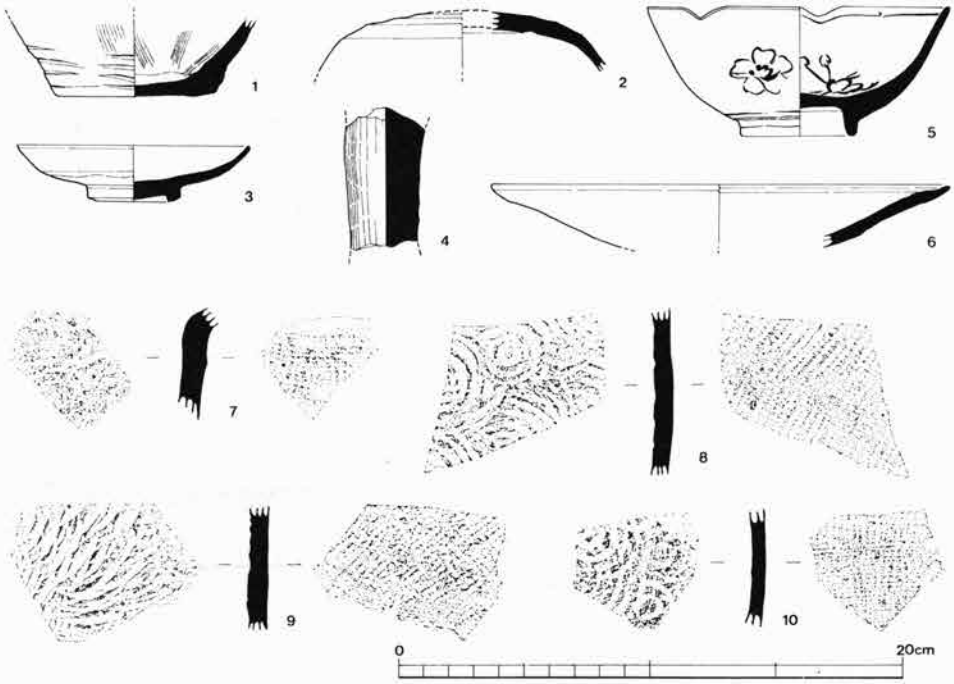
第 49 図　土 坑 1 実 測 図

調査地内の層位は，基本的に地表面から順に①旧庁舎建設当時の置土（表土下−40〜−50 cm）②茶褐色粘土（旧水田耕作土）ないし砂，粘土の互層（−100〜−150 cm）③礫層（−150 cm 以下）に大略分層される。なお，③の礫層上部からは，周辺部からの流込みと思われる器壁の磨滅した土器片が若干出土した。土器の種類としては，弥生土器をはじめ須恵器等が含まれ，田辺城築城時期以前に所属するものが大半である。

3. 検 出 遺 構

今回検出した遺構としては，築城以前に遡る土坑1基と，所属時期不明の打ち杭が挙げられる。

土坑（第49図）は，調査区の北西隅で検出したもので，西辺は建物基礎のため破壊されており，また北辺も土層観察用に掘ったトレンチのため削平されている。このため，土坑平面の規模・形状等については不明確であるが，現存部の規模は，東西長さ 100cm・南北長さ75 cm を測る。平面はいびつな楕円形を呈しており，現存部の形状から判断して南東から北西方向に長軸を置くものと考えられる。土坑の深さは，5 cm ないし 10 cm の深さを持ち北側に行くにしたがってやや深くなる。土坑の埋土は暗青灰色を呈する粘土で，坑内には長径20〜30 cm 大の石塊が3個置かれていた。石は内2個が角のある山石で他の一つは川原石を用いる。坑内からは土師器片（第50図6）と白磁の細片が出土した。またこの他，若干の木片



第 50 図　出土土器実測図及び拓影

1. 弥生土器　2・7～10. 須恵器　3. 白磁
4・6. 土師器　5. 磁器
土坑1・6　他は攪乱層

と炭化物を検出した。本土坑については性格等不明な点があるが，出土遺物・検出面からみて中世時期に所属すると考えられる。

その他，三の丸堀に直接関するものではないが，今回調査区と用水路の中間に入れた試掘坑から，用水路が現在の位置に付け替えられる以前の，同様な石積擁壁をもつ旧用水路跡を検出した。現在の用水路は，約4.2m 東に寄せて付け替えられていることがわかる。同水路の溝内は，ヘドロ状の泥土が堆積しその上部には溝を埋めたてた土砂や当時の塵芥が残存していた。

今回調査地は，伏流水の影響か全般的に地下水位が高く地表下約80cm 程掘り下げた所で激しく涌水をみた。

4. 出土遺物

出土遺物は全体として少ない。築城以前に遡るものと以降のものに大別される。前者には，弥生土器をはじめ土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁など各種ある。後者は陶磁器・瓦片

などがあるが旧庁舎工事時の攪乱に伴い混入したと考えられる近・現代のものがほとんどを占める。遺物はすべて小片で，ここでは特にその中で図示し得たもの，及びわずかに器形の判別できるものを中心に略述する（第50図）。

（1）は，弥生土器壺底部片である。器壁外表面に粗い線状の叩き目を施す。茶褐色を呈し，弥生時代後期に所属する。（2）は，須恵器杯蓋。天井部の一部が残存するのみであるが，形態上6世紀後半～7世紀初頭頃に比定できる。白磁皿（3）は，口径9.3cm・器高2.2cmを測り底部に輪高台を付ける。釉は体部以下及び底部には施されていない。中国製で大略12～14世紀代に所属する。（6）は，前出遺構の項で述べた中世土坑から出土したもの。口縁部のみの小片であるが復原径約18cmを測る。実測図では盤状に描いたが，天地逆にして鍋等の蓋になる可能性もある。（5）は，伊万里系陶磁器である。（7）～(10) は，古墳時代後期の須恵器甕体部の断面及び拓影である。須恵器の破片はこの他にも10数点出土しており今回出土遺物の中では割合に目立つものである。

5. ま　と　め

これまで述べたように，今回の調査地には旧庁舎建物の基礎が残存しており，それらの敷設工事に伴う土取りや攪乱のためか，予期した三の丸堀に関する遺構は検出できなかった。

既に何回か触れたように，今回調査地の東辺を流れる用水路は国鉄舞鶴線の西舞鶴駅から舞鶴公園に延びる道路が敷設された際，西側に幅寄せして付け替えられている。この旧水路はほぼ旧三の丸堀の位置を踏襲するものと考えられるから，逆に当初の堀跡は，今回調査地の東側に存在することが推測される。すなわち，試掘坑で検出した旧水路の石積み護岸壁は，そのものがかつての三の丸堀の西肩位置を示すものと考える。しかし，いずれにせよ開削当時の三の丸堀については，以前の調査で確かめられている本丸堀および二の丸堀跡のような石材等を用いた堅固な護岸施設は用いられなかったであろう。

これらは，城の占地および三の丸堀の開削等に当って，当時，城周辺に広がる広大な沼沢地を最大限に利用し天然の防塁としたという伝えを聞けば，堀の構造についてもおおよその判断が下せるであろう。

次に，礫層上面で検出した弥生土器片をはじめとする土器類は，河川の洪水等により上方から運搬されてきたものである。これと同様な遺物包含層は，当地点の北約300m離れた明倫小学校（二の丸跡）の調査や，それよりももっと海岸線に近い地点に立地する府立盲ろう学校舞鶴分校の校地内での調査でも確認されており，同種の層は西舞鶴市街地の平坦部一帯に分布するものと思われる。

現在，西舞鶴周辺には，女布遺跡をはじめ，市街地南部の山麓を中心に弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地が数箇所で確認されている。しかし，それらの遺跡についての具体的な様相については明らかではない。今回調査地において出土した土器片等についてもこれらの集落から洪水等により運ばれてきたものか，あるいは現在の市街地の地下に自然堤防の微高地を利用した未知の集落跡が埋没しているのかどうかは資料不足であり速断できない。

土器片を含む砂礫層（旧河道）は中世の時期に堆積が弱まった模様で，この時期に土坑が掘られている。今回検出した土坑の性格については，残念ながら断片的な資料しかなく，その性格等を明確にしがたいが，ここでは一応埋葬に伴う施設として考えておく。

中世以降，川原が埋葬場所として利用される例は良く知られる所であり，本例もそれらの一例に加えておきたい。

以上，今回の調査は三の丸堀の確認という所期の目的を遂げることができず，主に田辺城築城以前の西舞鶴地域の地理的状況を知る材料を得たにとどまった。しかしながら，今回の調査結果が，今後周辺地域の自然環境の復原など西舞鶴盆地全体の変遷史を考えるうえに何らかの手がかりとなれば幸いである。　（辻本 和美）

注1　「田辺城遺構発掘調査」（現地説明会資料）舞鶴市教育委員会　1981
「田辺城遺構第2次発掘調査―明倫小学校体育館改築に伴う発掘調査―」（現地説明会資料）舞鶴市教育委員会　1982

注2　調査参加者（敬称略）
作　業　員　大辻武夫・川端景一・水嶋亀吉・上羽マスエ・川端　操・後野春江・迫田ミキオ
獄キミコ・堀江キヨ子・村尾明美
調査補助員　堀田寿典
整　理　員　堀田寿典・片村誠宏・河野寿美男・川田美由紀・東山結花

参考文献

『日本城郭大系』第11巻（京都・滋賀・福井）　新人物往来社　1980

6. 蒲生遺跡発掘調査概要

1. はじめに

蒲生(こもう)遺跡は，京都府船井郡丹波町蒲生から豊田にかけての広範囲な遺物散布地である。『京都府遺跡地図』には「京都府遺跡番号2726・丹波町遺跡番号9」として登載されている。

丹波町の中心部は，標高150m以上の，いわゆる丹波高原とよばれる盆地に所在する。蒲生遺跡は，標高176mから180mにかけての台地上に位置する。今回の調査地は，丹波町豊田下河原であり，遺跡範囲内の北西端にあたる。

今回の調査は，京都府立須知高等学校の農業科実習棟建設工事に伴う事前の発掘調査として，京都府教育委員会管理課から同文化財保護課を経て当調査研究センターに依頼があった。そこで，当調査研究センターでは，再三にわたる協議や現地視察を行ったうえで，文化財保護法第98条第2項の規定に基づき「埋蔵文化財発掘調査届出書」を昭和58年6月17日付けで文化庁長官あて提出し，同年7月2日から現地調査に着手した。

今回の調査は，校舎建設工事に先立ち，同予定地内に遺構・遺物が存在するか否かを確認し，記録を作成することを主たる目的とする。現地調査は同年8月25日まで実施した。また，同年8月24日には関係者説明会を行った。この説明会には調査関係者や協力機関の方がただけでなく，丹波町教育委員会の御配慮により多数の地元の方がたが参加された。

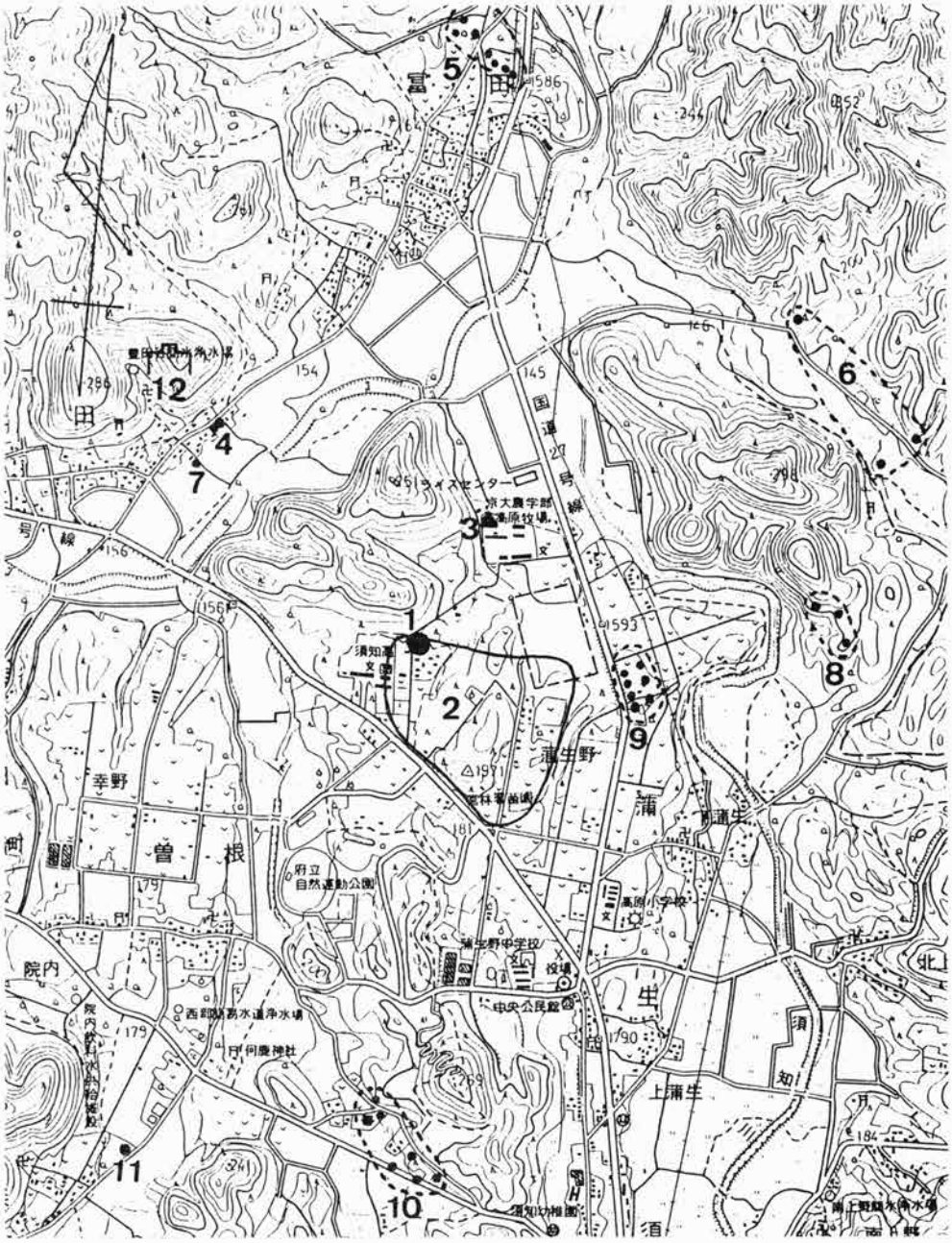
発掘調査にあたっては，当調査研究センター主任調査員 水谷寿克，調査員 引原茂治が担当して行ったが，現地での作業は主に引原が進行をはかった。

また，下記の方がたには調査に御協力いただいた。感謝の意を表したい。

調査協力者　京都府立須知高等学校・丹波町教育委員会・京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府南丹教育局・大西儀一(京都府文化財保護指導委員)・朝日航洋株式会社・田端輪業

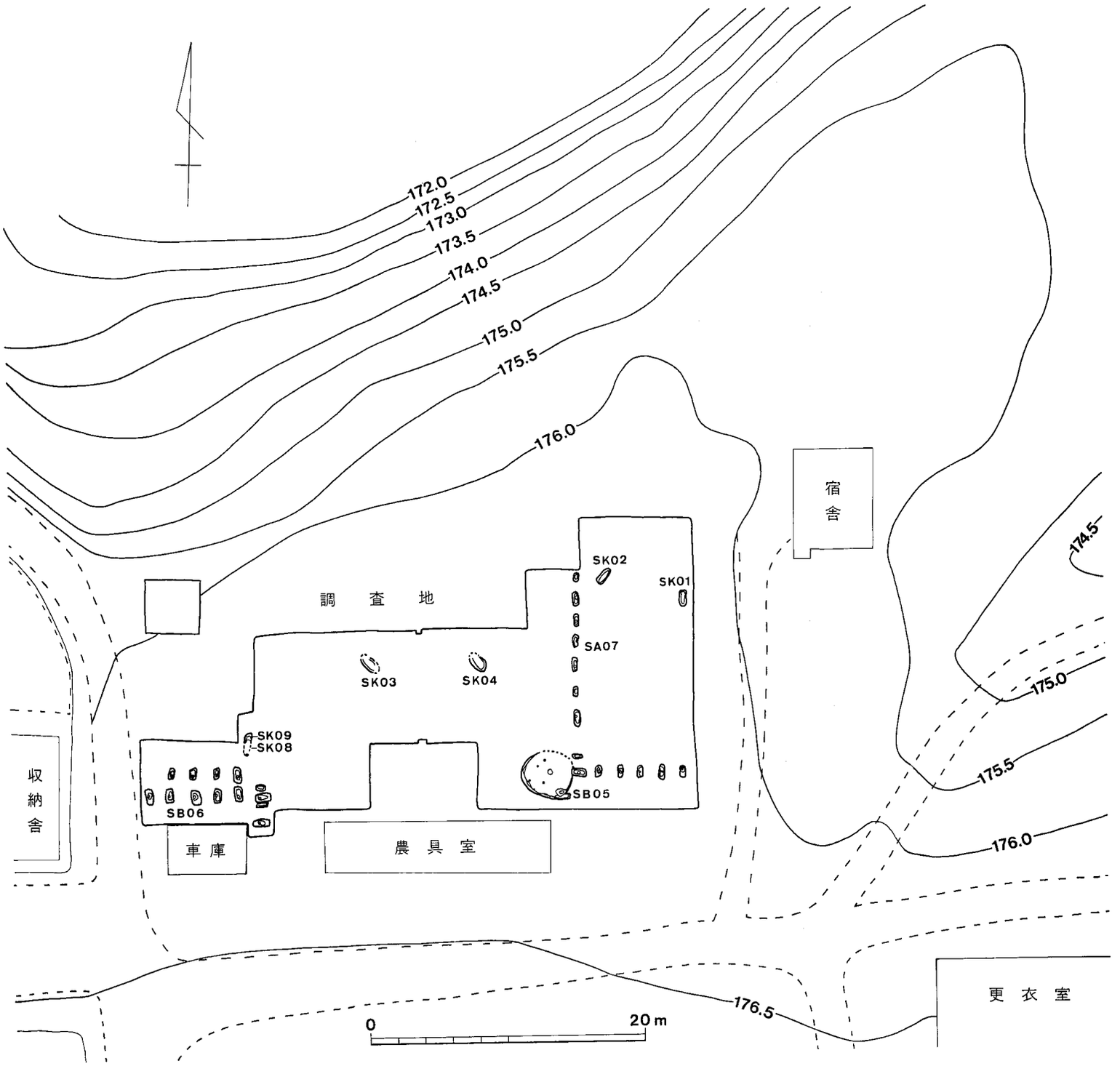
これらの方がたのほかに，調査補助員・整理員・作業員として各大学の学生諸君・地元の方がたに協力していただいた。(注1) なお，調査補助員の中西 宏氏には事務補助員としても調査を援助していただき，特に感謝したい。

この概要報告書の作成にあたっては，上記引原茂治が執筆・編集を行った。



第51図　調査地位置図

1. 調査地　2. 蒲生遺跡　3. 美月遺跡
4. 豊田車塚古墳　5. カナヤ古墳群　6. 実施古墳群
7. 藤浪古墳　8. 家ノ奥古墳群　9. 蒲生野古墳群
10. 宮の浦古墳群　11. 森狐塚古墳　12. 豊田城跡


172.0
172.5
173.0
173.5
174.0
174.5
175.0
175.5
176.0
176.5
174.5
175.0
175.5
176.0
宿舎
調査地
SK01
SK02
SA07
SK03
SK04
SK09
SK08
SB06
SB05
収納舎
車庫
農具室
更衣室
0
20m

第52図　調査地地形図

2. 位置と環境

丹波町は標高150 m以上の小盆地にある。丹波高原とも呼ばれ，京都府の屋根ともいうべきところである。丹波町南側の，園部町との境界ともなっている山塊は，淀川水系と由良川水系の分水嶺である。その山塊から南側へは園部川が流れ，各支流と合流し大堰川となり，京都盆地で桂川となりやがて淀川と合流する。一方北側へは須知川と高屋川が流れ出し，合流して由良川となる。丹波町は，由良川水系の最上流域にあたる。今回の調査地は，須知川と高屋川の合流点から南方約1.2 kmに位置する。

丹波町は，観音峠以北の船井郡内では，最も遺跡の分布が知られている。しかし，まだ分布調査が不充分であり，今後さらに多くの遺跡が発見される可能性が大きい。

丹波町内においては，現在のところ旧石器時代・縄文時代の遺跡は確認されていない。弥生時代の遺跡としては，今回の調査地から北東約500 mに位置する美月遺跡がある。京都大学農学部附属牧場内にある。先年発掘調査が行われ，弥生時代中期と平安時代後期の遺構・遺物が検出されている。(注2)

古墳時代の遺跡としては，多くの古墳が確認されている。後期の横穴式石室を内部主体とする小円墳が多い。小規模な古墳群が各所に分布している。これらのうちで，前方後円墳とされているものが2基ある。カナヤ1号墳（乗鞍古墳）と豊田車塚古墳である。『京都府遺跡地図』によると，カナヤ1号墳は全長34.5 m，豊田車塚古墳は全長31.5 mの小規模なものである。その他注目される古墳としては，宮ノ浦1号墳がある。一辺25 mの方墳であり，二段築成のしっかりした墳丘をもつ。内部主体は巨大な自然石で構築された片袖式の横穴式石室であり，ほぼ完存している。この古墳は，大規模な横穴式石室を内部主体とする方墳として，丹波町内のみならず周辺地域においても特殊なものである。

今回の調査中に，京都府文化財保護指導委員 大西儀一氏から，『京都府遺跡地図』に登載されていない古墳を教えていただいた。その名称だけを記す。

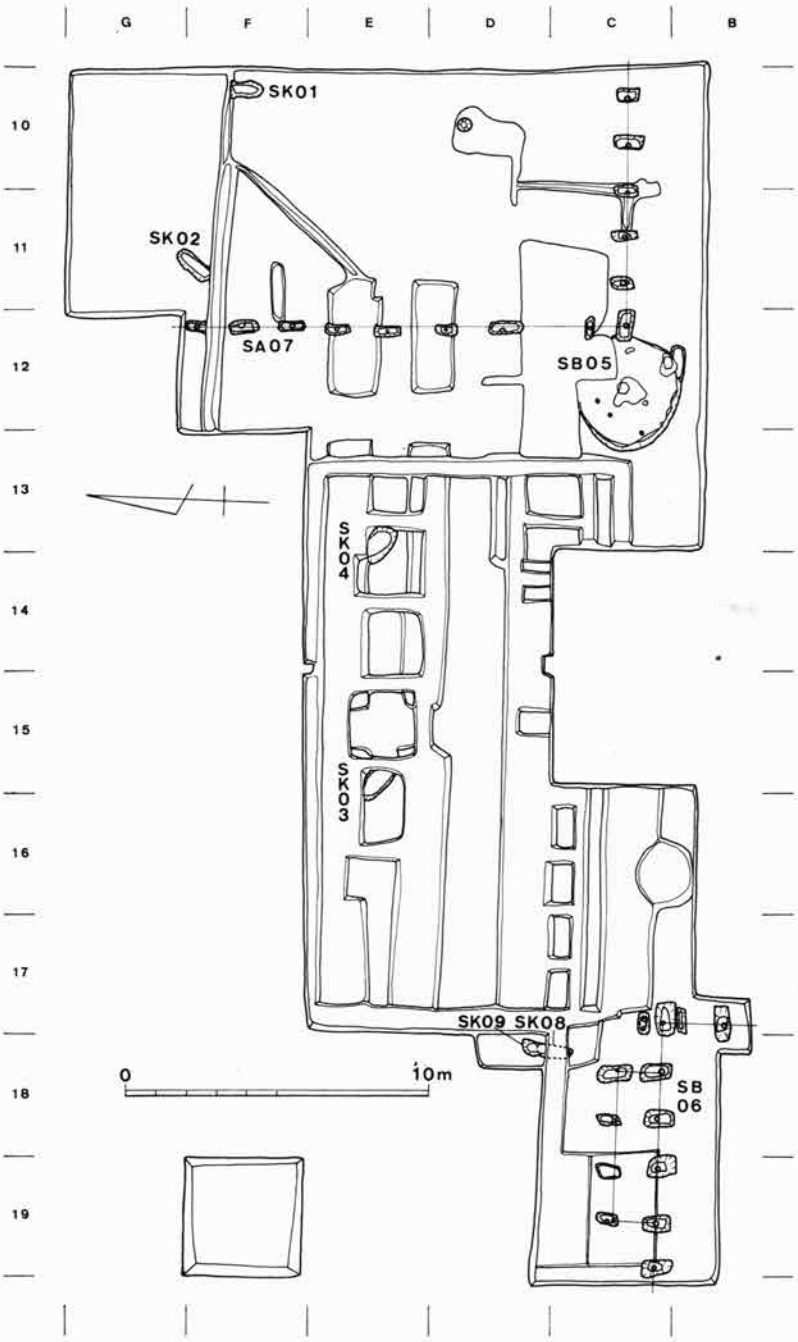
浜付場古墳群（3基・丹波町上野浜付場・円墳・横穴式石室・内1基古墳状隆起）

山田古墳群（2基・丹波町森山田・円墳・横穴式石室・内1基古墳状隆起）

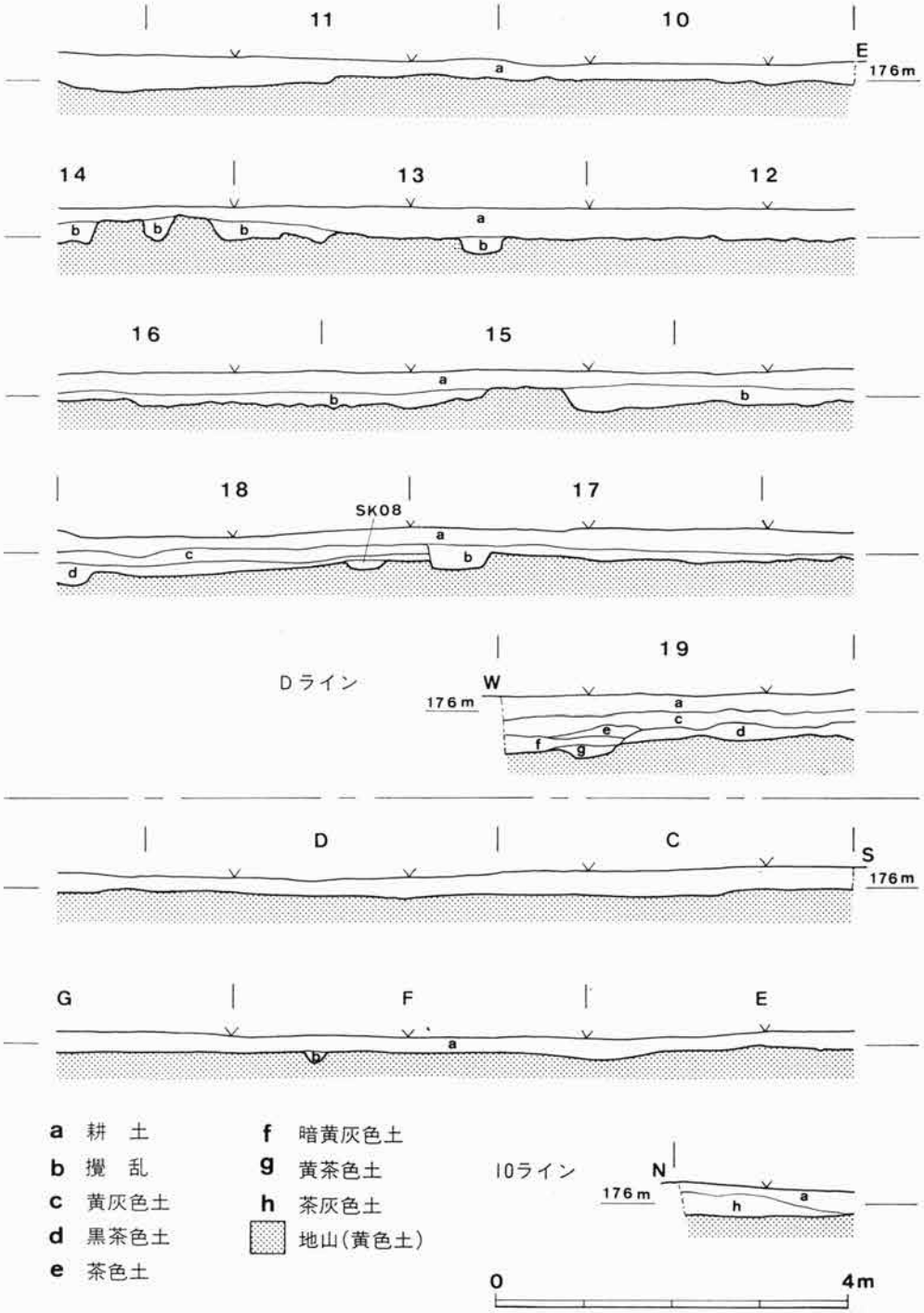
森狐塚古墳（丹波町森白井・円墳・横穴式石室）

南　古　墳（丹波町実施南・円墳・横穴式石室）

歴史時代の遺跡としては，院内地区および中台天ケ棚地区に奈良時代の須恵器窯跡が5基確認されている。中世の遺跡としては，他地域と同様に，山城跡・館跡がある。主なものとしては，須知城跡・上野城跡・曽根館跡・口八田城跡などがある。須知城跡は，在地の土豪須知氏の居城であり，大型梯郭式のもので本丸近くに石垣がよく残る。上野城跡は小型片傾



第 53 図　調 査 地（A 地 点）平 面 図



第 54 図　D ラ イ ン・10 ラ イ ン 層 序 断 面 図

斜梯郭式のもので，多くの郭や大規模な空堀が残る。

3. 調査の経過と概要

調査対象地は，現状では須知高校農業科の飼料畑となっている。現地調査は昭和58年７月２日から着手した。調査地の地区割は建設予定建物の方向に合わせた。東西方向・南北方向にそれぞれ４ｍ間隔の方眼で区切り，東西方向に数字，南北方向にアルファベットを付した。それぞれの方眼は，南東隅の交点の名称をその呼称とした。また今回の調査地をＡ地点とし，各方眼の呼称の頭にＡを付した。

調査は，AC 10・AF 10・AC 19・AF 19・AE 15 の試掘から開始した。その結果，AC 10 では柱穴状のピット，AF 10 では SK 01，AC 19 では柱穴状のピット，AF 15 では SK 03 を検出した。AF 19 では，地山が北西方向に傾斜していく様子がうかがわれ，遺構は存在しなかった。また，かなりの盛土を行って畑地にしている様子であり，ゴミ捨て穴などが掘られていた。このような状況から，北西側には遺構は存在しない様子なので，拡張は行わないこととし，その他はほぼ全面を掘削することとした。

その後，試掘グリッドをもとにして随時拡張掘削を行い，竪穴式住居跡１基 (SB 05)・土坑６基 (SK 01～04・SK 08・09)・掘立柱建物跡１棟 (SB 06)・柵列跡 (SA 07) を検出した。

竪穴式住居跡と土坑は，その出土遺物から弥生時代のものとみられるが，掘立柱建物跡と柵列跡は，それに伴う遺物がないため時代は不明である。

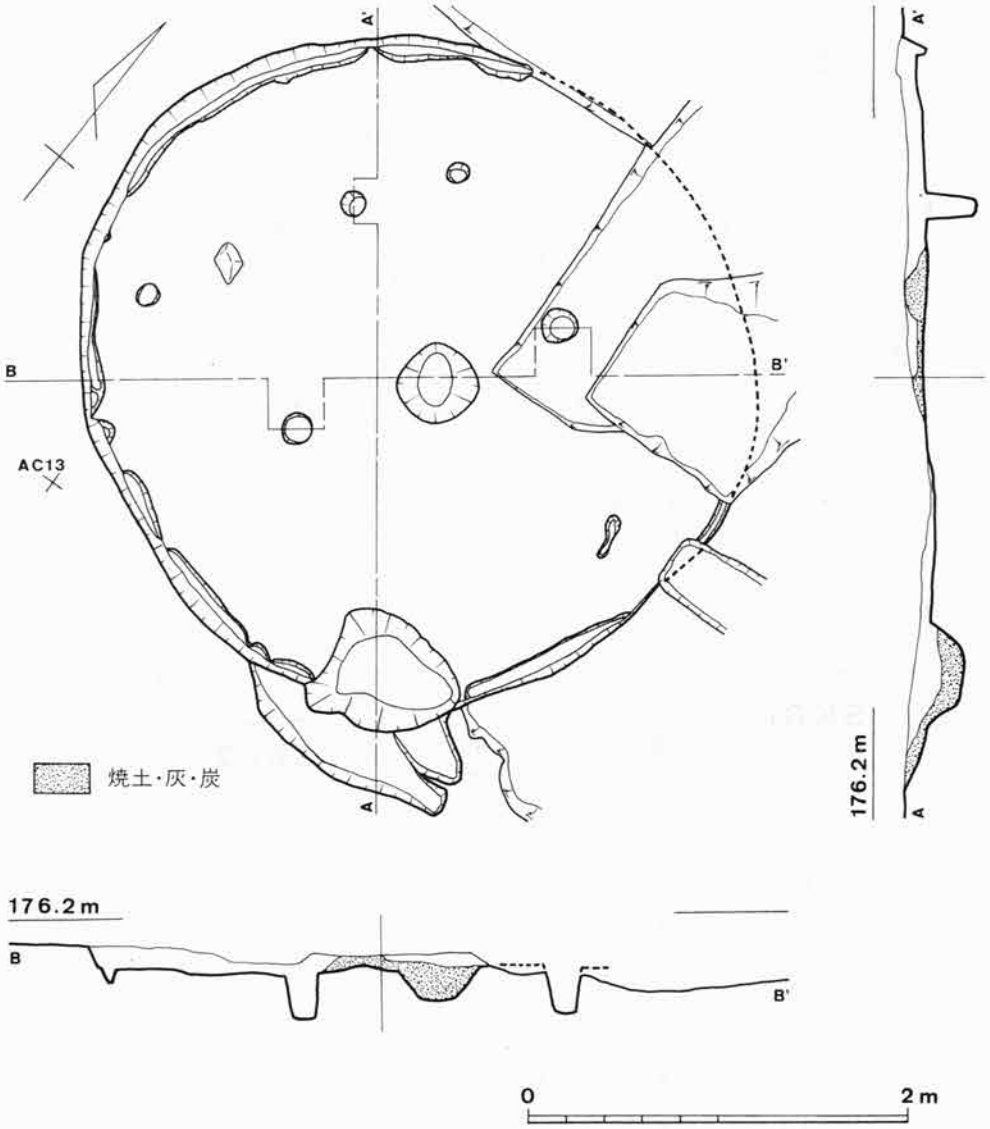
調査地はほぼ全体にわたって削平されている様子で，西側以外は耕土下即地山という状態であった。また，以前に学校関係の建物があったので，その基礎によってかなり攪乱されていた。そのため遺物包含層は全く残っていなかった。遺物は遺構から出土したものがほとんどであり，その量は少ない。

現地調査がほとんど終了した８月24日に関係者説明会を行い，翌25日に機材等の撤収を行って，完全に調査を終了した。なお，今回の調査を終了するにあたり，今後の調査の基準とするために，コンクリート杭によるポイントを調査地外に設定した。

4. 検　出　遺　構

今回の調査地において，特に中央部は学校関係の旧建物の基礎でかなり攪乱されており，また削平を受けていて，土坑などは底部付近のみの検出であったり，断片的に残存していたものもある。遺構の分布状況は，あまり濃密ではない。

検出遺構は，弥生時代のものと，明確に時期決定はできないが歴史時代のものとに大別される。弥生時代のものとしては，竪穴式住居跡 (SB 05) と土坑 (SK 01～04・SK 08・09) が

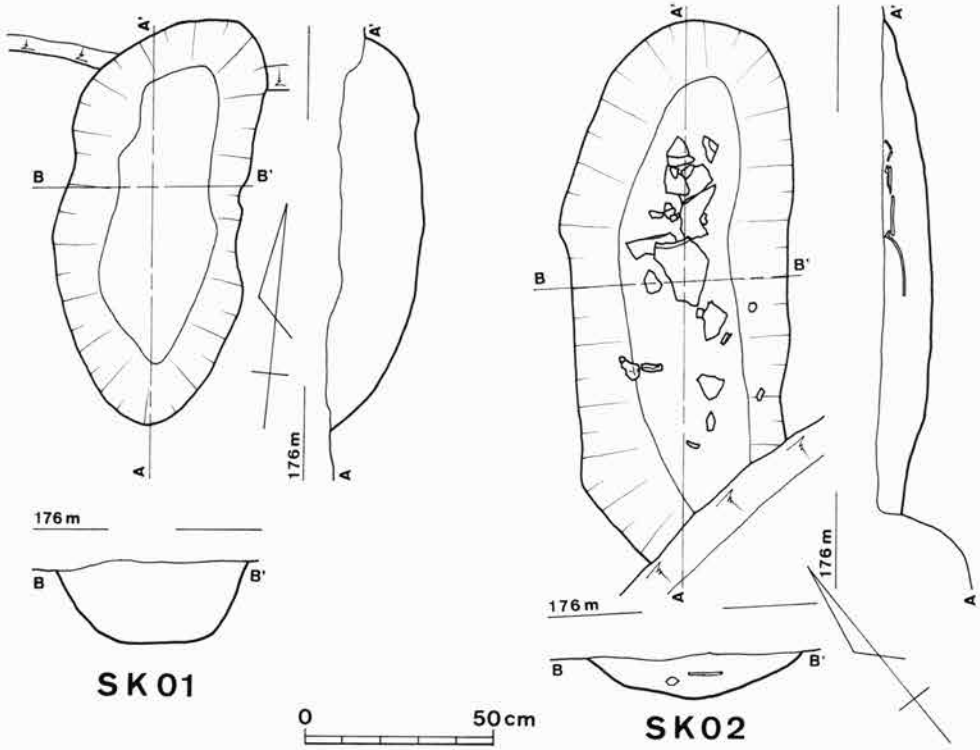


第 55 図　竪 穴 式 住 居 跡 SB 05 実 測 図

ある。歴史時代のものとしては，掘立柱建物跡 (SB 06) と柵列跡 (SA 07) がある。弥生時代の遺構はすべて地山面から検出した。

（1）竪穴式住居跡 SB 05（第55図　図版第34）

平面形は円形であり，直径約 3. 6 m の小形のものである。北側は攪乱のために残存していない。最も良好に残っている箇所での残存壁高は約 20 cm である。壁面にそってやや途切れ気味に周壁溝がめぐる。中央には炉跡とみられる焼土の堆積がある。また貯蔵穴状の掘り込



第 56 図　土　坑　実　測　図 (1)

みがある。南東側には不整形の張り出しと掘り込みがあるが，その性格は不明であり，炭および焼土が堆積している。床面には地山と異なる粘質土が部分的に残っており，張り床を行っていた可能性もある。また，南半部には炭化した木材が散乱しており，あるいはこの住居は火災によって廃絶したものか。

この住居跡からは，石鏃・石包丁片・剝片などの石器類が出土したが，土器は，埋土から小片が少量出土したのみである。なお，石器剝片は，南東側掘り込み付近と北西側周壁溝内および付近からまとまって出土している。

（2）土坑 SK 01（第56図）

長さ 110 cm・幅 48 cm を測るやや小形の土坑である。内部からは全く遺物が出土しない。埋土は後述する土坑に類似する。

（3）土坑 SK 02（第56図　図版第35—(1)）

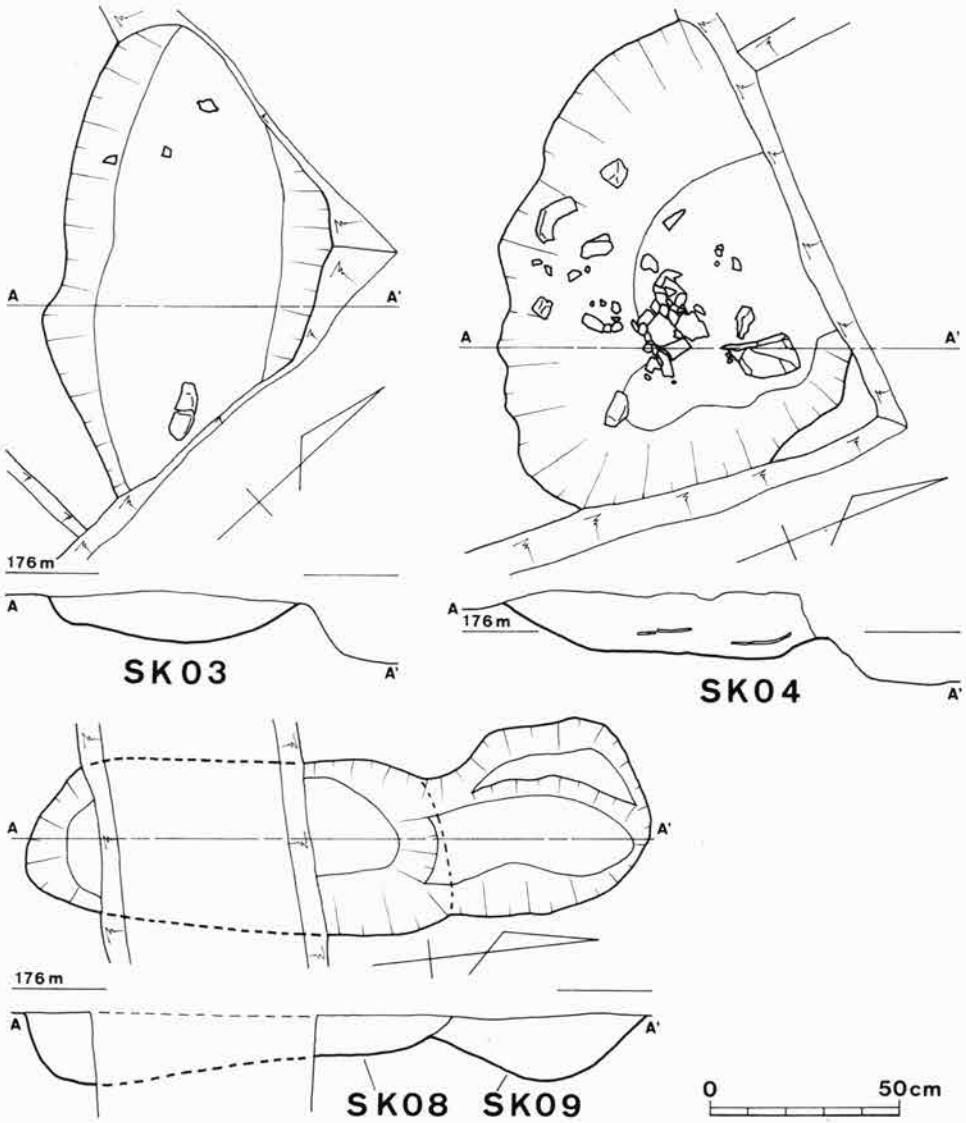
長さ 150 cm・幅 60 cm を測る。底部付近のみ残存しているものとみられる。内部からは弥生土器甕などが出土した。

（4）土坑 SK 03（第57図）

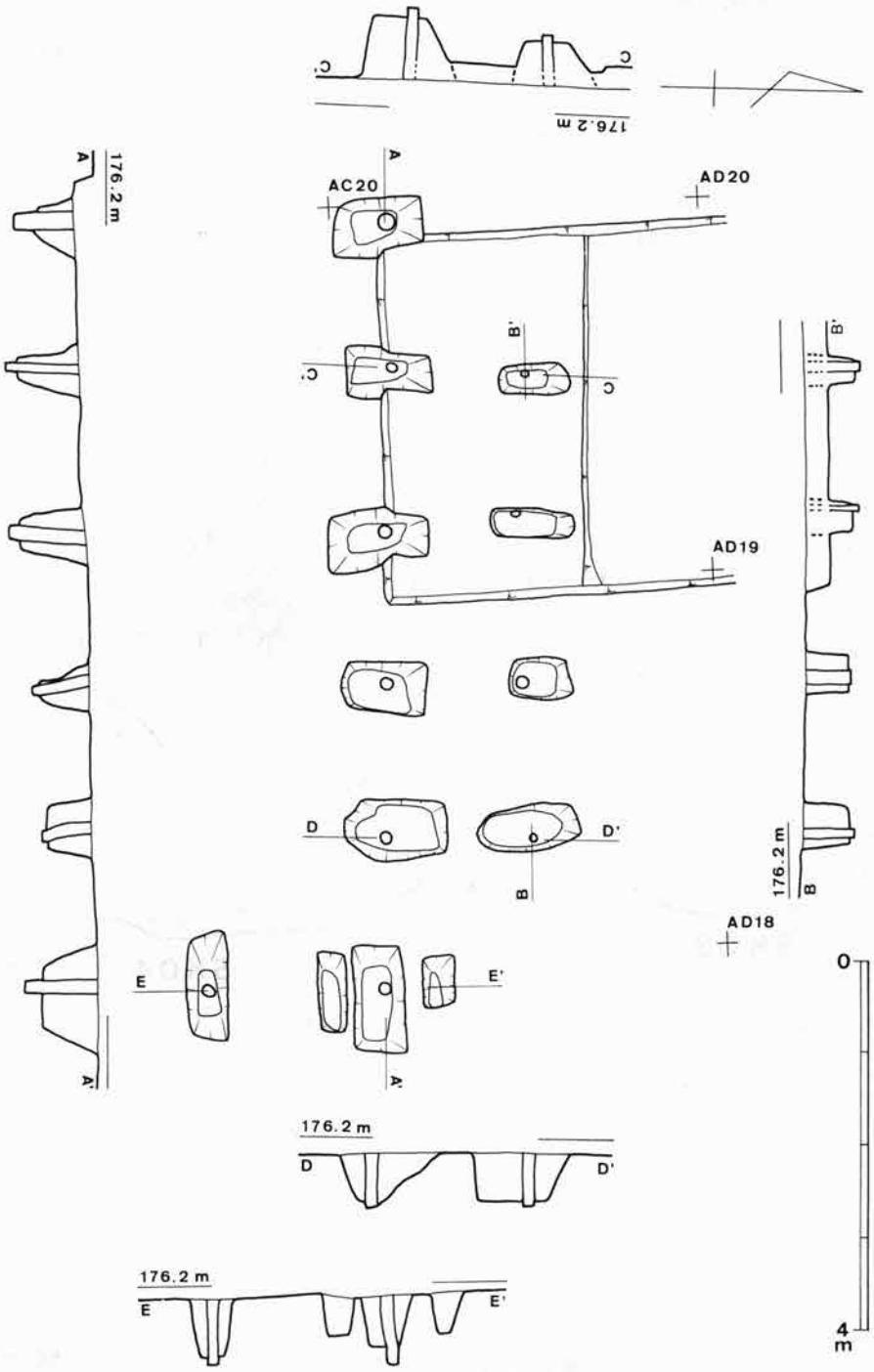
旧学校建物の基礎によって両端を切断されており，長さは不明である。幅は約 80 cm である。内部からは少量の弥生土器片が出土した。

（5）土坑 SK 04（第57図　図版第35―(2)）

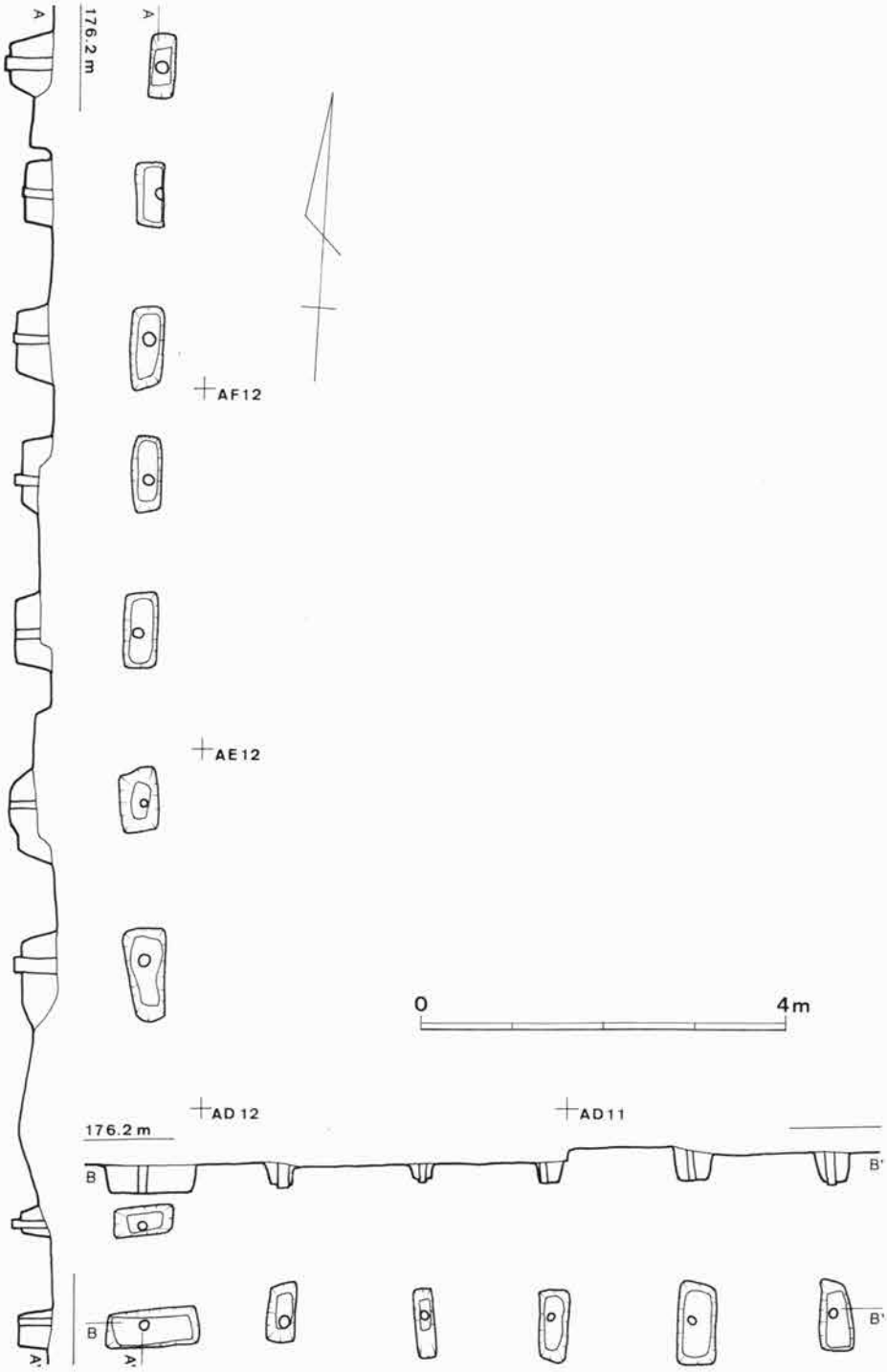
旧学校建物の基礎によって切断されており，長さは不明である。幅は約 1 m であり，今回検出した土坑のうちでは幅の広いものである。内部からは弥生土器甕などが出土した。



第 57 図　土　坑　実　測　図 (2)



第 58 図　掘 立 柱 建 物 跡 SB 06 実 測 図



第 59 図　柵 列 跡 SA 07 実 測 図

（6）土坑 SK 08・09（第57図）

現地調査終了直前の断ち割りによって検出した。SK 09 が SK 08 によって切られている。SK 08 は長さ 114 cm・幅 47 cm を測る。SK 09 は幅 53 cm を測る。SK 08 内部から弥生土器小片が少量出土している。

（7）掘立柱建物跡 SB 06（第58図　図版第36—(1)）

調査範囲の関係上，また道路や既存建物などの制約によって，全容は検出できなかったが，東西棟の建物と推定される。検出した柱穴は13個である。建物規模は2間×5間以上とみられる。北側に1間×3間の張り出しが付く。柱間は 1.5～1.8m である。柱穴掘形は長方形である。母屋部の掘形は，長さがほぼ 90～120 cm，幅は 40～60 cm である。張り出し部の掘形は，長さがほぼ 70～110 cm，幅が 40～50 cm である。柱の太さは母屋部で約 15 cm，張り出し部で 8～10 cm とみられる。掘形埋土は黒茶色と地山の黄色土が混ったものである。

（8）柵列跡 SA 07（第59図　図版第36—(2)）

SB 06 と同じく全容を検出してはいないが，14個の柱穴がL字状に並ぶ。掘形は長方形である。掘形の長さは 80～100 cm，幅は 30～40 cm である。SB 06 の掘形よりやや小形である。柱の太さは 8～10 cm のものが多い。柱間は1.5～1.8m である。ただ，屈曲部の北側2間目は柱間が約 3 m と広くなっており，出入口のような施設が想定される。SA 07は，SB 06 とほぼ方向がそろっており，柱穴掘形も類似することから互いに関連するものとみられる。

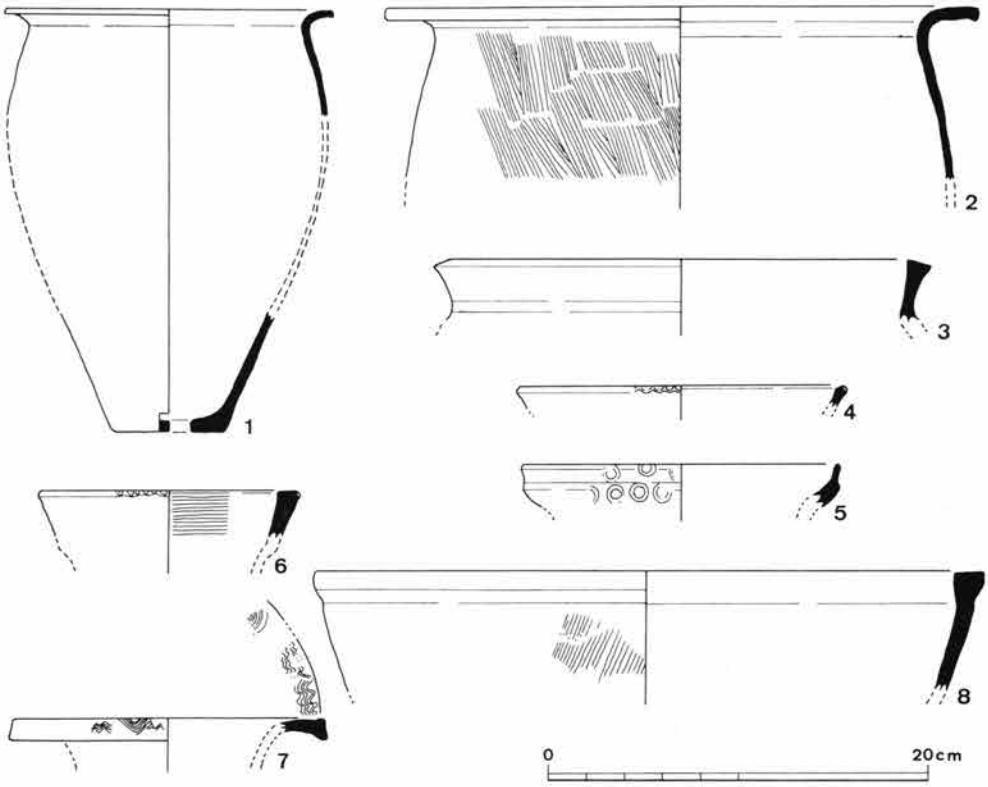
5. 出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物のほとんどは弥生時代のものである。その他の時代のものとしては，須恵器の小片と中世頃の糸切底をもつ土師器片などがあるが図示できる状態ではない。弥生時代の遺物としては土器と石器が出土している。しかし，先述のとおり，今回の調査地は削平や攪乱のため遺物包含層が全く残っておらず，ほとんどの遺物が遺構から出土したものであり，その量は少ない。しかも，土器は残存状態が非常に悪く洗滌もできないものもある。また，小片が多く図示できるものは少ない。

石器は，石鏃・石包丁・剥片が出土している。完形品は石鏃1点である。竪穴式住居跡 SB 05 から石器のほとんどが出土しており，特に剥片がまとまって出土しているのが注目される。

（1）弥生土器（第60図　図版第37）

出土量も少なく，残存状況も悪い。土坑から出土したものがほとんどである。器種は，甕・壺・鉢などがあるが，甕が多い。高杯脚部とみられるものも2点出土している。



第 60 図　出土遺物（弥生土器）実測図
SK 02：1•5　SK 04：2•3•6～8　AF 12：4

甑（1）は，土坑 SK 02 から出土したものである。内外面ともに剝落のために調整は不明である。

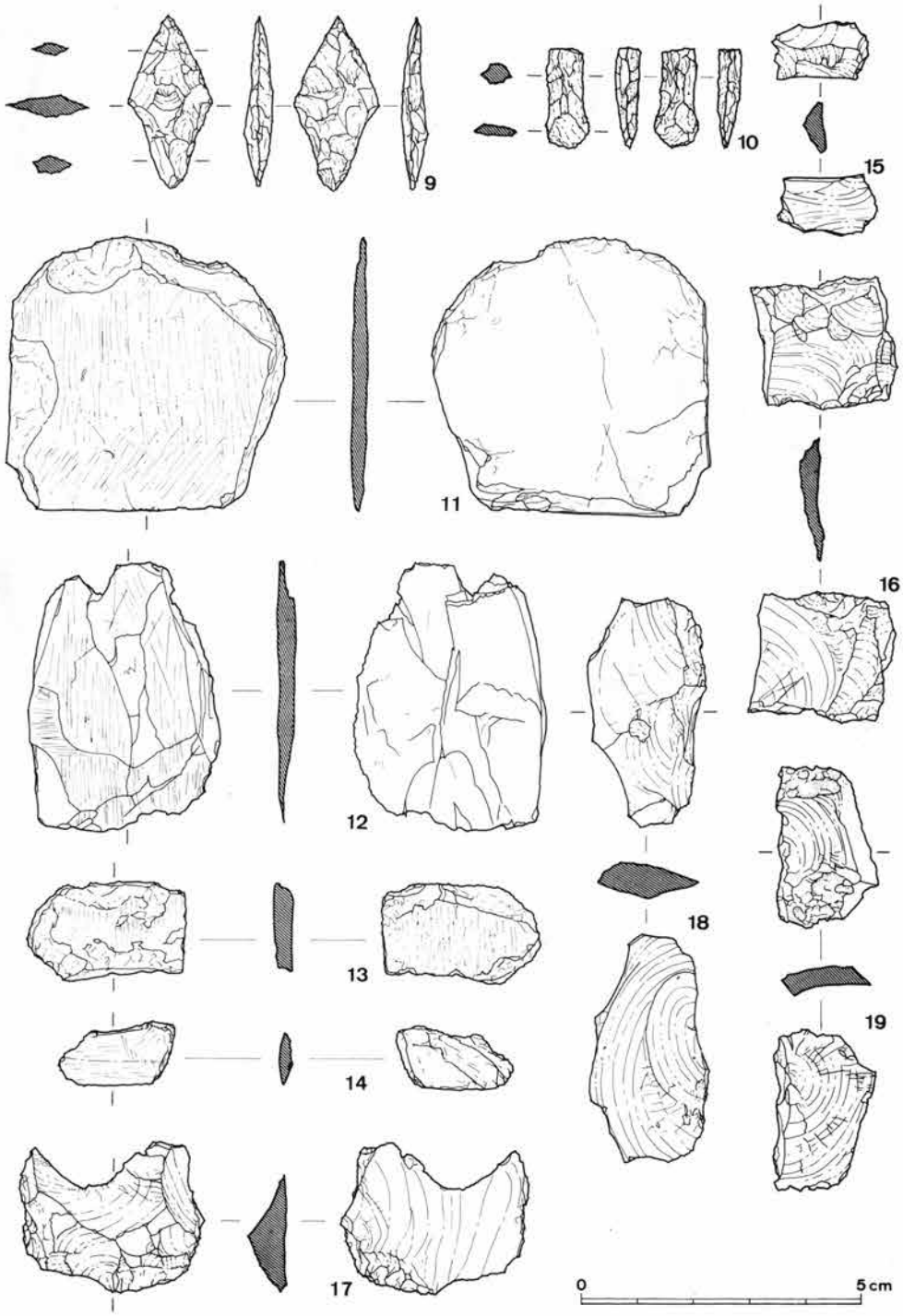
甕（2）は，土坑 SK 04 から出土したもので，外面をタテ刷毛調整している。内面は剝落のため調整は不明である。甕（3）も土坑 SK 04 から出土したものであるが，剝落のため調整は不明である。

甕（4）は AF 12 の直径 10 cm 程度の小ピット埋土から出土したものである。口縁端部に丸味をもつ刻み目を施す。

甕（5）は土坑 SK 02 から出土したものである。口縁部が受け口状になり，外面に竹管文を施す。

広口壺（6）は土坑 SK 04 から出土したものである。口縁部内面はヨコ刷毛調整であり，端部に刻み目を施す。

壺（7）は土坑 SK 04 から出土したものである。外反する口縁部の上面にクシ描きの波



第 61 図　出 土 遺 物 (石 器) 実 測 図
SB 05 : 9 ・10 ・12～19 AC 17 : 11

状文および扇状文を施す。口縁部の端面にもクシ描き波状文を施す。

鉢（8）は土坑 SK 04 から出土したものである。剝落がはげしいが，外面にタテ刷毛調整がみられる。

（2）石器（第61図　図版第37）

石器は先述のとおり竪穴式住居跡SB 05から出土のものがほとんどである。図示したもののうちで石包丁（11）のみ AC 17 の耕土中からの出土である。

石鏃（9）は凸基有茎式のもので，石材(注3)はサヌキトイドである。石鏃（10）は有茎式のものの茎部とみられ，石材は同じくサヌキトイドである。

石包丁（11）は片面がほとんど剝離しており，わずかに刃部が残る。直刃のものとみられる。石材は粘板岩もしくは頁岩である。石包丁（12）は剝離したものを接合したものであり，片面のみに磨痕が残る。粘板岩もしくは頁岩製である。石包丁（13）は小片ではあるが両面に磨痕が残る。石材は泥質ホルンフェルスである。石包丁（14）は，刃部のみの小片で，片面が剝離している。直刃のものと推定される。石材は粘板岩もしくは頁岩である。

剝片（15）は，黒色の石材であり，非結晶質（ガラス質）のものである。その他の剝片（16～19）は，サヌキトイドである。

6. 小　　結

今回の調査では，竪穴式住居跡をはじめとする弥生時代の遺構を検出した。これら弥生時代の遺構から出土した土器は，畿内第Ⅲ様式に並行するものとみられ，弥生時代中期にあたる。丹波町内においては，京都大学農学部附属牧場内にある美月遺跡についで二例目である。また，由良川上流域における数少ない弥生時代の遺跡としても重要である。ただ，良好な土器資料が得られなかったことが惜しまれる。その点では，今後に期するところが大きい。

今回の調査地は，平坦な台地から北東方向に尾根が張り出す，その付け根にあたる。弥生時代の遺構の分布をみると，張り出した尾根の部分に土坑があり，その南側の平坦地に続く地点に竪穴式住居がある。土坑は，その形状から墓の可能性がある。墓とすれば，北東側尾根部分は墓地であり，南側の平坦地が集落となっていたものと推定される。今回検出した竪穴式住居跡は，その集落の北端のものであり，今回の調査対象となっていないその南側一帯には，集落跡が広がっている可能性が大きい。

掘立柱建物跡と柵列跡は，規模も大きく，柱穴掘形もしっかりしたものであるが，伴う遺物がないため，その時期や性格は不明である。それを考える手がかりとしては，この調査地のすぐ北側が，付近では数少ない水源であるということである。この台地は，須知高校農業

科およびその前身である農学校によって開墾されるまでは不毛の地であった，といわれるとおり水の少ない所である。現在でも簡易水道の取水口となり，その下に大きなため池がある。弥生時代の集落の人々の生活や，掘立柱建物の時代に近辺に住んだ人々の生活をささえたのは，まさにこの水源ではなかろうか。今回検出した掘立柱建物や柵列は，この水源を扼する位置にあり，このことから，中世の名主層の館の一部ではないか，との推定もできる。詳細は今後に期したい。　（引原 茂治）

注1　調査補助員　山口文吾・田中暢一・中西　宏・富田　宏・青木恒文・氏家斉志・柿阪宣孝・片山統夫・熊谷秀伸・斉藤雅彦・菅原淳之・高羽政治・中井達雄・中西秀行・永岡一郎・西垣真史・畑　時正・山本正人・行沢洋人
　　整　理　員　田中智子・冬木万里・坂本明美・森川なる美
　　作　業　員　折竹了一・松村純司・湊幸之助・北村つるゑ・谷村峰子・松村富美子・湊　立枝・横川ちゑの

注2　清水芳裕「京都府美月遺跡の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財研究センター）1981

注3　今回の調査で出土した石器の石材については，京都府立山城郷土資料館橋本清一氏より御教示を受けた。

7. 上中遺跡発掘調査概要

1. はじめに

京都府は，府立北桑田高等学校校内に格技場の建設を計画したが，当該地は遺物の散布する上中(かみなか)遺跡として周知の遺跡であり，工事に先だち，遺構の有無を確認し記録保存を図るとともに，重要な遺構を検出した場合，保存のための資料を作成することを主な目的として，京都府教育委員会からの依頼を受け調査を実施したものである。

調査は，昭和58年7月1日～9月8日まで行い，当調査研究センター主任調査員長谷川達，調査員増田孝彦が担当した。その間，調査補助員・整理員として有志学生(注1)の協力を受けた。また，調査にあたっては，京北町教育委員会・府立北桑田高等学校・京北町森林組合・地元各地区をはじめ多くの方々(注2)の協力を得た。記して感謝の意にかえたい。

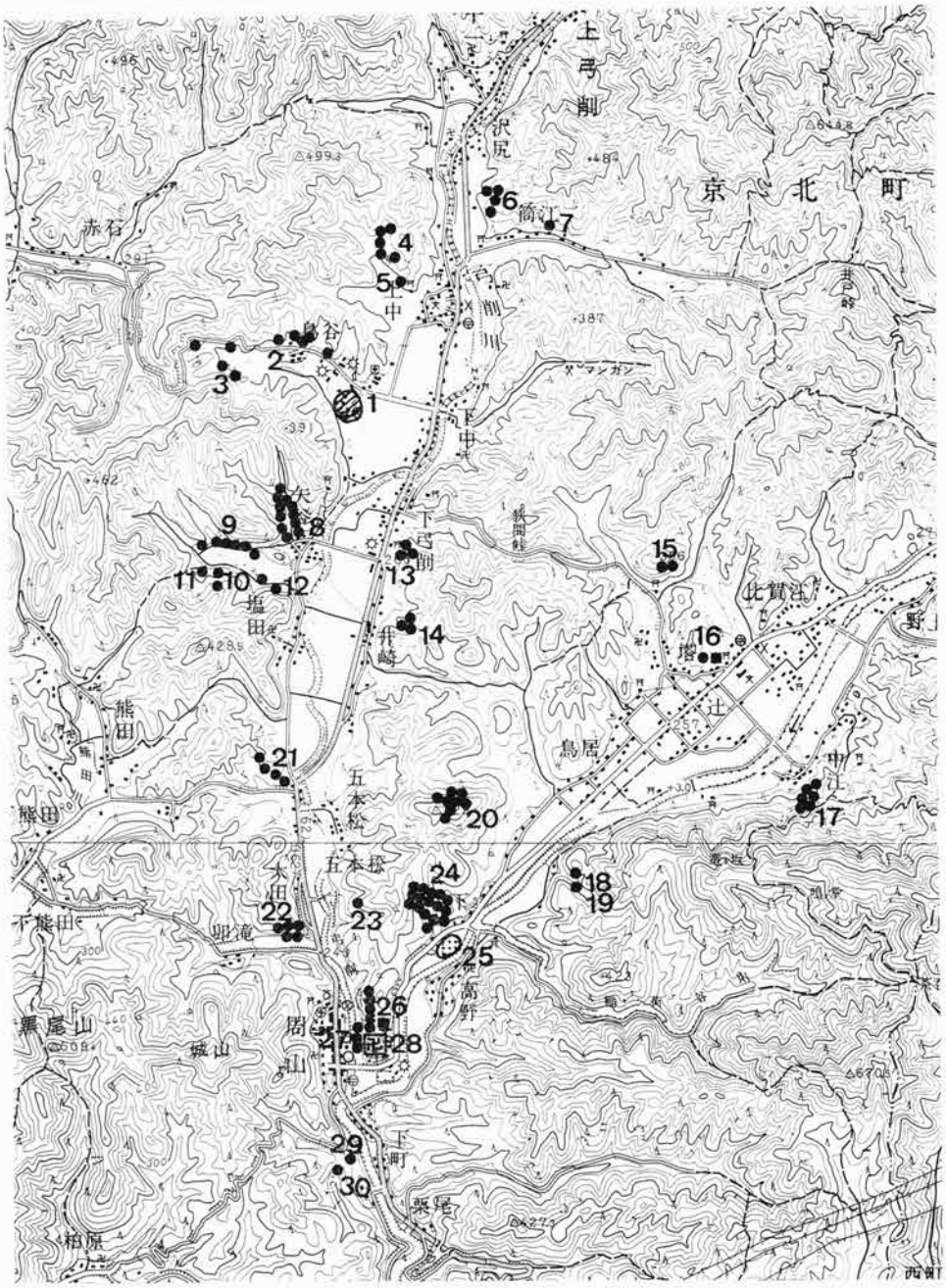
2. 位置と環境

京北町は，京都府の中央部，標高1,000 m未満の深い山々によって囲まれ，町内を貫流する大堰川（桂川）と，その支流である弓削川によって形成された山間の小盆地からなっている。小盆地は，大堰川上流の山国地区，弓削川中流の弓削地区にもっともよく発達している。周囲を囲む山々を越せば，北は北桑田郡美山町，南は京都市右京区，東は京都市左京区，西は船井郡園部町・八木町・日吉町と接しており，交通の要地として各河川沿い，峠越えの道路が通じている。

ここに報告する上中遺跡は，北桑田郡京北町大字上弓削小字沢ノ奥15番地の府立北桑田高等学校校地内の弓削川右岸に張り出した丘陵裾の低い台地上に位置している。調査地の標高は274.50 m，付近の水田との比高は4 mを測る。学校建設時にかなりの盛土が施されたようで，平坦化していた。

上中遺跡をとりまく歴史環境を見てみると，京北町最古のものは，大堰川右岸の台地上で発見されたチャート製の剝片・石屑が，旧石器時代後期にさかのぼるものとされている(注3)。

続く縄文時代は，ほとんど知られていないが，愛宕山古墳主体部埋土中より検出されたサヌカイト剝片・土器の微細片(注4)が，縄文時代までさかのぼる可能性が指摘されている。他に，本調査地，川跡埋土中より出土したチャート製石鏃も縄文時代にさかのぼる可能性があるが，縄文式土器の出土がみられないため，愛宕山古墳出土遺物同様，指摘のみにとどめたい。



第62図　周辺遺跡分布図(1/50,000)

1. 上中遺跡　2. 鳥谷古墳群　3. ふくがなる古墳群　4. 弾正古墳群
5. 八幡社裏山古墳　6. 岩ケ鼻古墳群　7. 筒江古墳　8. 岩ケ谷古墳群
9. 矢谷奥古墳群　10. 塩田古墳群　11. 井崎古墳　12. 塩田古墳群
13. 狭間谷古墳群　14. しが田古墳群　15. 塔村古墳群　16. 愛宕山古墳群
17. 中江古墳群　18. 毘沙門谷遺跡　19. 藤原経塚　20. 鳥居古墳群
21. 出口古墳群　22. 大年古墳群　23. 古墳　24. 折谷古墳群
25. 殿橋遺跡　26. 周山古墳群　27. 周山経塚　28. 周山廃寺
29. 周山瓦窯跡　30. 周山廃寺

弥生時代になると，遺跡が散在するようになり，北桑田高等学校周辺の平地からは，弥生時代前期・後期の土器片や半磨製石槍[注5]が出土している。また，ここより弓削川をやや下った左岸の丘陵地からは，1861（文久元）年，下弓削出土と伝える銅鐸[注6]（扁平鈕式袈裟襷文銅鐸—弥生時代中期）があるが，正確な出土地点は不明である。さらに，周山より大堰川を下った右岸の宇津小学校校地内（宇津遺跡[注7]）でも，弥生時代後期の土器片やチャート製打製石鏃が発見されている。このように，確認されている遺跡数こそ少ないが，弥生時代全期にわたりその展開が見られ，弓削川流域に限り見た場合，銅鐸祭祀をとり行った有力な農業共同体が存在していたことがうかがわれる。

続く古墳時代になると，弓削盆地・山国盆地を中心に総数120基にも及ぶ多数の古墳が築造されており，大堰川水系では亀岡市に次ぐものである。上中遺跡周辺でも，鳥谷（6基)・ふくがなる（2基）古墳群が，北西側谷沿いの丘陵上に存在している。これらの古墳の多くは，10基未満の横穴式石室を内部主体とするグループが平野近くの丘陵上に分布する後期の小円墳群である。中には，近年の発掘調査によって明らかになった周山1号墳[注8]・愛宕山古墳[注9]などの当地の首長墓系クラスの方墳もある。

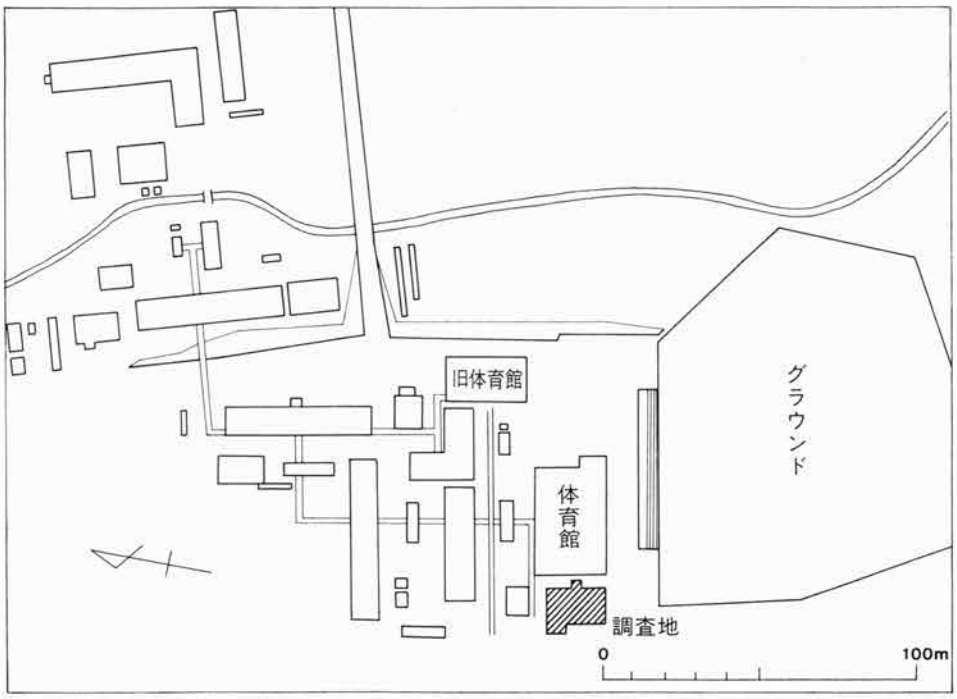
当地方のように，山間の地理的条件の悪い所に弥生文化が開花したのは，丹波・山城・近江・若狭国を結ぶ交通の要地として地域的な特性をもっていたためと考えられ，現在では，当地方に文化が移入されたルートとして丹波—近江ルート[注10]が有力視されているようである。前期古墳は，現在のところまだ確認されていないが，弥生時代から古墳時代前期・中期を含めて錯綜した地域間交渉および地域支配勢力の確立など多くの課題をもっている。

奈良時代になると，周山廃寺[注11]，その瓦供給先となった周山瓦窯跡[注12]、宇津遺跡・殿橋遺跡[注13]などが知られているが，本調査地からも奈良時代の土器が出土している。周山廃寺は奈良時代前期に建立された特異な伽藍配置をもつ寺院で，当地に早くから仏教文化が移入されていることは注目される。

また奈良・平安時代を通じ，長岡京・平安京および寺院等への木材供給地として，大堰川—木津川の便を利用して当時の木材需要をになった古くからの森業地帯であり，以後，今日に至るまで森業の町として発展している。

3. 調 査 経 過

調査は，格技場建設予定地に 15 m×20 m のトレンチを入れ，重機による盛土の除去を行った。盛土は，トレンチ北端で 2.0 m，南端で 1.2 m を認め，北から南へゆるい傾斜をもっていた。盛土除去後，暗褐色の旧耕作土が現われたが，トレンチ中央よりやや北寄りには，



第 63 図　調　査　地　位　置　図

旧学校建物のコンクリート基礎が残存し，その他の部分では農業用水路跡が見られた。旧耕作土中からは，土師器・須恵器・瓦器・陶器・チャート剥片が極少量出土した。

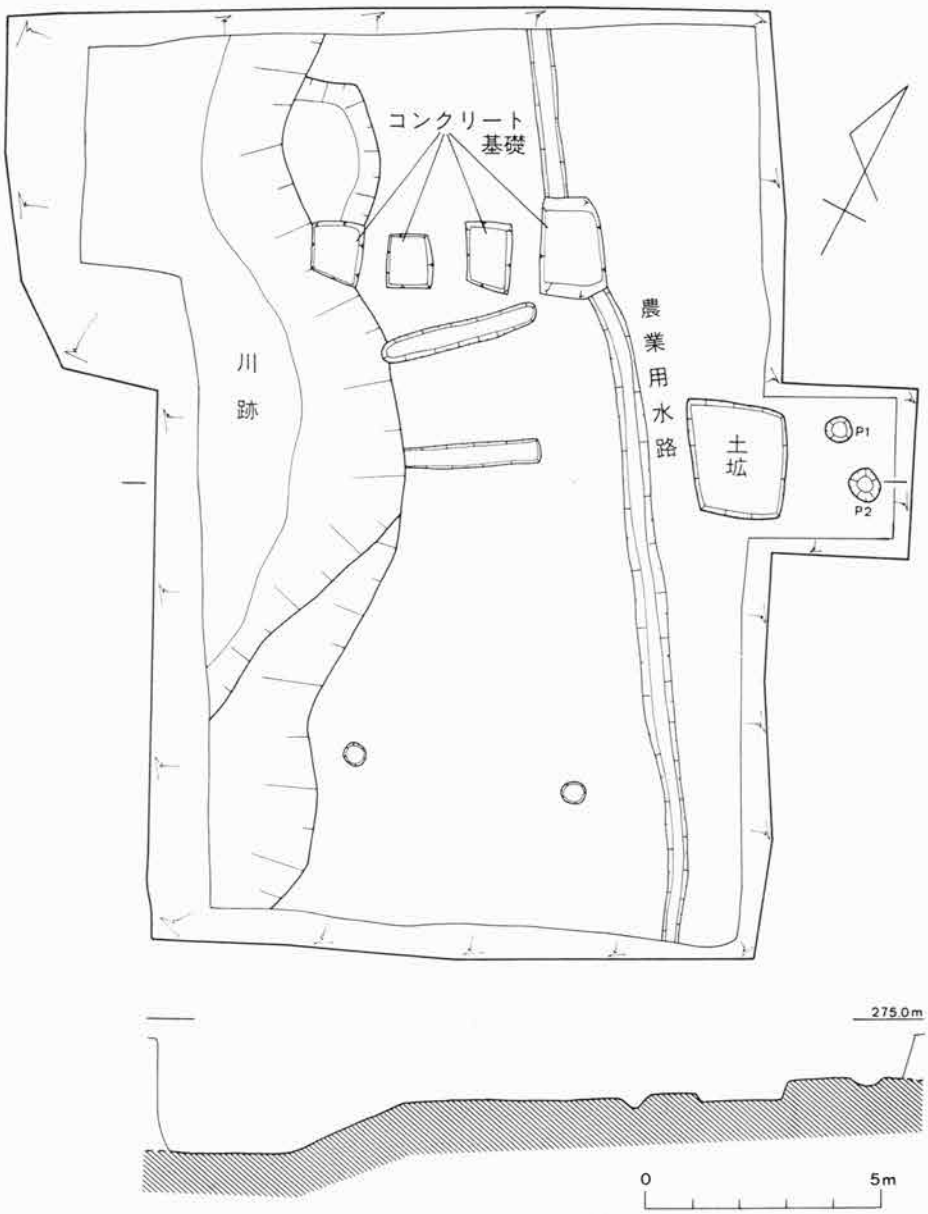
この旧耕作土を除去すると，黒褐色土の堆積が見られたが，トレンチ北端では，耕作によるためかほとんど存在せず，地山面である黄褐色礫混り粘土の広がりが認められた。以後，人力による遺構検出作業に入った。この黒褐色土面に至ってからは，調査地が自然地形の谷筋にあたるため湧水が著しく，トレンチ周囲に排水溝を設け，水中ポンプにより排水を行いながら調査を続行した。

黒褐色土は，平均約 30 cm の厚さを有し，かなりまとまりのある土師器・須恵器片に混ってチャート剥片等が見られたため，遺構検出のため精査を行ったが明確な土層の差を見い出すことはできなかった。そのため，黒褐色土を徐々に精査しながら下げた結果，黒褐色土下層寄りの所で遺構を確認することができた。検出された遺構は，すべてこの黒褐色土上面より掘り込まれていたと考えられるが，上層ではそれが認められなかった。

遺構は，トレンチ北西辺に並行する北西から南に流れる川跡と，南東辺中央で一部を壁内に残す方形の住居跡様の掘り込みを検出した。そのためトレンチを 3 m×3.5 m 北東側に拡張し，壁内に残る部分の確認をすることにした。その結果，この掘り込みは住居跡ではなく，

土坑であることが判明し，この土坑と隣接する2か所の柱穴状掘り込みも同時に確認した。

川跡埋土中からは，弥生時代末～古墳時代前期・後期の土器類・石鏃・敲石・紡錘車・剝片等が出土し，土坑内からは，古墳時代前期の鉢，柱穴状掘り込み(P_1)からは，古墳時代前期の高杯脚・甕等が出土している。川跡出土遺物の大半は細片化したものである。



第64図　遺構平面・断面図

なお，トレンチ中央部では，黒褐色土を除去し，黄褐色礫混り粘土層の地山面まで掘り下げ精査を行ったが遺構は存在しなかった。

4. 検 出 遺 構

検出した遺構は，川跡・土坑・柱穴状掘り込み（P_1・P_2）2か所である。

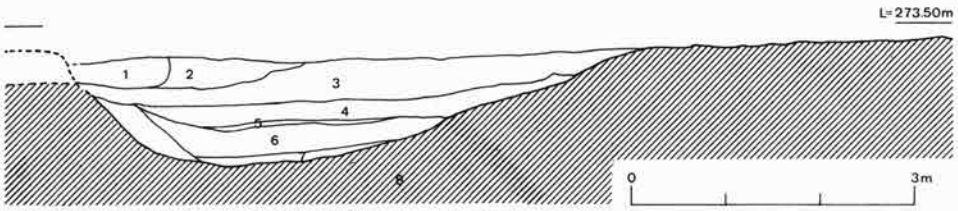
川跡（図版第39—（2）　第64・65図）

川跡は，自然地形の小さい谷川にあたるものと考えられる。トレンチ北西辺にその一部がかかるため，ほぼ1/2を欠いているが，北端は土層観察のためトレンチを拡張したため，北西岸部分を確認することができた。北端部における川幅は，約6m・深さ1.1mを測る。川跡がややカーブする南寄りでは，深さ80cmを測りやや浅くなるが，これは自然地形が，南下りを呈しているためである。底面は，平坦な面をもち，北側が高く南側が低い傾斜を示す。北壁断面で見る限りであるが，西岸と東岸とを比べた場合，西岸は底面よりかなり急な角度で，東岸はゆるい角度で立ち上っている。

埋土は，基本的には7層に分層でき，2回にわたって水の流れた痕跡を残していた。最下層は，（7）暗褐色砂層が約10cmにわたり堆積しており，常時水が流れていたことを示している。その後，水が流れず埋ったのか，沼状になっていたのか不明であるが，（6）暗黒灰色粘質土が約22cmにわたり堆積していた。遺物は，この層に至ってはじめて出土するもので，下層の砂層からの出土は見られない。弥生時代末期～古墳時代前期の土器が出土した。また，自然木，板状・杭状を成していたと考えられるわずかに加工痕の残る木器等も出土した。

さらにその上層には，再び水が流れた痕跡を示しており，最下層同様，（5）暗褐色砂層の堆積が認められた。内部から遺物の出土は認められない。

その後，完全に水が流れなくなり埋ったようで，（4）黒褐色粘質土の堆積が見られ，内部より，弥生時代末期～古墳時代前期の土器・石鏃・敲石等が出土した。さらにその上層に

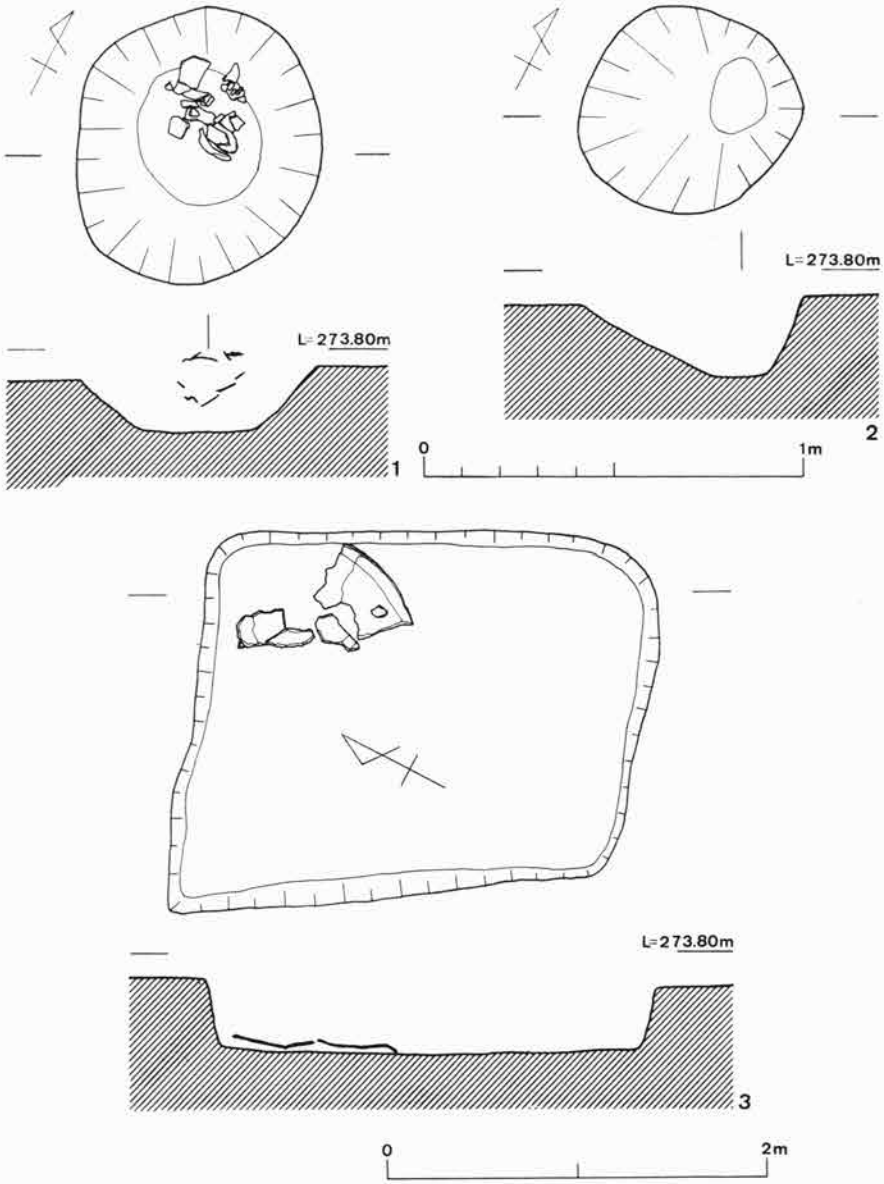


第65図　川　跡　北　壁　断　面　図

1. コンクリート基礎　2. 暗褐色土　3. 淡黒褐色粘質土
4. 黒褐色粘質土　5. 暗褐色砂層　6. 暗黒灰色粘質土
7. 暗褐色砂層　8. 黄褐色礫混り粘土

は，（3）淡黒褐色粘質土が堆積しており，最終的に整地が行われたようで，弥生時代末期～古墳時代前期・後期，奈良時代の土器・土錘・紡錘車等が出土した。

以上のように，2度にわたり水の流れの痕跡を残していたが，出土遺物から見ると，弥生時代末期～古墳時代前期にかけて流れていた川跡と考えられる。



第 66 図　遺 構 平 面 図・断 面 実 測 図
1：P_1　2：P_2　3：土坑

柱穴状遺構 P_1・P_2（図版第39—（1））

P_1（第66図1）

拡張部東寄りで確認したもので，トレンチ全面に広がる黒褐色土が存在しないため，黄褐色礫混り粘土の地山面において，その掘り込み上端部分を検出した。ほぼ，円形の平面を呈し，径 65 cm・深さ 18 cm の規模を測る。底面は水平面を保ち，内部は淡黒褐色土により埋っている。埋土上面より，土師器高杯脚・甕等が出土した。出土遺物から，古墳時代前期のものと考えられる。

P_2（第66図2）

P_1 の北西側約 70 cm の所に位置するもので，P_1 同様地山面において検出した。円形の平面を呈し，径 60 cm・深さ 20 cm の規模を測る。底面が極端に狭く，壁面は東側が底面から急角度で立ち上るのに対し，西側はゆるい傾斜角をもっている。内部は，淡黒褐色土により埋っており，遺物の出土は見られなかったが，埋土が P_1 と同様なことから考えれば，古墳時代前期のものと考えられる。

土坑（第66図3）

トレンチ北東辺中央付近で確認したもので，検出面・底面とも長方形の平面を呈する土坑である。長辺 2.4 m×短辺 1.9 m・深さ 40 cm を測る。底面は水平面を保ち，内部埋土は淡黒褐色土により埋っている。北東コーナ付近の底面より，古墳時代前期の鉢が出土した。

5. 出　土　遺　物

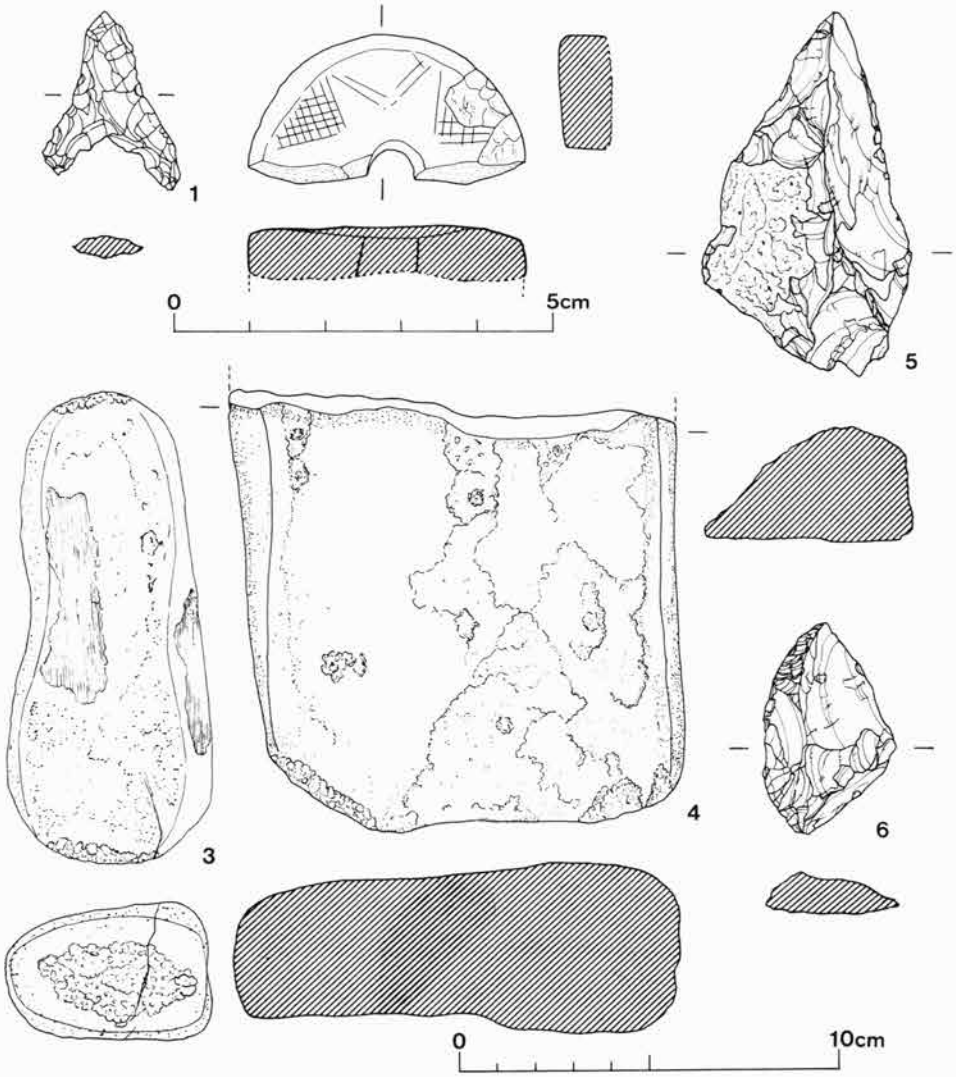
出土した遺物は，縄文時代と考えられるもの，弥生時代末～古墳時代前期・後期，奈良時代～鎌倉時代に至るまでの石器・土器類であり，そのほとんどは川跡の黒褐色土包含層より出土したものである。多くの遺物は細片化しており，図化できたものは少なかった。

石器（図版第41　第67図）

石器は，石鏃・敲石・紡錘車・剥片が川跡内より出土したが，他に包含層からも若干の剥片が出土している。

（1）は，凹基無茎式の打製石鏃である。使用された石材は，基部付近が半透明のチャートで長さ 2.4 cm を測る。全体に細かいていねいな剥離が施されている。縄文時代に比定されるものであるが，土器等の出土が見られないため指摘のみにとどめたい。

（2）は，上方 1/2・周径 1/2 を欠く紡錘車で，底面のみ残存する。現存高 7 mm・復元径　cm を測る。底面中央部は，周囲に比べやや凹んでおり，中央に径 7 mm の孔を穿つ。底面円周に沿って内側に 2 mm 程度作り出し，その内側に鋭利な線刻による文様が刻まれて



第 67 図　出 土 遺 物 実 測 図 (1)
1～5. 川跡第 2 層　　6. 黒褐色土層（包含層）

いる。文様は，右傾・左傾する 6 ～ 9 本の線刻により格子状を成す山形の三角形を呈するものが 6 単位分あったと思われる。現状では，4 単位分確認できるが，完存しているのは 2 単位分である。使用石材は滑石で，出土している遺物から古墳時代後期のものと考えられる。

（3）・（4）は，敲石である。（3）は，花崗岩の長円礫を利用したもので，両端部にアバタ状の敲打痕が認められる。長さ 12.5 cm を測る。（4）は，砂岩を用いたもので，一部を欠いているが，残存長 11.2 cm・幅 11.8 cm を測る。両平面には，自然面としてのなめらか

さの中に部分的に敲打された痕跡が残り，台石状礫器からの転用も考えられる。両端部の角には，アバタ状の強い敲打痕が残る。

（5）・（6）は剥片である。（5）は，赤褐色のチャートで長さ 9.5 cm。（6）は，半透明のチャートで長さ 5.6 cm を測る。

（3）・（4）は，（1）の打製石鏃との関連も考えられるが，詳細は不明である。

土器類（図版第40・41　第68・69図）

多くの土器は細片化しており，平安時代以降のものは極少量で図化できたものは少なかった。以下，時代別に形態・手法の特徴を記す。

弥生時代末期～古墳時代前期の土器（第68図 1 ～16・第69図17～20）

蓋（1）は，笠形を呈し，つまみ部がわずかに凹む。つまみ部外面・体部は篦磨きを施し，内面はなで仕上げ。

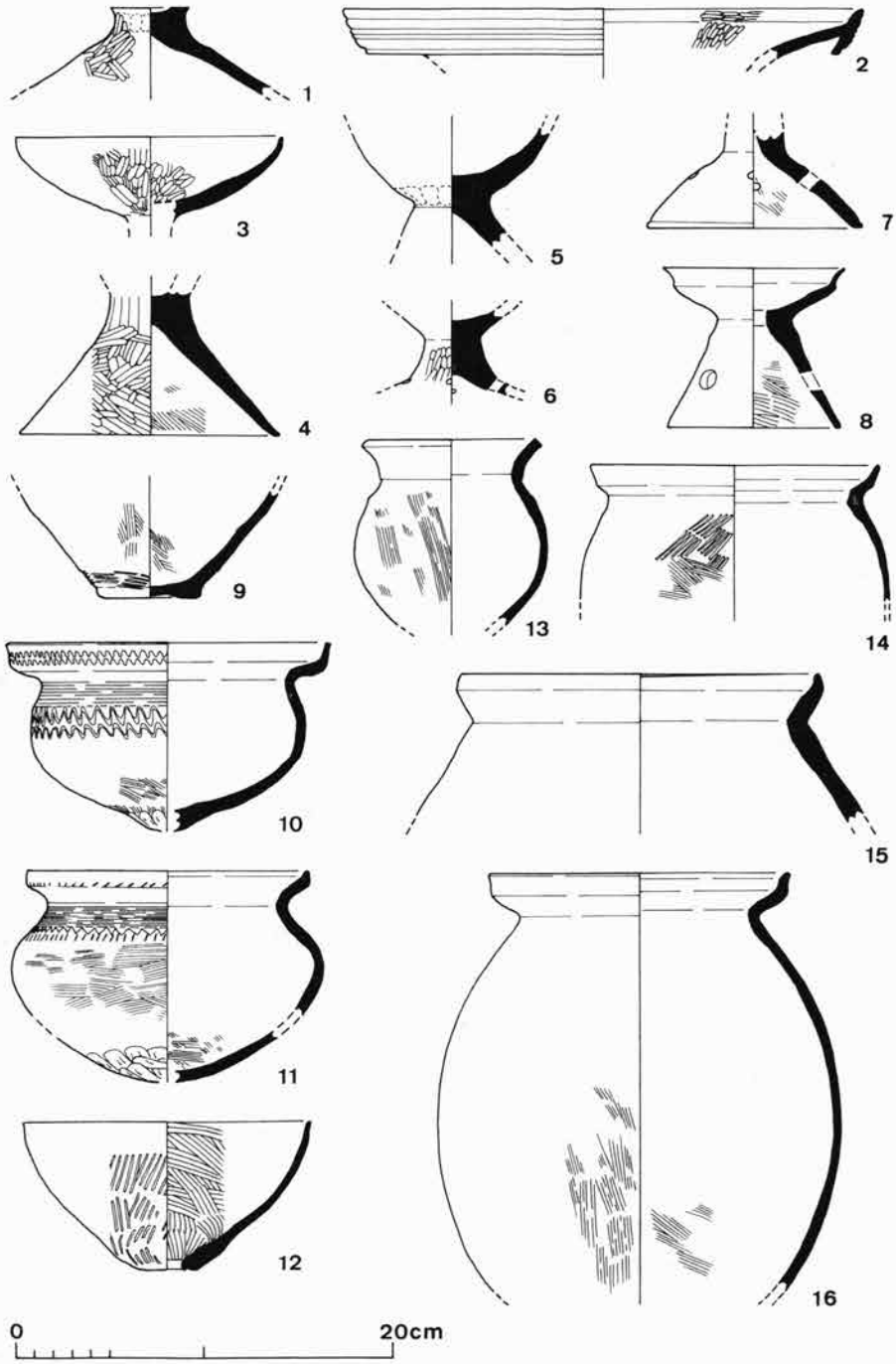
器台（2・7・8）は強く外湾する口縁部をもち，端部を上下に拡張し，端面に5条の凹線をめぐらすもの（2），細い円筒部から脚部中位で屈曲し，「ハ」字形にふくらみながら端部を外方に突出させるもの（7），「く」字形の接合部より，やや内湾気味に上に開く杯部と，直線的な「ハ」字形に延びる脚部を有するもの（8）がある。（2）は，内外面とも篦磨きを施す。（7）は，脚部中位に4孔を穿ち，外面は縦篦磨き，内面は刷毛目痕がわずかに残る。（8）は，外面は磨滅が著しく調整不明であるが，内面には刷毛目を施し，脚部中位に3孔を穿つ。

高杯（3～6）

（3）は，内湾気味に上方に開く脚部をもち，内外面とも不定方向の篦磨きを施す。（4）は，脚端部まで直線的な「ハ」字状に広がるもので，外面接合部付近を縦篦磨き，以下に不定方向の篦磨きを施し，内面端部付近には刷毛目が残る。（5）は，ワイングラス形を呈するものと考えられ，全体をなで仕上げ，接合部付近に指おさえ痕が残る。（6）は，低い脚をもつもので，脚中央で屈曲し，水平近く広がるもので，屈曲部に4孔を穿つ。杯部内面は篦磨き，外面はなで仕上げ，脚部外面は縦篦磨き，内面はなで調整を施す。

鉢（10～12・20）

（10）・（11）は，いわゆる「受口状口縁」を有するもので，（10）は，口縁部に波状文，体部外面上位に櫛描き直線文・波状文を施す。（11）は，口縁に左下りの刻目文，体部外面上位に櫛描き直線文・鋸歯文・刻目文を施す。両者とも体部外面中位以下は，刷毛目が残り，底部は篦削りを行い，口縁内面は横なで，以下はなで調整を施すが，（11）は底部に刷毛目が残っており，刷毛目後なでている。（12）は，逆円錐状の体部を成し，底部はやや広く，器



第 68 図　出 土 遺 物 実 測 図 (2)

1～3・5～7・10～13・15・16：川跡　4・9・14：P_1　8：黒褐色土層(包含層)

壁が厚い。中央部を穿孔する。外面は叩きしめ，内面には刷毛目が施されている。(20) は，大きく外反する口縁部を有し，口縁端部はやや内傾ぎみにつまみ上げる。口縁部外面はなで，内面は横方向の刷毛目を施し，体部外面は刷毛目調整，内面はなでる。

甕（9・13〜19）

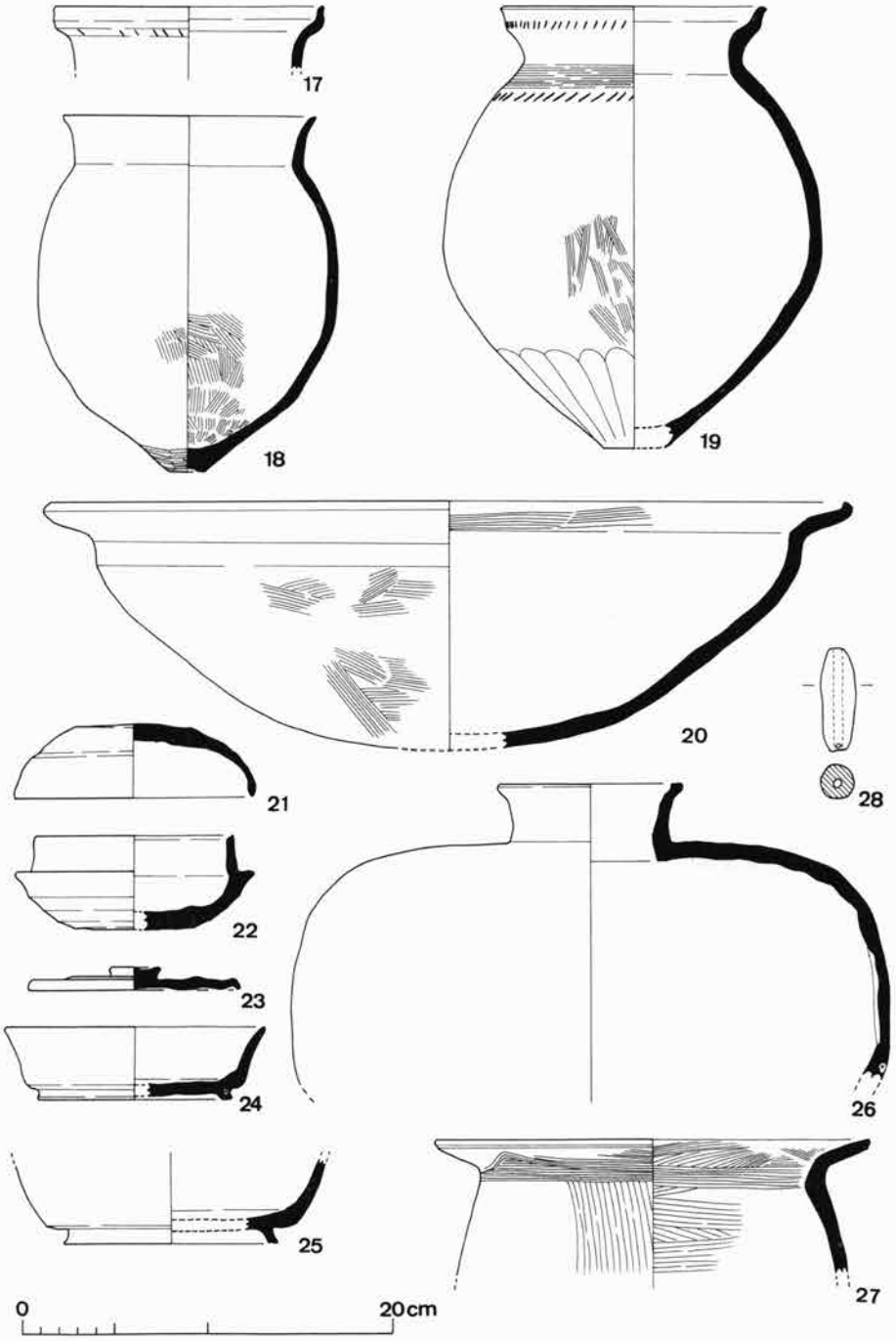
（9）は，丸底にやや薄手の高台を付したもので，内・外面は刷毛目を施し，高台付近は叩きしめる。(13) は，小型のもので，ゆるやかにカーブする頸部から外傾し，口縁端部は面をもつ。体部外面は，刷毛目後なで仕上げ。内面は磨滅のため不詳。(14)・(16) は，頸部で「く」字状に外反したのち，上方へにぶく屈曲し，外上方にたちがある。胴長の体部を有するもので，(13) は体部外面を叩きしめた後，刷毛目を施す。内部はなで・口縁部は横なで仕上げ。(16) は，体部上部は磨滅により不詳，下位は刷毛目調整，内面はなで仕上げを行うが，下位に刷毛目が残る。(17)・(19) は，「受口状口縁」を有するもので，(17) は，口縁端部が直立し，端面に右下りの刻目文を施す。内・外面とも横なで仕上げである。(19) は，口縁端部がやや外上方に延びるもので，端面に左下りの刻目文，体部上位に櫛描文・右下りの刻目文を有す。体部中位は刷毛目調整・縦方向の篦削り，内面はなで仕上げを行う。(18) は，頸部からゆるいカーブでほぼ直線的に外上方に延びる口頸部を有し，丸底化の進んだ小さな平底を呈する。体部外面は刷毛目後なで調整，内面は上位になで，下位に刷毛目が残る。

古墳時代後期の土器（21・22・26）

図化できたものはすべて須恵器である。(21) は，天井部から口縁部にかけ丸味を帯びながら屈曲する器高の高い蓋である。内外面とも回転横なで調整で，天井部外面は未調整，内面は不定方向のなでを行う。(22) は，ほぼ水平な受部にまっすぐ長く延びる立ち上がりを有するもので，外面受部まで回転横なで，以下を回転篦削り，内面は回転横なで仕上げを施す。(22) は，(21) よりやや先行する。(26) は，俵形の体部と短く外反する口縁部をもつ。成形時の体部上半内・外面なで，下半内・外面ともなでを施し，口縁部は横なで仕上げ。

奈良時代の土器（23〜25・27）

(23) は，ややいびつな蓋であるが，扁平なつまみを有し，口縁端部を下方へ折り曲げるものである。天井部外面は篦削り未調整，内面は不定方向のなでを施す。(24) は，短い外方に張った高台と，外上方へやや外反しながら延びる口縁部を有するもので，内外面とも回転横なで，底外面は不定方向のなでを施す。(25) は，(24) より大型で，外方に張った細く高い高台を有し，やや内湾しながら立ち上がるもので，内外面とも回転横なで仕上げを行う。(27) は，土師器甕で大きく外反する口縁部を有し，口縁端部に一条の凹線を施す口径の大



第 69 図　出 土 遺 物 実 測 図 (3)

17～19・21・22・28：川跡　20：土坑　23～27：黒褐色土層(包含層)

きい甕である。口縁内・外面を斜め方向の刷毛目，体部外面は縦刷毛目，内面は刷毛目仕上げである。

土錘（28）

円筒形を成し，中央部はややふくらむ。成形は，粗雑で指による整形痕と考えられる凹凸が各所に見られる。全長 4 cm・径 1.2 cm，中央の孔は径 3 mm を測る。

調査によって出土した土器の多くは，古墳時代前期に比定される土器の一群で庄内併行期と考えられる。また，近江地域の特徴を受けた「受口状口縁」を有する鉢・甕の出土もあり，大堰川水系で点々と発見されている近江系土器に一資料を加えることができた。なお，大堰川水系で近江系土器が出土しているのは，京都市中久世遺跡[注14]，向日市中海道遺跡[注15]・森本遺跡[注16]・東土川西遺跡[注17]，長岡京市今里遺跡[注18]・幣原遺跡[注19]が知られ，亀岡市[注20]でも出土している。

古墳時代後期の須恵器は，陶邑編年では6世紀中頃～後半に比定されるものである。

奈良時代の須恵器は，周山瓦窯編年[注21]によればⅣ・Ⅴ期に相当するものであり，8世紀前半頃に比定されるものであろう。

6. ま　と　め

限られた調査面積内において検出された遺構は数少なかったが，本調査地の立地する北桑田高等学校の台地上に集落が存在することが明らかとなった。また，縄文時代に属すると考えられる石鏃をはじめ，すでに確認されている弥生時代前期・後期の土器も含め，弥生時代～鎌倉時代に至るまでの遺物の出土が見られることから，長期にわたって本台地が利用された複合遺跡であることも確認できた。また，弥生時代に次ぐ古墳時代前期の確実な資料も追加され，京北町の歴史の空白部分を徐々に埋めることができるものであり，検出された川跡は，南側の高校実習林のある台地でも剝片および須恵器・土師器片がかなり散布していることから，集落の中を流れる川で，北側と南側の台地を二分する形になっていたとも考えられる。今後の調査によって，川跡・土坑等の性格および集落の広がり等が明らかにされることを期待したい。出土した遺物は，当地方の弥生時代末期～古墳時代前期の良好な研究資料及び指針となるものであろう。

（増田 孝彦）

注1　補助員　柱尾友一・馬場勝也・佐治義正
　　整理員　東山結花・雲出美智子・加藤由美・藤野綾子
注2　作業員　大西政雄・西三治郎・上野善太郎・梅谷廣三・草木九郎・市野卯三郎・九保理一，津原　勇・谷口岩吉・橋本数雄・橋本繁太郎・竹内外夫・仲野治一
注3　平良泰久ほか「周山瓦窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1979）』京都府教育委員

会）1979

注４　『愛宕山古墳発掘調査概報』(京都府京北町文化財調査報告書 第２集）京北町教育委員会　1983

注５　注３と同じ

注６　辰馬考古資料館所蔵。梅原末治「下弓削発見の銅鐸」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第７冊 京都府）1926

注７　『京北町誌』京北町誌編さん委員会　1974

注８　森　浩一「周山１号墳」(『日本考古学年報』27 日本考古学協会）1975

注９　注４と同じ

注10　注３・４と同じ

注11　安井良三「周山廃寺の遺址と遺物」(『文化史学』１）1949
石田茂作・三宅敏三「丹波国周山廃寺」(『考古学雑誌』45-2）1958

注12　『周山瓦窯跡発掘調査報告書』京北町教育委員会　1982

注13　景山春樹「京都府北桑田郡殿橋遺跡」(『日本考古学年報』7 日本考古学協会）1962

注14　梅川光隆「中久世遺跡・殿城遺跡の土器」(『大藪遺跡発掘調査報告』六勝寺研究会）1972

注15　高橋美久二ほか「中海道遺跡発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第３集 向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所）1979

注16　浪貝　毅ほか『森本遺跡発掘調査概報』長岡京発掘調査団　1970

注17　竹原一彦「長岡宮跡左京第36次（7 ANDII）発掘調査略報」(『長岡京』（長岡京跡発掘調査研究所ニュース）第18号 長岡京跡発掘調査研究所）1980

注18　高橋美久二ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-2)』京都府教育委員会）1980

注19　高橋美久二「幣原遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1969)』京都府教育委員会）1969

注20　当調査研究センター石井清司調査員の教示によると，亀岡市北金岐遺跡・南金岐遺跡からも近江系土器の出土が見られるそうである。

注21　注12と同じ

8. 千代川遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

京都府教育委員会では，昭和58年度に京都府立丹波養護学校亀岡分校の校舎新築を計画した。当該地は，亀岡盆地内でもっとも広範囲に広がる弥生時代から平安時代の複合遺跡である千代川遺跡[注1]の一画である。昭和57・58年度に今回調査地と近接する日吉ダム移転住宅地に伴う千代川遺跡[注2]第３次調査において古墳時代の竪穴式住居跡２基，幅約10ｍの溝，土坑，ピット群が多数検出され，溝内から多数の弥生時代から平安時代の土器・木器等が出土したことが知られている。また，千代川町一帯の水田地帯には弥生時代から平安時代の遺物が散布していることが確認されているため，今回は千代川遺跡第３次調査で検出された遺跡の範囲・性格等の究明ならびにその他の遺構・遺物の有無や，盆地一帯に整然と並ぶ条里制の解明を主目的として，当該予定地内の試掘・発掘調査を実施することとなった。

千代川遺跡では，昭和55年度に国道９号バイパス建設に伴う調査を第１次[注3]として，丹波国府推定地[注4]の西南域の試掘調査が実施された。この調査では調査地が千々川の氾濫原であったため，遺構等は検出されなかった。第２次[注5]調査も同バイパス建設に伴うもので，調査地は千代川町北ノ庄の丹波国府推定地外の南側丘陵である。第２次調査では，弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居跡４基，掘立柱建物跡６棟，土坑，ピット群，溝状遺構等や，多量の遺物が出土した。これらのことより，現地表にあまり遺物が散布しない地域にまで遺跡範囲が広がることが判明した。また，第３次調査地は第１・２次調査地から離れているが，弥生時代から平安時代までの良好な遺跡であることが確認できているし，今年度調査を行った千代川・桑寺遺跡[注6]においても多数の遺構と多量の遺物が出土しているため，今後の千代川遺跡に対する調査のあり方や遺跡の範囲等に十分な配慮が必要である。

今回の第４次調査は昭和58年６月20日より開始した。３ｍ幅のトレンチの試掘，校舎建設予定地を中心とした拡張等の調査を同年10月31日まで実施した。発掘調査にあたっては，当調査研究センター主任調査員水谷寿克，調査員村尾政人が担当して行った。

協力機関　京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府南丹教育局・亀岡市教育委員会
亀岡市青少年センター

なお，この調査にあたっては多数の調査補助員・整理員・作業員の方々[注7]と事務補助員として活躍していただいた中西宏氏等の協力があった。記して感謝の意を表したい。なお，本概報は調査補助員の協力を得て村尾が執筆した。

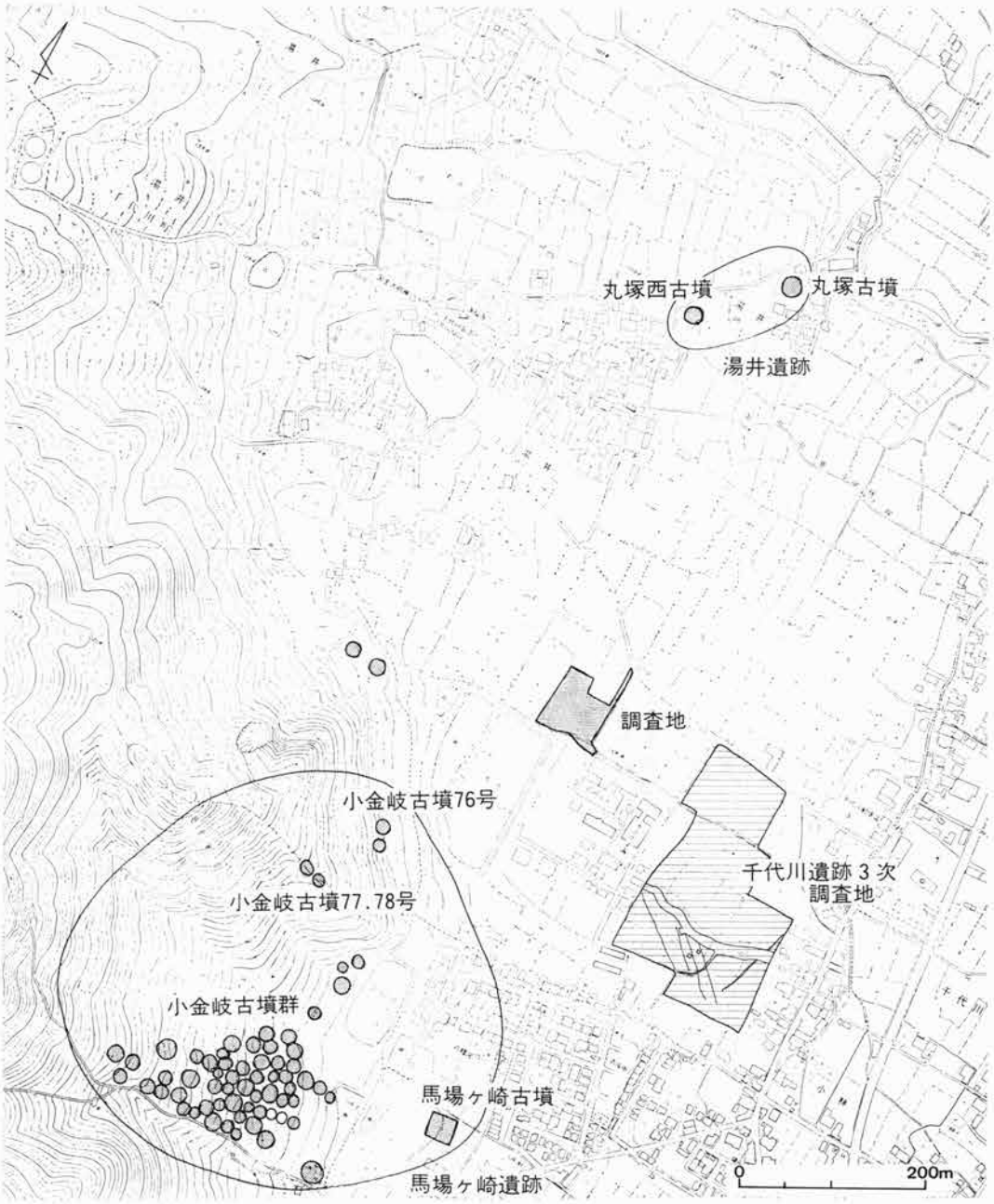
2. 位置と環境

亀岡盆地は，口丹波地方の最南部に位置し，盆地東端の北西から南東に続く山地と平地の境界には亀岡断層が明瞭に残っている。また，大堰川両岸平野部には条里制地割が残る水田地帯が展開しており，水田の畦筋にはハゼやハンノキなどが並び亀岡盆地特有の景観を呈している。

千代川遺跡の所在する亀岡市千代川町は，亀岡盆地の北西に位置し，丹波国府推定地・桑寺廃寺等の重要な遺跡が所在する。

調査地は西側を標高431 m の行者山，東側を盆地の中央を南北に流れる大堰川に囲まれた標高107 m の湯井集落から発する扇状地の南側に当たる。

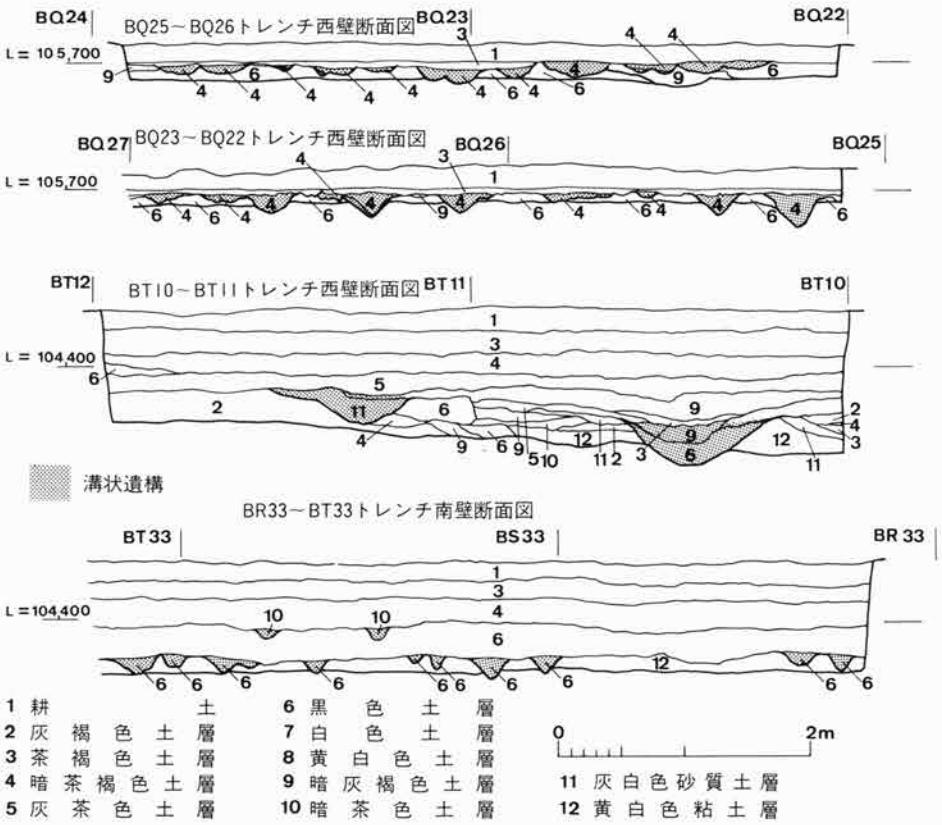
周辺の歴史的環境は，もっとも古いもので縄文時代後期の三日市遺跡(注8)があり，他に小金岐古墳群下層(注9)や拝田古墳群下層(注10)から縄文時代に属する遺物が出土している。また，今回の調査でも縄文時代に属すると思われる石錘が2点出土している。弥生時代の遺跡は，現在のところ盆地内に約30か所確認(注11)されている。中でも前・中期の大規模な拠点的集落遺跡として有名な太田遺跡(注12)をはじめとし，他に御上人林遺跡(注13)・丹波国分寺遺跡等(注14)があり，いずれも前期末の遺跡である。中期の遺跡としては，太田遺跡及び今年度調査が行われた千代川・桑寺遺跡(注15)，千代川遺跡(第3次)(注16)，穴川遺跡(注17)，余部遺跡(注18)，南金岐遺跡等(注19)がある。千代川・桑寺遺跡は第Ⅳ様式の方形周溝墓が3基と住居跡・土坑・ピット群等などが確認され，多量の遺物が出土した。千代川遺跡第3次調査においては第Ⅲ・Ⅳ様式の遺物が幅約10 m の溝内から出土している。穴川遺跡では第Ⅳ～Ⅴ様式にかけての遺物が土坑及び包含層から出土している。穴川遺跡は余部遺跡と近接し，同様の立地にあることや同時代であることから一つの広範囲な遺跡である可能性がある。南金岐遺跡(注20)は国道9号バイパス建設に伴う調査で第Ⅱ様式の方形周溝墓が3基と後期の溝状遺構が確認されている。後期の遺跡は盆地内に約30か所確認(注21)されている。本調査地にもっとも近いものとしては，馬場ケ崎遺跡(注22)がある。古墳時代の集落跡は盆地内に約40か所以上あると考えられ，もっとも古墳の集中する所には拠点的集落が予想される。もっとも著名な古墳としては，盆地内で最大級の前方後円墳である千歳車塚古墳(注23)がある。他の前方後円墳としては，野条古墳(注24)・拝田16号墳(注25)・保津車塚古墳(注26)がある。また，盆地内には方墳が2基隣して並ぶものがいくつかあり，丹波地域の特徴をなしている。後期の古墳群は丘陵上に多い所で100基(注27)を数えるものがある。奈良時代になると丹波国分寺や御上人林廃寺・篠町観音芝廃寺・与能廃寺・桑寺廃寺(注28)などや千代川国府推定地がある。また，亀岡盆地一帯の平野には条里制(注29)が及ぼされている。



第70図　調査地と周辺の遺跡

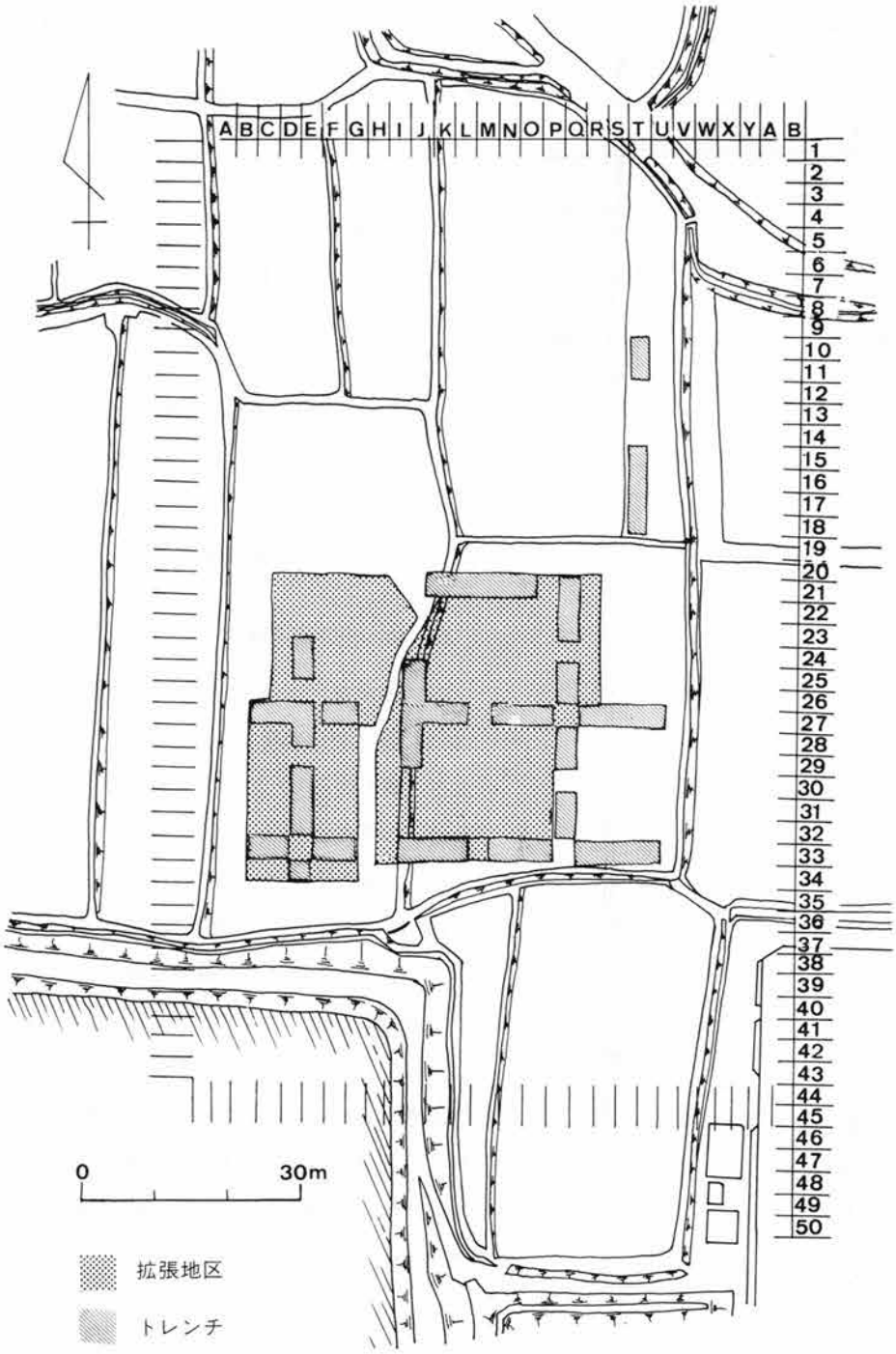
3. 調査経過

千代川遺跡第4次の発掘調査は，京都府立丹波養護学校亀岡分校の昭和58年度校舎建設予定地約 3,500 m² を対象として，昭和58年6月20日から同年10月31日まで実施した。

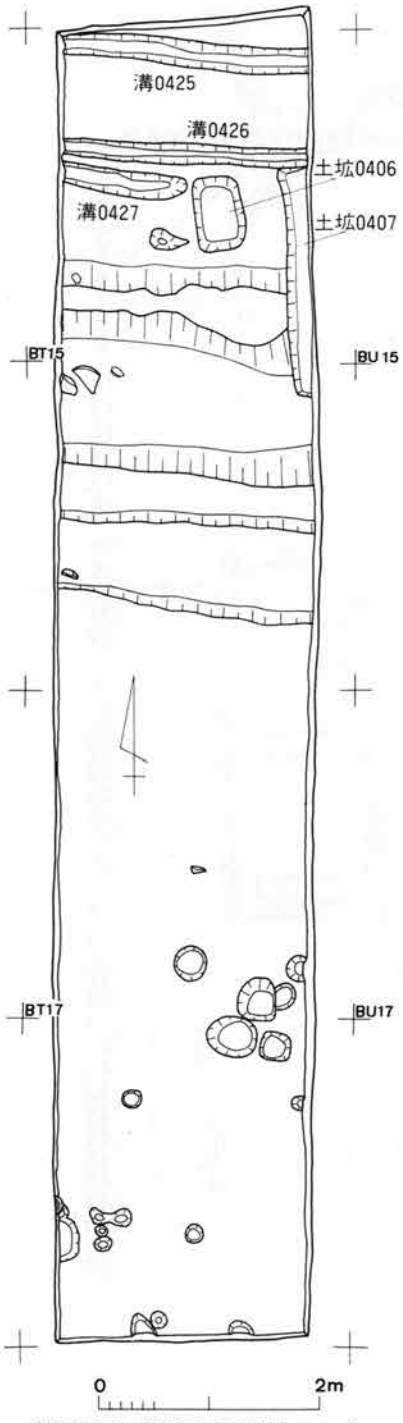


第71図　トレンチ断面図

千代川遺跡第1・2次調査は国道9号バイパス建設に伴う発掘調査であったが，第3次調査は日吉ダム建設による移転住宅地に関するものであった。今回（第4次）調査地は，第3次調査地に近く，第3次調査で確認された弥生時代中期から平安時代にかけての大溝，住居跡等などに関連する遺構が当初は予想されたため，校舎建設地を中心に調査を行った。第3次調査では26,000m² の調査対象地に4m方眼の割付・地区設定を行い，4m四方のグリッドによる試掘を行った。その結果，今回の調査地と同様の地形にある第3次調査地では，自然流路と考えられる大溝（幅約10m），古墳時代中期の住居跡2基が確認された。大溝は上流が当然，行者山の湯井集落の扇状地から発するものであると考えられるし，2基の住居跡の確認から，周辺一体が集落地と考えられる。大溝は，扇状地の南側を流れて，今回の調査地内でも確認できると考えられた。しかし，それらに関連する古墳時代の住居跡や大溝は確認できなかったが，奈良時代の掘立柱建物跡（2間×2間）1棟と奈良時代から中世にかけての溝を多数検出した。


A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y A B
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50
0
30m
拡張地区
トレンチ

第 72 図　調　査　地　区　図



第 73 図　BT 15～BT18 トレンチ遺構実測図

今回の第４次調査では，校舎建設予定地を中心に３m 方眼の地区を設定し，南北を数字，東西をアルファベットで表わす地区名を付けた。

次に，学校予定地への進入路部分に幅３m のトレンチを２本，調査地中央にも数本のトレンチを設定し，試掘を行った。

その結果，黄褐色粘土の地山上に黒色土の堆積があり，その上層の暗茶褐色土層には鎌倉時代以降の遺物が包含されているのを認めた。

遺構としては黒色土層の上層から切り込んでいると考えられる奈良時代の掘立柱建物跡・溝状遺構を地山面で検出した。また，黒色土層を切り込んでいる暗茶褐色土層の溝状遺構も多数検出した。

4. 検 出 遺 構

今回の調査によって検出した遺構は，溝が約150本，掘立柱建物跡１棟，土坑３，ピットが多数ある。溝のほとんどは，中世素掘溝と呼ばれる畑作による畦溝である。

以下，各遺構について概要を記述した。

BT 15～BT 18トレンチ（第73図）

当トレンチで検出した遺構は溝３，土坑２，ピット群である。

溝は，いずれも中世素掘溝と呼ばれる畑作の畦溝と考えられる。トレンチの北側に東西方向に平行した同規模の溝が３本あり，溝幅約 30 cm・深さ約 10 cm を測る。土坑は 0406 が幅 60 cm・深さ 10 cm を測る。土坑0407 は長辺が 210 cm を測るが，もう一辺の長さはトレンチ外になるため不明である。

溝状遺構と平行した段が少し南側に３段と畦状

の隆起帯がある。トレンチの南側にはピット群がある。ピットの平均直径は30 cm で，深さは約 15 cm を測る。調査地の中で当トレンチ BT 15～18 がもっとも高い地形であり，トレンチ南側と BM 20 ～ 22 地点にはピット群が集中していることから住居跡が予想される。トレンチ中央の溝に平行する段は北側に広がる溝等の耕作地と南側の住居区とを区画するものであると考えられる。

拡張区（第74図）

今回，拡張した面積は約 1,800 m² に及ぶが，住居跡等は検出されず，掘立柱建物跡が1棟とそれに伴う溝群などが検出されただけであった。これらの遺構の中で，ほとんどを占めるのが素掘溝である。奈良時代の掘立柱建物と同時期の素掘溝は，その当時の耕地や利用区画を知る上でかかせない貴重なものである。また，それ以後の中世頃における耕地の利用区画の変遷が考えられる。

溝0402　BO 32～BQ 32 地区で検出。東西方向に走る幅約 35 cm・深さ約 10 cm の規模で，黄褐色粘土の地山面に断面U字形に掘られている。溝内の埋土は黒色粘土である。BP 32 地点で南北方向に走る溝と合流しており，東西方向に走る溝が南北方向に多数走る溝の区画をする南限の溝と考えられる。掘立柱建物跡と同時期に利用されたものであろう。

溝0403　溝0402より南北方向へつながる同時期の溝群である。溝は5本あるが規模は同じである。掘立柱建物跡に平行した溝群の西端のものは，この時期の耕地の西限であろう。この溝より条里制の1町間と推定される東限までは約 17 m あることから，約15本の溝の存在が予想される。

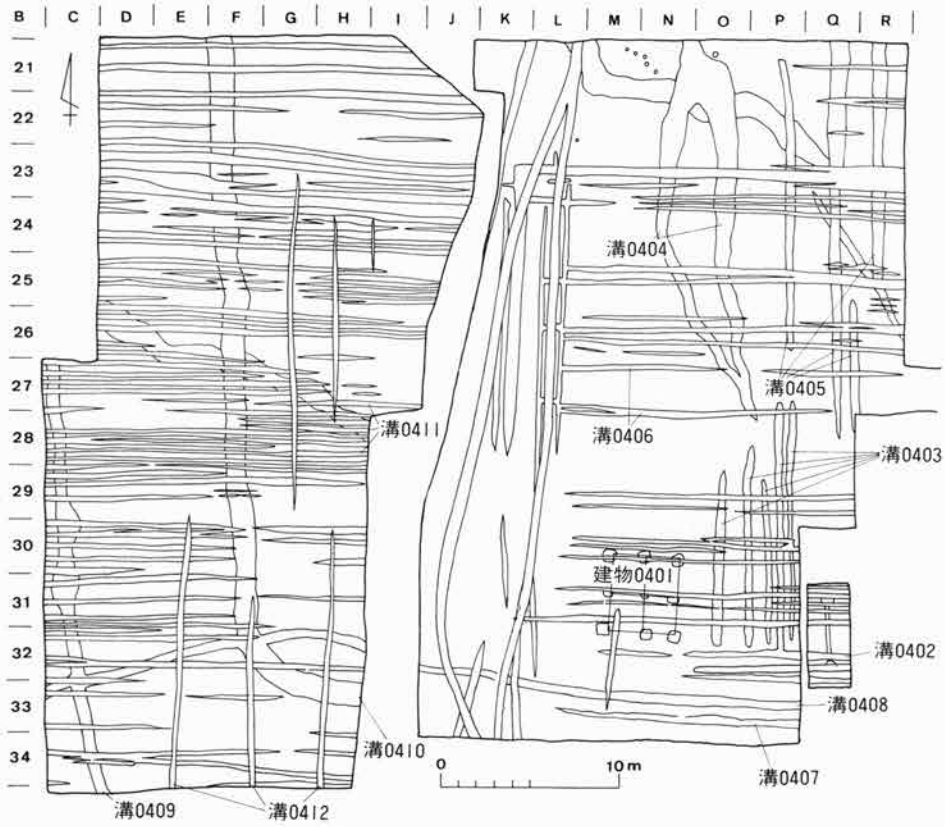
溝0404　この溝は，溝0402・0403と同様のものと考えられるが，幅が広く蛇行しているところから氾濫のため自然流路状にみだれたものと考えられる。溝幅約 50 cm・深さ約 20 cm を測る。溝内より第78図 3 ・10・19・17の遺物が出土した。

溝0405　溝0403と同様の溝である。28地区で北側の南北方向の溝と南側の南北方向の溝が切れるが，もとは連続していたものであろう。溝は4本あり，平均の溝幅 40 cm，深さ 10 cm を測る。

溝0406　鎌倉時代の東西方向の溝である。溝0402～0405・0408～0410は奈良時代から平安時代のものであったが，溝0406・0411等の東西方向に多数走る溝は鎌倉時代以降のものである。溝幅約 30 cm・深さ約 10 cm を測る。

溝0407　この溝は0402・0408と平行に走る溝で，溝0403・0405や掘立柱建物跡と同時期のものである。溝0410に続く同一の溝であろう。溝幅約 30 cm・深さ約 25 cm を測る。

溝0408　奈良時代の溝である。掘立柱建物に伴う溝で，溝0402・0403と同時期と考えられ



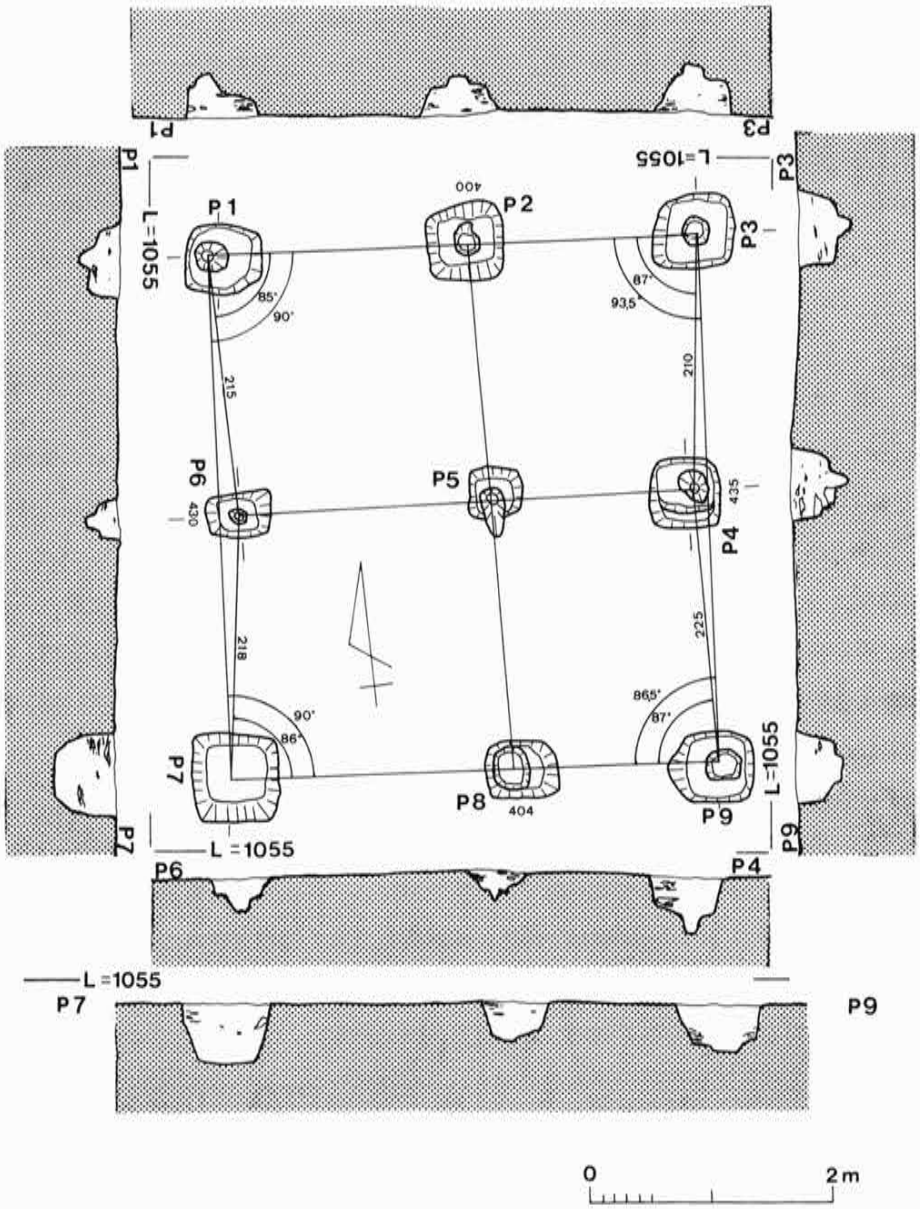
第 74 図　遺　構　実　測　図

る。この溝は西側になると北側へカーブを描き，少し南側へ曲がる。BF 32 地区で溝0410と交差する。切り合いは不明であるが，溝0410のほうが古いものと考えられ，同時期に機能したものではないと考えられる。溝0410は深さが浅く幅広いもので，水の流れた痕跡や砂層の堆積がみられないが，この溝は深さ約 70 cm・幅約 60 cm を測り，砂層の堆積や腐植土の堆積がみられる。

溝0409　溝0408と同様の溝で同規模である。同時期に機能したものであろう。溝の性格から水田の水路と考えられる。

溝0410　32・33地点で東西方向に走っていたものが約90度近く曲がり，南北方向に走る。溝幅が約 120 cm と広く，平底の溝である。深さは約 10 cm ほどしか残っておらず，水の流れた痕跡がないことから，掘立柱建物や，溝0402～0405等の耕地を区画するものと考えられる。

溝0411　溝0406と同様の溝である。今回の調査で，もっとも多く検出した東西方向の溝である。溝幅約 20 cm・深さ約 10 cm を測る。



第 75 図　掘 立 柱 建 物 跡 SB 0401 実 測 図

掘立柱建物跡（第75図）

２間×２間の総柱倉庫跡と考えられる。ピットは方形を呈し，大きなもので１辺約 80 cm ×70 cm，深さ約 50 cm を測る。P７ 以外はすべて二段に掘られた柱穴がある。各柱穴の位置は 90° に近いが P１ から P６･７ と P３ から P４･９ は約 4° ほど内側にある。各掘形内には

黄褐色粘土の地山を掘削したさいの土がほぼ水平方向に薄い層をなして堆積していた。埋土はほとんどが黒色粘土である。掘形内からは，刷毛目のある土師器甕片が少量出土した。

B C28・29 地区素掘溝群0411・溝0409（第76図）

南北方向に走る溝0409は東西方向の素掘溝群0411に切られている。溝0409の堆積は黒色粘土の腐植土で，砂質土と交互になっており，水の流れていた痕跡があるため水田等の水路と考えられる。東西方向の溝群0411は暗茶色土の単一層で，溝内からは，土師皿・瓦器椀が出土した。第76図北側の素掘溝0411出土の土師皿は第79図23である。

5. 出 土 遺 物

今回の千代川遺跡第４次調査では，当初第３次調査で予想された弥生時代から古墳時代にかけてのものはほとんどと言ってよいぐらい検出しなかった。しかし，奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構を多数検出し，それにともなう遺物も出土した。

遺物は大きく３つに分けることができる。第３～６層の暗茶色土層から黒色土層にかけての包含層から出土した縄文時代から弥生時代に属する石器，奈良時代の溝，ピット内，第３・４層包含層出土の須恵器・土師器，鎌倉時代の溝，第３・４層包含層出土の土師器・瓦器・陶器類がある。

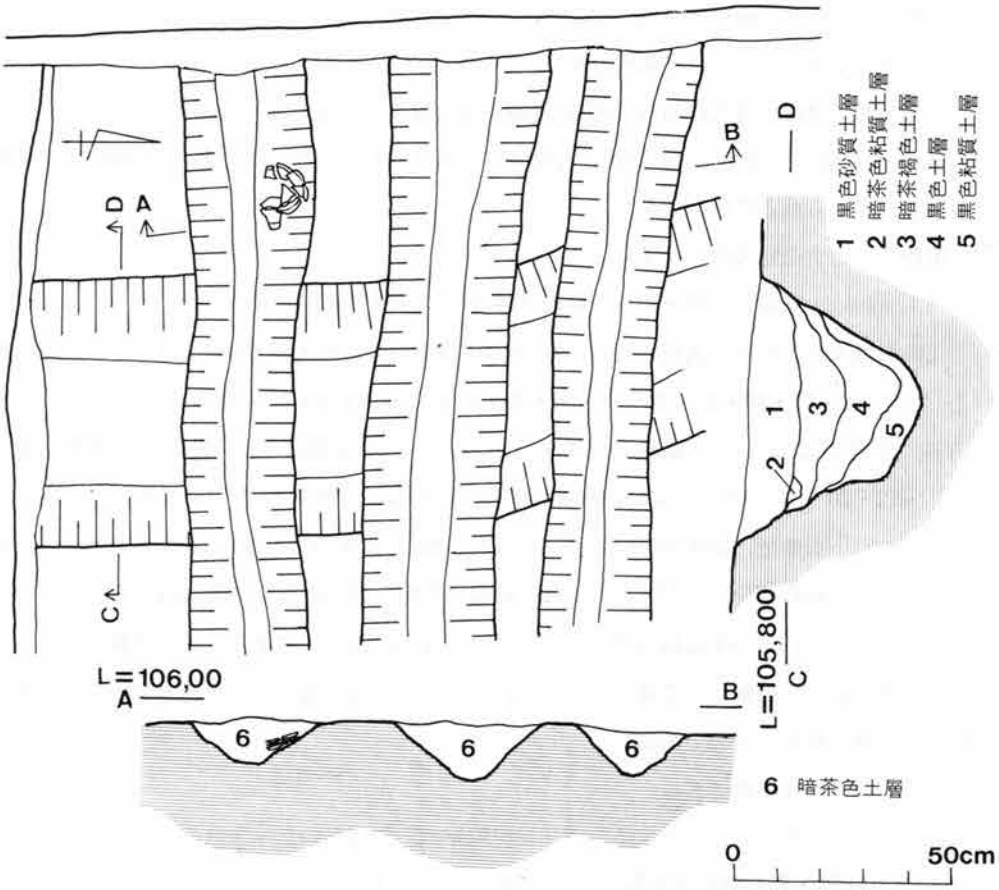
以下，各図別に順次記述する。

第77図　出土遺物実測図（１）

（３・４）は縄文時代に属する石錘である。石材は砂岩系のものである。出土地点は（3）がBO 25 地区の溝内。（４）が BO 27 地区，暗茶褐色土層の遺物包含層出土である。重量は（３）が 85 g，（４）が 100 g である。石鏃（１）はチャート質の断面が台形を呈する肉厚のものである。両面の刃部を粗く剝離した凸基有茎鏃である。（２）は石包丁の破片である。刃部は破損して残っていない。背部と考えられる所は面を有している。両面に横方向の擦痕があり，全体に薄い。石材は黒色粘板岩である。出土地点は BP 28 地区，重量は（１）が 3.7 g，（２）が 6.8 g である。いずれも弥生時代に属する。（５）は小型の土錘である。焼成は良好で赤褐色を呈する。出土地点は BO 32 地区で重量が 3.2 g ある。

第78図　出土遺物実測図（２）

（１）～（３）は弥生時代後期の土器である。（１）は頸部から「く」字状に外反した断面三角形を呈する口縁部である。（２）は平底の甕と考えられる。外面に叩き痕を残す。（３）は上げ底の平底である。平底に木葉を敷き，輪台の粘土を貼り付けた後にもう一度木葉を敷いている。外面は縦方向の刷毛目を施している。



第 76 図　BC 28・29 地区溝平面・断面図

（4）～(19) は古墳時代から平安時代までの須恵器である。（4・5）は杯身である。(4) は口縁部の立ち上がりが長く，わずかに内傾するものである。（5）は立ち上がりが短く内傾するものである。

（6～19）は奈良時代以降の須恵器である。

（6～9）は平底の杯である。8世紀頃と考えられる。(10～17) は高台をもつ杯身である。(18) は高台をもつ瓶の底部である。(19) は小型の宝珠形つまみを有する蓋である。(20) は土師器の椀と考えられる。

(21～27) は輸入陶磁器類である。平安時代後半以降の遺物である。

(21) は白磁の内面に花弁状の環状リングを有する合子の身である。(22) は青磁椀の口縁部である。(23・25～27) は白磁椀である。(23) は口縁端部をわずかに外反させた椀である。(24) は高台下半まで厚い釉のかかった青磁椀である。(25) は外面上部にわずかと，内

面に釉がかかった白磁椀である。(26・27) の口縁端部外面は折り返された太い玉縁状を呈する。11世紀後半頃のものと考えられる。

(28～30) は鎌倉時代の羽釜である。(28) は口縁部が内傾し端部は面をもつ瓦器羽釜である。(29) は口縁部が「く」字状に外反すると考えられる瓦器羽釜である。(30) は土師質の羽釜と考えられる鍔部分である。

第79図　出土遺物実測図（3）

（1～46）土師皿と（47～59）瓦器椀は鎌倉時代以降の遺物である。

土師皿は大皿，小皿に大別した。口径 10 cm 以上のものを大皿，10 cm 以下のものを小皿とした。(12・17・19・21・22～24・30・32・36・43・45・46) は大皿である。他は小皿である。形態別では，ヘソ皿状の（1・2），外反する口縁部直下に一段のなで調整を施す（3～12・20～24），外反しない口縁部直下に一段のなで調整を施す（13～19），底部より体部がやや厚い器壁で，端部が肥厚している（25～26），底部の脇を強くおさえることで，腰部分に大きな屈折部を生みだし，外面の一段なで調整と底部の指おさえに段を有する（36～46）がある。これらの中には口縁直下の内面に一段の回転なでによる一本の沈線がめぐるものや，外面のなで調整による稜があるもの，底部に指圧痕を施すものと施さないものがある。13世紀以降に属するものである。

(47～59) は瓦器椀である。

瓦器椀は，橋本久和氏の上枚遺跡「瓦器椀編年表」ではⅣの2・3に分類されている頃になる。(49・54・55) は器高が低く，低い断面三角形の高台をもち，口縁端部内面に細い沈線をもつ。口縁部外面直下には回転なでによる稜があり，内面に横方向の暗文がある。器壁は全体に薄いものが多く，径も小型である。(48・49) は口縁直下が厚く，丹波地方の特徴を呈している。

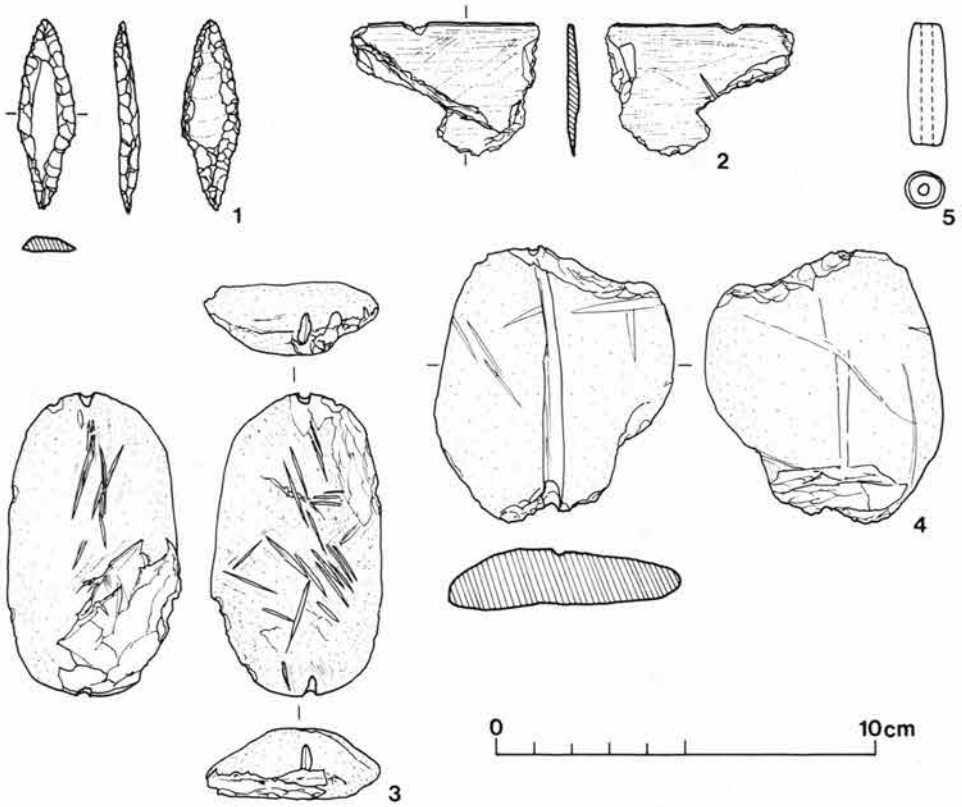
6. ま　と　め

今回の調査では，奈良時代から鎌倉時代を中心にした遺構・遺物を多数検出した。

遺構は，奈良時代の掘立柱建物跡（2間×2間）の総柱倉庫と考えられるものと，それを囲む溝群0402・0403・0404・0408，また水田の水路と考えられる溝0409・0410がある。

鎌倉時代の遺構としては，東西方向に走る多数の溝群0406・0411・0428がある。これらの溝は中世素掘溝である。前者の奈良時代の溝群は南北方向に走るものが主流であるのに対し，鎌倉時代の溝は東西方向に走るものが主流である。

これらのことから，奈良時代には南北方向の縦長に利用されていた耕地と住居が，鎌倉時

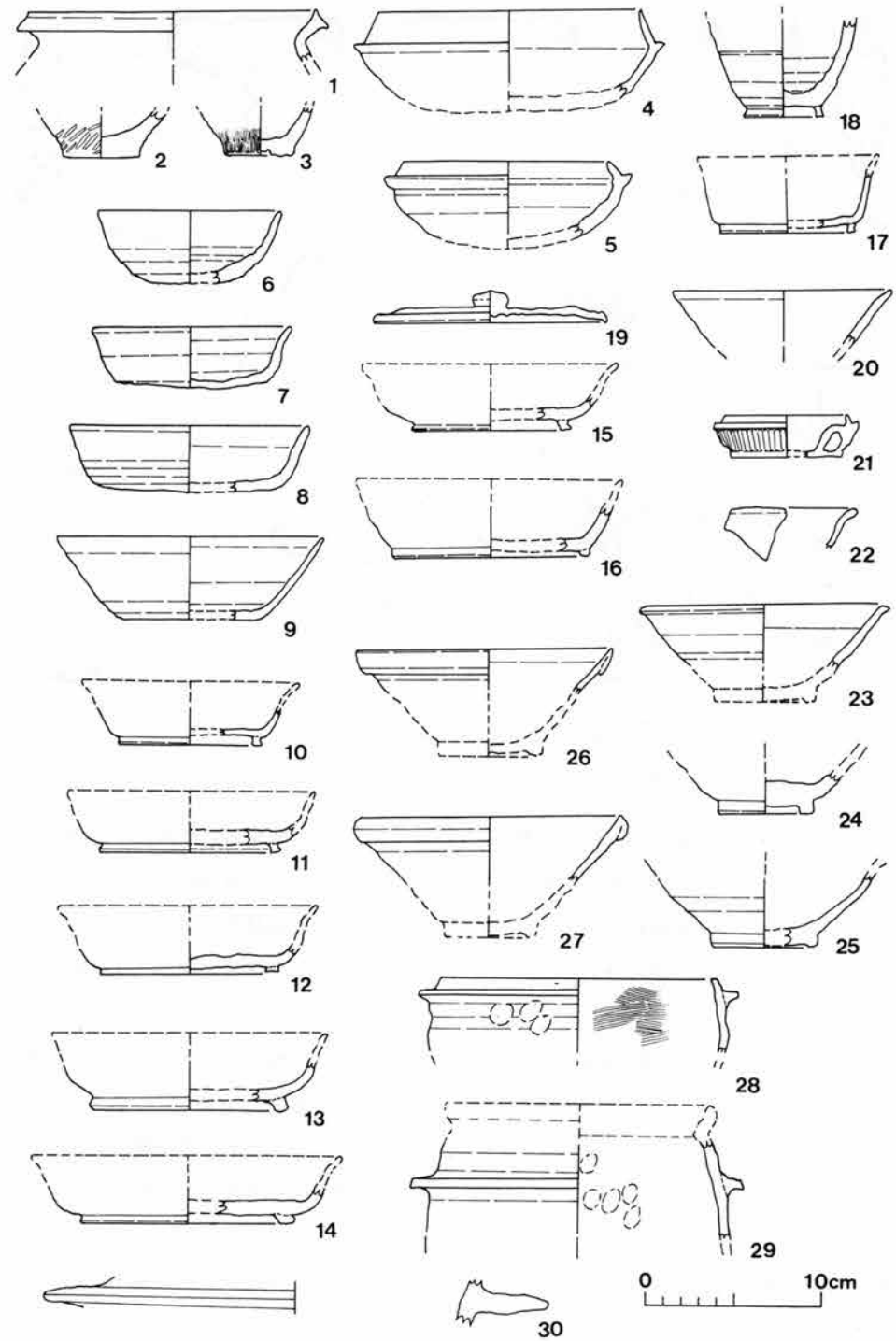


第77図　出土遺物実測図(1)

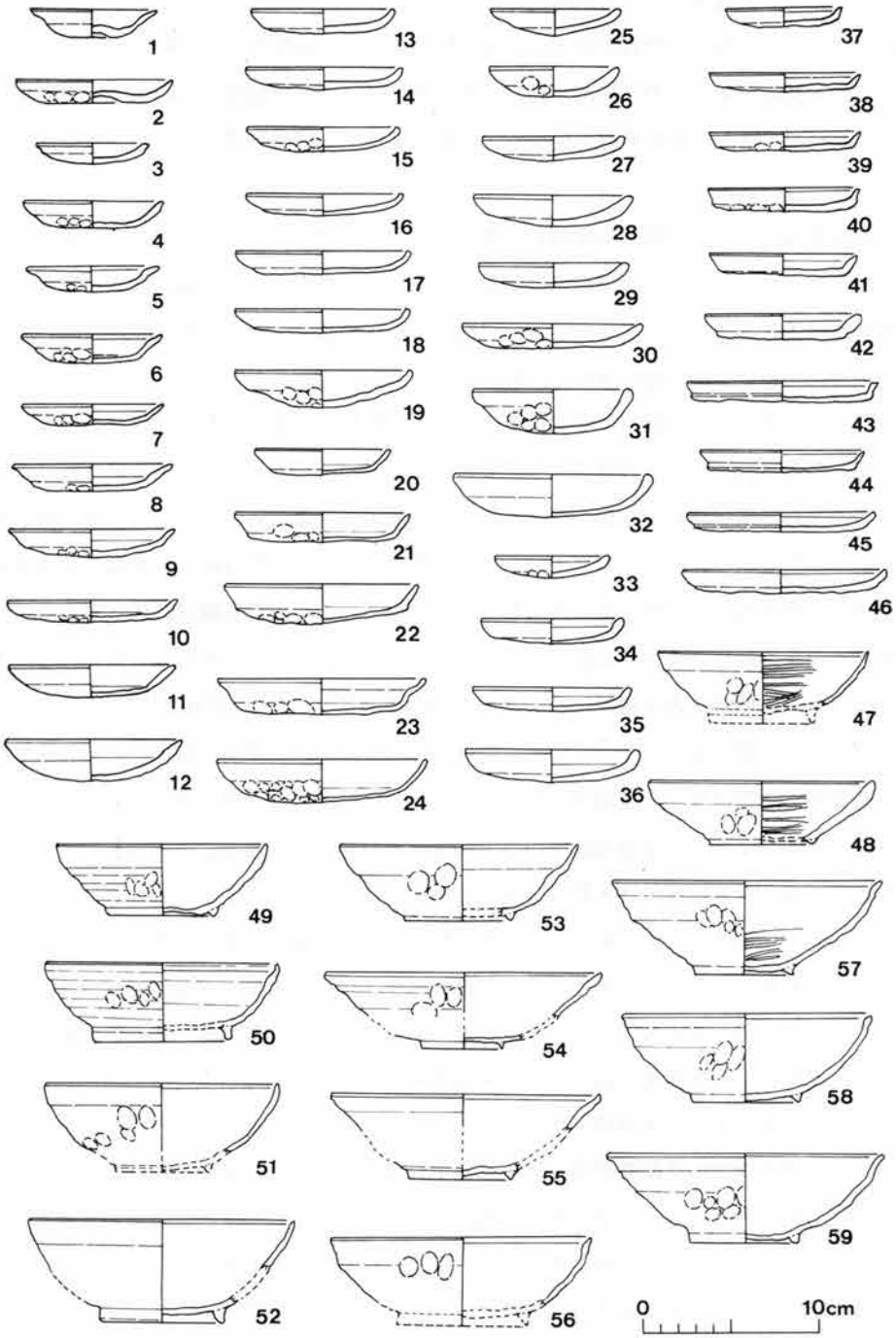
代になると東西方向の横長に変化し，利用されていたことが判明する。また，この地の条里制に関しては，これらの溝が亀岡盆地の地表面に残る条里跡と同一方向にあることから奈良時代に亀岡盆地の条里制の起源がもとめられるとすれば重要な遺構である。また，倉庫と考えられる掘立柱建物が1棟だけしか確認できていない点からも，それに伴う他の建物の存在が調査地の南側かその周辺に予想され，今後の調査に大きな期待がもたれる。

桑田郡条里制についての研究は，竹岡　林氏の「大井川右岸地域に於ける条里制―京都府亀岡盆地」がある。また，条里制の調査に関しては，国道9号バイパスに伴う調査で，現地調査が昭和56年～58年に行われている。調査地は，国道9号バイパス予定路線内の風ノ口から北金岐にいたる約4km である。東西南北方向に条里制区画の畦畔・溝が整然と並ぶ水田地帯の試掘や，溝・畦畔の断ち割り調査が行われている。

亀岡盆地の条里制は，村落制度や土地制度であり，盆地内の平坦な沖積低地・洪積台地・段丘・山麓傾斜変換線まで広がっている。古代より営まれてきた水田が，国家の強力な権力のもとで，盆地内の水田を一変させる大土木工事になり，その姿は現在まで拡張されながら



第 78 図　出 土 遺 物 実 測 図 (2)



第 79 図　出 土 遺 物 実 測 図 (3)

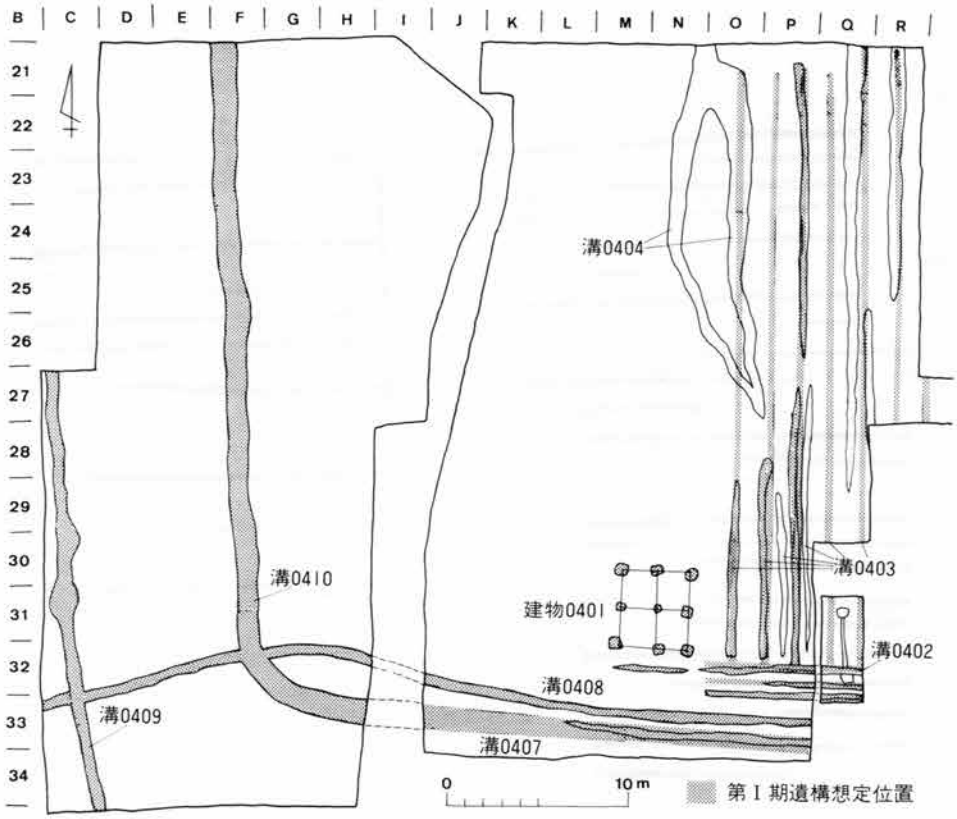
息づいている。大堰川右岸の条里地割は，大きく分けると千代川町周辺の広がりと大井町・薛田野町・吉川町周辺，曽我部町周辺，亀山城，三宅，矢田町周辺と篠町周辺になる。その中で，曽我部町宮条より千代川町中村里に至るまでは，条里制地割の方向が直線で南北方向に走っている。また，薛田野町奥条より保津町六条までは同様に正しく東西方向に走っている。現在では，盆地のいたるところに条里に平行する畦畔・溝・道等が見られるが，当初の条里制地割は河川の氾濫原と山麓傾斜変換線より高所には施行されていなかったと考えるのが妥当であろう。つまり，河川沿岸の氾濫原については水害による問題がある。また，山麓傾斜変換線より高所や複合扇状地においては，水田への灌漑・貯水・悪地等の問題があり，高度の技術を要するので施行されていなかったのであろう。

大堰川・曽我谷川・犬飼川・年谷川等の河川の氾濫原には条里地割が施されている地域と条里地割が施されていない地域がある。昭和57年国道バイパスに伴う条里制の発掘調査以前は，当初から条里制施行がなかったのか，施行後河川の度重なる氾濫によって条里制が乱されたのか不明であった。しかし，トレンチ等の調査(注15)により，河川周辺の氾濫原にある条里制や山麓傾斜変換線より高度にある条里制は古く施行されたものでも鎌倉時代と考えられるし，そのほとんどが近世に施行されたものであった。古代から水田が営まれ，奈良時代頃に条里制が施された可能性がある地域は，大堰川右岸の標高 97 m から 105 m 以内で，弥生時代から奈良時代の遺跡が集中している太田・南金岐・北金岐地区と千代川町一帯である。また，この両地域の地割は現在，長地型が多く確認できる。地割は長地型と半折型に大きく分けることができる。また，長地型は畦畔の長辺が東西方向を示すA類と長辺を南北方向に示すB類がある。半折型も同様にA・Bに分類することができる。

今回の調査地である千代川町は，長地型B類が圧倒的に多い。また，千代川町には条の呼称に特異な変化をしたものがある。千代川町大字北ノ庄には上条と下条の間に中筋がある。中筋のもとは中条（ナカスジ）と呼んでいたのが変化したのであろう。条が筋に変化しているものでは他に千代川町大字湯井に東筋・西筋・南筋・北筋・巽筋・艮筋がある。これらは中筋を中心に東筋・西筋・南筋・北筋があり，あきらかに筋は条であったことが窺われる。また，湯井集落構成の条配置や条里集落形態より条「スジ」名の変化したものと考えられる。今回の調査地も巽筋にあたる条里地割が明瞭にみられる。また，条里制に関する溝等の遺構を検出しているので，これらの遺構をもとに変遷過程の復元を試みた。

遺構は大きくⅠ・Ⅱ・Ⅲの3時期に分けることができる。Ⅲ期はさらに細かく前・中・後期の3つの小期に分けた。

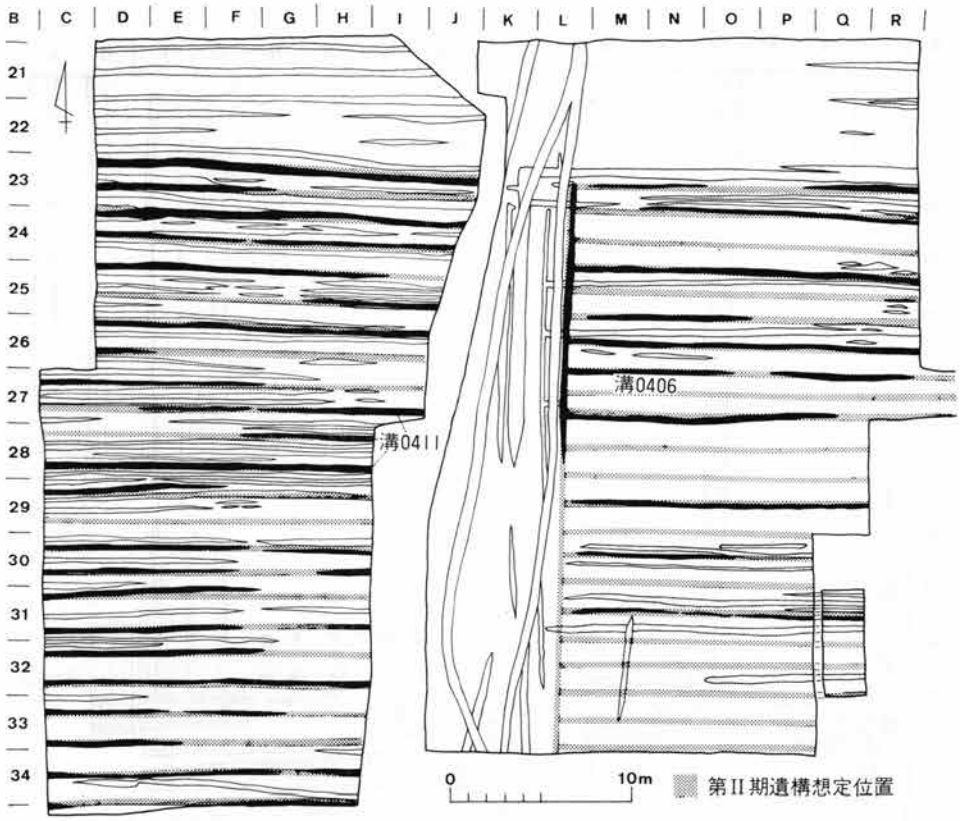
以下，遺構（溝状遺構）を中心にした各時期の概要を記述した。



第 80 図　遺構変遷図（第Ⅰ期遺構）

第Ⅰ期

この時期は，溝0403・0404・0408出土の須恵器（第78図10・11・14・19）や，掘立柱建物跡のピット内から出土した少量の土師器甕片などから奈良時代と考えられる。これらの遺構は土層からみると黄褐色粘土の地山を切り込んでいる最下層のもので，遺構内の埋土は黒色土層である。調査地である巽筋は西側に南筋が接している。この南筋と巽筋の境である畦畔から調査地東端の畦畔までが109 m 前後を測る1町間である。南北幅は調査地の南限である貯水池から湯井集落に至る道より1本南側の畦畔までが約110 m の1町である。これらが1町区間であるから，溝0403は掘立柱建物から東へ幅約 24 m 続き，南北方向に長く走る素掘溝である。素掘溝の間隔は約 120 cm で，掘立柱建物跡から西側には確認できなかった。素掘溝0402は東西方向に走るもので，南北方向に走る溝の南限である。この溝は同一方向に3本あるが，時期差によるもので南側に拡張していったものであろう。また，この溝の南側に同様の方向に走る溝0408・0407があるが，これらの溝は，前者の溝と規模・性格等が違う。

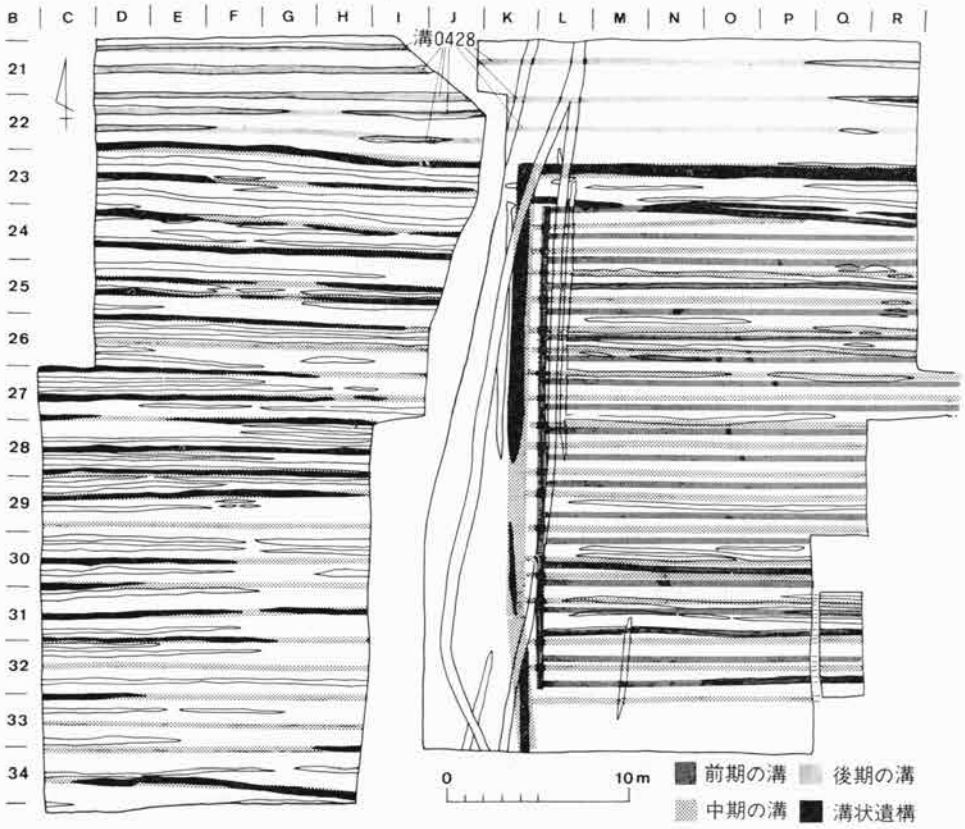


第 81 図　遺構変遷図（第II期遺構）

溝0408は溝0402・0403よりも幅が広く，深いものである。さらに，前者の素掘溝群は黒色土層の単一層であるのに比べ，溝の下層・中層に砂層が堆積しており，水の流れた形跡がある。溝0407は，溝0408より幅が広いが浅く，砂層の堆積はあまり確認できない。以上のことから溝0407は水路であったとは考え難い。また，この溝は溝0410に続くものと考えられ，掘立柱建物とほぼ同一方向にあることから区画し，囲う性格のものであろう。溝0409は溝0408と同様の規模で，溝内には砂層の堆積がみられるので，灌漑等の水路と考えられる。さらに溝0409と0410は同一方向に走っており，溝と溝の空間部分には薄い溝内の粘土と同じものが堆積している箇所があったので，溝0410と溝0409の間及び溝0409の東側が水田であった可能性がある。溝0404は溝0403と同じものであるが，南側で一部蛇行している。溝0403・0404は掘立柱建物により規制された長地型B類の畑地と考えられる。また，溝0410と溝0409による区画から西側にも同様の長地型B類が続くものと考えられる。

第II期

時期は溝内の出土遺物（第79図）から鎌倉時代と考えられる。第I期が奈良時代から平安



第82図　遺構変遷図（第Ⅲ期遺構）

時代まで南北方向に長い長地型B類で営まれたのに対して，第Ⅱ期では東西方向に長く利用した長地型A類に変化している。この期の遺構は，幅約30～40 cm の素掘溝が一面に検出された。この素掘溝は黒色土層に切り込んでいるもので，溝内の埋土は暗茶色土層である。溝の間隔は，約 120 cm である。溝群0411周辺には同様の溝が同じ方向に走るが，溝の切り合い関係から前後の時期を決定した。第Ⅱ期は，東西方向に長く利用し始めた時期である。また，K地区を南北に区画する段，及び溝がこの時期にできている。

第III期

時期は溝内の出土遺物（第79図23・53～55）の瓦器・土師Ⅲ等から鎌倉時代以降と考えられる。第Ⅲ期の遺構は第Ⅱ期の遺構を切っているため拡張して行く過程が窺われる。また，この時期はさらに細かく前・中・後期の小期に分類した。まず，前期は第Ⅱ期の東西方向に多数走る溝群0406とそれを区画する南北方向の溝が一本を切り，約1m間，南北方向の溝より拡張し，耕作面積が大きくなっている。東西方向の溝は，溝群0406の間に同様の溝の間隔

で東西方向に走る。南北方向の溝幅は東西方向の溝と同じ約30～40 cm を測り，ほぼ直線である。中期の溝は，さらに前期の溝を切って西側へ約 1 m, 北側は約 2 m 拡張している。また，B～J 地区の東西方向の溝は，K～R 地区の溝と同一延長上にほぼ直線であったと考えた。K地区の南北に走る溝は，中期の溝より幅が広く，約 130 cm を測る。B～J 地区の東側を区画する南北の溝は，前・中・後期とも現在の水田による約 1 m の石垣を組んだ崖によって削平されているため不明である。後期になると22地区より北側に東西方向の溝が約 150 cm 間隔で拡張し，広がる。南北方向の区画された溝は不明である。中・後期になると全体的に溝が直線的なものからゆがんだものに変化している。以上，畑地と考えられる畦による溝の変遷を考えてみたのであるが，幾多の溝より，過程を考えることが可能となってきたのである。調査前は，南北に長い水田として利用されていた。　（村尾 政人）

注 1　安藤信策「国道バイパス関係遺跡昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-1)』京都府教育委員会）1980

注 2　岡崎研一「千代川遺跡第 3 次発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財情報』第 9 号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1984

注 3　村尾政人「国道 9 号バイパス関係遺跡昭和55年度発掘調査概要千代川遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報第 2 冊（1981-2)』京都府教育委員会）1981

注 4　村尾政人「国道 9 号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要千代川遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第 1 冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982

注 5　森下　衛「千代川・桑寺遺跡の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第12号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1984

注 6　昭和58年度調査参加者氏名（五十音順）
調査補助員　天野　裕・伊藤裕康・井上志津光・井上和也・小原孝信・河原昭夫・木村明史・小谷　悟・佐々木健・菅原淳之・中川昌人・中澤　勝・西垣真史・野々村寿良・福島　勇・藤井敏広・俣野二郎・松山智昭・美馬秀和・八木教之・山内　忠
整理員　浅田芳子・石井ゐつえ・石原俊子・大村絹江・小田泰子・片山延子・日下部恵子・酒井信子・高田江見子・田中智子・出口瑞鳥・並河智実・広瀬順子・藤本肇子・堀井幸子・松家みはる・箕輪真紀・村田みどり・山本清美
事務補助員　富田敦子

注 7　木下　良氏により推定されている。木下　良「丹波国府址」(『古代文化』16-2）1966

注 8　樋口隆久『御上人林廃寺第 5 次発掘調査報告』亀岡市教育委員会　1980

注 9　堤圭三郎・安藤信策・吉水真彦・樋口隆久「国道 9 号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1977)』京都府教育委員会）1977

注10　堤圭三郎・安藤信策・吉水真彦，樋口隆久「国道 9 号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1978)』京都府教育委員会）1978

注11　安藤信策「国道 9 号バイパス関係遺跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）1979

注12　村尾政人「亀岡市太田遺跡」(『丹波史談』第118号 口丹波史談会）1984

注13　樋口隆久『御上人林廃寺第 3 次発掘調査報告』亀岡市教育委員会　1978

注14　樋口隆久「史跡丹波国分寺第１次発掘調査報告書」(『亀岡市文化財調査報告書第12集』亀岡市教育委員会）1982

注15　村尾政人「国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983

注16　吉水真彦「馬場ケ崎遺跡発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書第５集』亀岡市教育委員会）1978

注17　安井良三『亀岡市史』上巻　1960

注18　龍谷大学考古学研究会「亀岡盆地に於ける群集墳」(『無』の再版創刊号1975)

注19　竹岡　林「大井川右岸地域に於ける条里制―京都府亀岡盆地―」(『亀岡高校研究紀要』３集」1954

注20　亀岡市教育委員会，亀岡市文化財保護委員会『亀岡市余部郡是工場内出土遺物略報』(1965)及び亀岡市教育委員会「亀岡市余部郡是工場内出土遺物」(『昭和41年度亀岡市文化財保護委員会調査報告書』）1966

9. 篠窯跡群昭和58年度試掘調査概要

1. は じ め に

亀岡市の東方，京都市より老ノ坂峠を越えた丘陵部には古代の土器生産遺跡がある。この亀岡市篠町に築窯された古窯跡を総称して篠窯跡群と呼ぶのである。篠町の丘陵部一帯は，旧期洪積層の侵蝕が著しいため小谷が多く複雑な地形を形成し，また地質は，泥・砂・礫の互層から成っているため，水・粘土・樹木を豊富に提供し，窯体構築には非常に適した土壌であったといえる。

篠窯跡群は，分布範囲が東西 4 km・南北 2 km に及ぶ。現在までに確認している窯跡は70基を数え，全体では 100 基を越えると考えられ，操業期間が古墳時代終末から平安時代後期まで約 400 年間連綿と続いた一大窯業生産遺跡である。また篠窯跡群は，篠町の南方部丘陵と北東部丘陵では若干その性格を異にし，南方部丘陵では古墳時代終末から平安時代後期にわたっての須恵器窯跡が多く分布するのに対し，北方部丘陵の王子や三軒家には平安時代後期の瓦窯跡が点在する。

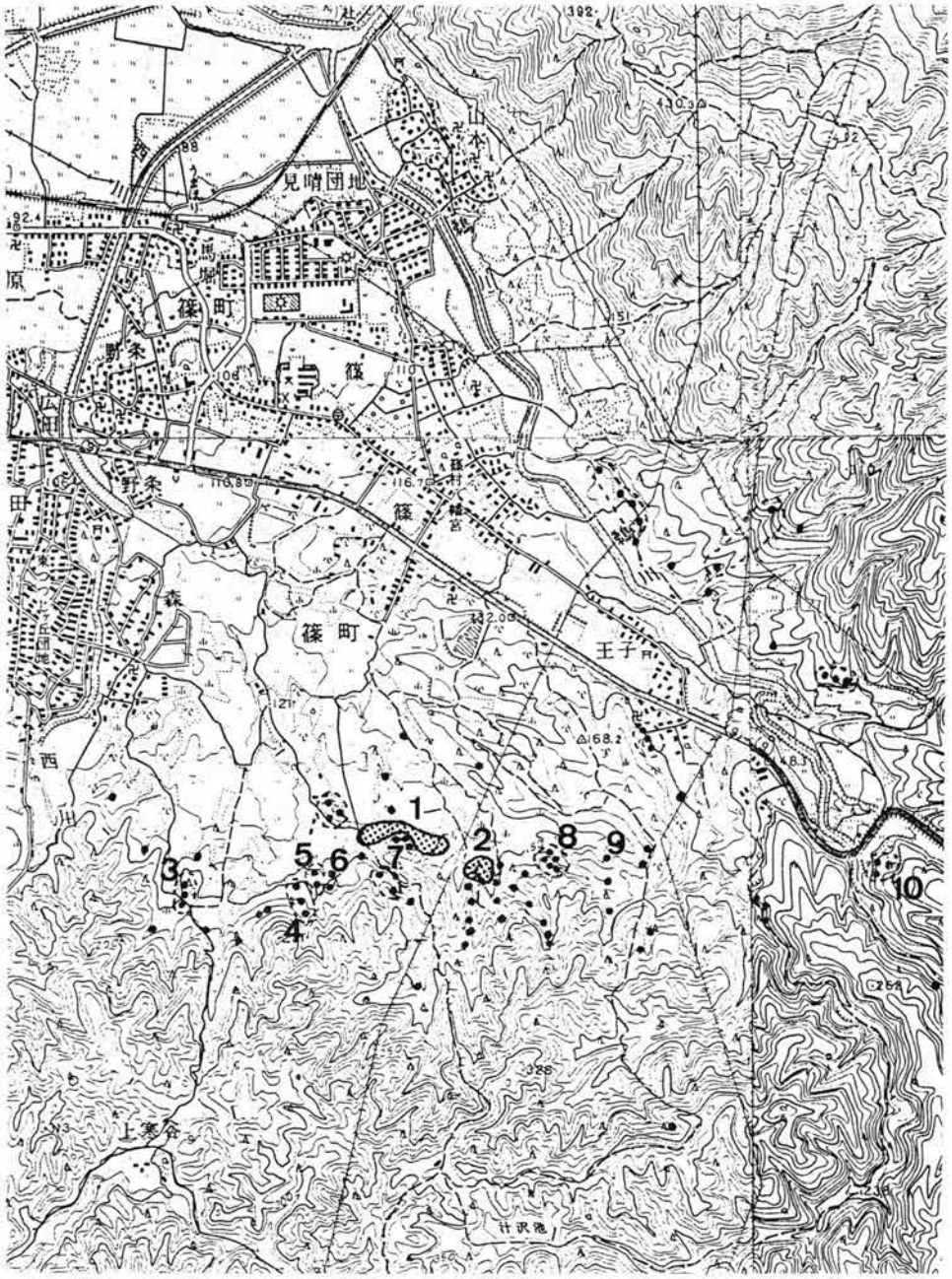
この遺跡の調査は，国道 9 号バイパス建設計画の事前調査として昭和51年度より建設予定道路幅に限って調査を開始し，これまでに篠町南方部丘陵に密集する須恵器窯跡18基（半地下式登窯12基・小形窯 6 基）を検出している。今後さらに発掘調査を進め，窯跡・工房跡等の検出に努めるが，今日までの調査経過を簡単にまとめてみたい。

2. 調 査 経 過

昭和47年 8 月，建設省京都国道工事事務所より京都府教育委員会へ，国道 9 号バイパス建設に先立つ遺跡分布状況の調査依頼があった。府教委は，関係市町教育委員会にその旨を通知し，同時にその全域に及ぶ遺跡の分布状況を京都国道工事事務所に回答した。

昭和48年 8 月から 9 月，昭和49年 7 月には，遺跡の現状を確認するための分布調査を京都国道工事事務所が調査主体となり，府教委が協力して実施した。以上の経過をふまえ，路線決定に際しては，遺跡の現状保存を原則として実施するよう再三にわたる協議を重ねた。

昭和49年 2 月，京都国道工事事務所より「一般国道 9 号改築事業の整備計画」が発表され，京都市右京区大枝沓掛町から京都府船井郡丹波町須知に至る延長32 km にわたる整備計画が進められることになり，道路建設に際しどうしても避けられない 8 遺跡（篠窯跡群・条里制遺構・小金岐古墳群・千代川遺跡・拝田古墳群・小谷古墳群・善願寺遺跡・瓜生野古墳）に



第 83 図　調 査 地 位 置 図 (1/25,000)

1. 調査地（芦原・掛ケ谷地区）　2. 調査地（西長尾A・B地区）
3. 前 山 窯 跡 群　4. 黒 岩 窯 跡 群　5. 小 柳 窯 跡 群
6. 黒岩窯状遺構　7. 芦 原 窯 跡 群　8. 西長尾窯跡群
9. 西長尾奥第1窯跡群1号窯　10. 石 原 畑 窯 跡 群

限って事前に調査を行うこととなった。

篠窯跡群の本格的な調査は昭和51年度より実施され，以下年次順に別表（付表3）をもとに概略を説明するが，詳細については，各年度の京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの発掘調査概要報告書を参照されたい。

昭和51年度　篠窯跡群の本格的な調査を開始するにあたり，事前に調査方針・調査方法等について調査担当者の間で打合せを行った。調査方針では，国道9号バイパス関係遺跡の一環として篠窯跡群の調査を行うこととし，また予定路線内における窯跡やその他の遺跡の分布状態を知ることを目的とした。調査方法では，分布調査が須恵器の散布地点を確認しただけの調査であったため，調査対象地全域の試掘調査を必要とし，3 m 方眼を一区画とする割り付けを全域にわたって行い，今後の調査基準を定めた。また山林部の試掘調査では，立木の間を縫っての調査であるため，3 m 方眼内に1か所 30～50 cm 四方の小孔を掘って窯体や灰原・遺物等の有無確認を行い，また地層の観察を行うこととした。

調査は，分布調査等により最も西端に位置する森・柏原地区より東方に向って開始した。

字柏原小字禿尾山地区・字森小字前山地区の試掘調査は，延長 170 m・総面積約 2,000 m² を対象として実施した。この調査では，分布調査で発見した前山1号窯跡の南方に，時期を違える緑釉陶器片を検出し，付近に他の窯跡の存在する可能性を認めた。また前山1号窯跡の全面発掘調査を実施し，無段式の半地下式登窯，焼成部床面傾斜角30度という篠窯跡群における登窯の構造を初めて明らかにした。

昭和52年度　字篠小字黒岩・小字掛ケ谷・小字芦原地区の試掘調査は，延長 350 m・総面積 10,000 m² を対象として実施した。黒岩地区では，傾斜角8度というなだらかな丘陵斜面に設けた試掘坑より焼壁を検出し，拡張して発掘調査を行った。その結果，平面三角形を呈し，焚口部2か所，煙道部1か所という特異な小型窯を検出し，また窯体内からは緑釉陶器が29個体以上出土した。

このことは緑釉陶器窯として初の検出であり，二次焼成窯と考えられた。

昭和53年度　字王子小字西長尾地区の試掘調査は，延長 500 m・総面積 15,000 m² を対象として実施し，窯跡5基の存在を確認した。特に西長尾1号・2号・3号と名付けた窯跡は灰原が3か所約 300 m² の中に集中して確認できた。

昭和54年度　国道9号バイパス関係道路の一環として行っていた篠窯跡群の調査は，京都市右京区大枝より亀岡市曽我部町風ノ口に至る延長 10 km の部分を日本道路公団が施行することになり，この時点から老ノ坂亀岡バイパス関係の遺跡として実施することとなった。

字王子小字西山地区の試掘調査は，延長 400 m・総面積 12,000 m² を対象として実施した

付表3　篠窯跡群試掘調査・発掘調査年次一覧表

年次	調査対象	所在地（大字、小字）	調査主体	調査時期	地目	調査概要
51	禿尾山・前山地区	柏原，禿尾山・森，前山	京都府教育委員会	52. 3	山林	（試掘）前山1号窯，緑釉陶器片多く付近に緑釉窯の存在
	前山1号窯跡	森，前山	〃	52. 3	〃	半地下式登窯，長6.6m，幅1.3m，傾斜30°N-87°-E
52	黒岩地区	篠，黒岩	〃	52. 6～8	〃	（試掘）黒岩1号窯，小柳1号窯
	掛ケ谷・芦原地区	篠，掛ケ谷・芦原	〃	52. 9～53. 3	〃	（試掘）掛ケ谷1号窯，芦原1・2号窯
	黒岩1号窯跡	篠，黒岩	〃	52. 7～8	〃	小型三角窯，一辺2.3m，傾斜10°，緑釉出土，N-141°-E
53	西長尾地区	王子，西長尾	〃	53. 10～54. 3	〃	（試掘）西長尾1・2・3号窯
54	西山地区	王子，西山	〃	55. 3	〃	（試掘）
	小柳1号窯跡	篠，小柳	〃	54. 11～55. 2	〃	半地下式登窯，長7m，幅1.2m，傾斜30°，N-80°-E
	〃　2号窯跡	〃　〃	〃	〃	〃	窯体（？）
	〃　3号窯跡	〃　〃	〃	〃	〃	平窯（？）削平が著しく識別不明
55	石原畑地区	王子，石原畑	〃	56. 3	〃	（試掘）石原畑1号窯
	小柳4号窯跡	篠，小柳	〃	55. 4～6	〃	小型三角窯，一辺2m（底辺2.6m），傾斜10°，N-83°-E
	前山2号窯跡	森，前山	〃	55. 8～11	〃	小型三角窯，一辺2m（底辺1.5m），傾斜8°，緑釉出土，N-107°-E
	〃　3号窯跡	〃　〃	〃	〃	〃	小型三角窯，一辺2.6m（底辺1.8m），傾斜8°，緑釉出土，N-118°-E
	芦原1号窯跡	篠，芦原	〃	55. 10～12	〃	半地下式登窯，長6.6m，幅1.5m，傾斜38°
	〃　2号窯跡	〃　〃	〃	〃	〃	灰原を検出していたが，1号窯の二次堆積と判明
	鍋倉第4群1号窯跡	王子，西長尾	〃	55. 11～56. 3	〃	灰原の検出，窯体は流失
	西長尾C地区作業場跡	〃　〃	〃	〃	〃	カマド状遺構，ピット（24）
	〃　F地区作業場跡	〃　〃	〃	〃	〃	西長尾窯跡群の灰原と判明
56	西長尾1号窯跡	〃　〃	（財）京都府埋文センター	56. 6～9	〃	半地下式登窯，長5.3m，幅1.4m，傾斜28°，N-91°-E

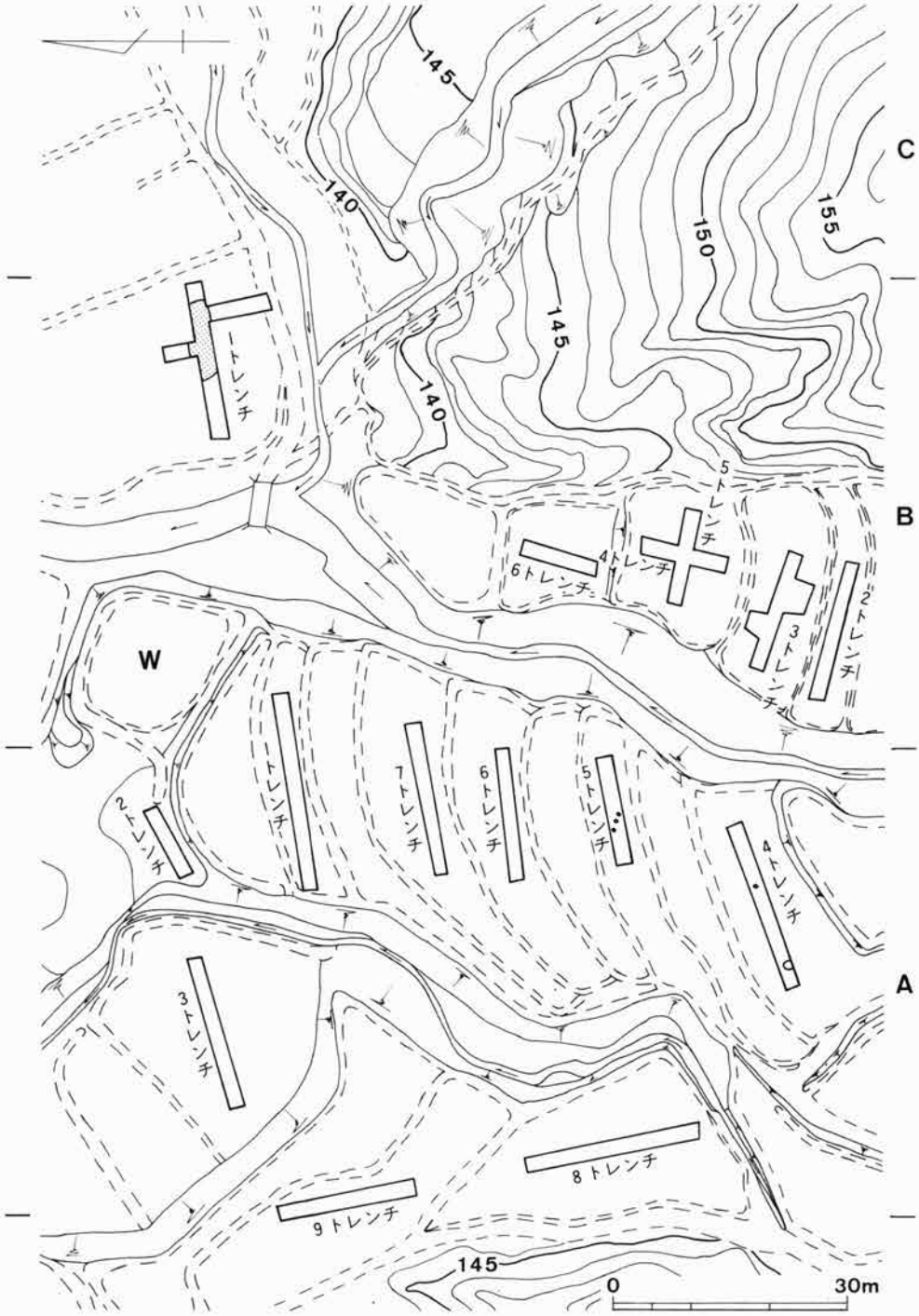
年次	調査対象	所在地（大字，小字）	調査主体	調査時期	地目	調査概要
56	西長尾2号窯跡	王子，西長尾	(財)京都府埋文センター	56. 6～9	山林	灰原の検出，窯体不明
	〃 3号窯跡	〃 〃	〃	〃	〃	半地下式登窯，長8.4m，幅1.6m，傾斜29°，N-99°-E
	〃 4号窯跡	〃 〃	〃	〃	〃	半地下式登窯，長5.8m，幅1.1m，傾斜37°，N-80°-E
	〃 5号窯跡	〃 〃	〃	56. 9～12	〃	ロストル式楕円窯，長径2.4m，短径1.4m，上部傾斜8°，下部傾斜10°，N-75°-E
	〃 6号窯跡	〃 〃	〃	〃	〃	ロストル式小型三角窯，一辺2.4m，上部傾斜不明，下部傾斜8°，N-77°-E
57	芦原・西長尾地区	篠，芦原・王子，西長尾	〃	58. 1～3	田畑	（試掘）芦原4号窯
	西長尾奥1号窯跡	王子，西長尾	〃	57. 5～6	山林	半地下式登窯(？)，窯体基底部のみ残存，灰原
	石原畑1号窯跡	王子，石原畑	〃	57. 5～9	〃	半地下式登窯，長6m，幅1.3m，傾斜26°，N-90°-E
	〃 2号窯跡	〃 〃	〃	〃	〃	半地下式登窯，長9.5m，幅1.3m，傾斜36°，N-100°-E
	〃 3号窯跡	〃 〃	〃	〃	〃	半地下式登窯，長4m，幅1.3m，傾斜33°，N-78°-E
	黒岩窯状遺構	篠，黒岩	〃	57. 7～8	〃	平窯(？)，窯体基底部のみ残存。灰原遺物なし
58	芦原・西長尾地区	篠，芦原・王子，西長尾	〃	59. 1～3	田畑	（試掘）西長尾A地区作業場

備考 （長―残存長，幅―中央幅，傾斜―焼成部床面傾斜角）

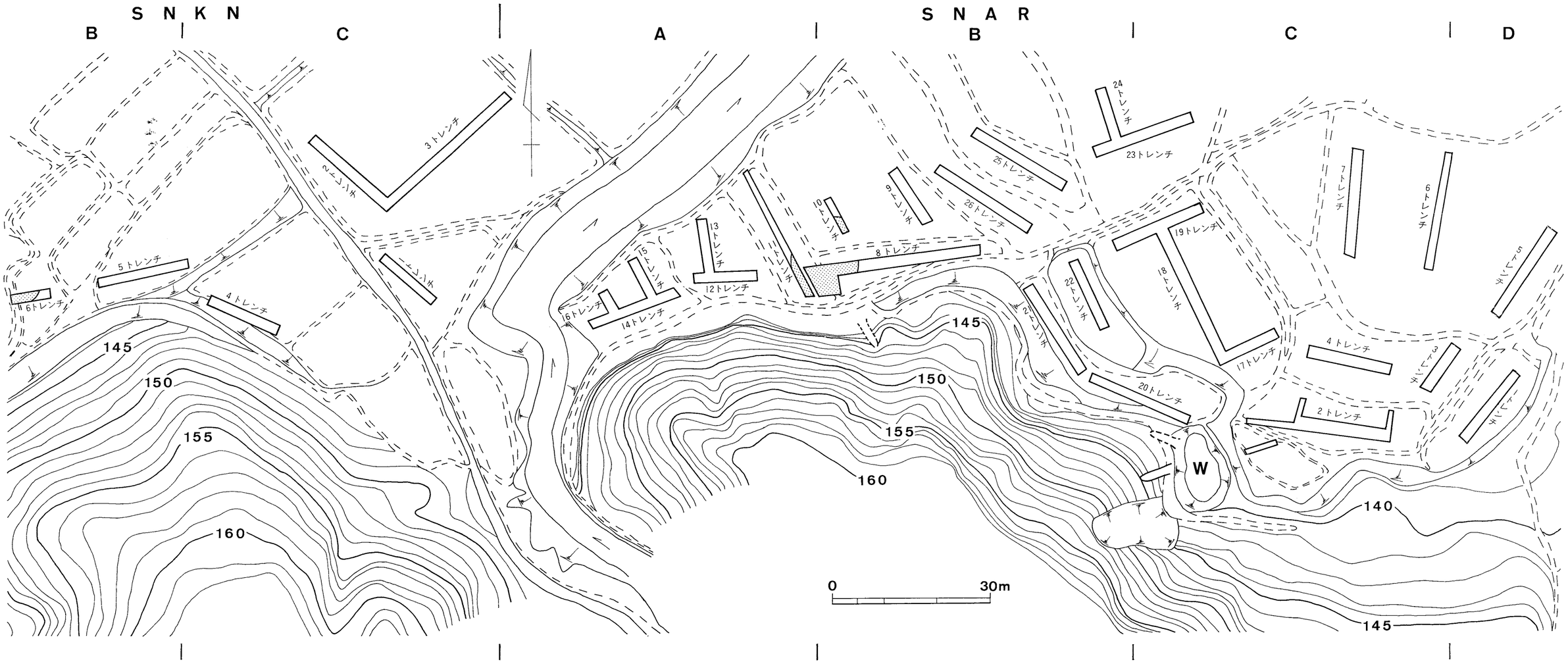
が窯跡は存在しなかった。発掘調査では，小柳1号窯跡の調査を実施したところ，焼成部最大床面傾斜角46度という窯体を検出し，大量生産を意図した燃焼効率の良い窯体を築窯したものと考えられた。さらに，流出した灰原内からは糸切り椀や鉢などの時期を違える遺物が出土したことから調査地を拡張して掘削したところ，小型窯の存在が判明し，次年度に調査を持ち越して実施した。

昭和55年度　字王子小字石原畑地区の試掘調査は，延長450m・総面積13,500m^{2}を対象として実施したところ，西側丘陵斜面に焼土・灰原を検出し，窯跡1基以上の存在を確認した。発掘調査では，以前の試掘調査で検出した窯跡（6基），作業場跡（2か所）の調査を実施した。窯跡では，小柳4号窯，前山2号・3号窯で，黒岩1号窯と同型の小型窯を検出した。しかし，前山窯からは，黒岩窯と同様，須恵器と緑釉陶器が伴出するものの，小柳窯からは，緑釉陶器が出土せず，緑釉陶器の二次焼成窯と考えられていた小型窯に問題を投じた。

昭和56年度　昭和51年度から昭和55年度まで，京都府教育委員会が調査主体となり実施し



第 84 図　試掘トレンチ配置図（西長尾—SNNO—地区）



第85図　試掘トレンチ配置図（掛ケ谷・芦原地区）

てきた篠窯跡群の発掘調査を，京都府が設立した(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが引き継いで実施することになった。

この年度は，昭和53年度試掘調査で検出した西長尾窯跡群3基の発掘調査を実施することになった。調査を行ったところ表土下2.5mの流出灰原層直下より2基の窯跡，さらに灰原だけの窯跡を検出し，総数6基の窯跡を調査することになった。特に，灰原下層より検出した西長尾5号・6号窯跡は，須恵器窯跡として初のロストル（火格子）を有する小型窯で，前年度までに検出している小型三角窯の変遷，及び篠窯跡群の消滅過程を考えるうえで貴重な資料となった。

昭和57年度　一部の植林地を除き，大半の山林試掘調査を終了したため，この年から，田畑部の試掘調査を開始した。田畑部の試掘調査は，田畑が地形に合わせて複雑に整備されているため，原則的に田一面について約7分の1を掘削することとし，現在の地形から旧地形を考慮して，T字あるいは十字の幅 2m トレンチで掘削を実施した。

字篠小字芦原地区，字王子小字西長尾地区の田畑試掘調査は，総対象面積14,000 m² を実施し，芦原地区の山林試掘調査で確認できなかった窯跡の灰原を丘陵裾で検出した。発掘調査では，篠窯跡群の中で最も東に位置する石原畑窯跡（3基）の他，黒岩地区，西長尾地区で2基の発掘調査を実施した。

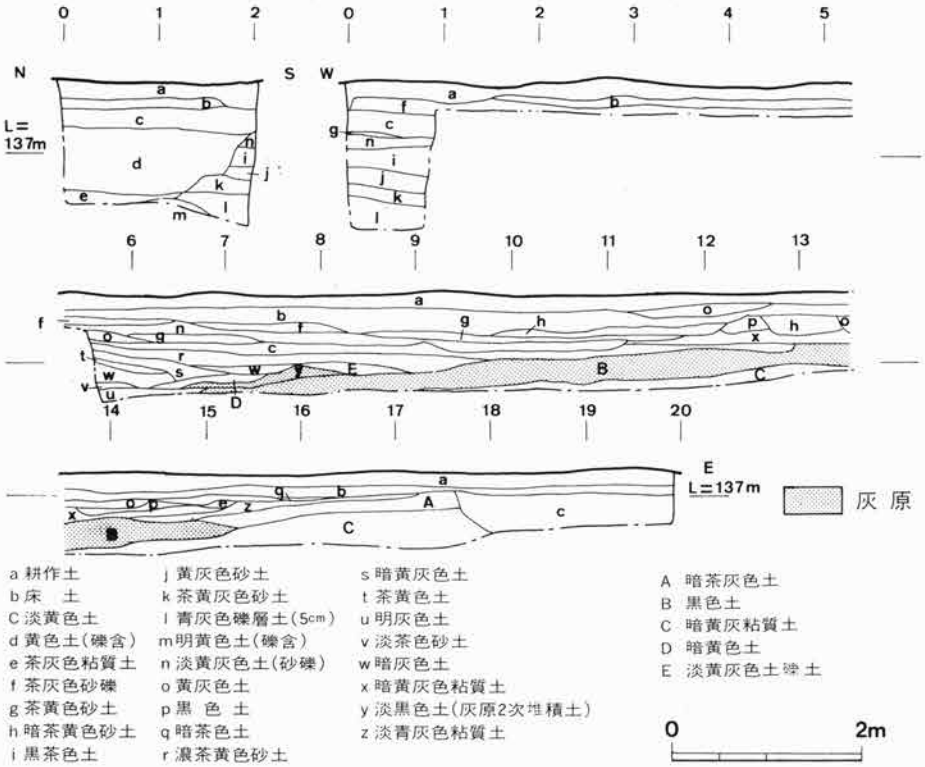
昭和58年度　昨年度に続き，芦原地区・西長尾地区の田畑試掘調査（総対象面積14,000 m²）を実施し，西長尾地区で作業場跡と考えられる遺構を検出している。

以上簡単に現在までの調査経過を概略したが，篠町の丘陵裾部を横断する道路幅に限っての調査の中で，窯体構造の変遷など貴重な資料を得ることができ，われわれに課せられた課題は大きい。また遺物においても，コンテナバットにして約2,000箱を数える量が出土し，現在鋭意整理中である。　（水谷 寿克）

3. 西長尾 A・B 地区（SNNO-A・B）試掘調査

調査地は，南から北へ向って張り出す2本の尾根に挟まれた扇状地状の傾斜地にあたり，現状は段々状に開削された田地となっている。篠窯跡群全体の地区割りでは西長尾A地区・B地区にまたがり，境付近に細い谷がはしる。

この地区は，昭和58年3月3日から同年3月25日（B地区第1トレンチ），昭和58年5月25日から同年6月30日（A地区第1～第3トレンチ），昭和59年2月6日から3月28日（A地区第4～第9トレンチ・B地区第2～第6トレンチ）と，3次にわたって試掘調査を行った。



第 86 図　　西長尾B地区第1トレンチ断面図

A 地 区

当初，2本のトレンチ（1・2）を設け掘削したところ，窯跡・灰原等は検出できなかったが，耕作土層直下から二次堆積土層と考えられる須恵器（9世紀前半頃）や緑釉陶器を含む層が堆積していた。また西方に設けたトレンチ（3）では，水性堆積による粘土層が広がることから，もとは谷筋もしくは湿地であったと推定された。これらのことから，田畑の開削によって消滅している可能性はあるものの，谷筋を利用して築かれた窯跡の存在が想定された。さらに，南方の田地に6本のトレンチ（1・2・4～7）を設け掘削したところ，第4・第5トレンチから計4箇所の柱穴を検出し，また第4トレンチ西端からは南北1.1m・東西0.9mの範囲で周囲をうすい焼土が巡り，9世紀中頃の須恵器片が多数出土する遺構を検出した。後者は建設道路幅の最も南端に設けたトレンチであるため拡張することができず，窯体燃焼部の一部であるのか，他の遺構であるのかは判明しなかったが，前者の柱穴は作業場跡と想定する貴重な遺構であり，今後の全面的な発掘調査に期待される。

B 地 区

昭和54年度に調査を行った西長尾 C 地区作業場跡の北西約 30 m の田地にトレンチ（1）を設定し掘削したところ，南北約 25 m・東西約 8 m の範囲で灰原を検出した。さらに窯体の有無を確認するために，北側・南側にそれぞれサブトレンチを設けた結果，この周辺の旧地形は，南東から北西に向って傾斜する斜面であることが判明し，また窯体が存在したとみられる灰原南東側は田地の開墾によって削平されていたことも判明した。遺物では，須恵器・緑釉陶器のほか，分焔棒や窯滓が出土し，またその時期は，黒岩 1 号窯出土のものと類似することから，10世紀中頃と推定される。

西長尾 C 地区作業場跡の西方 60 m の田地には 5 本のトレンチ（2～6）を設定し掘削した。その結果，各トレンチから少量の須恵器片が出土したが，二次堆積土層と認められ，またその東端は地山が急に下がっていることから，丘陵に沿って小さな谷地形を成していたものと考えられた。

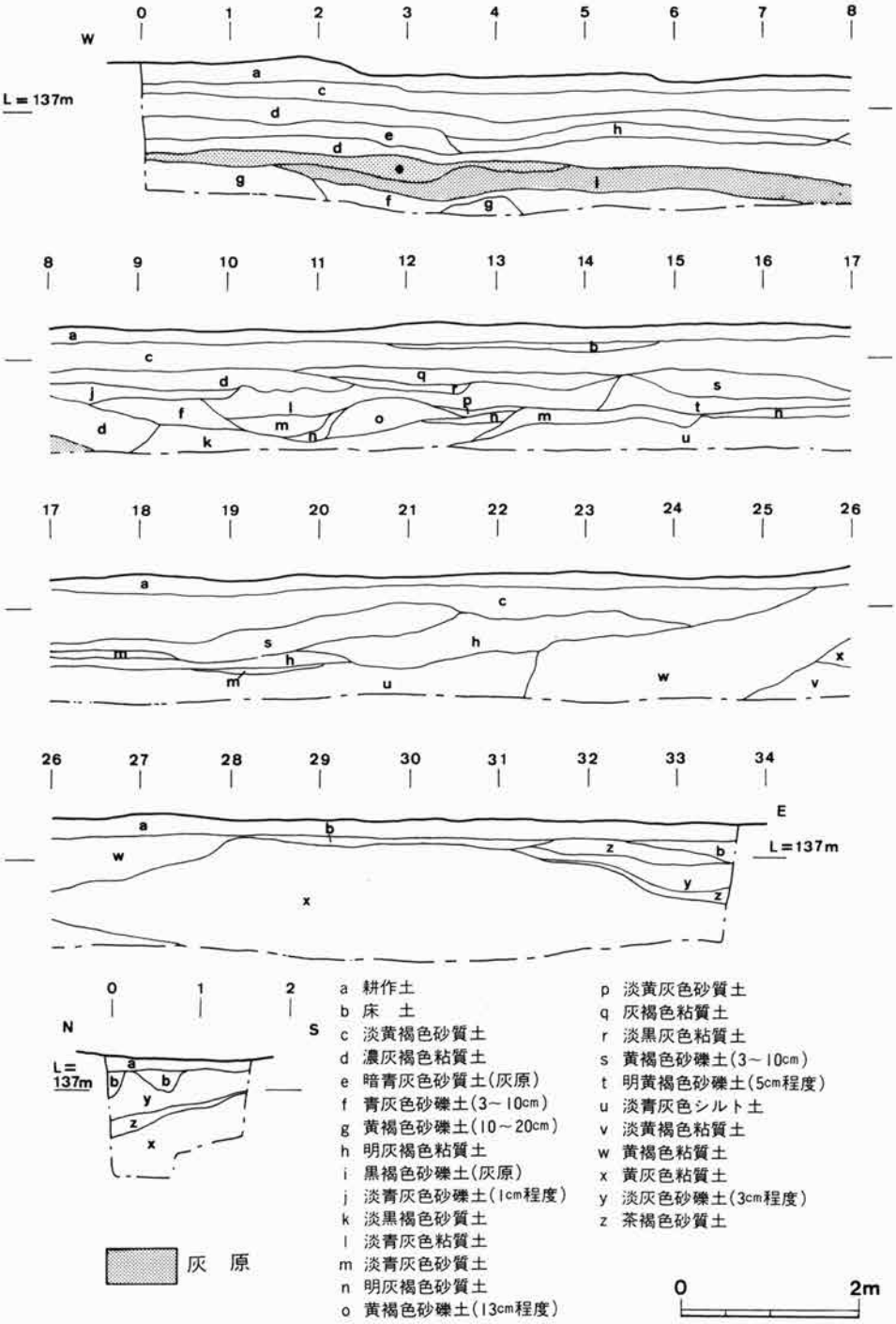
4. 芦原地区（SNAR）試掘調査

芦原地区では，昭和53年度に山林部の試掘調査を行った際に，芦原窯跡（窯 1 基・灰原）を発見し，昭和55年度に発掘調査を行い，その全容を明らかにしている。この時に 3 号窯跡の存在も確認している。今年度は，芦原窯跡の位置する丘陵沿いに広がる田畑を対象として調査を行った。この地区の調査も西長尾地区と同様，昭和58年 1 月26日から同年 3 月25日（第 1 ～第16トレンチ），昭和59年 2 月 6 日から同年 3 月 28 日（第17～第 26 トレンチ）の 2 次にわたっての調査であった。

丘陵の北側では，計19本のトレンチを設定し試掘調査を行った。掘削したところ，第23トレンチでは耕土下にうすい淡青灰色砂質土が堆積しており，この層より下は地山となる。第18トレンチでも，同じ堆積状態であるのに対して，芦原 1 号窯北側の田畑に設定した第20トレンチでは，耕土下約 60 cm から青灰色をした 1 号窯跡の灰原を検出した。

また昭和53年度の試掘調査で検出した 2 号窯（灰原のみ）は，55年度の調査の結果，1 号窯の灰原の二次堆積であることを確認している。その原因は，溜池をつくる際によるものであった。今回の試掘調査では，溜池の西側にも灰原の二次堆積があるものと考え，第10トレンチを設定した。掘削を行ったところ，2 号窯ほどの灰原は見られず，うすい灰原の層を検出したにとどまった。

この灰原内からは，ほぼ完形に近い平瓶を 1 点検出している。第26・第25・第23トレンチの土層堆積状況を観察すると，標高の低い第23トレンチの方が，堆積土が厚く約 30 cm ある



第 87 図　芦原A地区第8トレンチ断面図

が，第26トレンチでは耕土下すぐに，淡黄灰色粘質土の地山となる。これらのトレンチからも数点の遺物が出土した。

丘陵の北側には，計6本のトレンチを設けた。そのうち第8・第10・第11トレンチから，北へ向って厚く堆積する灰原層を確認し，南から北へ流れたことを窺わせた。南の丘陵部については，昭和53年度に試掘調査を実施し，窯跡等の検出はできなかったが，この灰原層から，全体に破片が丸味を帯びているものの多量の須恵器片が出土し，この灰原層に伴う窯跡が芦原窯跡群と同じ丘陵の北側斜面に存在したと思われる。時期的には，後述するように芦原1号窯とその差はなく，同じ頃の所産と考えられる。以後この窯跡を芦原4号窯と呼称し，次年度，確認のため丘陵部の発掘調査を行う。

5. 出 土 遺 物

ここに紹介するのは，昭和58年1月26日から3月25日にかけて行った芦原地区・西長尾A地区の試掘調査出土遺物，昭和58年5月25日から6月23日にかけて行った西長尾A・B地区試掘調査出土遺物である。

（1）西長尾A・B地区出土遺物（第88図1～18）

この地区からの出土遺物は，B地区第1トレンチで検出した灰原から出土した須恵器がその主たるものである。

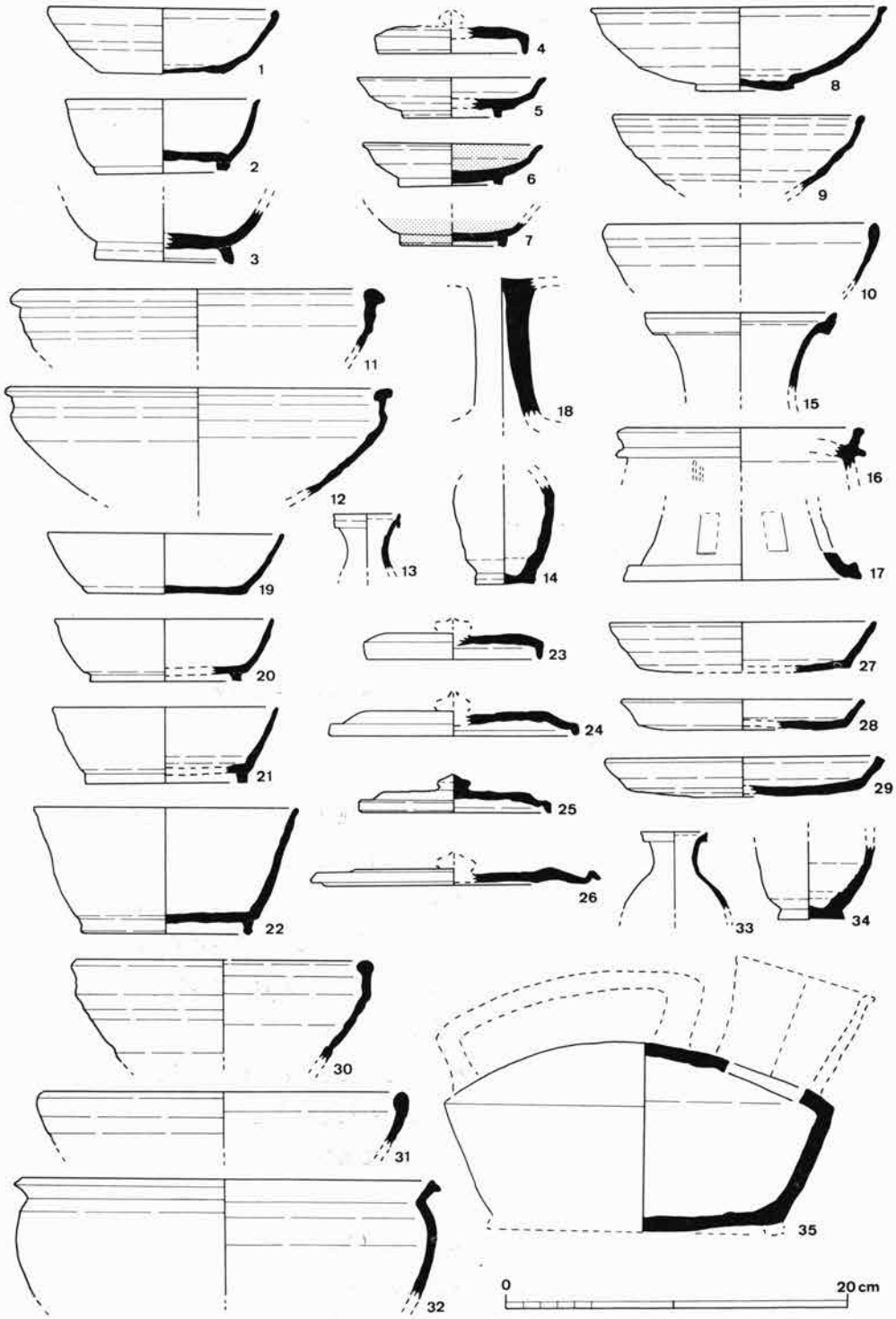
①B地区第1トレンチ灰原出土遺物

椀（9）は，水挽きの痕を明瞭に残すものである。皿（5）は体部に稜をもつもので，高台は削り出しである。皿（6）は，形態的には皿（5）と同様である。内面のみ緑釉を施す。緑釉陶器（7）は，椀とみられるが，小片であり，器形は不明である。削り出し高台をもち，内外面とも施釉している。鉢（19）は口縁端部を肥厚させて丸くおさめる。鉢（11・12）は口縁部が玉縁状になり，体部には水挽きの痕が残る。瓶（13）は，口縁端部を上下にひき出している。壺（15）は，口縁部をN字状に屈曲させている。

以上の遺物は，黒岩1号窯出土遺物に並行するものとみられ，10世紀中葉頃のものとみらる。また，同じトレンチから出土した椀（8）は，糸切り高台をもち，体部に水挽きの痕を残すもので，時期的には上述の遺物に並行するものであろう。

②その他の出土遺物

上述の第1トレンチから出土した遺物として，杯（3）は，底部糸切りの後，外側へ開き気味の貼り付け高台を付すもので，鍋倉第4窯跡群1号窯から同様のものが出土している。蓋（4）は，薬壺蓋形のもので，天井部と口縁部の境が明瞭に屈曲する。瓶（14）は，胴部



第 88 図　出土遺物実測図（1～18：西長尾A・B地区出土，19～35：芦原地区出土）

が卵形であり，腰部にかすかな稜を有する。小柳1号窯出土遺物に同様のものがある。円面硯（17）は，脚部の小片であり，その詳細は不明であるが，数か所のスカシをもつものである。

B地区第2トレンチ出土遺物として，杯（2）は，底部篦切りの後，貼り付け高台を付す。高台の位置は，底部と口縁部の境に近い。芦原窯跡群に並行するものか。椀（1）は，底部糸切りである。11世紀代のものか。円面硯（16）は，小片であり詳細は不明であるが，脚部に篦描き沈線をもつ。

高杯脚部（18）はA地区第2トレンチ出土のものであるが，かなり細手である。現在のところ篠窯跡群出土遺物のうちではその類例をみない。

（2）芦原地区出土遺物（第88図19～35）

この地区出土の須恵器は，昭和55年度に調査された芦原1号窯および3号窯に関係するとみられるもの（第20トレンチ出土）と，今回の調査によって存在が想定される芦原4号窯に関係するもの（第8・10・11トレンチ出土）がある。

①芦原1号窯および3号窯に関係するもの

杯（19）は，高台をもたないものである。体部は外上方に立ち上り，口縁部は丸くおさめている。底部は篦切りで，その後雑ななでを行っている。杯（20・22）は，底部篦切りの後，貼り付け高台を付している。皿（27）は，高台をもたないもので，底部篦切りの後，なで調整している。口縁端部は丸くおさめる。皿（29）は，手法・形態は皿（27）と同様であるが，口縁端部を平坦にしている。このような形態の皿は，芦原窯跡出土遺物によくみうけられる。蓋（25・26）は，口縁端部を屈曲させ，宝珠つまみを有する。天井部には篦切り痕が残り，部分的になで調整する。平瓶（35）は，容量や頸部付け根付近から高台にかけての傾きや体部の器高等から，芦原窯跡出土遺物に類似する。

②芦原4号窯に関係するもの

杯（21）は，底部篦切りの後，貼り付け高台を付す。口縁端部は丸くおさめている。皿（28）は，平底のもので，口縁端部を平坦に仕上げる。蓋（23）は，薬壺蓋形のもので口縁部が真下に屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。蓋（24）は，口縁端部を屈曲させるものである。瓶（33）は，糸切り底であり，底部に×印の篦描きをもつ。瓶（34）は，口縁端部を若干上方へひき出す。鉢（32）は，体部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲するもので，口縁端部は平坦である。鉢（30・31）は，体部に水挽きの痕が残り，口縁端部が玉縁状になる。他の遺物よりも時期が降るものとみられ，混入したものか。

（引原 茂治・岡崎 研一・土橋 誠）

参　考　文　献

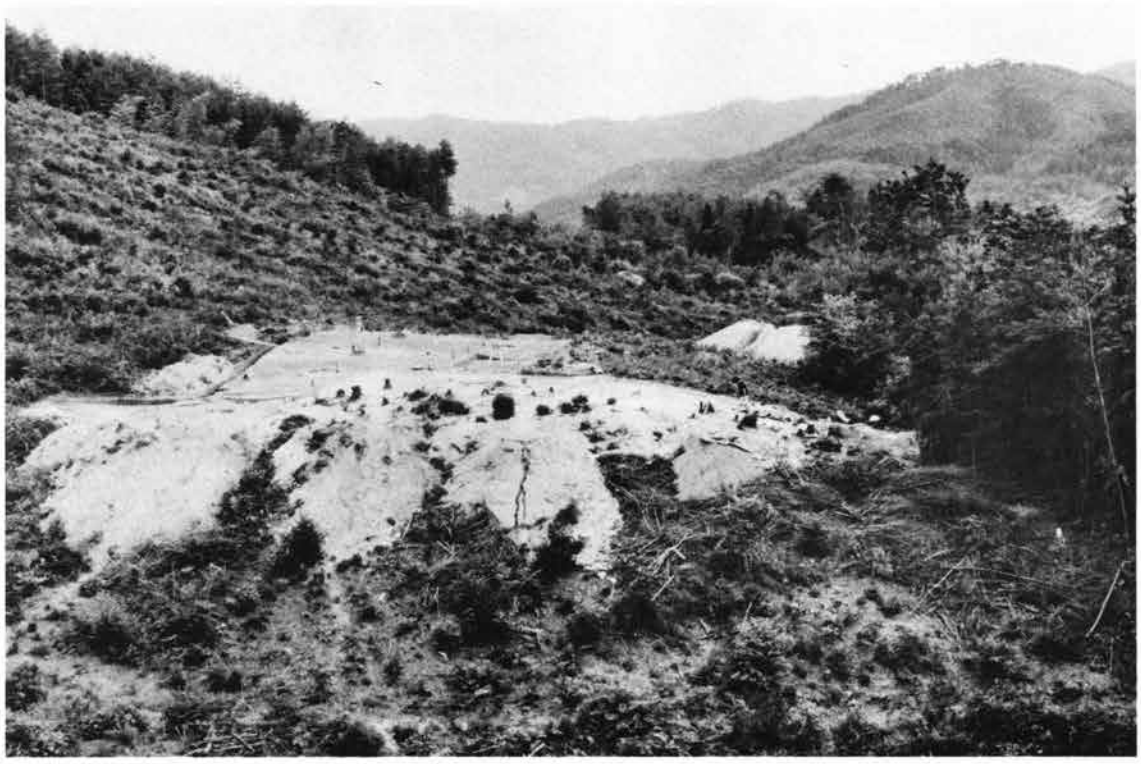
堤　圭三郎「昭和51年度国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」―篠窯跡群―（『府概報』）1977
堤　圭三郎・安藤信策・樋口隆久「昭和52年度国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」―前山１号窯跡・黒岩１号窯跡発掘調査　前山・禿尾山試掘調査―（『府概報』）1978
安藤信策「昭和53年度国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」―掛ケ谷・芦原・西長尾試掘調査―（『府概報』）1979
安藤信策「亀岡篠緑釉焼成窯」（『丹波史談』105号）1979
安藤信策・水谷寿克・山口　博「昭和54年度篠窯跡群発掘調査概要」―小柳１号窯跡発掘調査西長尾・西山試掘調査―（『府概報』）1980
安藤信策・水谷寿克・岡崎研一・平本　哲・広川徹也「昭和55年度篠窯跡群発掘調査概要」―小柳４号窯跡・前山２号３号窯跡・芦原１号窯跡発掘調査　西山・石原畑試掘調査―（『府概報』）1981
水谷寿克「亀岡市篠窯跡群」（『埋文情報』創刊号）1982
石井清司「篠西長尾窯跡発掘調査概要」（『埋文情報』２号）1982
石井清司「篠西長尾５・６号窯発掘調査概要」（『埋文情報』３号）1982
堤　圭三郎「亀岡市篠窯跡群」（『丹波史談』112号）1982
引原茂治「篠西長尾奥１号窯跡」・「篠黒岩窯状遺跡」（『埋文情報』５号）1982
水谷寿克・石井清司・久保田健士「篠窯跡群発掘調査概要」―西長尾窯跡群発掘調査―（『京都府遺跡調査概報』）1982

府概報：『埋蔵文化財発掘調査概報』
埋文情報：『京都府埋蔵文化財情報』

図　　版

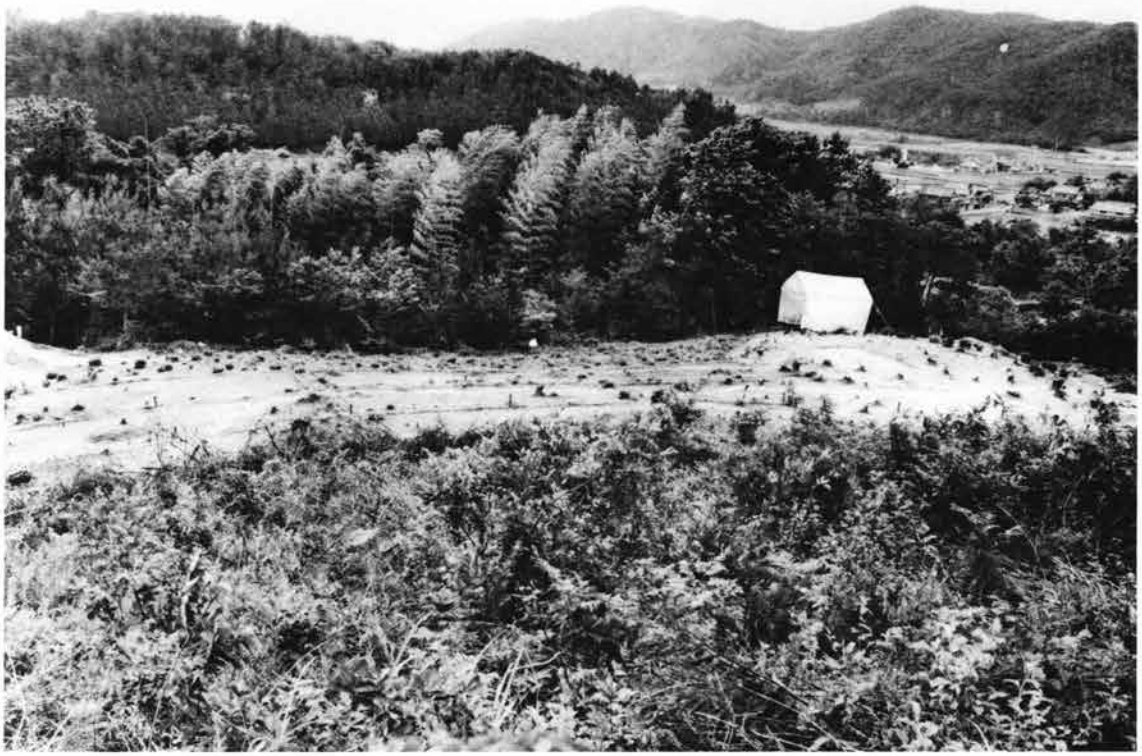
図版第1　洞楽寺遺跡

(1) 洞楽寺遺跡近景（南から）

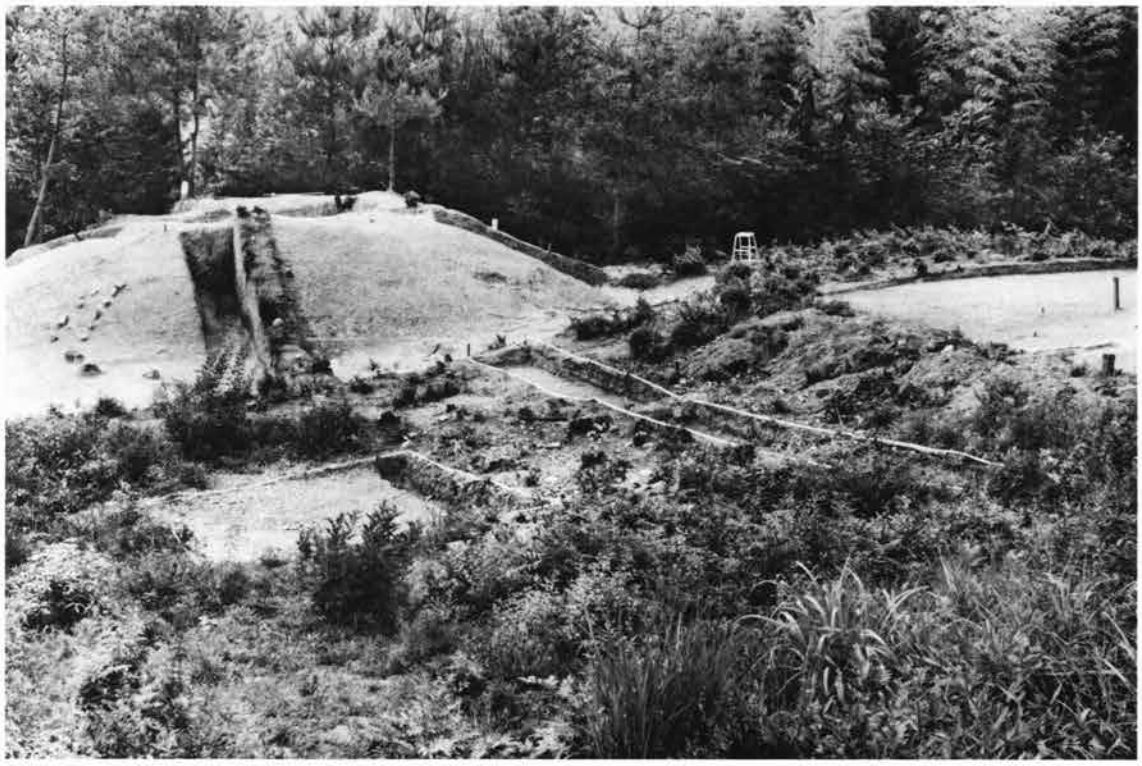


(2) 洞楽寺遺跡・洞楽寺古墳遠景（洞楽寺北遺跡から南を望む）

図版第2　洞楽寺遺跡

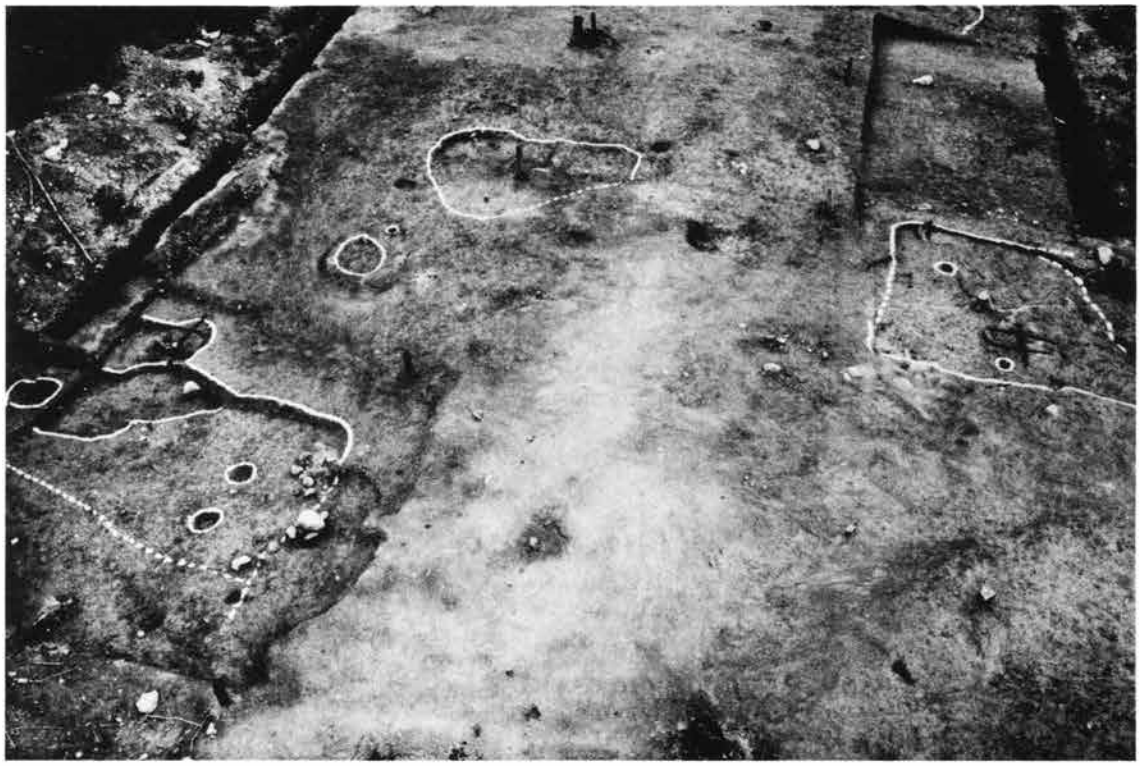


(1) 洞楽寺遺跡全景（東から）

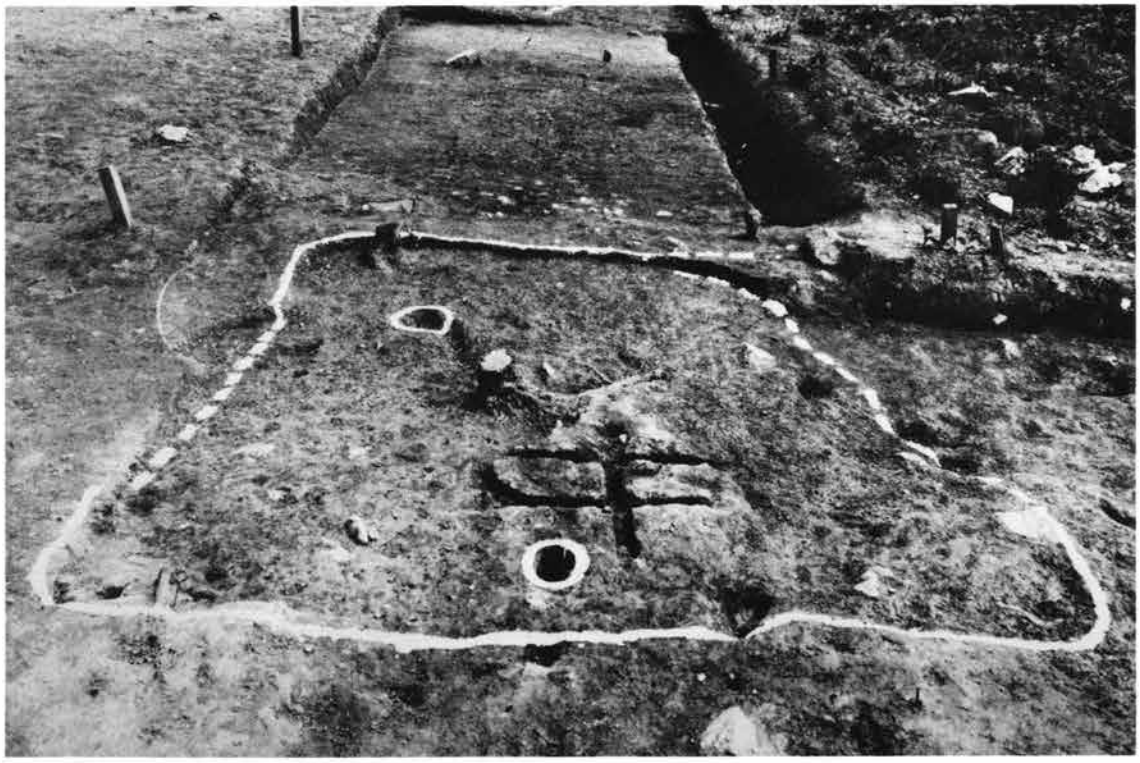


(2) 洞楽寺遺跡と洞楽寺古墳（東から）

図版第3　洞楽寺遺跡



(1)　調査地北半検出遺構（北から）



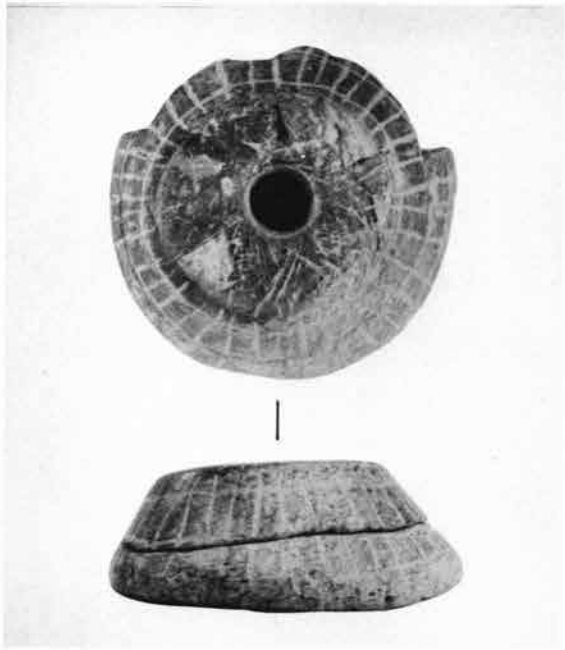
(2)　ＳＢ03全景（北から）

図版第4　洞楽寺遺跡

(1)　ＳＢ02全景（西から）

(2)　ＳＢ02内かまど（北西から）

図版第5　洞楽寺遺跡



出土遺物

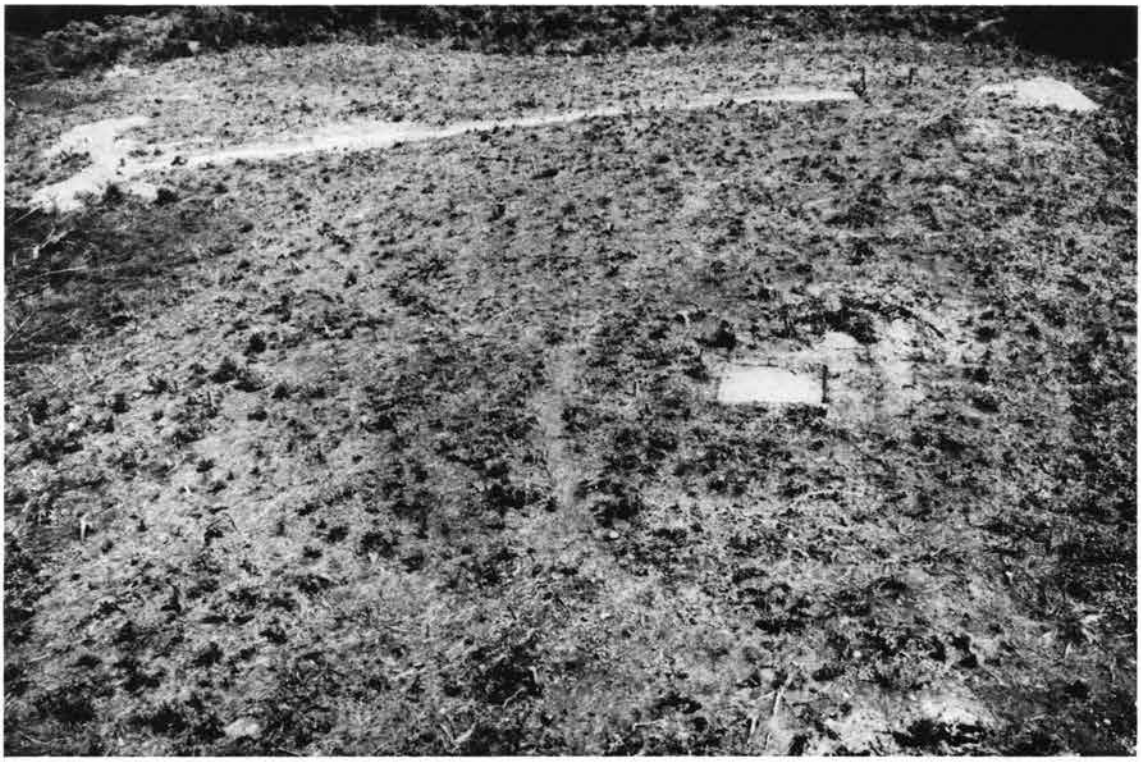
図版第6　洞楽寺北遺跡

(1) 洞楽寺北遺跡遠景（洞楽寺遺跡から北を望む）

(2) 洞楽寺北遺跡全景（西から）

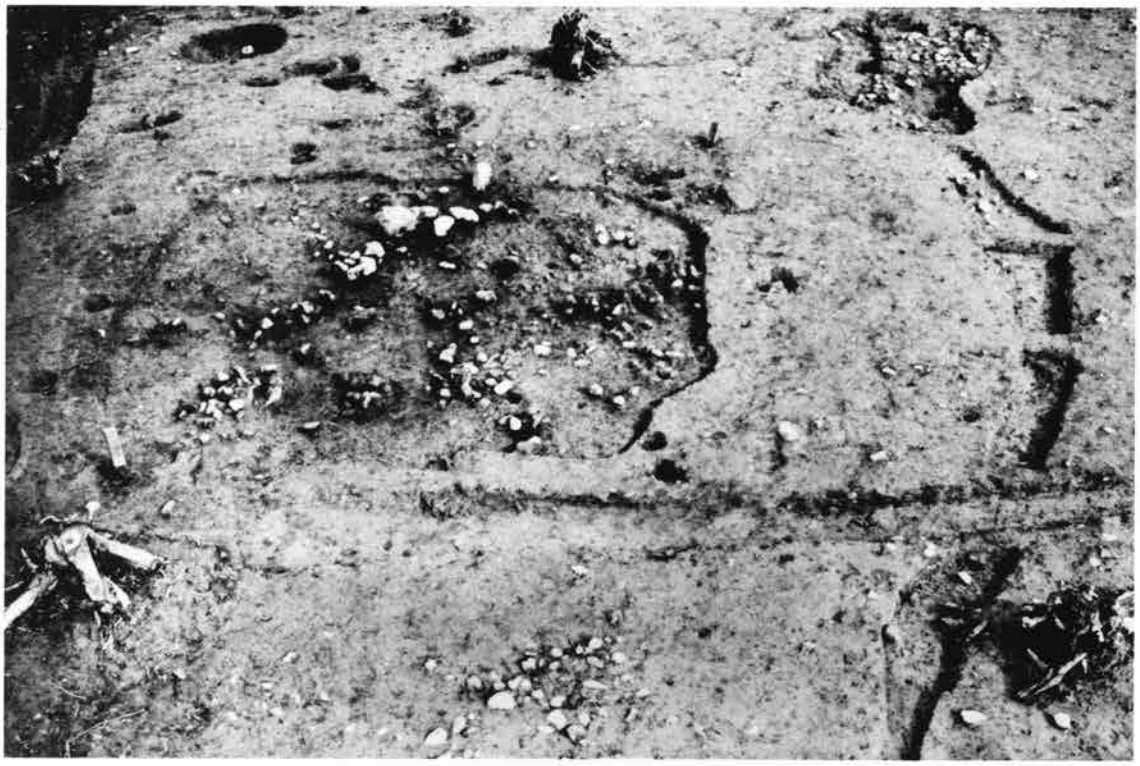
図版第7　ケシケ谷遺跡

(1) 調査前北半部（南から）



(2) 調査前中央部（南から）

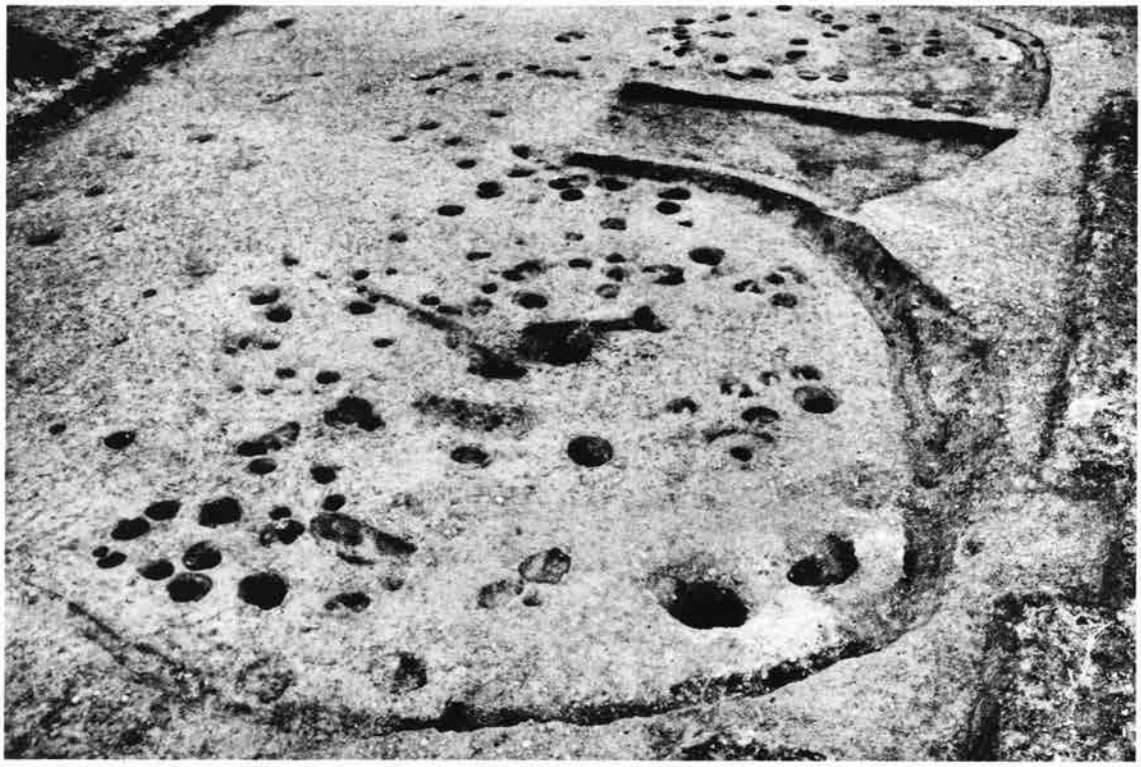
図版第8　ケシケ谷遺跡



(1)　SB02・SD05（南から）

(2)　SB119（北から）

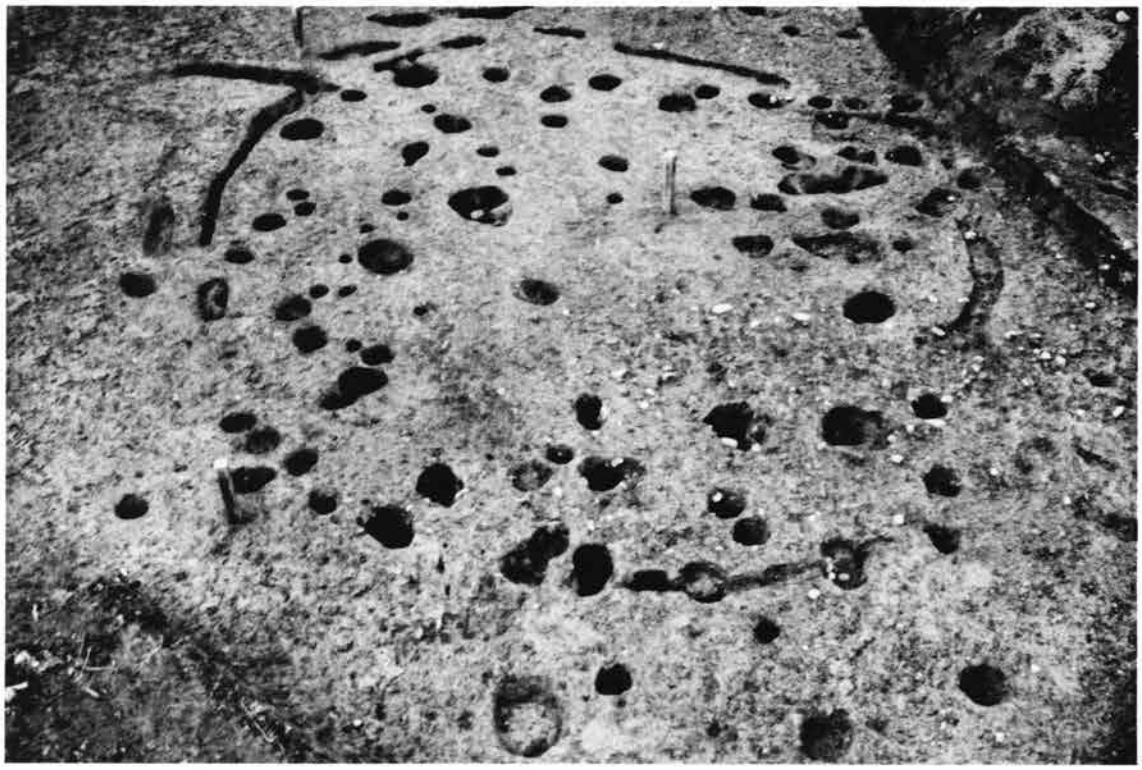
図版第9　ケシケ谷遺跡



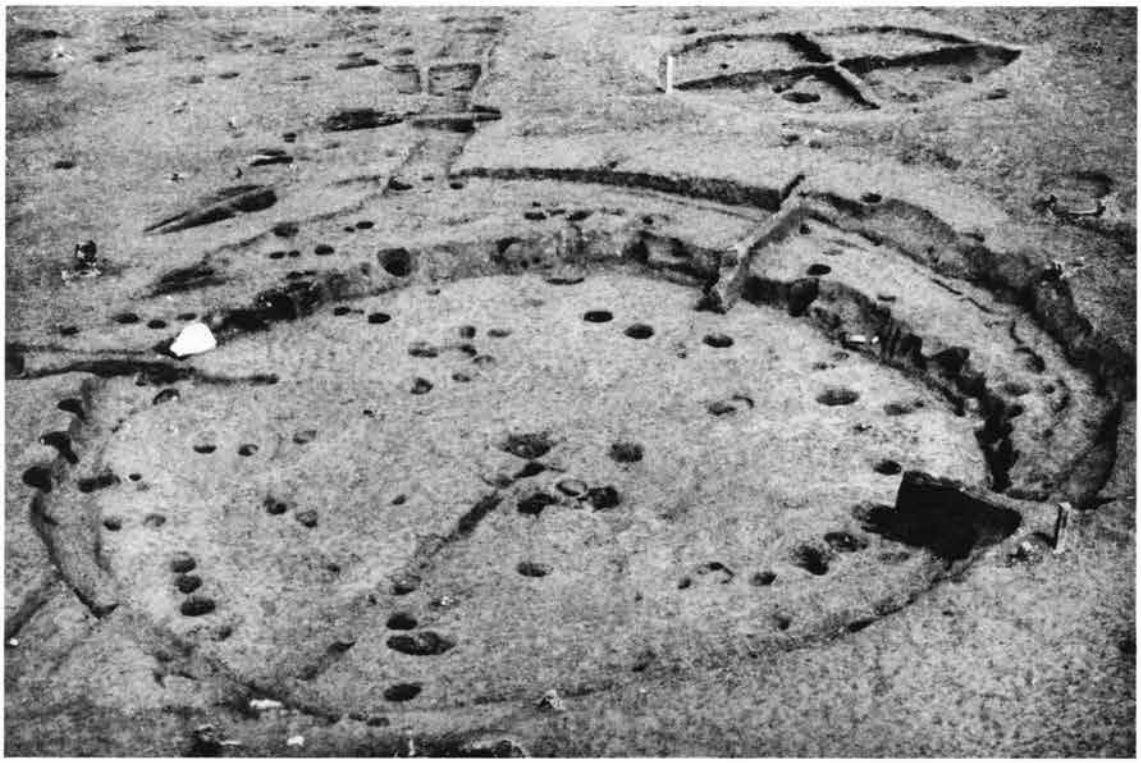
(1)　ＳＢ118・ＳＢ138全景（南から）

(2)　ＳＢ138全景（西から）

図版第10　ケシケ谷遺跡



(1)　ＳＢ136全景（南から）



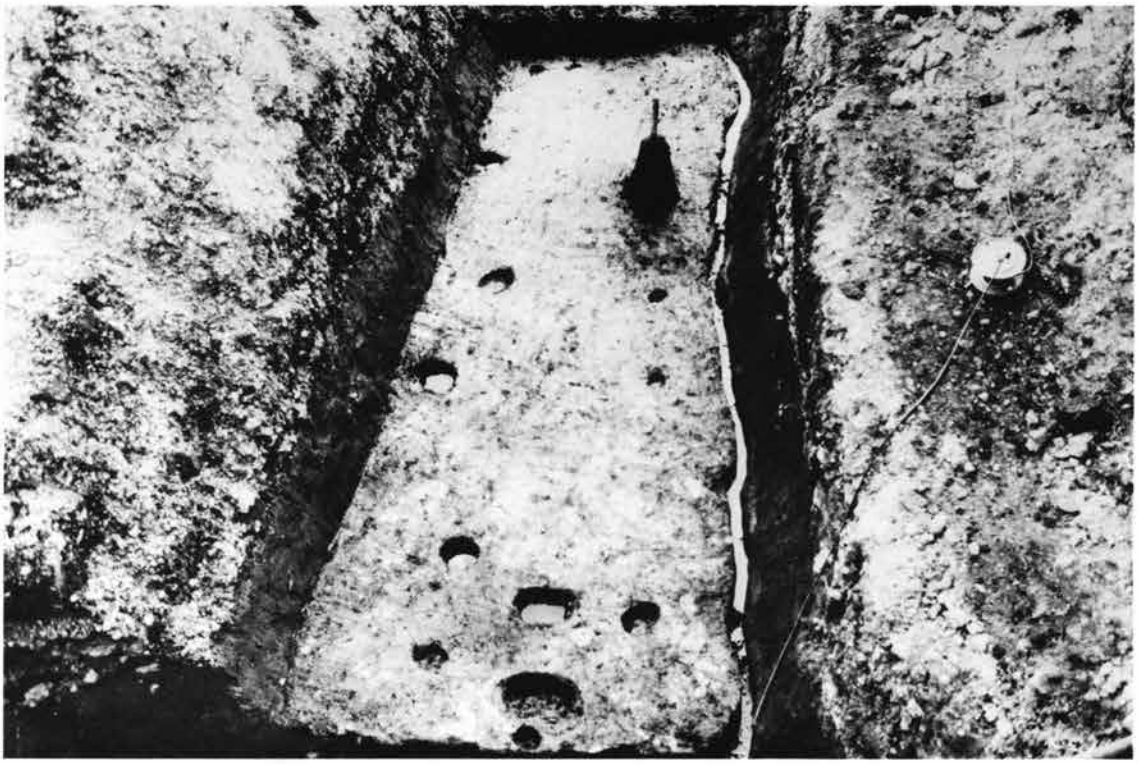
(2)　ＳＢ72・ＳＢ96・ＳＢ135全景（南から）

図版第11　ケシケ谷遺跡

(1) 出土土器（ＳＤ74内）

(2) 出土石鏃

図版第12　土師南遺跡



(1) 柱穴検出状況（東から）

(2) Cトレンチ東壁（西から）

(1) 出土遺物（土錘・土師器・須恵器 他）

(2) 出土遺物（中国製陶磁器・瓦器・土師器 他）

図版第14　中山城跡

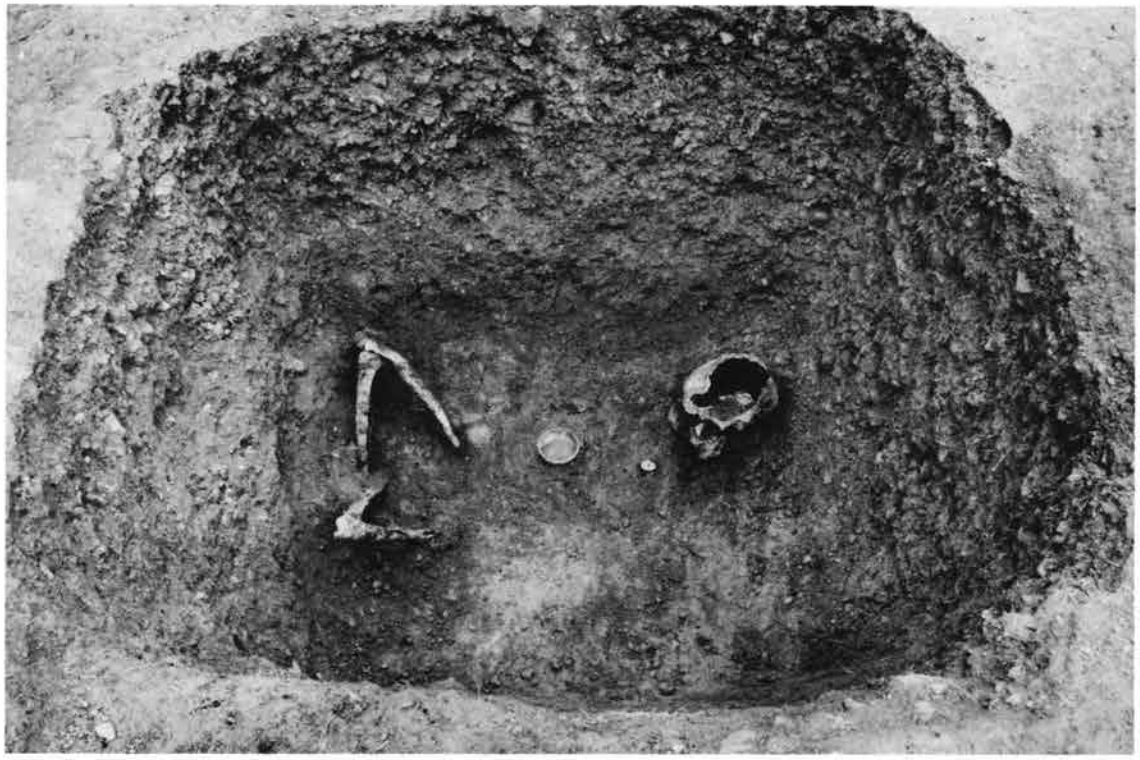
中山城跡全景（航空写真）

図版第15　中山城跡

(1)　A地区調査前（南東から）

(2)　B・C地区調査前（南東から）

(1)　A地区古墓（北から）



(2)　A－1号墓 人骨出土状況

図版第17　中 山 城 跡

(1)　A－2号墓 遺物出土状況

(2)　A－3号墓 遺物出土状況

(1) B－1号墓 集石検出状況（北から）

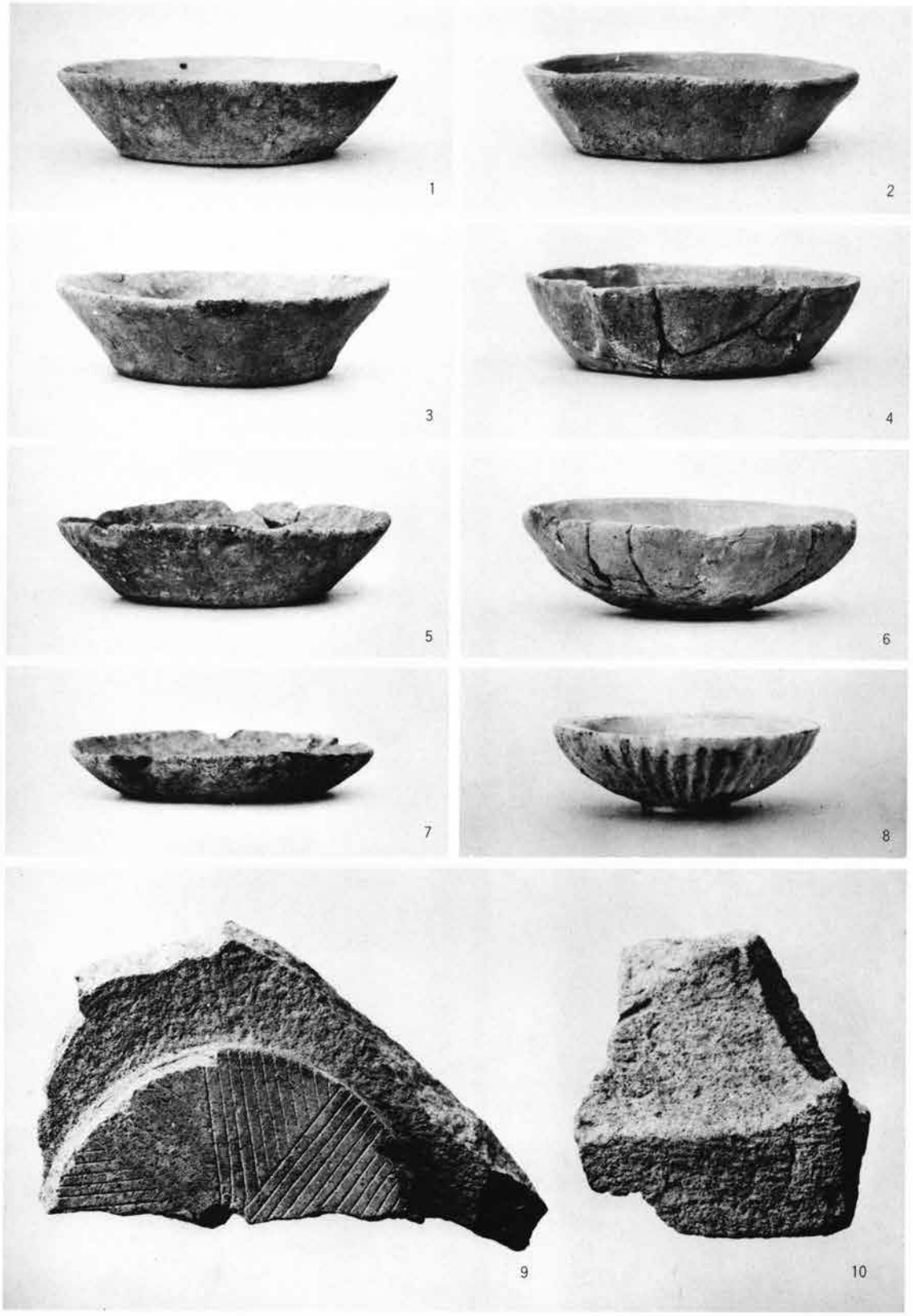
(2) B－2・3・4号墓（北西から）

図版第19　中山城跡

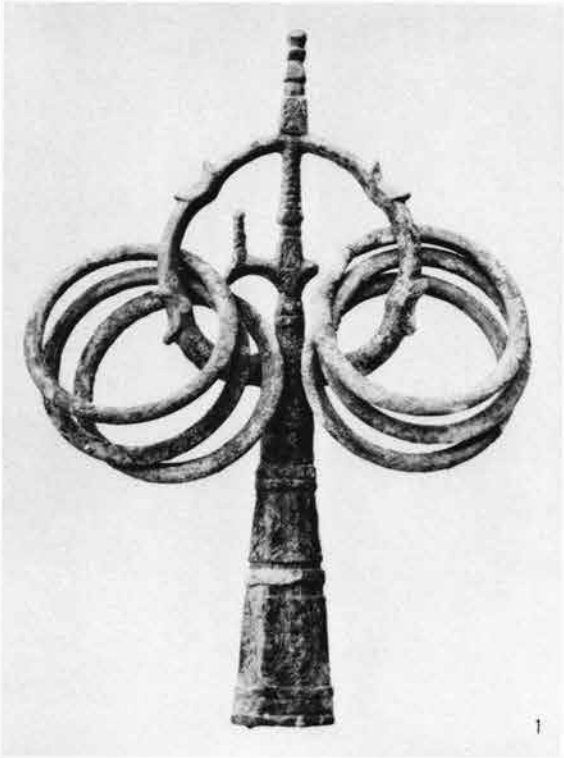
(1)　B地区完掘状況（北から）

(2)　C地区 堀切り（北から）

図版第20　中山城跡

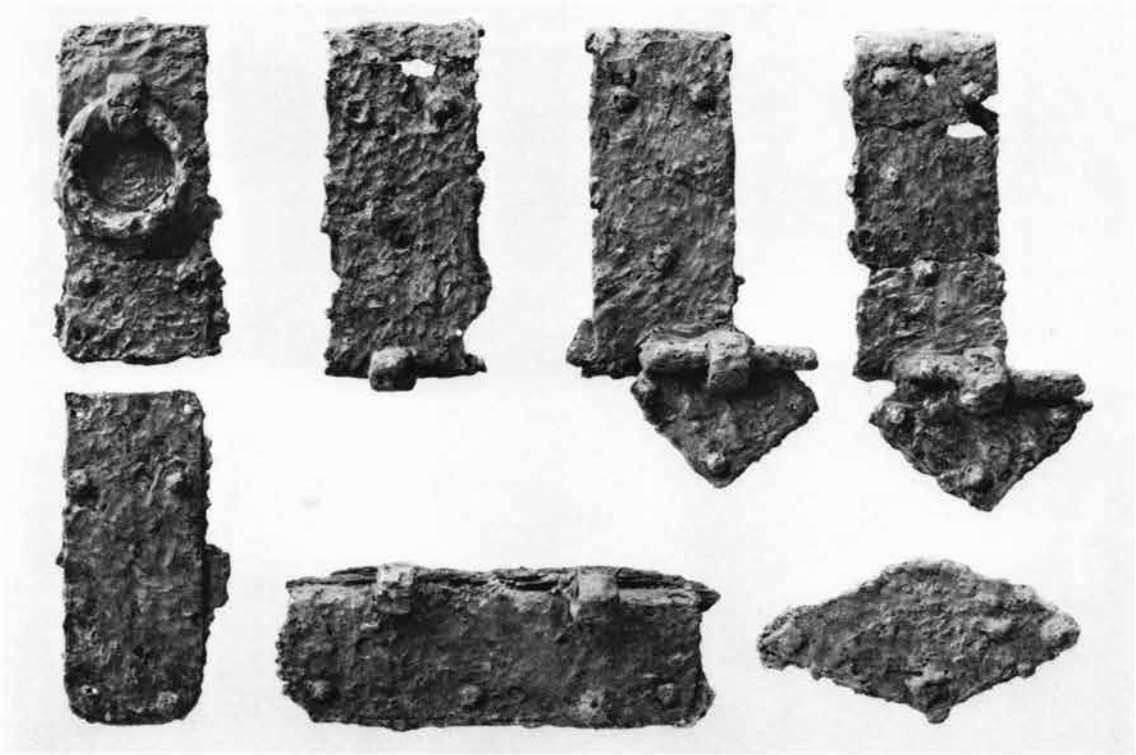


1～7. 土師皿　8. 紅皿　9. 石臼　10. 火輪（五輪塔）

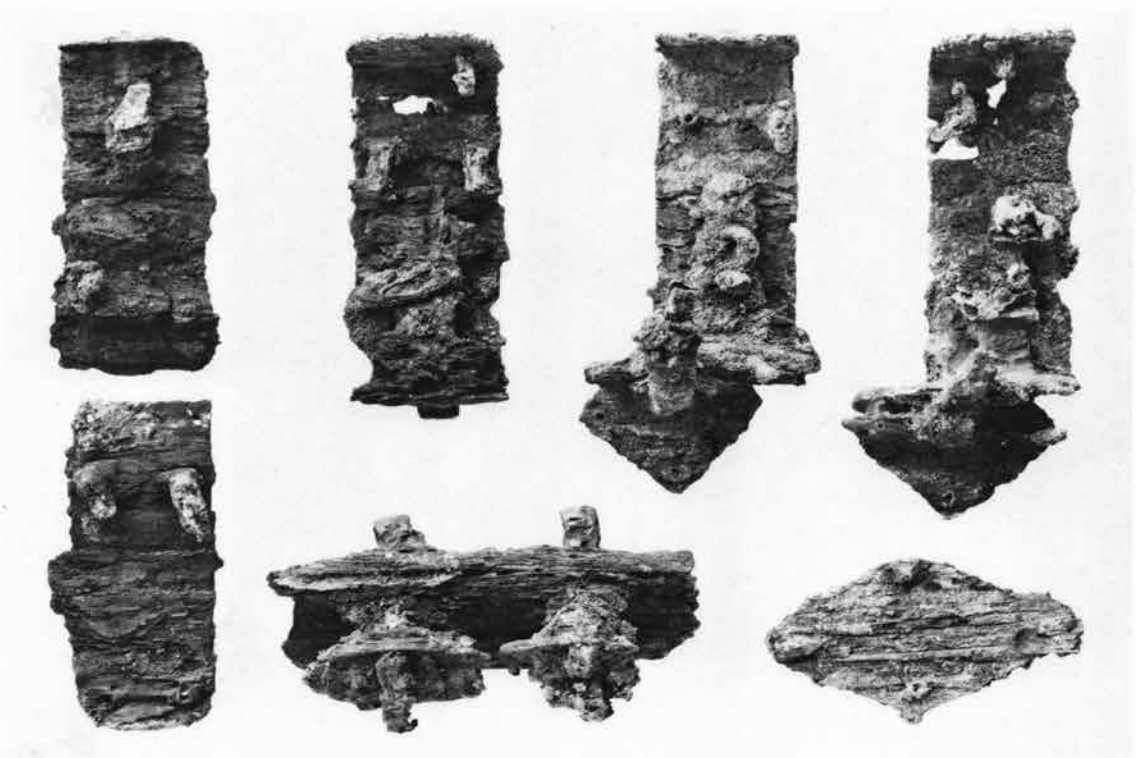


(1) 1．錫状頭　2．銅鉢

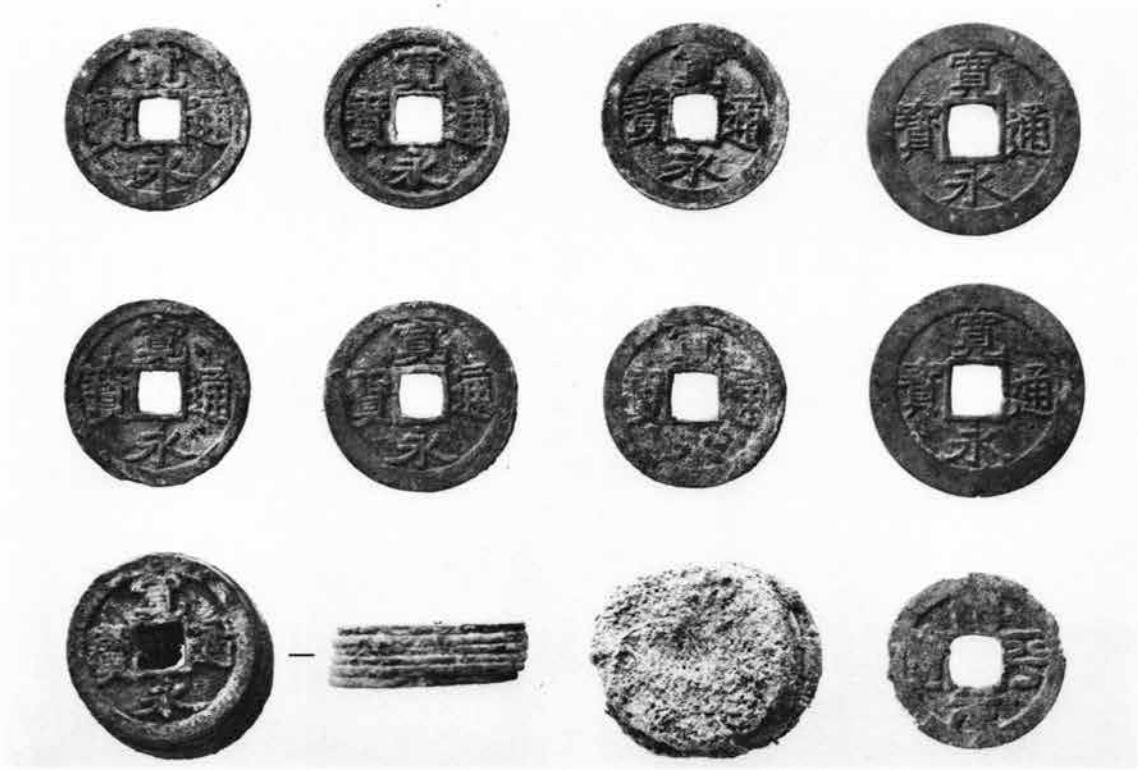
(2) 櫃金具



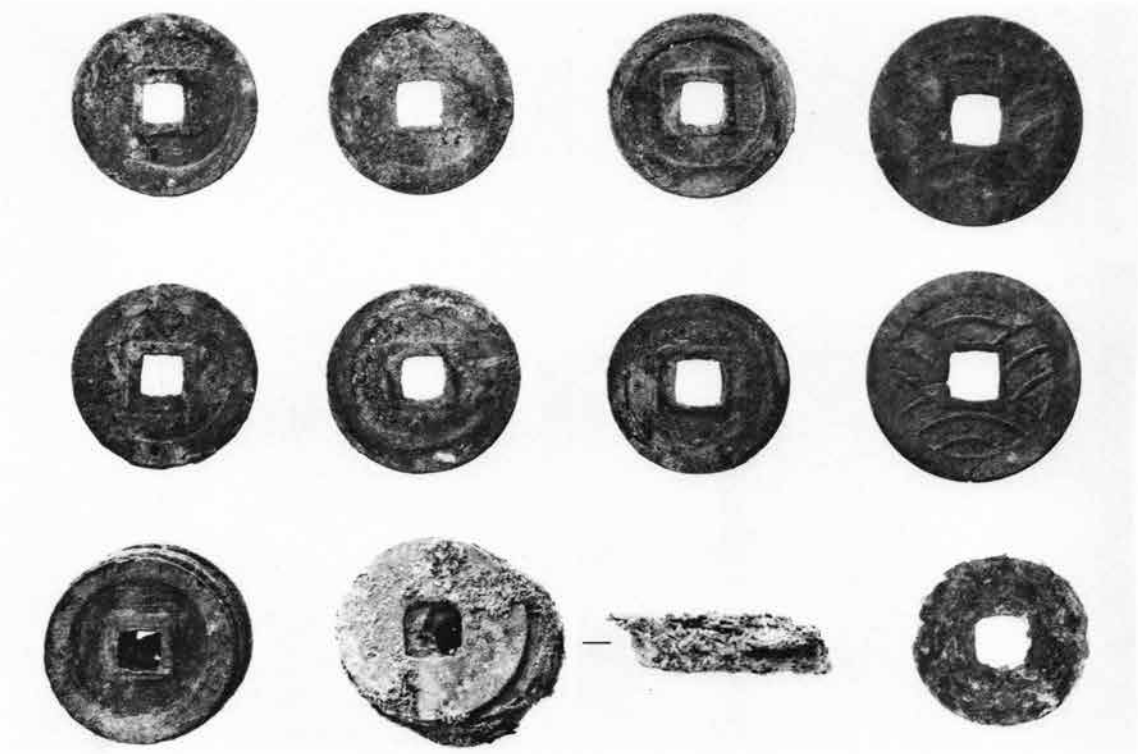
(1) 櫃金具（表）



(2) 櫃金具（裏）



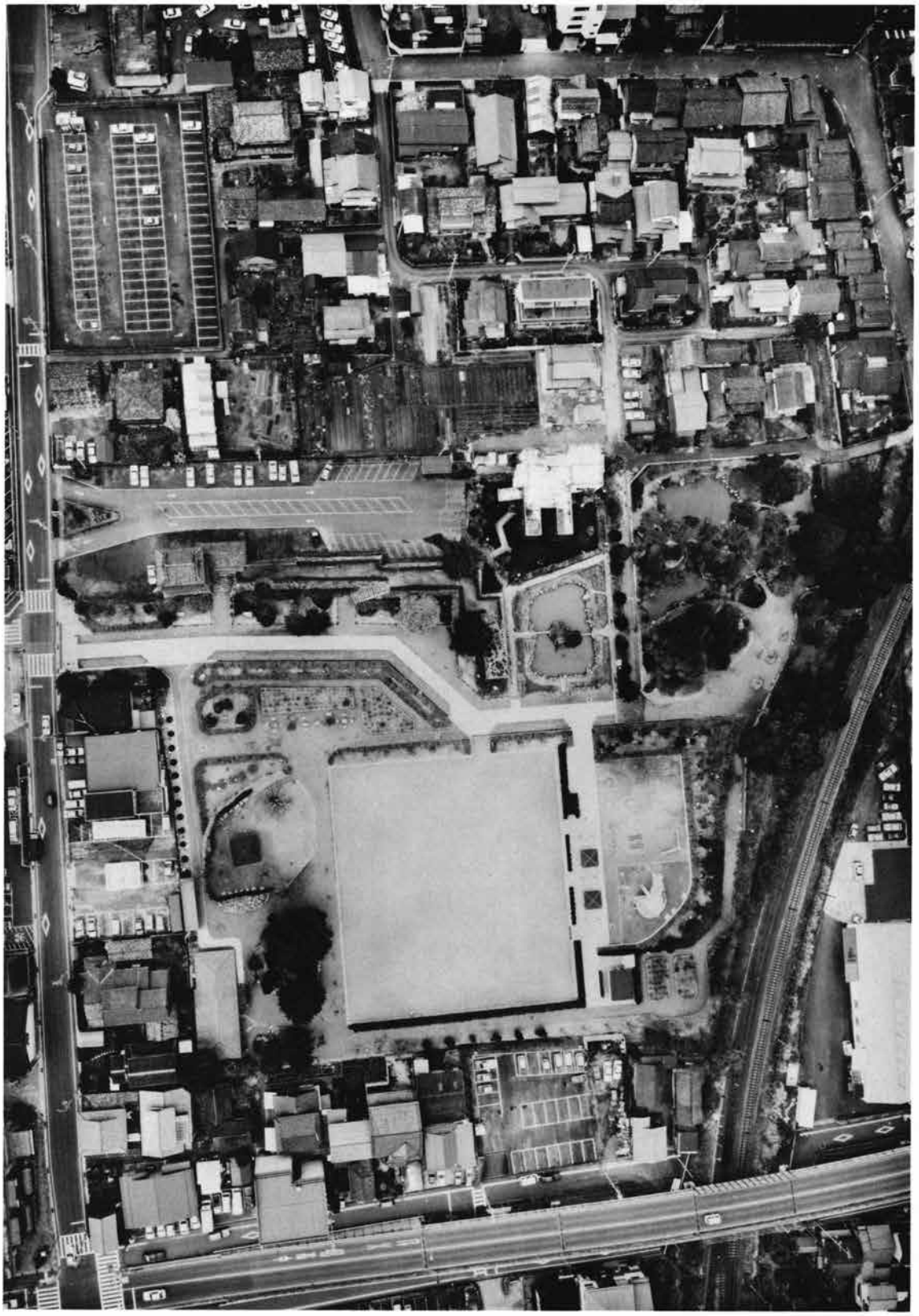
(1) 古銭（表）



(2) 古銭（裏）

田辺城跡全景（航空写真）

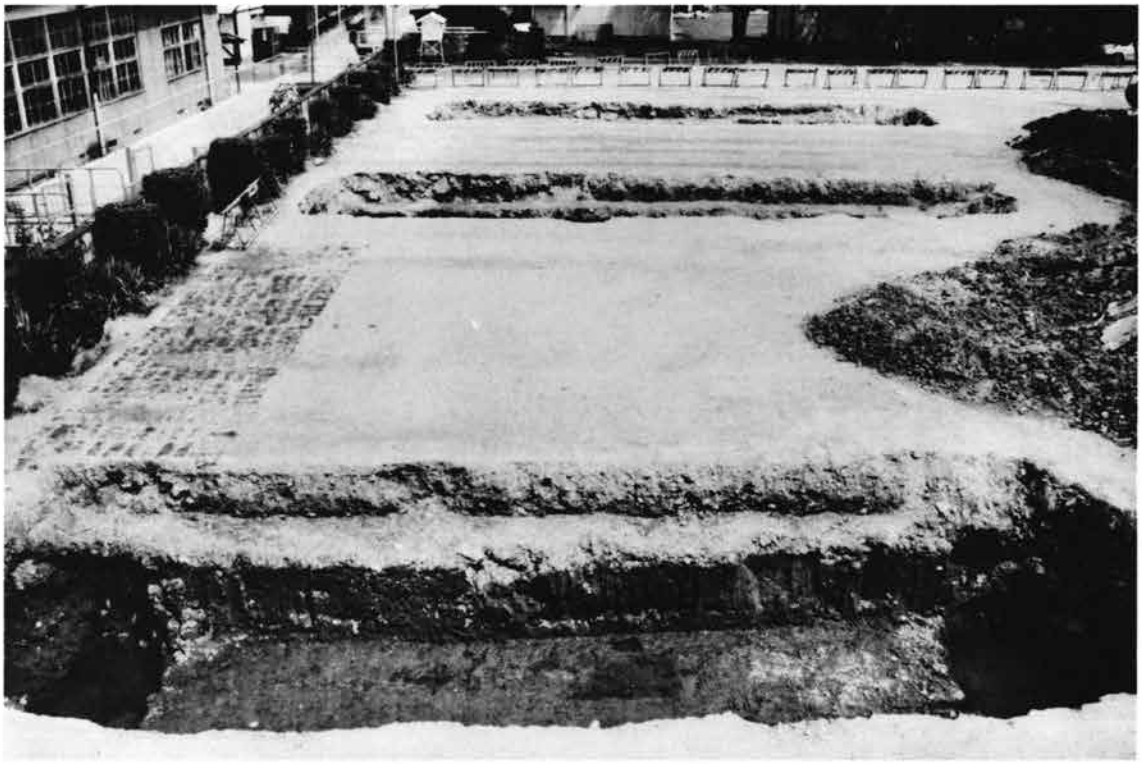
図版第25　田 辺 城 跡 第3次



田辺城跡本丸跡付近（航空写真）

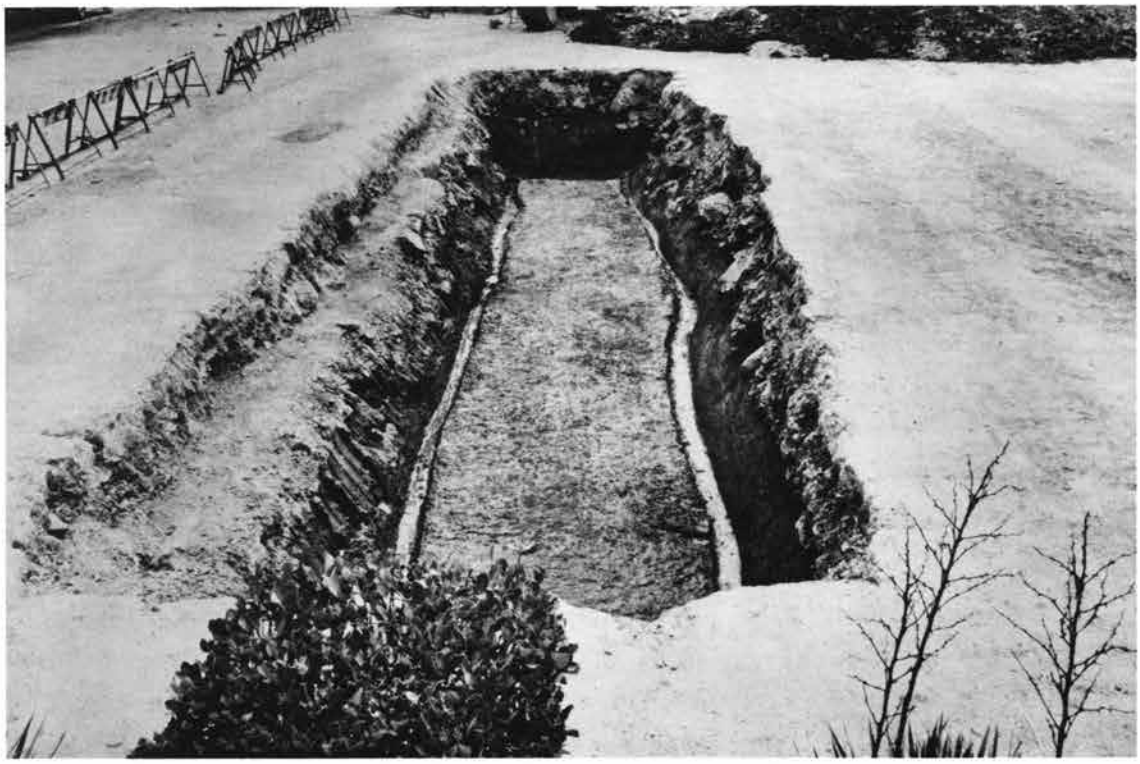
図版第26　田 辺 城 跡 第3次

(1) 調査地全景（北から）

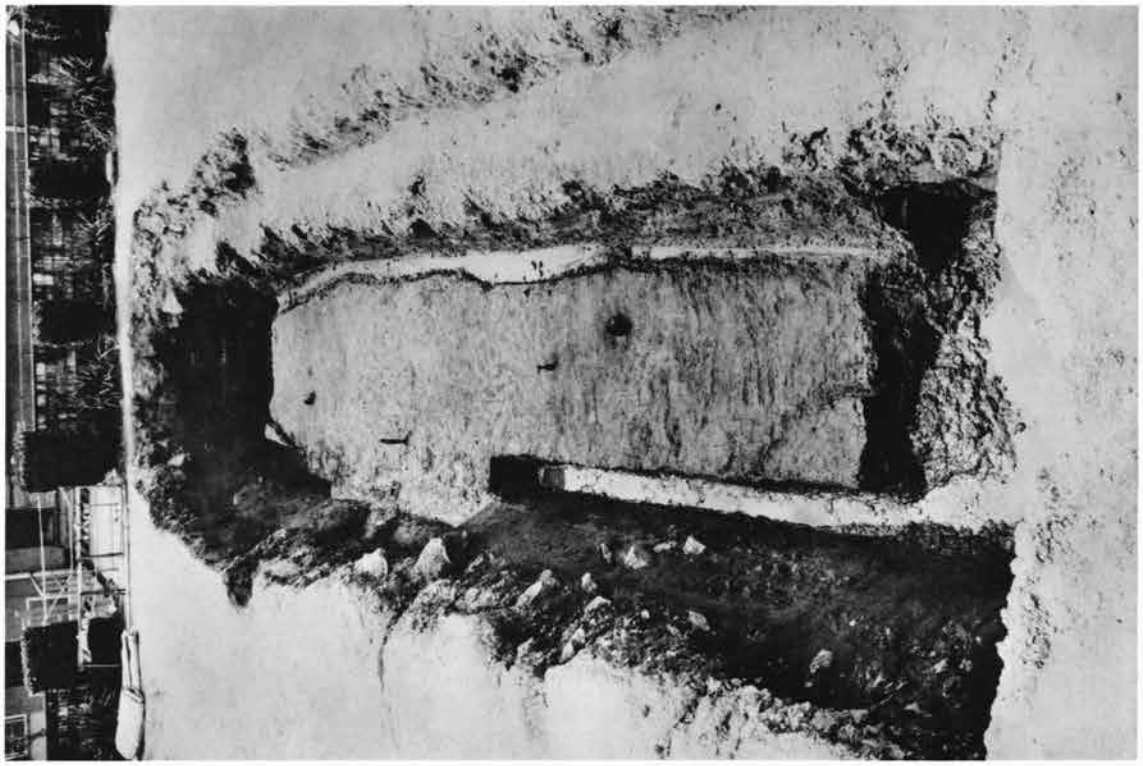


(2) 調査地全景（南から）

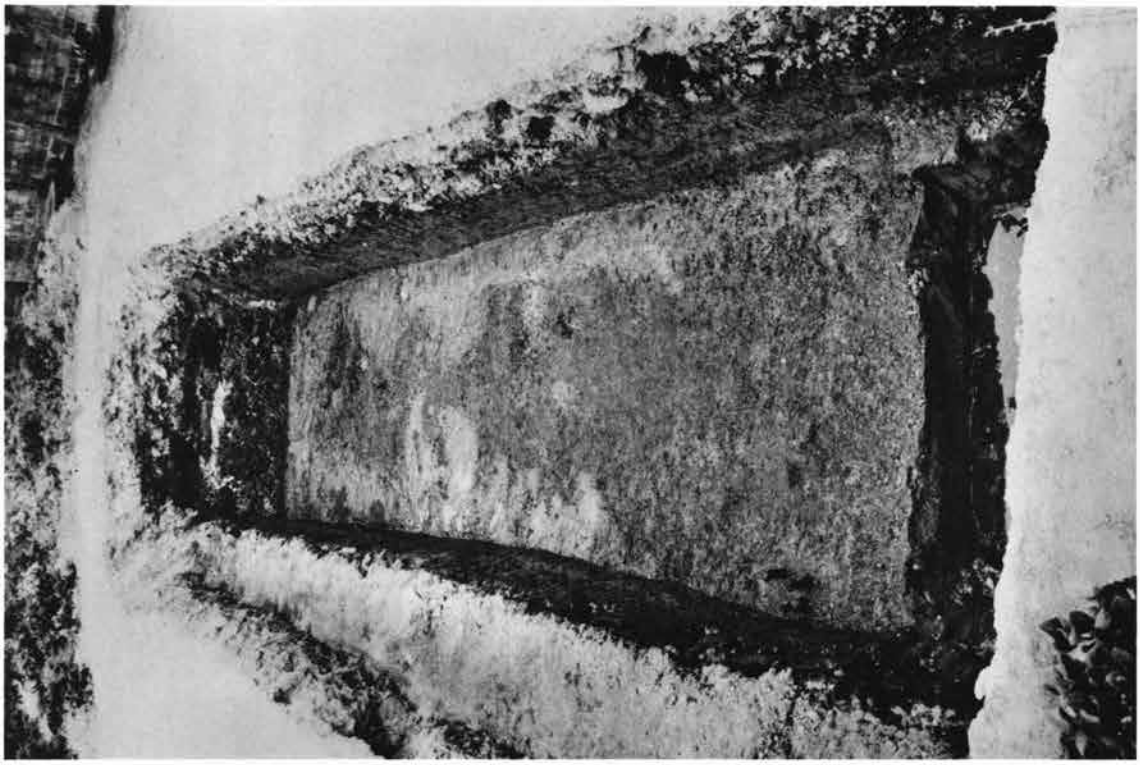
(1) 旧三の丸堀(静渓川)とトレンチ設営状況（南から）



(2) Cトレンチ全景（西から）



(2) Bトレンチ全景（東から）



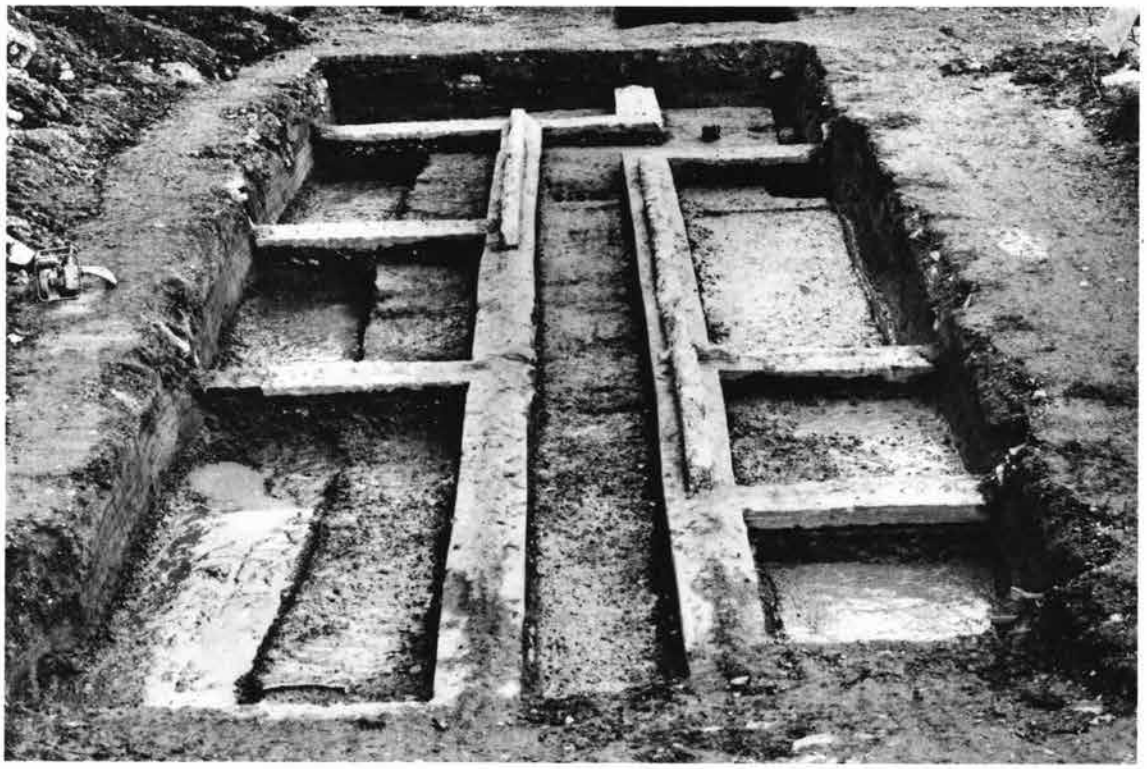
(1) Aトレンチ全景（西から）

図版第29　田 辺 城 跡 第4次

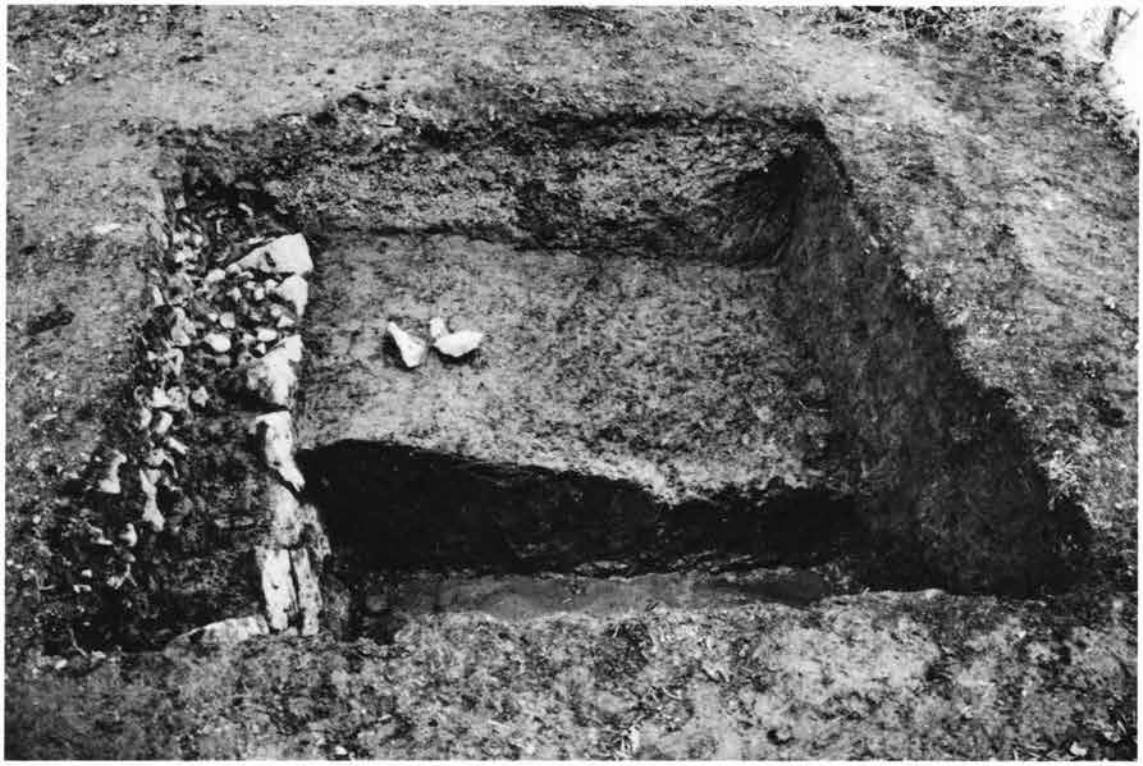
(1) 調査前状況（西から）

(2) 調査状況（東から）

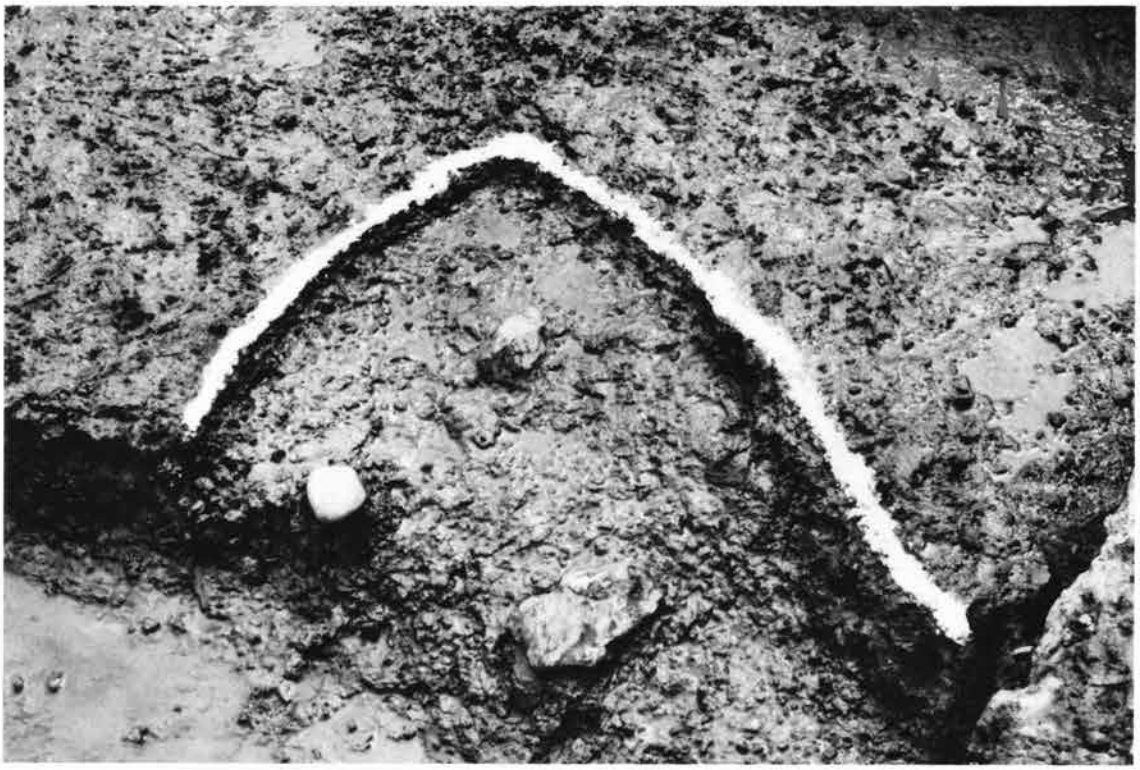
図版第30　田 辺 城 跡 第4次



(1) 調査状況（西から）

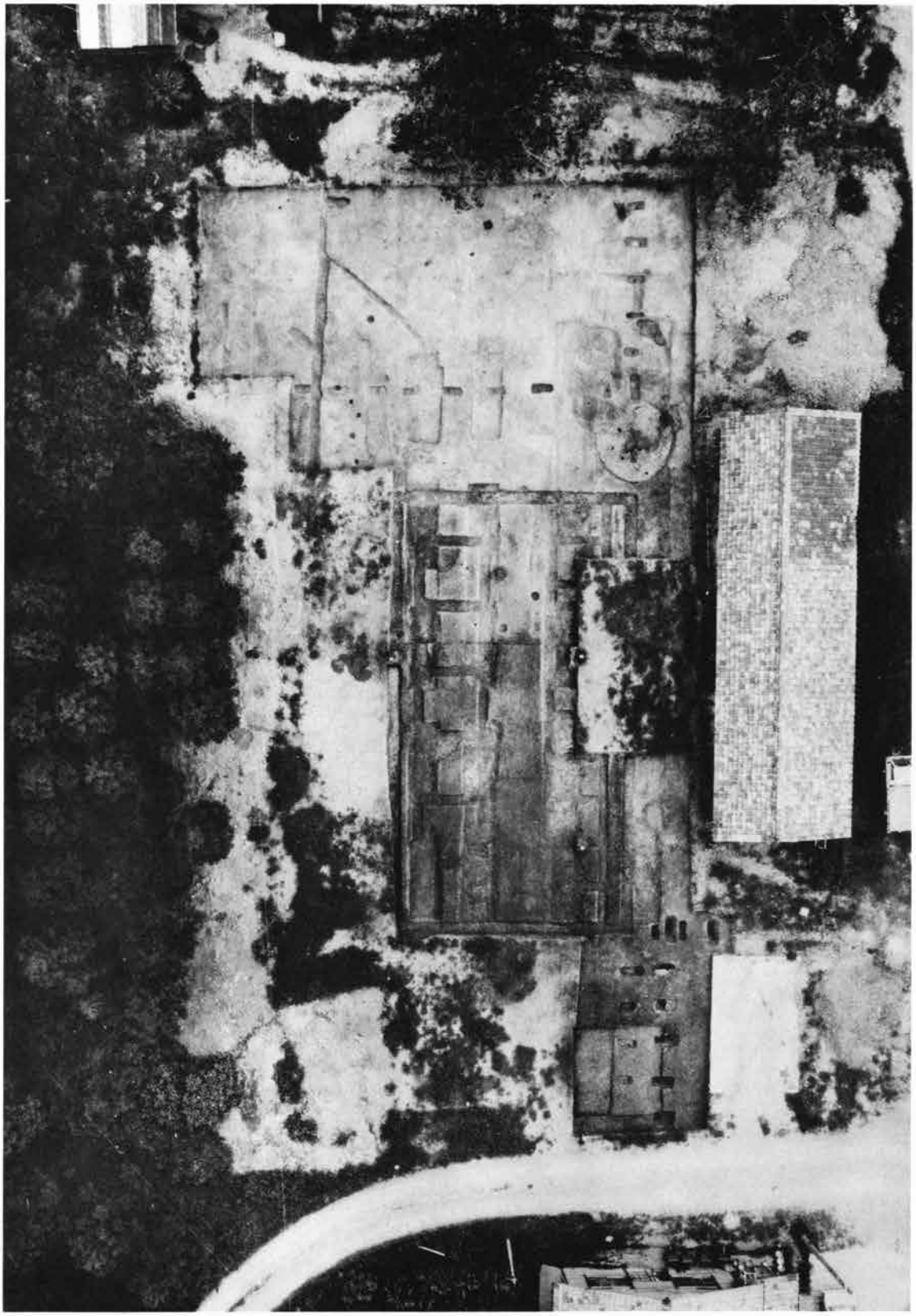


(2) 拡張グリッド調査状況（南から）



(1) 土坑1（北西から）

(2) 調査地土層断面



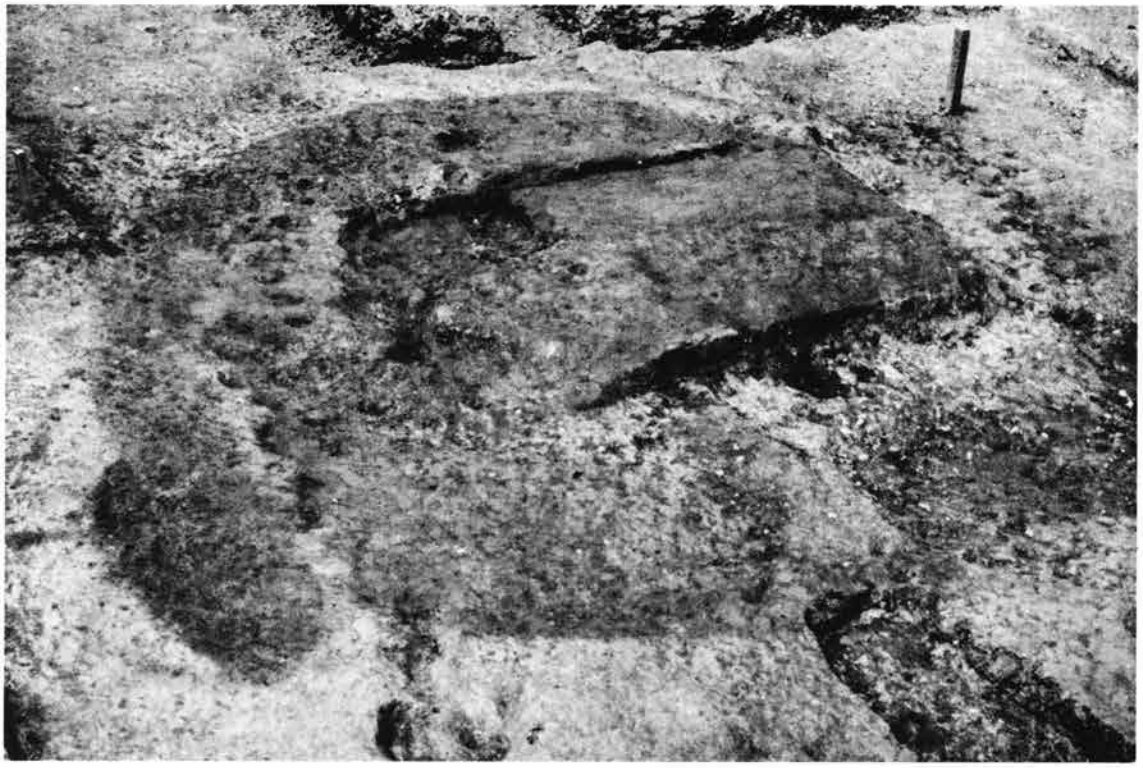
調査地全景（航空写真　左が北）

図版第33　蒲生遺跡

(1) 調査前全景（南西から）

(2) 調査前全景（北東から）

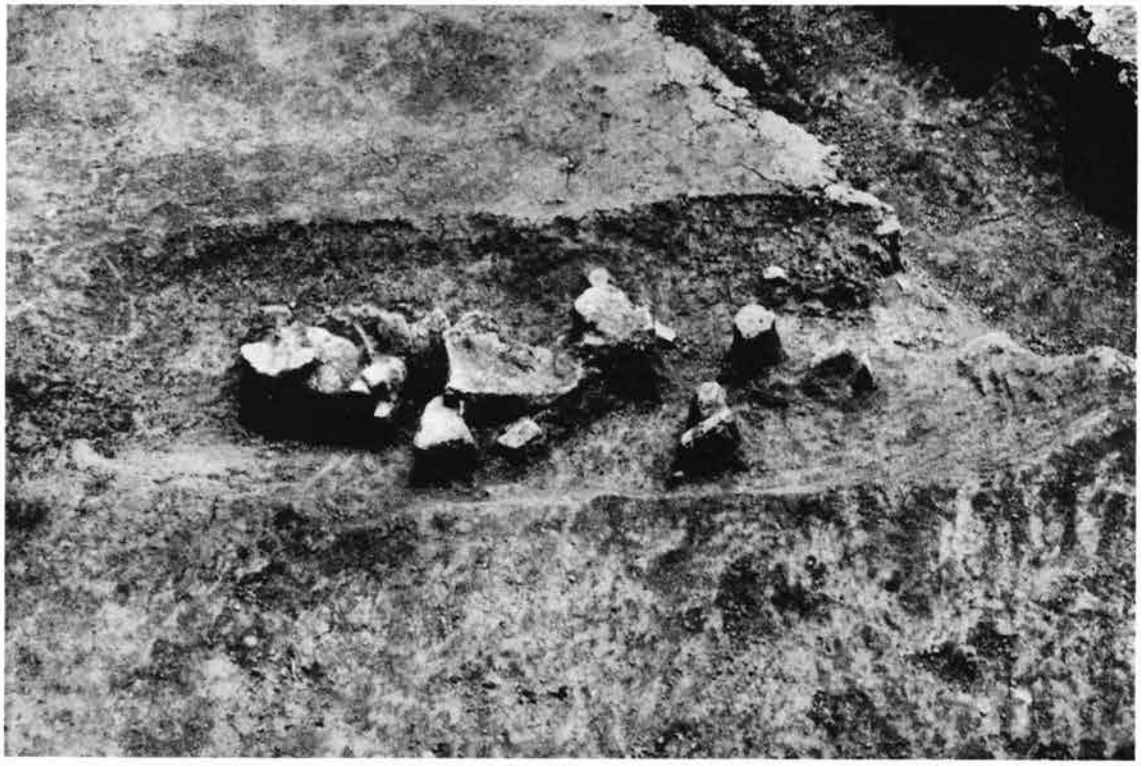
図版第34　蒲生遺跡



(1) 竪穴式住居跡ＳＢ05検出状況（南東から）

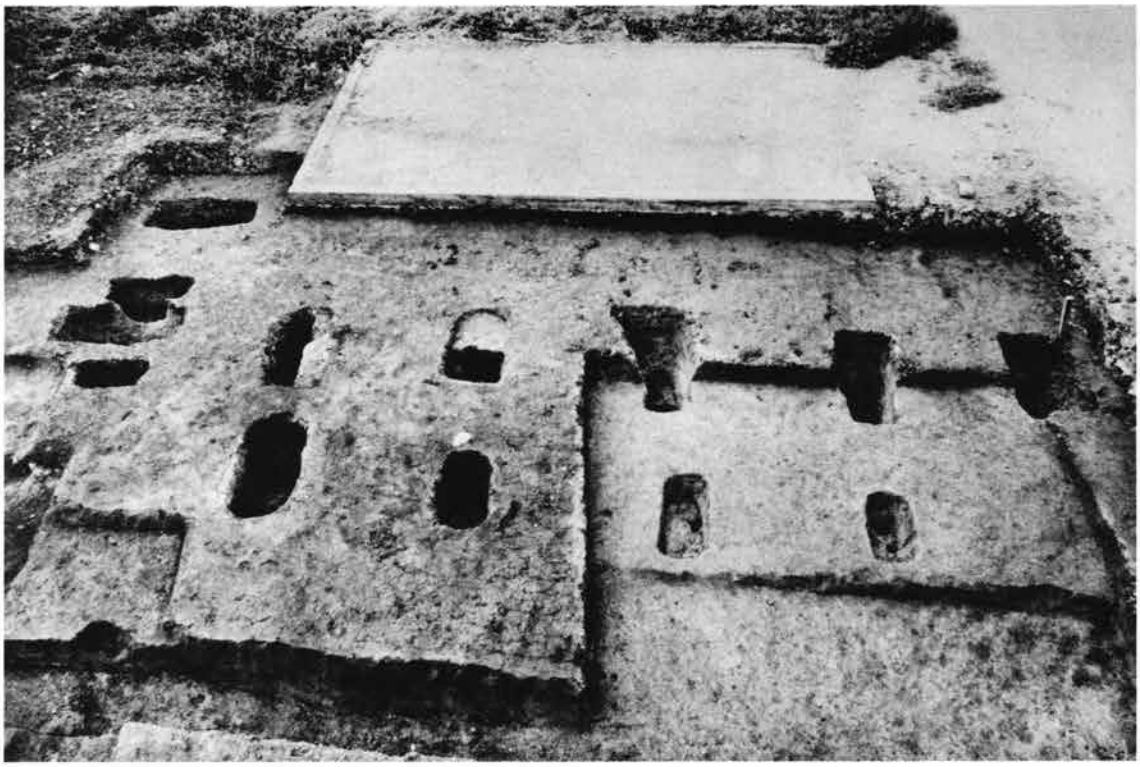
(2) 竪穴式住居跡ＳＢ05（北東から）

図版第35　蒲生遺跡



(1) 土坑ＳＫ02（北西から）

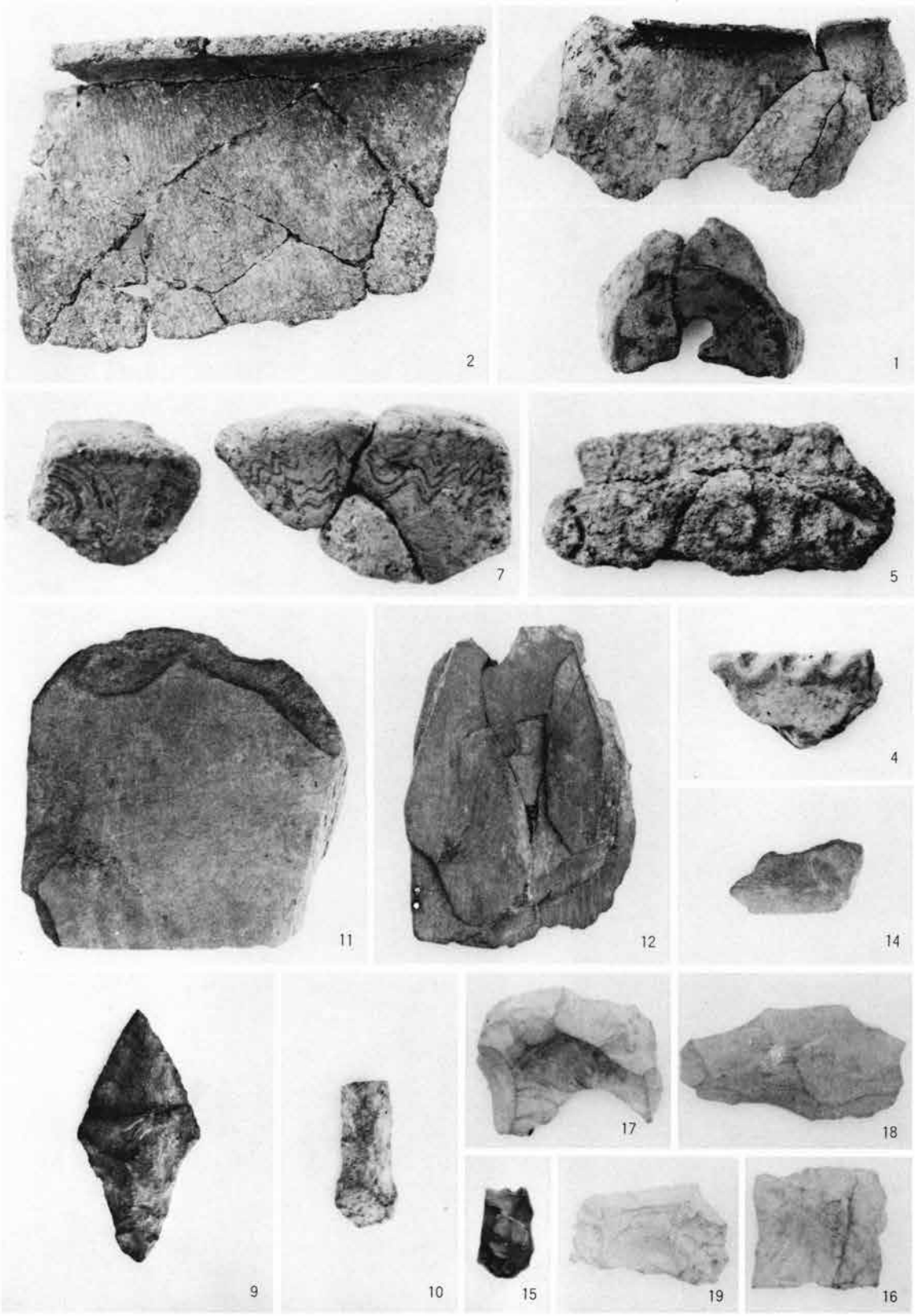
(2) 土坑ＳＫ04（南西から）



(1) 掘立柱建物跡ＳＢ06（北から）

(2) 柵列跡 ＳＡ07（南西から）

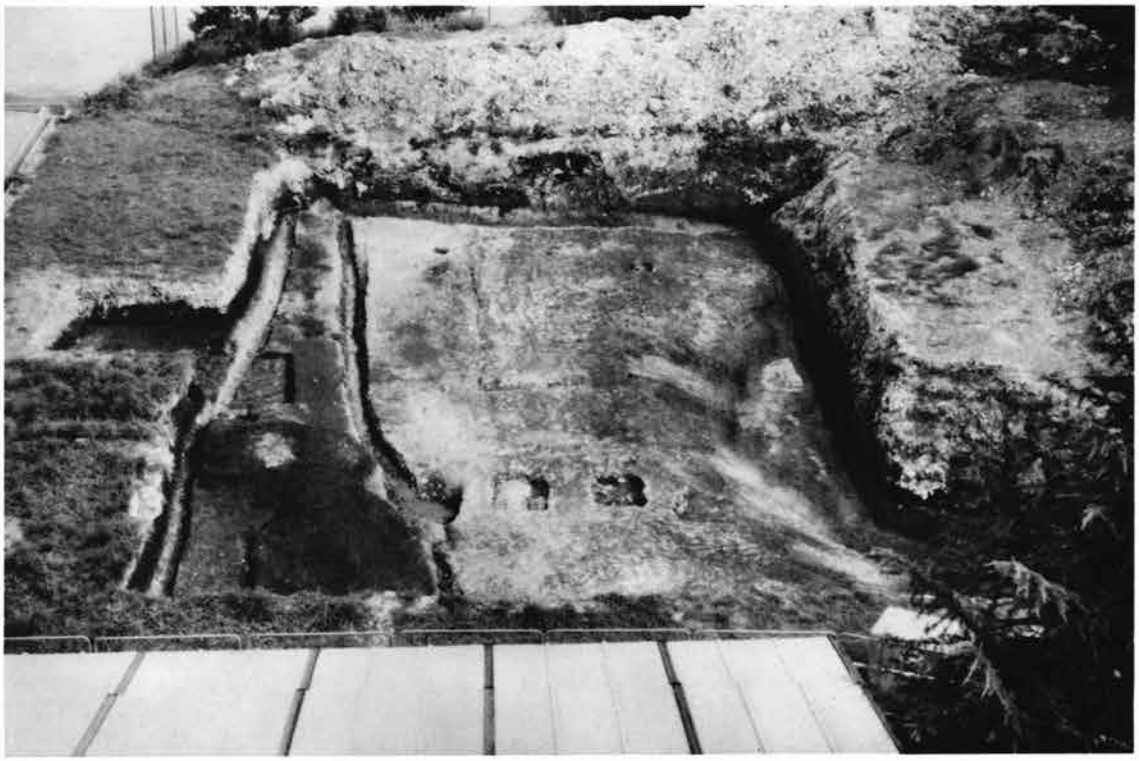
図版第37　蒲生遺跡



出土遺物

図版第38　上 中 遺 跡

(1) 調査地全景（西から）



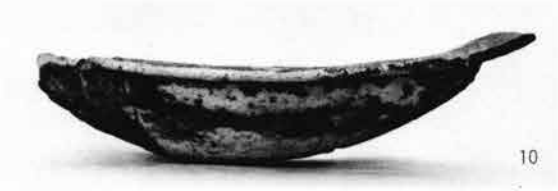
(2) トレンチ全景（北西から）

(1) P1・P2土壙完掘状況（南東から）

(2) 川跡全景（南東から）

出土遺物(1)
1：黒褐色土（包含層）出土　2～6：川跡出土

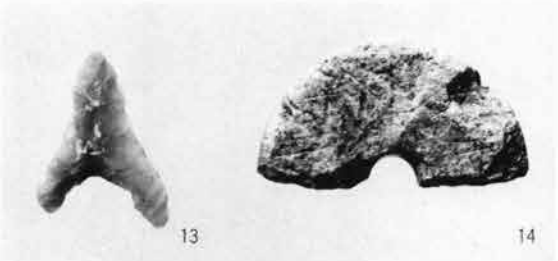
7


10

11

8

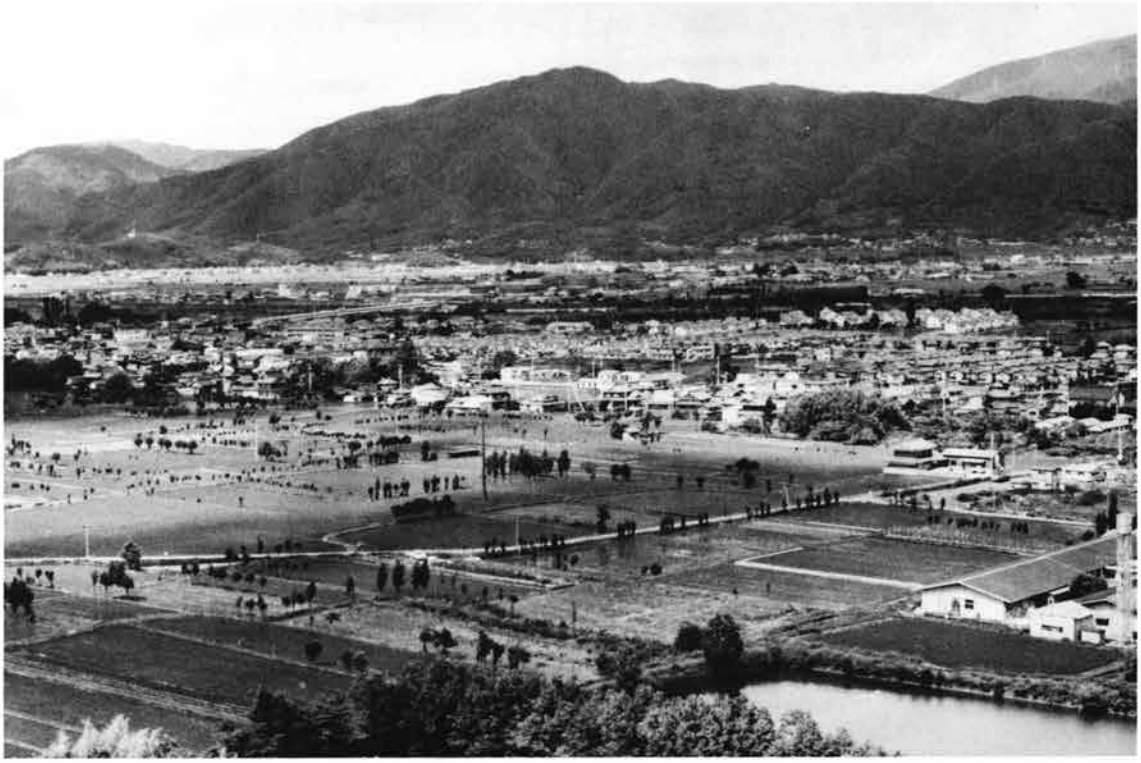
12


13 14

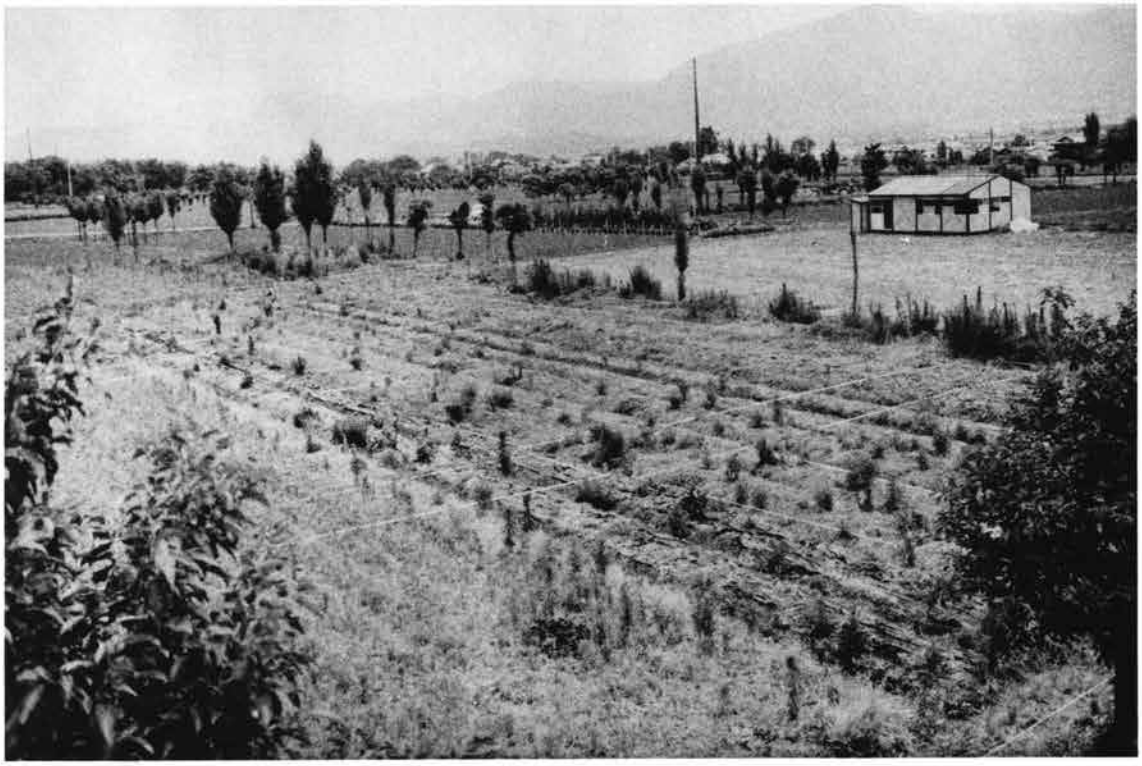
9

15

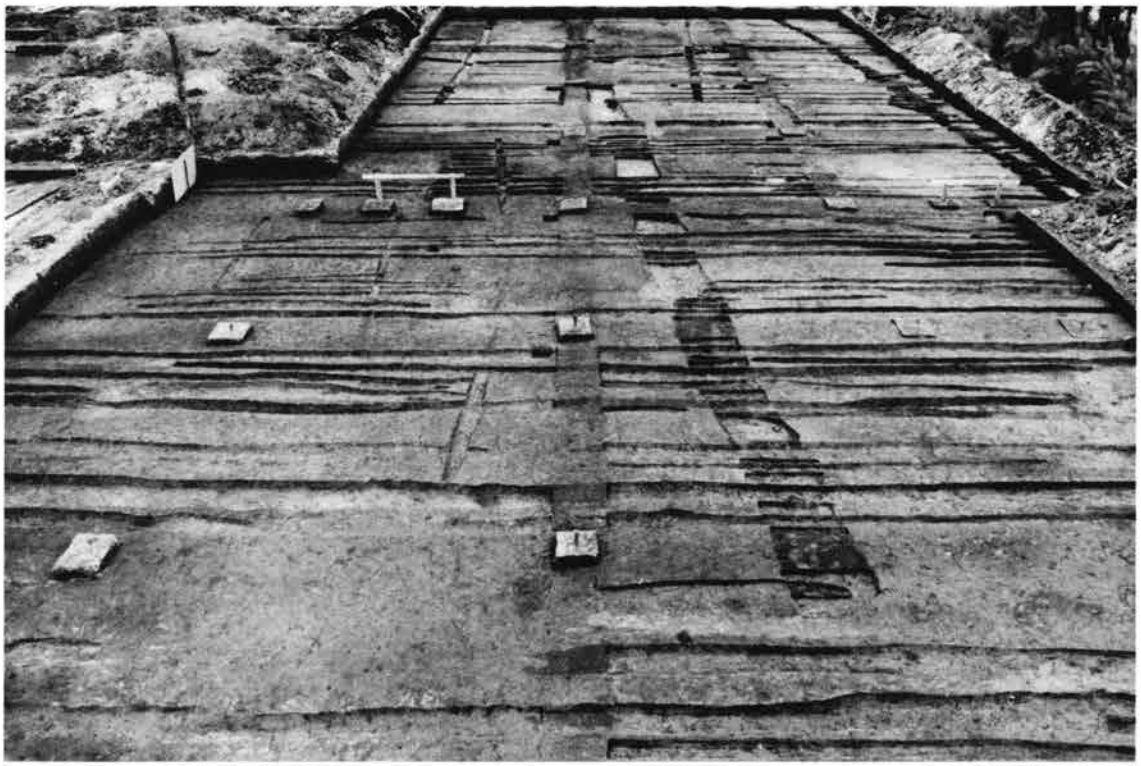
出土遺物(2)
7～9・11～15：川跡出土　10：土坑出土



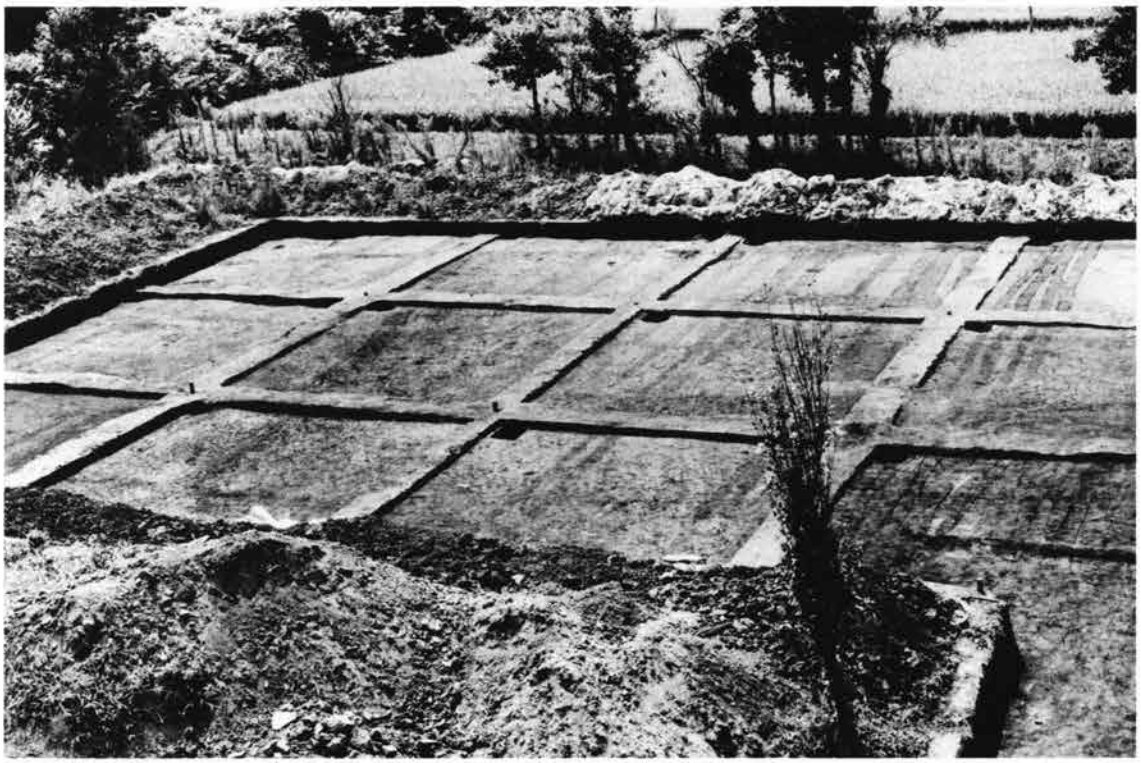
(1) 調査地遠景（南西から）



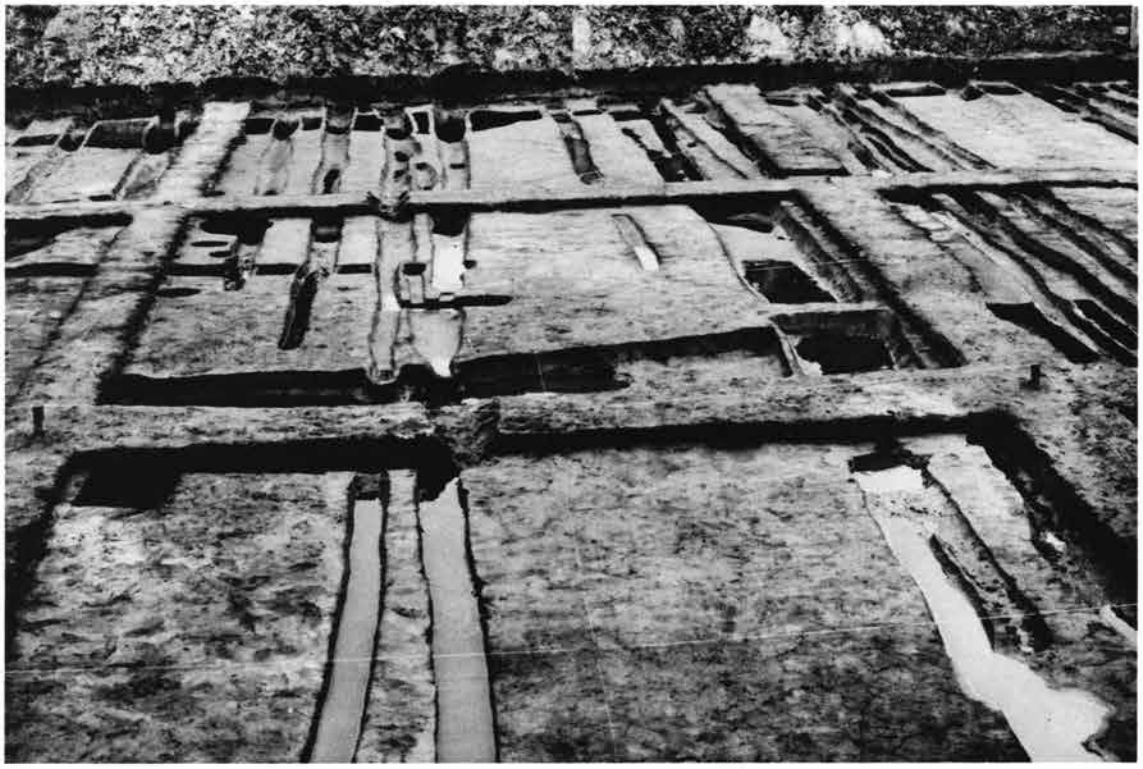
(2) 調査前全景（南西から）



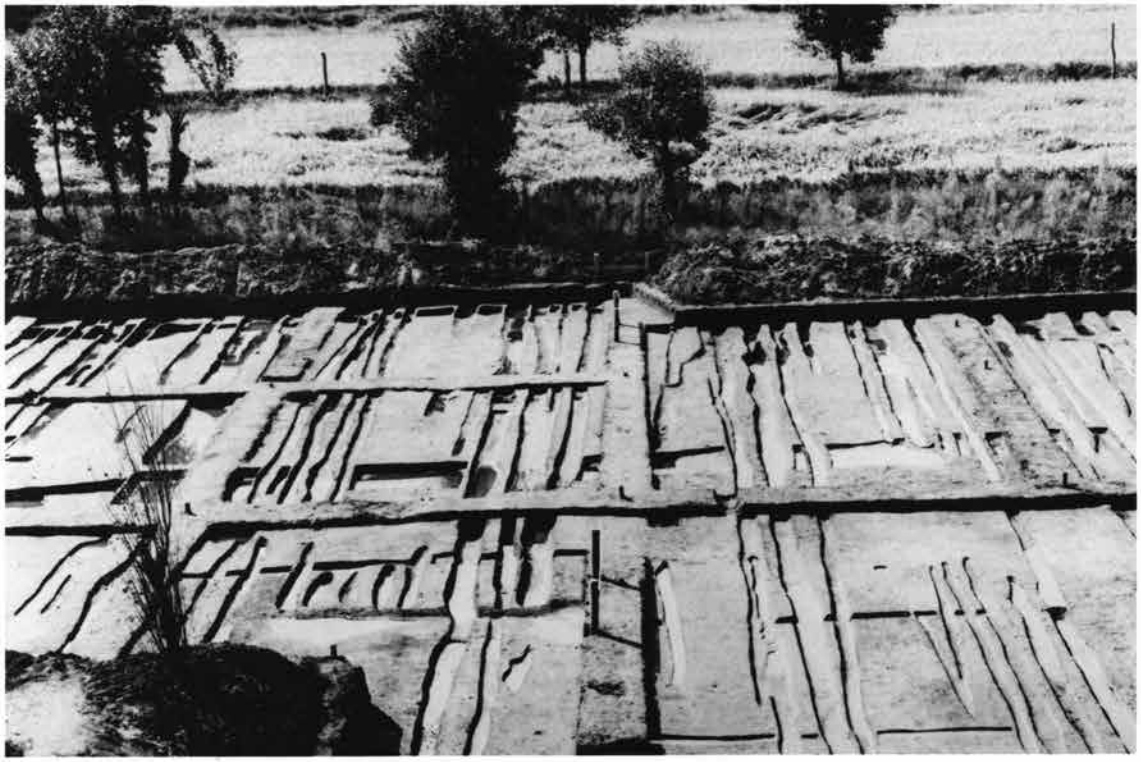
(1) 調査地西側全景（南から）



(2) 調査地南東側全景（北東から）

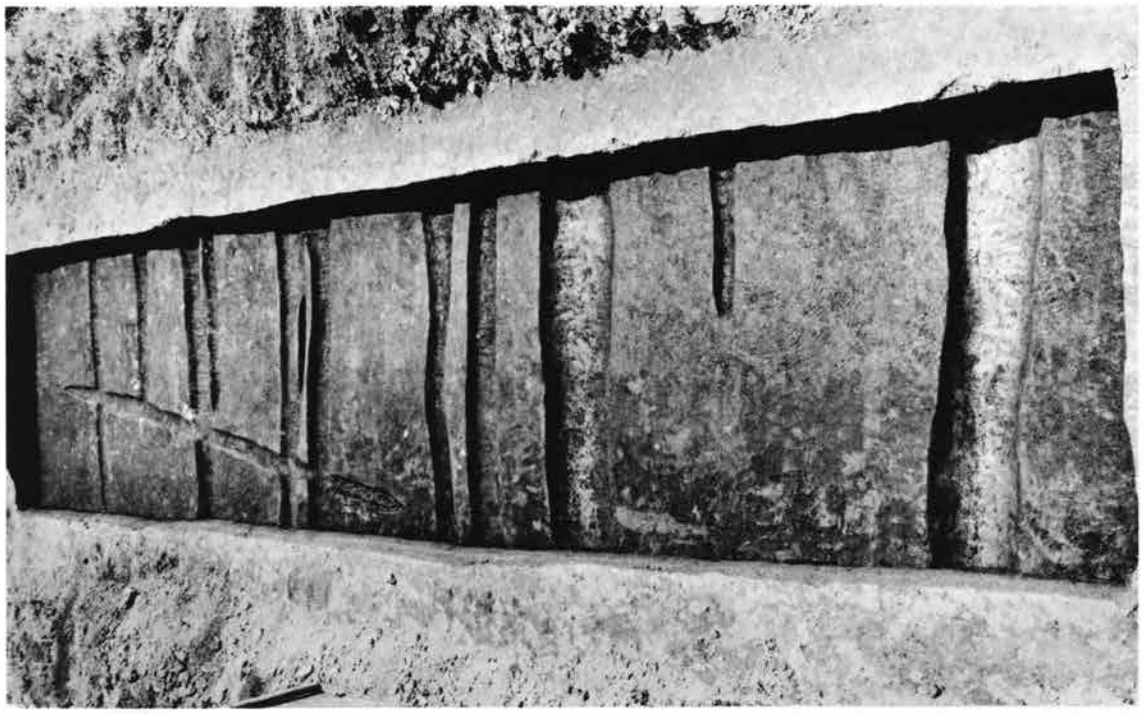


(1) 調査地北西側素掘溝全景（東から）



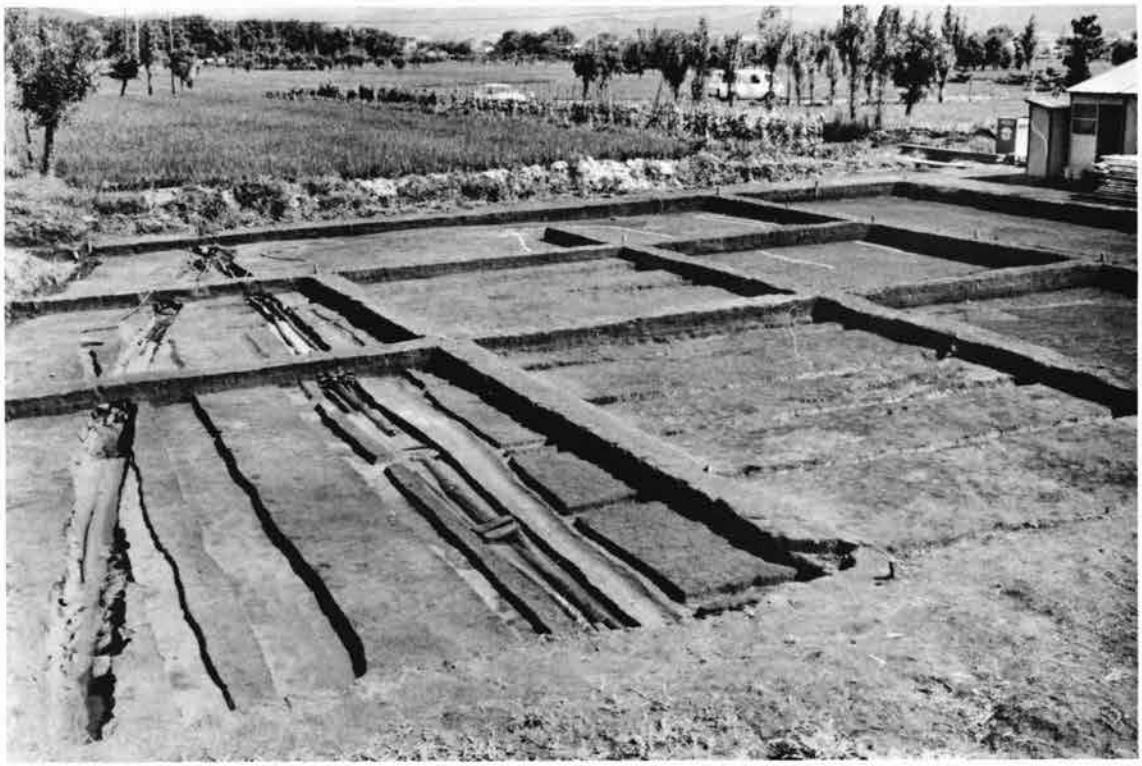
(2) 調査地西側全景（東から）

(2) BT11～BT12トレンチ全景（北から）

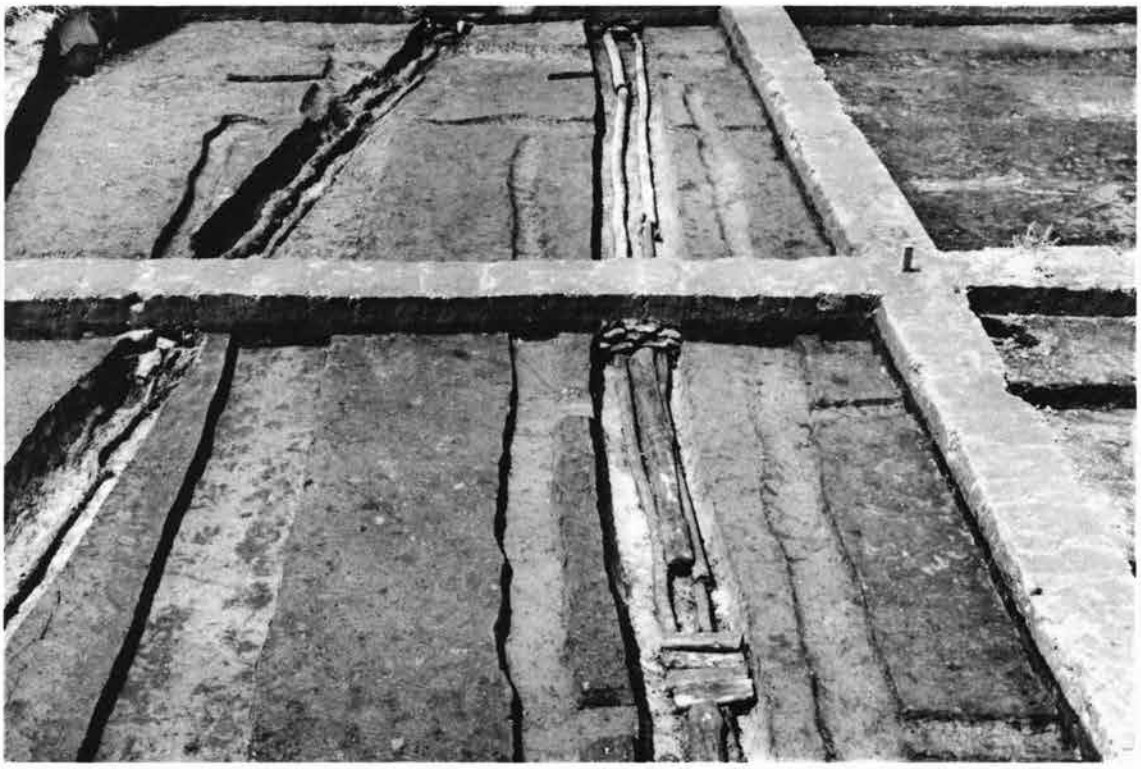


(1) M29～M32トレンチ全景（北から）

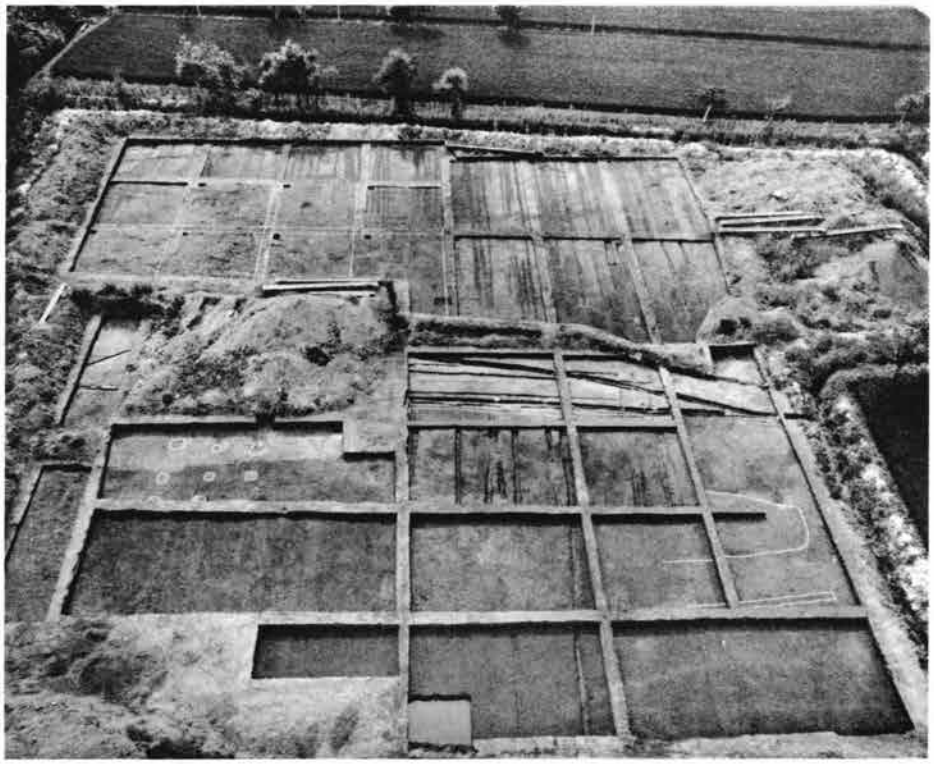
(1)　ＢＴ11～ＢＴ12トレンチ北側旧河道（東から）



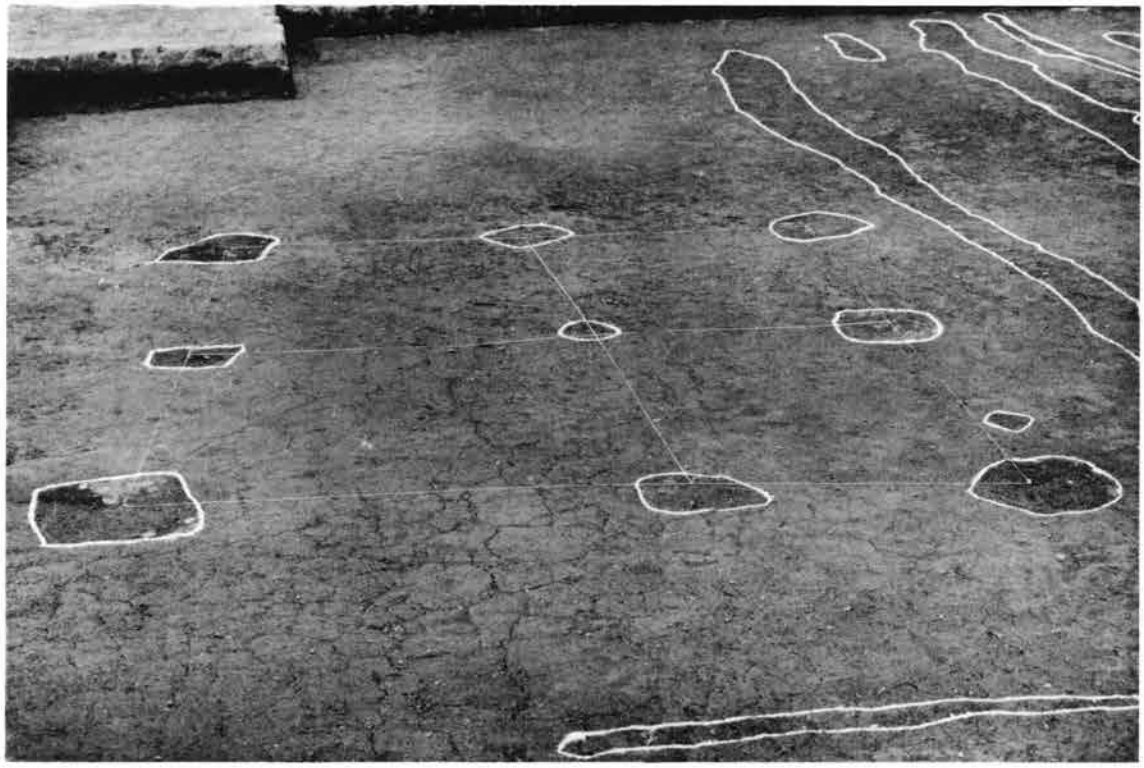
(2)　調査地東側全景（南西から）



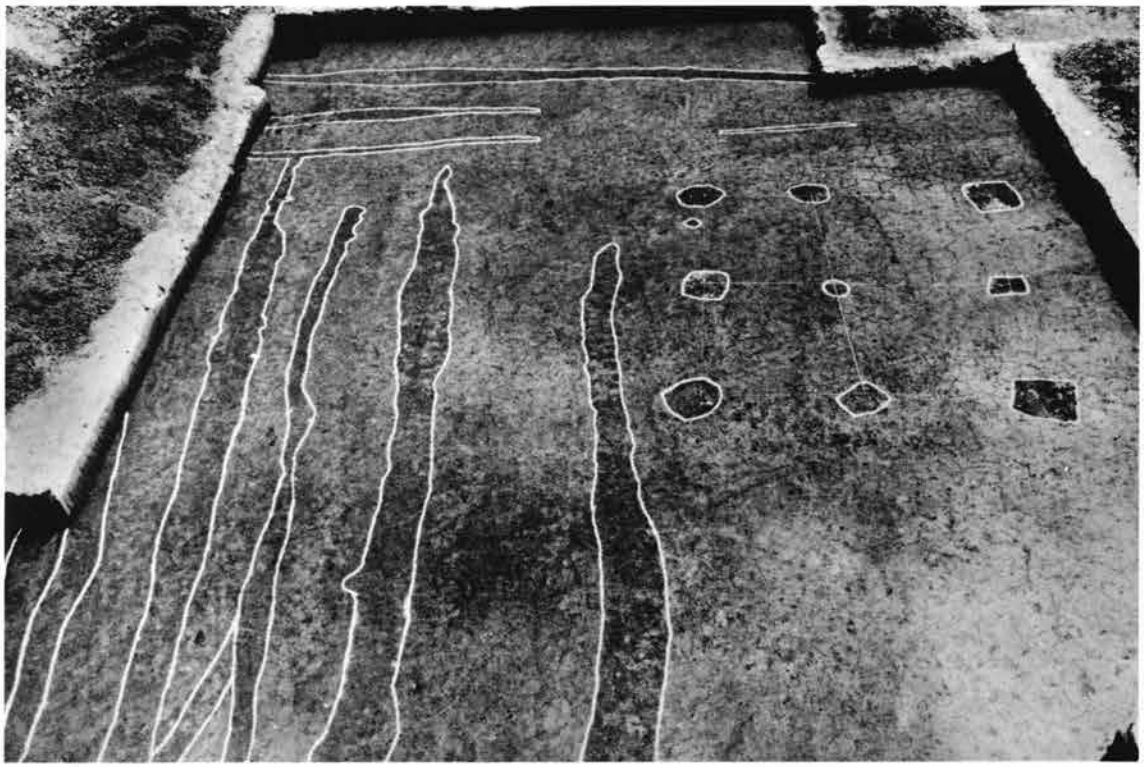
(1) 調査地東側全景（南から）



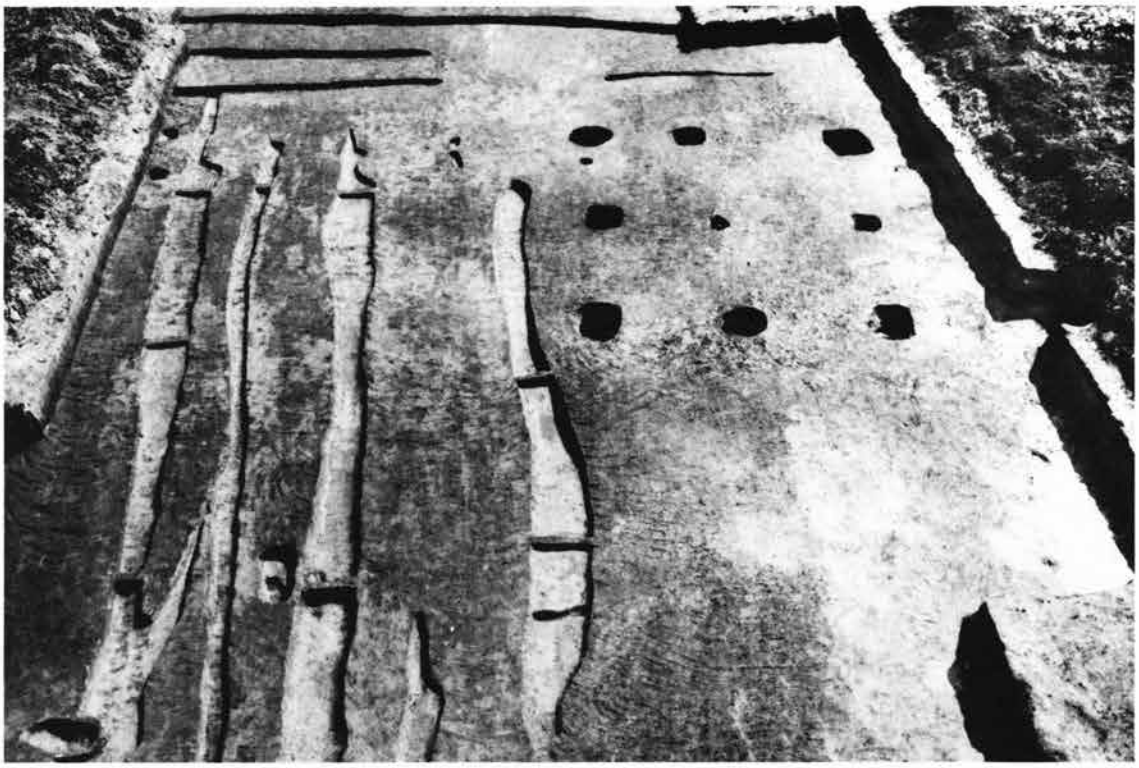
(2) 調査地拡張区全景



(1)　ＳＢ0401掘立柱建物跡（南から）

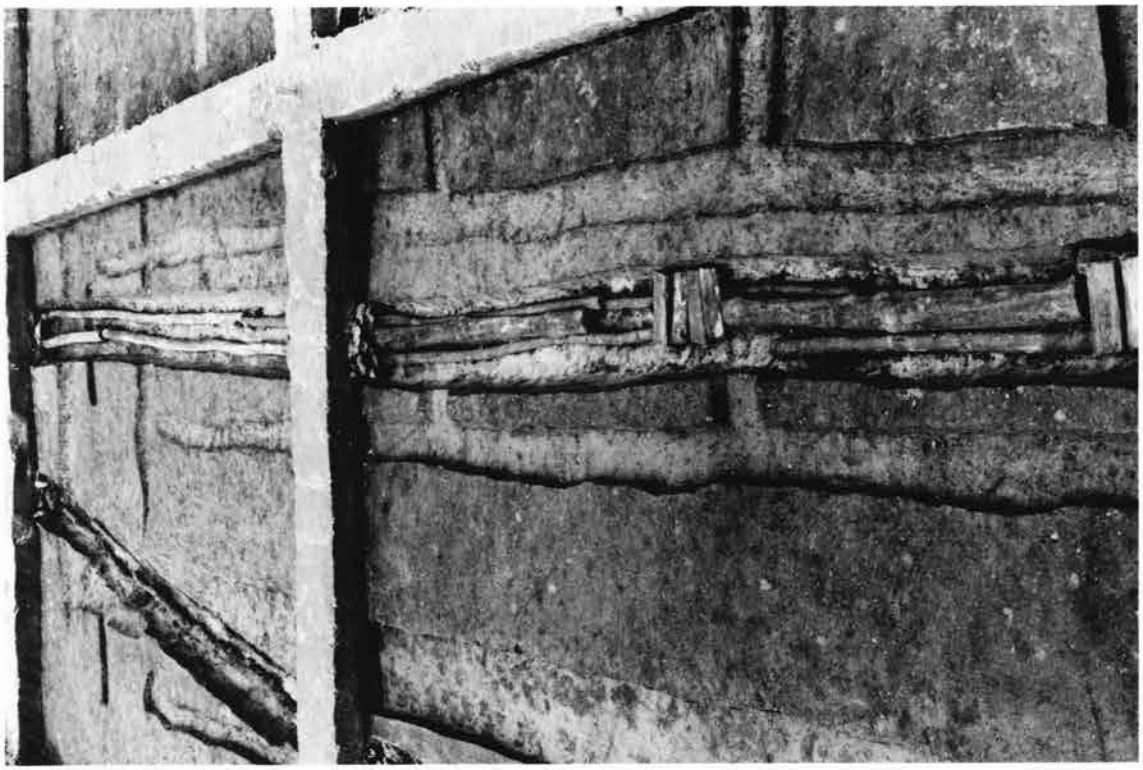


(2)　ＳＢ0401掘立柱建物跡と素掘溝（北から）

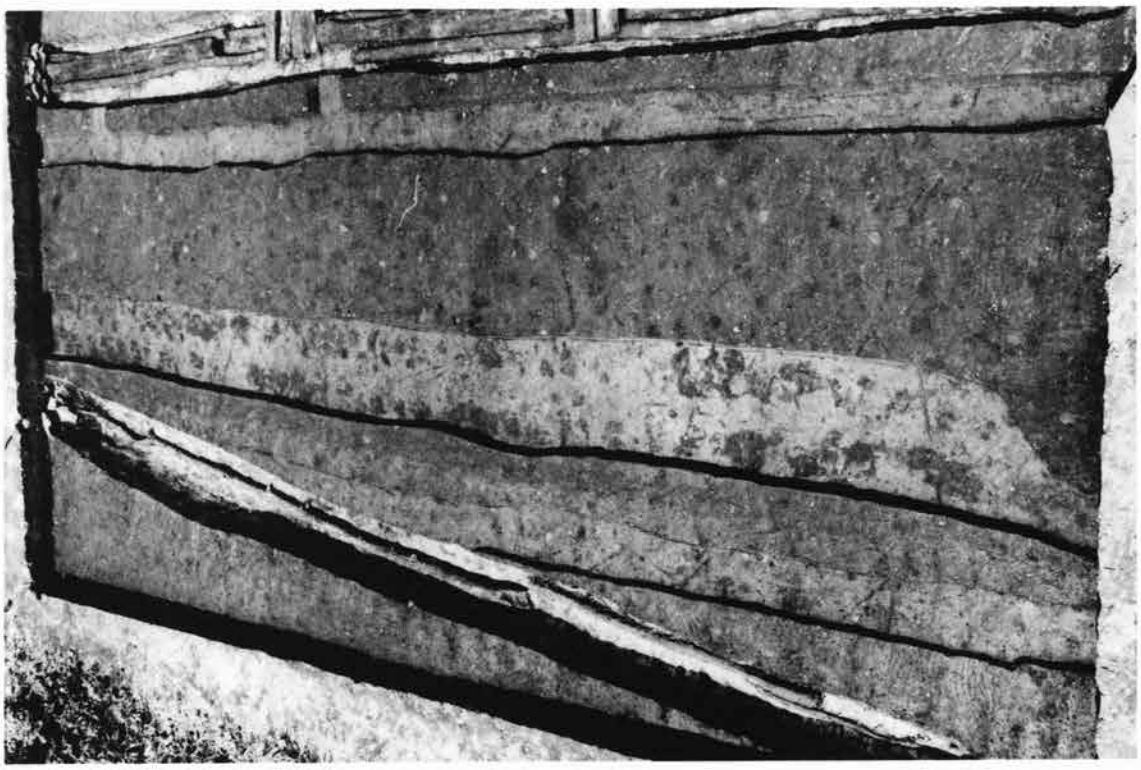


(1)　S B 0401掘立柱建物跡と素掘溝（北から）

(2)　調査地東側奈良時代の溝（南から）



(2) 調査地東側素掘溝・暗渠（南東から）



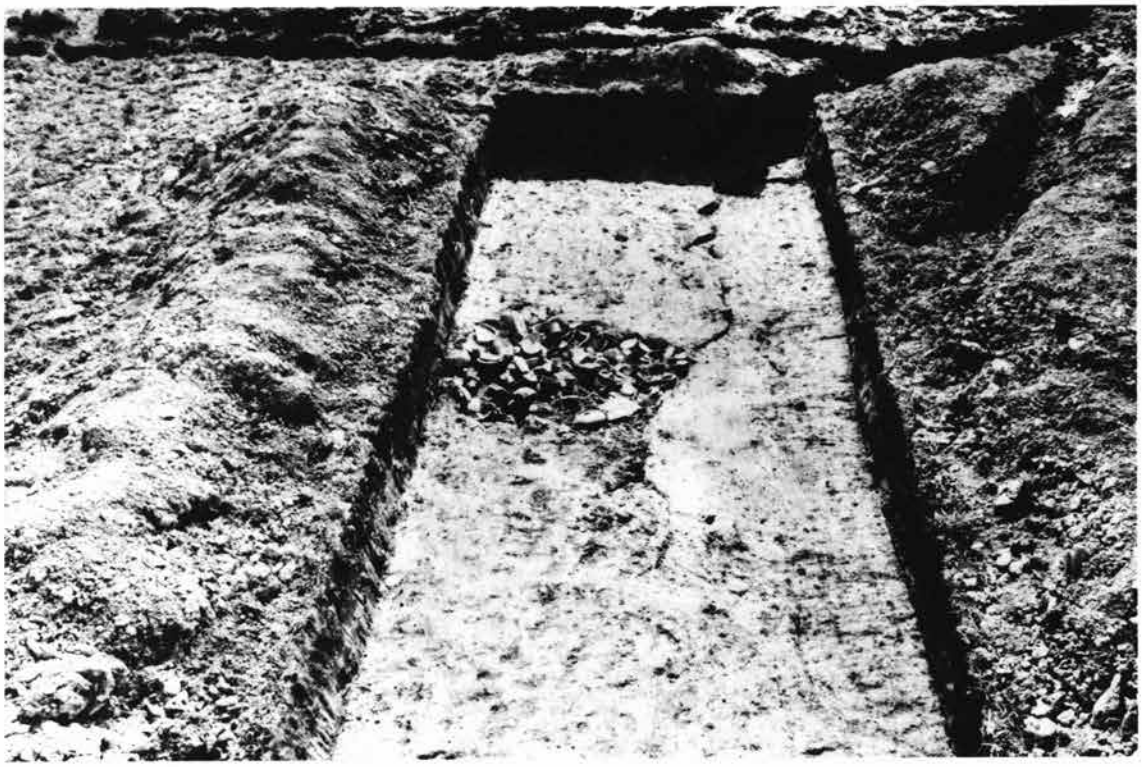
(1) 調査地東側素掘溝西域（南から）

(1) 西長尾B地区 第1トレンチ全景（南東から）

(2) 西長尾B地区 第1トレンチ灰原検出状況

図版第52　篠窯跡群

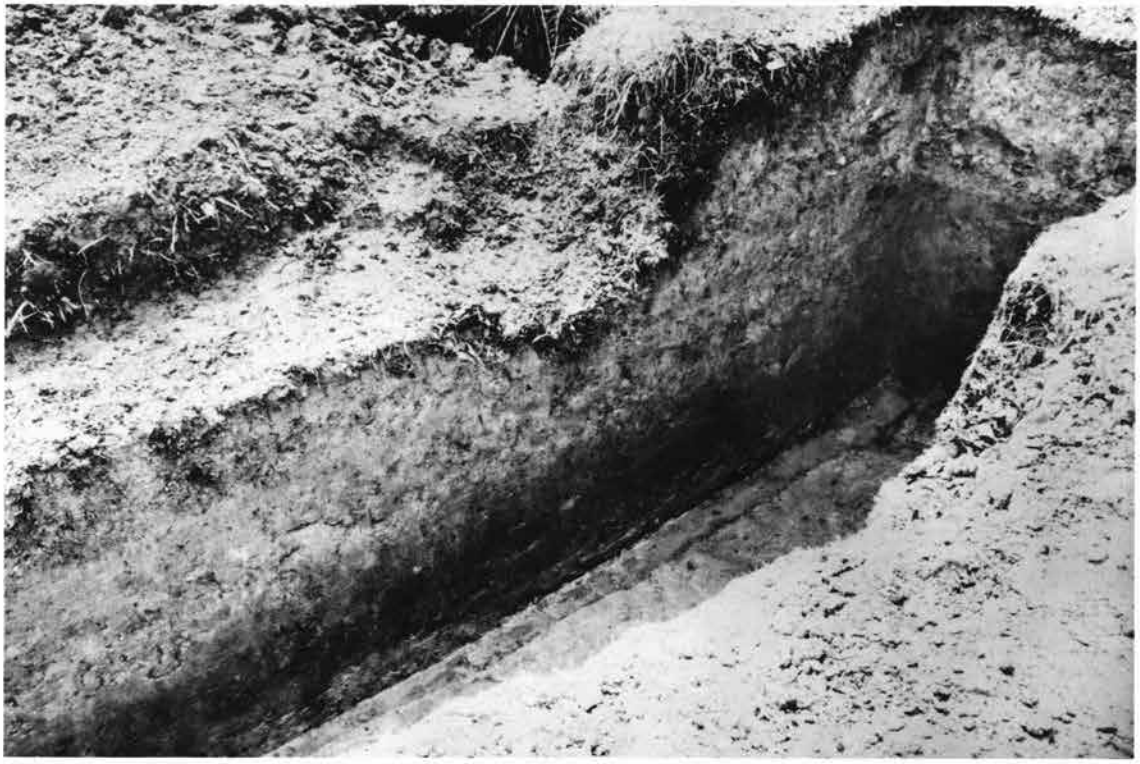
(1)　西長尾A地区近景



(2)　西長尾A地区作業場跡関連遺構

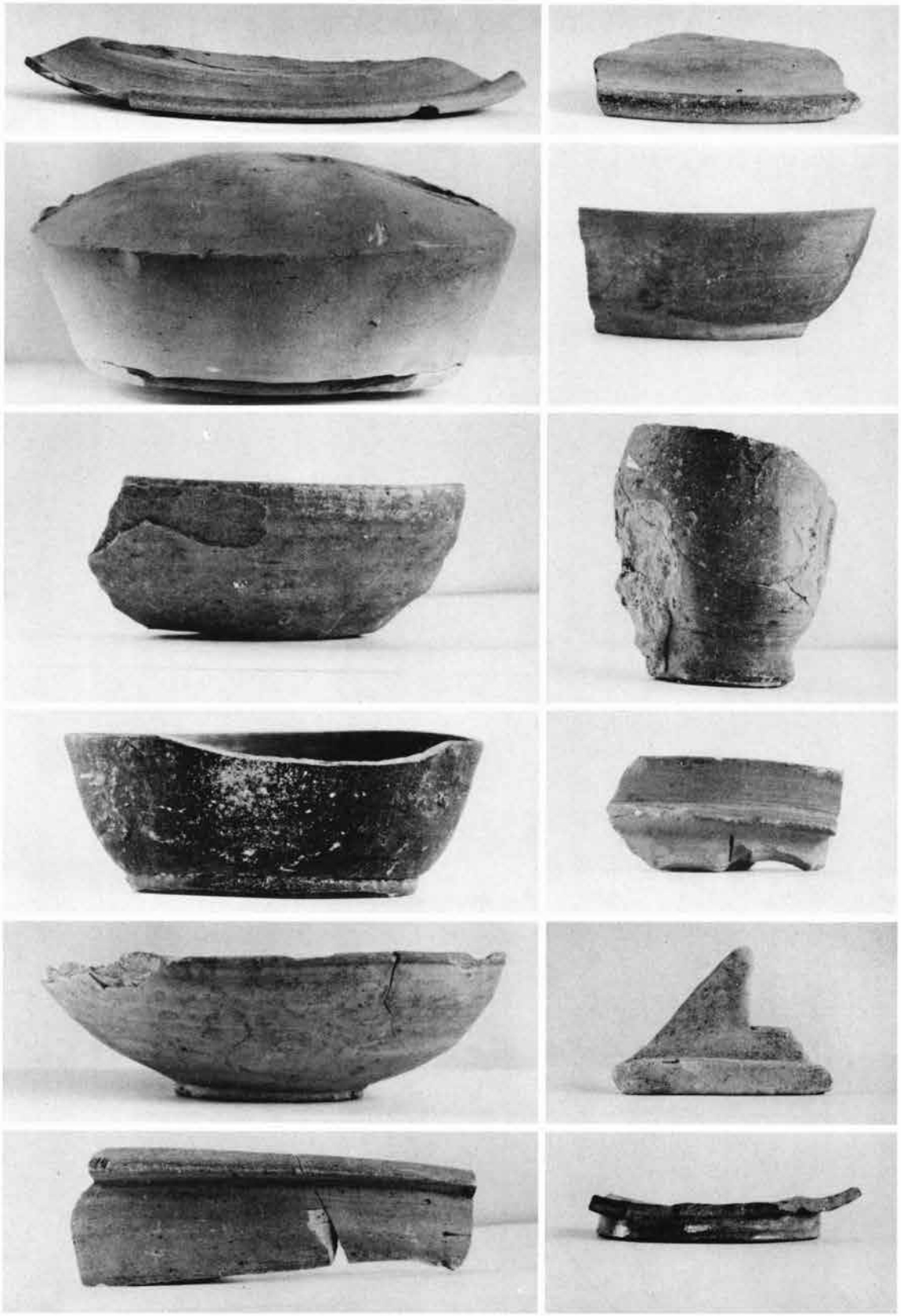
図版第53　篠窯跡群

(1)　芦原B地区遠景



(2)　芦原1・3号窯灰原検出状況

図版第54　篠窯跡群



出土遺物

京都府遺跡調査概報 第10冊

昭和59年3月31日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
TEL (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）